

醜乳主様
美長て
たら肉さ
死したチ
即リ&ム
後口に保
移後即死
転移後即
逆転口に
転移後即
様（ヒモ）

hentai提督

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何の前触れもなくいきなり異世界に転移したと思ったら即死した。

と思つたら可愛く綺麗で神々しくドスケベな竜人族に保護されて主様（ヒモ）になることに。

楽できそうできないマジカルちんぽ男と山一つ軽く消し飛ばせるポンコツ竜人娘達の物語。

目次

# 1	転移したと思ったら即死しました	1
# 2	異世界で学ぶビジネスマナー	11
# 3	上座と下座	17
# 4	自己紹介と美的感覚	25
# 5	即堕ち竜人王（済）	32
# 6	緊急御前会議（未遂）	42
# 7	拷問に次ぐ拷問、相手は死ぬ（異世界基準）	48
# 8	竜人族の恋愛偏差値	54
# 9	光の三原色竜（喪）	61
# 10	最強〇の矛と盾	70
# 11	竜人族の王	80
# 12	ネラ 1	90
# 13	ネラ 2	97
# 14	ネラ 3	102
# 15	ネラ 4	109
# 16	ネラ 5	116
# 17	ネラ 6	124
# 18	お前が言うな	136
# 19	ちんまくてでつかい	145
# 20	ちんまくてでつかい	2
# 21	ちんまくてでつかい	3
# 154		

# 27	キャラクターとか紹介	241	dirty deeds do	# 26	Dirty deeds do	215	# 25	ちんまくてでつかい	7	205	# 24	ちんまくてでつかい	6	195	# 23	ちんまくてでつかい	5	176	# 22	ちんまくてでつかい	4	164
------	------------	-----	----------------	------	----------------	-----	------	-----------	---	-----	------	-----------	---	-----	------	-----------	---	-----	------	-----------	---	-----

るか	4	292	# 32	残念喪竜はリア充種族の夢を見	282	るか	3	# 31	残念喪竜はリア充種族の夢を見	274	るか	2	# 30	残念喪竜はリア充種族の夢を見	266	るか	258	# 29	残念喪竜はリア充種族の夢を見	3	dirty deeds do	248	るか	2	dirty deeds do
----	---	-----	------	----------------	-----	----	---	------	----------------	-----	----	---	------	----------------	-----	----	-----	------	----------------	---	----------------	-----	----	---	----------------

#1 転移したと思ったら即死しました

気付いたら男はそこにいた。

トラツクに撥ね飛ばされたでもなく、隕石が頭上に落ちてきたわけでもない。死んだと思ったら光り輝く神様がご降臨あそばされてそれはもうご親切にチートを授けてくださった後、投げやりな説明を受けて異世界に放り出されたわけでもない。

本当に、気付いたらそこにいたのだ。

頭がどうにかなってしまつてポル○レフ状態なのか、白昼夢を見ているだけか、神隠しにでもあつたか、そもこれは現実か。

しかし、この肌を感じる空気、視界に広がる見慣れない、だだっ広い草原の景色、鼻腔をくすぐるどこか嗅ぎ慣れない澄んだ空気、鼓膜を揺する風と草の囁き、初めて聞く鳥の歌声——そして、額に大層立派な角を生やした馬鹿でかいウサギのような生き物が目の前にぼつんと一匹。

「……………は？」

男が目の前に現れたのはウサギ（？）にとつても突然の事だったのか。紫と白の体毛

を逆立たせ、血のように真っ赤で獐猛な瞳を真っ直ぐ向けて喉を唸らせ威嚇しながらも、男の様子を伺うかのようにするだけで動かない。

男も突然の意味不明な状況に全く理解が追いつかないでいた。しかも生まれて初めて浴びせられる明確な殺意に本能が警鐘を鳴らすが、身体はピクリとも動かさそうになかった。

—
どれだけの間こうしているのか。いつになったら解放されるのか、この恐怖から。

恐らく大した時間は経っていないだろうが、体感的にはもう何時間も過ぎているように思えた。照り付ける太陽の暑さと、超大型犬並にデカイ野生の獣と対峙し、殺気を浴びせられ続けているこの状況に全身から汗が吹き出し、喉は乾き、今にも喚き叫んで逃げ出したい欲をすんでのところで抑えつけていた。

死ぬ。動いたら死ぬ。声をあげれば死ぬ。目を反らそうものなら狩られる。食い殺される。

現代日本という、死の実感からは随分と遠い世界でこれまで生きていた割には働く本能を感じながら、男にはどうすることもできないでいた。

(どうする……どうする……!? このままじつとしてても死ぬ……!)

男は丸腰だ。銃なんぞ持つて持っている筈もない。爪も牙も角も、身を護る鎧も毛皮も何もない。都合よく魔法でもなんでも使えないかと手に気を溜めるイメージを試みるが、当然のように何も起きない。

焦る男が気圧され僅かに後ずさった瞬間、獣の瞳が大きく見開かれ、弾けるような音とともに突っ込ん――

「――がつ」

凄まじい衝撃と聞こえてはいけなような音とともに、男は鮮血を噴き出しながら一瞬で10数メートル吹き飛ばされていた。全力で蹴り飛ばされたボールのように何度も何度も全身を地面に打ち付け、ようやく勢いが死んだ頃には、糸の切れた人形のようにピクリとも動かなくなっていた。

—

—

「—」

下半身から来る妙にこそばゆい刺激に、男は微睡から意識が覚醒していくのを感じる。

「——、——つふ♡ んおつ♡」

「な、ん——?」

重い頭を上げて薄目に開くと、またしても信じ難いような光景が視界に飛び込んできたことに、男は困惑することになる。

「おつ♡ くおつ♡♡♡ こ、こによちんぽ♡ おちんぽお♡♡♡ すう——♡♡♡ つ

はあああ〜♡♡♡ おお、つ♡♡♡ な、なんでこんにやあ♡♡♡ すけべ♡♡♡

えつろお♡♡♡ だ、だめ♡ ダメなのに♡♡♡ 竜人王の私がこんな無様なあ♡

うつオ、つまらイック♡♡♡ ちんぽのにおいだけでいつぐうううつ♡♡♡♡♡」

(ええ……)

ぷしゅつ♡♡♡ ぷじやつ♡♡♡ びちや♡♡♡ ぱたたたつ♡♡♡

男は困惑した。いや、この状況で困惑するなという方が無理があるだろう。

AVでよく聞いた水音が鼓膜を揺する。ぼやけた視界に映るのは、己の股間に頭を埋めてやたらめつたら甘く品のない爛れ切った嬌声をあげている主の、若干黒みがかつた美しい銀の長髪。俯いてビクついているだけの頭が上げられると、男の逸物に遮られてよく見えないが、随分と幼い輪郭と異様に長く艶やかな紅い舌——先端が二又に割れて

いる——がちらつき目についた。しかも頭部には一對の立派な漆黒の角が生えていた。さらに言えば、恐らく女であろうこの幼女の頭越しに動き回る羽と尻尾のような物すら見えている。とうか動きが激しすぎて自己主張が凄い。待ち侘びた飼い主が帰つて来た時の犬以上の振りたくり様である。

「ふーっ♡♡♡ ふーっ♡♡♡ おおっ♡♡♡ ほおおっ♡♡♡ こ、こ
 んにやきけんなもの♡♡♡ やっぱりみんなに見せるわけにはあ……オっ♡♡♡
 ひゅっ♡♡♡ うっおっ♡♡♡ つ♡♡♡ し、しかたないの！♡♡♡ これは仕方なくこ
 うしてるのおオっ♡♡♡ つ♡♡♡ ふえっ♡♡♡ へっ♡♡♡ ひゅっ♡♡♡ ひっひっ
 ♡♡♡ む、むり！♡♡♡ こんなやめるなんてむーり♡♡♡ すううう♡♡♡
 ♡♡♡ んっほおおおオっ♡♡♡ イクいぐイツギユ♡♡♡♡♡♡♡」

「……」

男は困惑した。いや、いったい何だこの状況。マジで頭がおかしくなつたか。ていうか俺はさつき死んだんじゃないやなかつたのか。一瞬ではあるが滅茶苦茶痛かつただけ。全身に怠さは残っているが普通に呼吸できているし、動かそうと思えば全身もどうにか動かせそう。ただまあ、この状況下で動こうにも動いていいものなのか……なんか”王”つて単語も聞こえた気がするし、向こうはこつちの意識が戻っていることに全く気付いていないのか、相も変わらず男の股間にあらゆる角度で小さな顔を押し付け、思

いっきり息を吸い込んで吊り上がった尻をへっこへこ と情けなく振りたくって
 体液を撒き散らしているようだった。水音が聞こえると、それまで凄じ勢いで振り回さ
 れていた美しい黒銀の羽と尻尾がぴーん と伸びて硬直するのが見えていて面白い。
 そしてなにより――、

「ほつによ♡♡ ふっへえ♡♡ のオ、っ♡♡♡ ひゅーー♡♡ ひゅーー♡♡♡
 ♡ ま、まひやいつひや♡♡♡ こ、こんななさけないすがたをおつ♡♡ うつぐ♡
 おいつく♡♡ か、かるイキすりゆ♡♡ くつふうくく♡♡ こ、黒銀竜のこんな
 姿♡♡ だ、だれかに見られでもしたらあ♡♡♡ うつあみじめすぎ♡♡♡ つおオ、っ
 ?♡♡ あっ♡♡ うそ♡♡ うそうそ♡♡ りやめ♡♡ ひっ♡♡ うつオ、っ♡♡ そ
 うぞうしたりやけでいつく♡♡ おオ、いつぎゆっ♡♡♡ ぬおおおくくく♡♡♡」
 (Oh……)

このドラゴン少女、まごうことなきDMである。しかも雄の饅えた匂いだけで褐色の
 美しい肌をほんのり桜色に染め上げるくらいに発情してえぐいガニ股でむち尻をへこ
 らせ潮を撒き散らすレベルの変態性癖持ちと来た。

「あくくく♡♡♡ りやめ♡♡♡ こ、こんにゃあ♡♡♡ ばかになりゆ♡♡♡ のうみ
 しょおちんぽちゆうどくになりゆう♡♡♡ おっほ♡♡♡ ふっへ♡♡♡ おオ、く
 くく♡♡♡」

(もうとつくに中毒だと思いが……フムン)

あえて言おう、ドスケベ人外幼女最高であると。

「おつぐ♡ くつひゆ♡ ふおつ♡ あええ♡ えへつ♡ ふっへ♡♡♡
おつおつ♡♡ のおオ~~~~♡♡♡」

どうやらイキ過ぎて思考もあやふやになつてきたらしい。羽も尻尾も先程までと比べて元気がなく、たまにぴん♡ と突つ張る以外は力なくへにやつている。搗きたての餅のように柔らかい頬を男の太ももに預け、白目を剥いて汗だらけの顔はこれ以上ないくらいに情けなくアヘリ散らかしていた。そんな状況にあつてすらも、彫刻も顔負けのレベルで整つたまさしく絶世が如き美しさを全くと言つていい程隠しきれていないのは、この幼女がとんでもない美貌の持ち主であることを雄弁に物語つている。

(雄弁も何も性欲に溺れ切つてるけどな。だがそれがいい)

そんな、まるで二次元の存在がそのまま飛び出してきたような美を持つ幼女が、己の逸物に散々に狂わされて乱れまくつていふという事実が、今更ながらに異様な興奮を男に与えていた。というか、これまた今更だが己の分身をよく見るとやたらとデカいことに気づく。

(20cm軽く超えてない?)

下手すれば30cmくらいありそうな息子にまたも困惑するが、人外幼女がちゃんぽで

イキ散らかしてんだからそれくらいあるんやろ、とさらつと流すことにした。人類最大の武器の1つはその適応能力の高さである。その強みを遺憾なく発揮しながら、男はそろそろ好奇心を堪え切れなくなっていた。

（角も羽も尻尾も……。気になる……。本物なのか？ ちよつとくらい触つてもバレないか……？）

日本人特有の空気を読むとかいう良くわからない特技をこちらも遺憾なく発揮し続けてはいるが、どうにもこの好奇心は抑えられそうになかった。しかしながら、目の前でびくびく痙攣して伸びている幼女はなにやら凄そうな肩書を持っているようだし、逆鱗にでも触れれば命の保証はないだろう。なんせウサギに瞬殺されたのだ。仮にこの幼女が本当にドラゴンに比する存在なら瞬きする間もなく消し炭にされるのがオチである。楽に殺してくれるだけマシンレベルかもしれない。でもまあ――、

（最悪息子で黙らせればイケるのでは……？）

困惑し過ぎて本当に頭もおかしくなったらしいが、にしても妙な自信が男にはあった。この幼女は男のちんぽに首つただけだ。その溺れようは現状の痴態を見れば最早議論の余地はない。逝ける。いやイケる。

（ちよつとだけ。ちよつと触るだけだから）

絶対がちよつとじゃ済まないフラグを立てながら男はそつと手を動かし、相変わらず

ビクついている人外幼女の角に触れ——

「——ふおっ?」

(やば)

た瞬間声を上げて幼女が反応したが、相変わらず意識が混濁しているようで襲つてくる心配はない。

一息ついて、俺の逸物を散々弄繰り回しとつたんやからこれぐらいええやろ、と訳の分からん理屈を都合良く頭の中に並べ立てながら、案外手触りの良いツルツルとした感触を恐る恐る楽しむ。

「おっ? ほっ? ほおお♡ んにい♡ ぴっ♡ あっあっ♡♡ んつきゅう♡♡
のおくく♡♡」

(あ、これ楽しいわ)

触れれば触れる程に可愛らしく、それでいてやたらと色っぽい反応を返す幼女に気を良くしていく男。常識破りの連続で本能が麻痺しているのか、それとも別の要因か。男の警戒心は驚くほどに薄れ、遂に好奇心を抑えきれなくなり——、

(もう思いつ切り握つたら)

「おあっ♡♡ つ♡♡ ——っお?」

——撫でさするだけだったそれを一変させ、あろうことか思い切り握り締めてしまつ

た。

「——ひっ?♡ な、なん——ぴっ!」

「あ」

「によおおおおお〜?!♡♡♡♡♡ ふっへ?♡♡♡ あええっ?!♡♡♡ ——おっあいつぎゅ!♡♡♡ にやにこりえ?!♡♡♡ おイッグ♡♡♡ くっほ♡♡♡ ほっひよ♡♡♡ ひっひっ♡♡♡ おああイッグ!♡♡♡ まらいぐ♡♡♡ ひーひー♡♡♡ ひーひー♡♡♡ や、やめっ♡♡♡ もうやめへえ♡♡♡ ぬおオ、っ!?!♡♡♡ し、しぬっ♡♡♡ のうみしよぶっこわれてイギしにゆううううオ、くくくっ!!♡♡♡ もつやめえ♡♡♡ ゆる♡♡♡ えへっ♡♡♡ ゆるひへえ♡♡♡ ほっへ?♡♡♡ んのおお〜♡♡♡ いぐいぐイツギユ〜♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

（——うん）

目を見開いてはひっくり返り、長い舌を放り出し口を限界まで縦に開いて、喉からは絞り出すように喘ぎまくる幼女を眺めながら、男は憑りつかれたかのように彼女の角を弄り倒す。快樂信号の濁流に脳を焼き切られそうになり、許しを乞う為に媚びへつらつてにへら♡ と笑う幼女に底意地の悪い笑みを浮かべながら、彼女が失神して反応を示さなくなるまで、男は容赦なく彼女の角を責め立て続けるのであった。

#2 異世界で学ぶビジネスマナー

「ほ、本当に済まぬ！ この通りじゃ！ どうか！ どうか非礼の限りを許してはくれぬだろうか……！ どうか……どうか……!!」

「え、ええ……」

男がドラゴン幼女の角をひたすらに弄り倒して失神させた後、ようやくと覚醒した彼女がとつた行動は男の予想の遙か斜め上を行くものだった。

ゆっくり目を開いて男と視線が落ち合ったかと思えばかなりの時間固まった後、「……………あ」と蚊の鳴くような声を発したと思えば文字通り飛び上がって取り乱し、ベッドに投げ捨ててあつた顔を隠す為の随分と煌びやかな布——中東のニカブみたいだが白基調で若干透け気味のやつ——に飛びついてあたふたと顔を隠して床に頭を強く打する勢いで土下座してしまつたのだ。なんならこつちが土下座でもなんでもして許しを乞おうと思つていたのにこの展開はあまりにも想像の埒外過ぎて男の思考はまたしても停止してしまう。

「そ、そなたをたまたま東の平原で見つけて。もう心の臓を貫かれておつたがまだ時も

浅かった故、無礼を承知で我が宝玉をもつて蘇生を図った。なんとか一命をとりとめたが予断を許さぬ状況であつたので、その……居城に招き我が魔力を注いでおつたのだ。し、しかしそなたの……えっと……あ、あまりの性の色香にやられてあんな事を……。済まぬ！ 本当に済まぬ！ しかしどうか……どうか！ 今回の助命でもつて我が蛮行を見逃してはもらえぬだろうか……!!!」

「……………え、っと」

物凄い早口で捲し立てられ、さらにあまりの必死さにも圧倒され、さっぱり判断のつきかねる男は全く思考が纏まらずに意味のない言葉を発する。

そんな男の様子に深く絶望の色を瞳に宿した彼女は力なく顔を伏せてしまい、絞り出すように声を発した。

「……………そ、そうじゃな。謝つて済む話ではない。我が肉体の一部がそなたを犯しているも同然。僭越ながらそなたは我が霊角に興味がおありのようだ。これを持つてすれば強力な魔力の触媒にも、威光を示す手助けにもなるう。……ああ。もう角だけと言わず、我が身の全てを捧げるが故、此度の対価とさせてはもらえぬだろうか。この身は臍物から爪先に至るまで、余すところなく相応の価値を生む。故にどうか、我が祖国に僅かばかりの救いを恵んでいただきたい——」

「ちよ、ちよつと待つて。待つて下さい」

なにやら死ぬことを前提としたとんでもない事を言い出したので、流石の男も考えるのをやめベットから転げ落ちそうな勢いで件の彼女の傍に立つと、床に膝を付けて止めにかかるが――。

「まだ何か……。あ、そうだ、うちの城にある財宝も好きナだけ持つて行つて良いです。それなりに価値はあると思います、はい……………」

(アカン、目が死んでる……)

恐ろしくネガティブな思考に沈むドラゴン幼女を目の前に、男は兎にも角にもまともに話ができるよう無い知恵を絞つて元気付けるのであった。

――

「えっと、その……取り乱してしまつて申し訳ありませんでした。つい……」

「いや、謝るのはこつちの方で……。ほんとすみませんでした。ほんの出来心だったんです」

「ああいや、それは全然……。寧ろ私――こほんつ。わ、妾の方が余程の無礼を……」

あ、そのキャラで通すんだ。

もうだいたい手遅れなのではと思いつつ、またネガティブに陥つておつかないことを言

い出されても困るので黙ることにする。無言は金なり。ていうか散々無礼を働いたのは自分の方だと思うんだがほんとに怒ってないんだろうか。ないみたいだからいいか。「えーっと、それでは確認したいことがいくつかあるんですが……。というより、教えて頂きたいことが山ほど」

「……………う、うむ」

至極真つ当な罪悪感を抱きつつ、男は目の前の幼女を見据える。床に2人して正座で向かい合う奇妙な光景。しかも一方は角と羽と尻尾を生やし、最早神々しさすら感じられる美しさの褐色幼女だ。残念ながらそのご尊顔は瞳以外隠されてしまっているが。ていうか何故隠す。減るもんでもないだろう。是非とも余すことなく拝ませてくれたまえ、良い子だから。

相も変わらず頭の悪い思考に耽られる程にこの訳の分からん状況にも幾分か順応してきた男は、

(にしても、商談でも始めるみたいだな空気だな)

なんて社畜思考で考えながら口を開いた。

「それではまず、この世界の事なんです——」

「そ、その前に良いだろうか」

「はい?」

とにかく現状を把握したいので質問しようとしたらいきなり遮られた。おいおい、相手の話はとりあえず最後まで聞くのがビジネスマナーつてもんですぜ幼女の旦那。なんてアホなことを考えたが、そもどう考えても一生物としては彼女の方が圧倒的上位であることに疑いはない。比べる事すらおこがましいレベルである。死んだ生き物を蘇生できるとか一体全体どういうことなの……。

すなわちこの目の前の、実に愛らしくちよこんと正座し、身を護るかのように長い尻尾で自分を囲い、心配そうな紅蓮の瞳で男を見遣るこの幼女は、まさしく雲の上の超常的存在である。そんな人物（？）を相手に相対して正座させていることがそもそも不敬に感じられてきた矢先に、それまでモジモジと言い淀んでいた件の幼女が口を開いた。「話を遮ってしまい申し訳ない。しかし、どうにも気になって……」

おお、すっかりマナーも弁えておられるではないか。流石ですね。なんて殊更アホなことを考えていたが、またしても黙りこくってしまった幼女にどうしたものかと悩んでいると、意を決したかのように男を見据え、震えながら言葉を紡ぐのじゃロリドラゴン。くっそ可愛い。

「ふ、服を着てもいいだろうか……。あ、あと、そなたもどうかその……。そ、その逸物を隠していただきたい……。♡」

「……………失礼しました」

マナーがどうかってレベルじゃねーぞ。

#3 上座と下座

「う、うむ。それでは気を取り直して会談を——」

「いやいやいや待って待って待って」

「……? す、済まぬ、その程度の椅子ではお気に召さなかつただろうか……」

「逆逆逆。違うって。いやどう考えても逆やってこれ」

「ええ……?」

「ええ……?」

思わず突っ込むわオウム返しするわしてしまつたがこれはどう考えても俺が正しい。

……だよな?

「なんで俺がこんな玉座みたいなのに座ってそつちが地べたなん?」

「ええ……?」

「ええ……?」

あれ?もしかして俺がおかしい? 地球の常識通用しないやつこれ?

「あ、あの……とりあえず席換わってもらって良いですか……?」

「……妾に死ねと?」

「んーそのレベルかー」

「まずいですよこれは。貞操逆転とかそういう類の代物でしてよ。」

「あ、いや、死ねと仰るならその通りにいたしますがその前に私のお話だけでも聞いていただけないでしょうかすみませんどうかお願いします何でもしますから……」

「ん? —— じゃないじゃないあーいやこの椅子最高だなーいや完璧ですほんとにもうフツカフカですよフツカフカ! 是非とも座らせてくださいお願いします何でもしますから!!」

「そ、そうか、気に入っていただけか。良かった……」

「いやーホツとした感じもほんとに可愛いなー。………なんで自分よりよっぽど高位な存在を下座にさせる為になんでもせなあかんねんおかしいやろこの世界……。」

あ、ここ異世界やったわ。

「そ、それでは今度こそ気を取り直して。会談をお願いできるじやろうか、主様」

「アツハイ。オネガイシマス」

落ちて着かねえ……。ガチでとんでもなくふつかふかでくつそ良い匂いするのに全然落ち着かん……。所詮は一般庶民の俺がなんでこんな……。これがほんとの針の筵というやつですねわかります。

_____。

_____。
——んん？

「あ、あの」

「なんじゃろう？ 主様」

至極当然のように言つてのけてくれるは頭を垂れ、見下ろす先では片膝をつき、こちらの様子をうやうやしく伺つてくれるのじゃ（偽）ロリドラゴン幼女様。可愛いね。これ以上は俺の常識と精神が持たんぞ。

「ア、アルジサマとは？ アルマジロか何か？」

「あるまじろが何かは存じ上げませぬが……。無論、我ら竜人族の主、ということですよ」
「どちら様か？」

「……………？ あなた様ですが……………」

「……………」

「す、すみません。皆の前でなら慣れてるので普通にできるんですが……」

「ふぉーん」

「うっ……」

それ多分ボロ出るのも含めて皆さんが慣れてるってことじゃないですかね。まあでもさっきのマジで必死な時はしっかり出来たから普段はほんとにあんな感じなのかもしれない。もしくは会議とかデカいイベントの時ならしっかりできるとか。追い詰められないと実力発揮しないタイプと見た。

そういえば――、

「そもそもなんでたまたま俺を見つけれられたんですか？ 結構なんもない草原だったと

思うんですけど」

「」

「もしもーしっ？」

「ちよ、ちよつと息抜きに兎狩りを……」

「……………」

「……………」

息抜きにあのバケモノ兎を狩りつて戦国時代の武士か何かかな？

てかそれ外回り行つてきまーす、つつといてパチンコ行つたり漫喫行つたり駐車場で寝てたりするやつじゃねーか。人それをサボリという。こらもう確定だな。

「夏休みの宿題とか最後の1日で一気にやろうとするタイプ？」

「な、なぜそれを!？」

「……………」

「……………」

「あ、僕もです」

「威厳が……尊厳があ……………」

「大丈夫、最初つからなかったよそんなもん」

「ぐっふう」

エロさと可愛さと美と神々しさとポンコツしかないよ。ていうか今更だけど服着てる方がエロくない？ この子。ほぼすつけすけで面積極狭なんですけどロケット貧乳も最高かよ殆ど見えてますやん。あと竜人族にも夏休みとか宿題とかあるんですね、勉強になるなあ。

—— じゃなくて。じゃなくてだな。話が進まんぞ。

「えーつろ……………違う。えーつと…………、そろそろお話伺わせていただいても？」

「あ、えと…………はい。ど、どうぞ…………」

「んじやまずこの世界——」

「——あ、あのっ」

「んんっ。……な、なんででしょう?」

「わ、私、その、あの………エロい、ですか……?」

「当たり前だろ何言ってるんだブチ犯すぞ」

「ふっぎゅ♡♡♡」

ぷしっ♡ ぷじゅ♡ びゅっびゅ♡

おおーっとのじゃ(止)ろりドラゴン幼女様たったこれだけでクリティカルヒットお
 ! 顔面から突っ伏して潮まで吹いてイってしまったー! いくらなんでもクソザコ
 すぎる!! そこにシビれる! あこがれ……はせんな。これは今後の躰け(意味深)に
 も気合が入りますねー。

……マジ? 色々重なって頭バグって思わず口をついたとはいえ流石にDMす
 ぎひん?

「あの、大丈夫ですかね……?」

「ひっ♡ へひっ♡ ひゃい♡ ら、らいじょうぶれすう♡♡ のおっほお♡♡♡」

(アカン、目がイっっちゃってる……)

教えてくれごひ……俺はいつになったら話を聞けるんだ……このクソザコロリ雌ド

ラゴンは何も教えてくれない……。
いやほんといつになつたら話進むんだよいい加減にしろ。

#4 自己紹介と美的感覚

「落ち着きました？」

「んっ♡ あっ♡ は、はい♡ 大丈夫です♡」

「あっそう……」

いやもうそんな艶っぽい声で鳴かれたらこっちが全然大丈夫じゃないんですけどそんなところわかってんですかねこのプリティー人外幼女様は。竜娘でレースゲーム出せば流行るんじゃない？ どう考えても語呂が悪いから却下な。

「と、とりあえず自己紹介もしてなかったのでまずは俺から——」

「あ、それは大丈夫です」

「えっ」

「主様のお名前をお聞かせ願えるなど我が一族の名誉が極み、至上の喜びに他なりません。ですが主様は尊く強き雄であらせられます。すなわち御身の名は我が魂に刻まれ目を合わせるだけで屈服しきってお情けを乞うこととなりお話どころではなくなってしまうのでそれはまた後日に是非とも」

「えっ」

ちよつと待つて話がぶつ飛びすぎてておじさんついていけない。あとなんやねん尊く強き雄て。

「……えーつと？ つまりなんだ、俺の名前を聞いただけでさつきみたいになりかねないっ？」

「比ではありません」

「お、おう……」

なにそれこわい。さっきのアレもだいぶイキ散らかしてたけど思うですがそれは……。ていうかあんな姿見られといて随分ケロつとしてらっしゃいますね。見た目の割にタフだな。そもこの子人間じゃなかったわ。

まずどういいう世界情勢なんこれ。終末にハーレムしちゃう系か？ なんとなくそんな気はしてきたな。そうでもなきやこの上位種がただの人間如きにこんな扱いせんやろ。

「じゃあ逆にお名前をお聞かせいただけますか……？」

「……………え、つと」

「あ、ダメでした？」

え、なにこの間。この世界じゃ男女問わず名前聞くとなんか呪われたり刻まれたりする

るん？ 先走ったか……いやまあ既に先走ってるモノは相当量あるんだけど。正直目の前の幼女がドスケベ過ぎて辛抱たまらんです。

「それは……命令でしょうか？」
なぜそうなる。

「いや、命令というかお願いというか」

「お願い……」

「そうそう」

「主様が私にお願い……つまり主様が私を頼って下さっている……？ こ、これはやはり好機なのでは……！ 私の素顔を見てもこんな風に普通に接してくれてしかも名前まで……私の名前を聞いてくれる殿方なんて主様が初めて……。——イケる！ 苦節800年、遂に私にも番を得る千載一遇のその時が!!」

「うーんこの……」

ちよつとあなた、心の声が駄々洩れでしてよ。せめて隠す素振りぐらいいは見せなさいなんかの王なんだろ君は。ていうか800年も生きててその容姿なんですな合法ロリとかマジでこの世界業が深いな最高だよ。

「わかりました！ こうなれば我が真名も主様に捧げ奉りましょう!!」

「声でっか」

鼓膜破れるわ肺活量凄いな。目もめっちゃクワツ！ ってなつとるし。

あとなんか真名とか言っちゃってますけど大丈夫なんこの子。

「私は竜人王。通名に黒銀竜。真名をネラ・アルジエントと申します。どうか未永く主様のお傍に立つことをお許しください。いかなる艱難辛苦も我が吐息が消し飛ばし、御身に尽くすことをこの血肉と魂と名誉にかけて誓いましょう」

こいつはくせえツー！ 厨二病のにおいがプンプンするぜツooooooooooツ！ これは封印されし右腕（○）が実に良く疼きますねえ。あと急にかっこよくなるんやめーやキョんキョんするやろ。

「今のは威厳を感じた。にしても竜人王は無理があるでしょ」

「ほんとなんですってばあ……」

「つまり——、この世界の男は早い段階で成長止まって年をとっても小さなままで、そもその数が極端に少なく希少価値が高いと？」

「主様にとつてはおかしなことなのですか？」

「そりやおかしいもなにも……」

ようやくこの世界のことが聞けたと思っただらとんでもなくて頭おかしくなりますよ。色んな種族がいるらしいけどどの種も男女比1:10000もないとかいくらなんでも歪すぎるだろうなってんねん。

しかもこの竜人族、現状1万程度の個体は皆女ばかりで男は1人もいないらしい。雌の遺伝子強すぎんか？ それとも雄の遺伝子がクソザコ過ぎて淘汰されてるのか。なんにしろこのままじゃ滅亡待ったなしだった訳だ。

「なんか呪われてない？ 神様がいていたはずらしてるとか？」

「どうなのでしょう、我々にとってはこれが普通ですから。神と呼ばれる存在もいるにはいますがそうそう姿を現すものでもないのですよ、よくわかりません」

あ、マジでいるんだ神様やっぱ異世界凄い。是非とも会ってみたいけど出現率激レアっぽいし会うのは無理かな。そもそも神様って地球基準だと碌なのいないから会わない方がいいかもしれん。人殺した数ダントツで神<悪魔だったりするし。

「その……主様の世界では私のような者が、えつと……美しいとされるのは本当なのでしょうか……？」

「地球だと綺麗とか可愛いってレベルじゃないからね君」

「ほっぎゅ……♡♡ くっふ♡ ……で、でもまだ信じられません」

お、今度はちゃんと耐えれたね偉い偉い。って言うのすら反応して即イキアクメ決め

ちやうから迂闊に褒められないんだよなこの竜人王様……。どんだけ酷い扱い受けて来たんだよ。

「他種族の殿方は皆、私達の素顔を見ると卒倒なさるか泣いて許しを乞われるかの2択でしたので……………」

「うわあ……………」

「なんやその2択えぐ過ぎるやろ……。」

「じゃあどんな顔ならいけるんだよそいつら……………」

「あ！ では主様の脳内に今話題の方々を投影しますね、皆さんほんとに素敵な方ばかりで多種族女性誌の表紙も飾られてるんですよ！」

「えっ。あ、いや、ちよつと待つ——」

「このオークの女性なんてとってもガタイが良くって毛深くて皺が凄くって」

「」

「こちらのゴブリン族の方は妙齡なのにまだまだお綺麗で太ましくてお鼻がとっても大きくて羨ましいですよね！」

「」

「このコボルトの女性もまだお若いのにも眉毛と髭がとても立派で——」

「」

りゆうじんおう ネラの SAN値へのダイレクトアタック！
きゆうしよに あたった！ こうかは ばつぐんだ！
きゆうしよに あたった！ こうかは ばつぐんだ！
きゆうしよに あたった！ こうかは ばつぐんだ！
おとこは めのまえが まつくらに なった！

「二度とやるな」

「え、でも——」

「二度とやるな」

「アツハイ」

#5 即墮ち竜人王 (濟)

「……信じられません、本当に真逆の感性をお持ちなのですね。こんなことがあるなんて……」

「あの……ガチの精神的ブラクラいきなり脳内に直接ぶち込むとかマジ止めていただけませんかね……うっぷ気持ち悪……」

「も、申し訳ありません……。ただ、その、主様の今の反応は、普段は私達に対して向けられるものですので……不思議な感覚です」

こっちは2度味わいたくない感覚にボロクソにされてますがね！

ていうかこんな超絶美少女見て吐きそうになる奴等とかどんな精神構造してんだよ全く理解できん。まあこの世界の男からしたら俺の方がよっぽど理解できんのだろうけども。あかん待ってマジで吐きそう……。

「ネラ……ちよつとこっち来て……」

「ひゃひ!? あ、主様、今私の真名を……?」

「い、いいから早く……頼むマジきつい……」

「——ふっう♡ は、はい♡ 主様の仰せのままに……♡」

やけに戸惑うネラをとにかく急かす。やばいもうほんとにキラキラリバーズしそう……精神の安定が必要なんだからこれは仕方ないんだネラ早くこっち来いドスケベ衣装のザコメス幼女の甘つたるい臭いで脳みそ上書きしないと死ぬ。

「そ、それでは失礼します……。あの……主様？ 私が触れて、その、殊更に気分を害されましたらすぐにお申し付けくださいね……。？」

「……」

「あ、主様……？？」

ほんとに捨てられた子犬みたいな目してんな。んなこと天地がひっくり返ってもありえるかよなんかもうイライラしてきた。傍までトコトコ寄ってきたネラを抱き上げる。「ひゃわ!」と見た目相応の反応を示した竜人王様を膝上に座らせると、吸い込まれそうなくらいに大きく透き通ったルビーの瞳があっちこっち泳ぎまくる様が見えていて実に愛らしい。

「あ、あの——」

「ネラ」

「ひっ♡ ひゃい♡」

「顔隠してるそれ取れ。邪魔だ」

「えつ。あつ、えつ、で、でも……」

「取れ」

「くくくつ♡♡ んつきゆ♡♡ は、はい、失礼します……♡♡」

形容しがたい程に甘つたるく芳醇なネラの蜜臭で肺を満たし獣欲を刺激されながら、歯止めが利かなくなつてきて語気が荒くなる。そんな俺の怒気すら孕んだ言葉にも従順に全身を震わせ悦ぶ手の内の圧倒的上位種の姿に、この上ない支配欲と征服感が湧き上がつてきた。ゆつくりと不安げに顔布を取り払うネラの姿は、それだけで極上の官能作品に等しい。

「……と、取りました、主様」

「顔を良く見せろ」

「ひつ♡♡ お、お許してください♡♡ やっぱり怖い♡♡ 怖いのお♡♡」

「……」

「あつ♡♡ やつ♡♡ あああ……♡♡ 主様……♡♡ 主様あ♡♡♡」

俺の命令にもイヤイヤと俯き首を振るネラの、マシユマロのように柔らかな頬を片手で掴み、無理矢理こつちを向かせてやる。本来であれば力で負けようはずがないネラがなんの抵抗も見せず下等種である俺に従わせられ、悲痛と歓喜の入り混じった恍惚の表情で俺を主と呼ぶ——。

「——最高だな」

「ひっ♡ ひっ♡ いやあ♡♡」

寒気すら感じる嗜虐の悦楽が背筋を駆け抜け、情けない悲鳴をあげるネラの美声が脳を揺すり、鳥肌が止まらない。

涙を零して期待と失望の恐怖に揺れる宝石のような紅い瞳。もはや神秘的、計算し尽くされたかのように整った美しい顔立ち。絹のようにしなやかに流れる黒銀の長髪。一目で上位種と判る雄々しい漆黒の双角、双翼に長大な尾。沁み一つない肌理細やかな褐色の肌は発情に伴って仄かに桜色に色づいている。ボディラインを全く隠す気がない、最早服とすら呼べない銀の刺繍が施された透け気味の布切れを全身に貼り付ける様は度を越した蠱惑で繁殖欲を煽ってくる。小ぶりでありながら自己主張する長めの乳房も否応なく性欲を引き摺り出し、低く耳元で囁くだけでマゾ潮を撒き散らす幼い恥丘は産毛一本生えていない。

「あ、主様——んっむ!？」

こんな極上の雌が雄に飢えて涎を垂らして待っているのに、この世界の雄は馬鹿か不能だ。その気がないなら遠慮なく俺が貪り尽くしてやる。

「ふっみゅ?♡ んっちゅ?♡ むおっ♡ あ、あるひひやまあ♡♡ ちゅま♡

ちゅ——♡♡」

強引に唇を奪い、甘い果実のようなそれを吸い上げる。頭が痺れるような柔らかさと同弾力。

最初は何をされたか理解できずに目を白黒させていたネラも、それが口づけだと認識した途端に強張る全身の力が抜け、俺の首に両手を回ししな垂れかかつてきた。

「んっちゅ♡ ちゅっぱ！♡ ちゅっぱちゅっぱ♡♡ ふっむ♡ ふっもお♡♡
ちゅっちゅっちゅっちゅ♡♡ んむお~~~~♡♡♡」

瞬く間に虜になってしまったネラがキスしか頭にないかのようにながつついてくる。細い腰と、その割に豊かに実ったムチ尻は既に制御不能に陥ったらしく、出来の悪いブリキのようにカクつかせては尻を俺の太腿にたばん♡ たっぱん♡ と叩きつけては快楽を貪り、延々とイキ潮を噴き続けている。お陰で俺の下半身はあつという間にマキングし尽くされ、当分このロリ雌の臭いは取れそうにない。

「ちゅっぱちゅぶりゅ♡♡ んっぱんっっぱあ♡ フー~~~~♡♡ んふ~~~~っ♡♡
♡♡ んぐっっぱん♡♡ あっ♡ やだ♡♡ やあだ♡♡ 主様♡♡ キス♡
ちゅー♡ もっ♡ もっろきしゅ♡♡」

「ネラ、舌出せ」

「ふひっ♡♡ ひっひっ♡♡ ひゃい♡♡ つべえ~~~~♡♡ んれろれれええ~~~~
っ♡♡♡♡」

窒息しそうなくらいに吸い付いてくるネラを引き？がし、目にたつぷり♡を浮かべたロリ雌が目一杯に口を開け、恥など欠片もなく舌を差し出してくる。幅は人と同じくらいサイズのだが長さが異常なそれは、人間と違い先端が二又に分かれてそれぞれが別の生き物のようにウネウネと卑猥に蠢き、まさしく男の精を貪る為にあるかのような。目の前で管を巻いて媚び媚びに煽り散らかしてくるネラの舌に、俺は頭の中で何かが切れる音をはっきりと聞いた。

「黒銀竜に竜人王なんて立派な肩書あるくせに家畜みたいに媚びへつらつて、恥ずかしくないのか？ とんだマゾメスだな」

「ひっ♡ ひどい♡ 酷いです主様あ♡♡ おっ♡ うそ♡ ふっぎゆ♡♡ おイツグ♡♡♡ のおっぎゆ！♡♡ うっオ、いっつっく!!♡♡♡♡」

ぶっし♡ ぶしやつ♡ ぴゅっぴゅびゅ♡ ぶしゅっ♡ ぶしゅっ♡

わかつてはいたがここまでクソザコだと変な笑いがでてくるな。「ひぎっ♡♡♡ ふっぎい♡♡♡」と腕の中で酷い顔して堪えるネラが愛おしくて堪らない。

「なあネラ、お前のせいで股がこの有様だ。どうしてくれるんだ？」

「ひっ♡ ふぎゆうお♡♡ ご、ごめんなしや♡♡ おゆるし♡♡ おゆるしくだしやい♡♡♡ あるじしやまあ♡♡ ネラ♡ ネラは悪い雌れすう♡♡ ザコメス許してえ♡♡♡」

「媚びるしか能がないのか？ さっさとなんとかしろ」

「ひっぎ!?!♡♡♡ ふっぎい!!♡♡♡ ご、ごべんなしやい♡♡♡ しましゅ♡ なんとかしましゅから角握らないでえ♡♡♡ ほっひよお♡♡♡」

覚えの悪いペットのようなネラを虐げる極上の愉悦に浸りながら、俺はネラの角を引つ掴んで股座に引き摺り墮としてやる。

「おオ、♡♡♡♡♡ ふっお……ほっへ？」

もうとつくに被虐の虜なネラの不思議そうなアホ面に自然と口角が上がる。ネラのマゾ潮と俺の我慢汗をたっぷり含んだ股間にこのクソザコ竜人王様が顔を埋めたらどうなるかなんて、そんなもんな想像するだけでゾクゾクするじゃないか。

「ほおおオ、っ!?!♡♡♡♡♡ くっさ♡♡♡♡♡ きっつ♡♡♡♡♡ ごれぎっつっづ♡♡♡♡♡ ほぎよおお♡♡♡ ある♡♡♡ あうじひやまあ♡♡♡ ふっぎゆくっさ♡♡♡ きちゅい♡♡♡ これきつちゅいのお♡♡♡」

「なあネラ」

「ほっひえ?♡♡♡ ごえんなしや♡♡♡ たしゆけてえ♡♡♡」

「ほんつと可愛いよお前は」

「——へえへ?♡♡♡ むっぐお!?!」

もつとだ。もつとこの愛らしいロリ雌の壊れていく姿が見たい。実に掴みやすい角

ドツバアアアンツ!! と馬鹿でかい豪勢な扉がとんでもない勢いでぶち破られたかと思えばこれまたとんでもない美しさの角羽尻尾付き金髪ロリが部屋に飛び込んできた。と思つたら絶叫して口開けたまま固まってしまった。なんだこれ。ていうかカツ飛んできた扉がもうちよいで直撃して死にかけてたところを虫の息のネラがノールック尻尾でブツ飛ばしてくれたので助かった。あれ、やっぱネラって凄いいんじゃね？

「えっ、と……う？」

「な……な……」

「なな？」

「何羨ましい事やってんのよお姉さまもアンタもー！ー！？」

「ええ……」

「私のお姉さまにこんなことさせて羨ましいお姉さまも男捕まえてこんなことしてるなんて羨ましいズルイ悔しい大体誰よアンタなんなの人間!!」なんて男がこんなデカいなんておかしくない男つてもっとチビでしよどうなつてんの?!」

（元氣やなコイツ）

扉のあつた場所でやたらとキャンキャン騒いでるのはどうにもネラの妹らしい。にしても姉妹にしてはネラは褐色なのにこの金髪ロリの肌は驚きの白さだ光反射してんぞどうなつてんのそれ。そして何より身長割に乳がめちやくちやデカい。デカくて

長くて騒ぐたんびにぶるんぶるんしよるぞ。例によつて服とすら呼べんような布はつつけてるだけやからもう視覚的にやかましいレベルで凄い。なにこれ下品すぎるやろ最高やな。またもや凄まじい美少女ロリドラゴンが現れてしまった。

「ちよつとアンタ聞いてんの!?!」

「あ、あんまこつちに近づかない方が——」

「はあ? 何言つてんのよ人間如きにわたしが負ける訳ないでしょ舐めてんのふざけんふつぎゆ♡♡♡ おオ、っ?♡♡ んのっほおくく??♡♡♡」

「あーあーあー……」

ちよつと竜人族さんちんぼの臭いに弱すぎやしませんかね……??

6 緊急御前会議（未遂）

「ではお集まり頂いたところで緊急御前会議を開きます。よろしいですね、王よ」

「うむ——つてこらゴルト！ いい加減主様から離れんか貴様！」

「えーやだー♡ 主様あ♡♡ ゴルトのおっぱいおつきくて長いでしょお？♡ エロい

？♡ 気持ち良い？♡ おっぱいで腕挟まれるの気持ち良いですかあ？♡ お姉さま

じゃこんなことできないもんねー♡♡」

「き、貴様妾の気になっていることを……」

「お姉さまこそさつさと離れてよ。さつき散々主様に可愛がつてもらったんだからもういいでしょ？ あんな情けないかつこで発情しちやってさ♡」

「それは言うなどあれほど……！ き、貴様こそ主様の色香に中てられただけでイキ散らかしておったじゃろうが!!」

「は、はあ~~~~?? それをここで言っちゃうとか信じらんない……！ この貧乳！

なんちゃって竜人王!!」

「ひ……な……」

「お姉さま知ってる？ 大は小を兼ねるんだよ？」

「よくわかった表出る。その脂肪の塊消し飛ばす」

「乳があつたら即死だった。ぷふっ」

「ゴルトオ!!」

「さんをつけろよ貧乳野郎!!」

「Oh..」

謁見の間にて。有無を言わさず玉座に座らされた俺を挟んでやたらと低レベルな言い争いを始めたと思つたら2人揃つて外に飛び出していった。何を言ってるかわかると思うがとりあえず姉妹なんだなあ、と思つてたら窓の向こうでとんでもない花火大会を始めたのでやっぱり種として格が違うらしい。なんかビームっぽいのが飛び交ってるんですけどドラゴンボールじゃねえんだぞ。

「その……主様、誠に申し訳ありません。あのお2人は顔を合わせればいつも喧嘩ばかりでして……」

「ああいや、俺は良いんですけどほんとに大丈夫なんですかあれ。辺り一面クレーターまみれに……」

「問題ありません。何時もの事ですので」

「お、おう………えっと」

「申し遅れました。私は四元竜が一寸、通名を紅炎竜、真名をローゼフラムと申します。以後お見知りおきください」

うーんこの厨二感、イエスだね。ちなみに冒頭で取り仕切ってくれたのも彼女、燃えるような赤髪の知的美人さんだ。丸の内で敏腕秘書やってそうだな、眼鏡とタイトなパンツルックスーツ着せたら似合いそう。ていうか出るところ出て引つ込むところはしっかり引つ込んでる抜群のプロポジションがヤバイ。これももう完成されてるやろ。そして例によつて服ともいえんどスケベ布切れと顔を覆うニカブもどきを身に着けている。もう顔隠れてる方がエロいんじゃないかとさえ思えてきましたよ。

「これはどうもご丁寧に。あの、やっぱり俺は名乗らない方が？」

「ええまあ……。王と妹君の前ではお控えいただければ幸甚にございます、主様」
「うん？」

お、ローゼフラムさんはクソザコじゃない可能性が出て来たな。質問にしつかり答えてくれるかもしれん。

「あの、質問させて頂いても」
「なんなりと」

いやもうこの対応の素晴らしさよ。どこかのロリ雌ドラゴン姉妹にも是非見習って欲しい。……うん、無理か。

「真名というのはそう簡単に名乗って良いものなんではようかね……？」

今も姉とのハチャメチャバトルに興じている金髪ロリ巨乳ドラゴン妹ことゴルトちゃん。通名は白金竜、真名をシュネーヴァイス・ゴルトと言うらしい。イエスだね。つい先程警告を無視して無事即堕ちをキメたかと思えば復活した途端に秒で真名を告げられた後、すんごい猫撫で声でめつちや求愛されたのでクソザコっぷりは遺伝なのかもしれない。妹君さあ……。

「いえ。真名は番か己が主と定めた相手、若しくは自分より余程の強者と認められた者にしか名乗りません。故に、我ら竜人族が真名を名乗ることは本来非常に稀です」

「ええ……」

もう割と聞いちゃったんですけど……。ていうかそれだと名乗っちゃって良かったんですかローゼさん。

「竜人族の、しかも格別に強い3人から真名を捧げられるなんて君が初めてなんじゃないかな？ あ・る・じ・さ・ま」

「おおう……」

まるで重力など感じさせない跳躍で俺の目の前に降り立ったのはこれまた超絶美女でなんかもうどうしよう。吹き抜ける風のように爽やかなエメラルドの髪は基本シヨートだが長めの後ろ髪がアクセントで女性らしさを失わず、かと思えば少し低めの

声はボーイツシユというより王子様系だな。漂う色香とギャップにくらくらしてきた。そして例によつての布切れとニカブもどき。生地が薄くてひらひらだから唇が透けて見えてエロいんだよいい加減にしろ。あと前かがみでこつち覗き込まないでくれませんかねおっぱいふるんぷるん！

「飄翠竜、無礼が過ぎるぞ」

「いいじゃないかローゼ。この”主様”とやらはこの程度で発狂するような器でもないらしい。僕らにとつても実に都合良く結構なことだろう」

「貴様に真名を許した覚えはない。それに、王と妹君が名を許されたのであれば疑う余地もなく、伴うのもまた臣下の務めだ」

「——まさか本気でそう思っている訳じゃないよな」

「……」

「それ見ろ。なあ水晶竜に沃震竜、お前たちはどう思う？」

「私は王の判断に従うだけです」

「……同じく」

「ということだそうだ。さて人間くん」

どうやらこの場にいる4人が四元竜とかいう方々らしいんだけど四天王の親戚かなにか？ くつそかつこいいんですが左眼が疼いちやうぜ。あと俺の事をあのポンコツ

姉妹みたいに速攻で好いたりはしない模様。まあそれが普通だよなあ。あの2人がクソザコ過ぎておかしいんやっつきつと。ついでに、ていうかこつちが本題なんだが全員目が据わってて正直ちびりそうです。

「詳しく話を聞かせてもらおうじゃないか。なあ？」

#7 拷問に次ぐ拷問、相手は死ぬ（異世界基準）

「で？ どうやって王と妹君をたぶらかしたのかな。君は確かに姿形だけとつても恐ろしく稀有な存在だが、事と次第によつては死んだ方がマシな思いをしてもらうことになる。よく考えて発言してくれよ、人間くん」

ヤバい。あの兎がトイプードルにしか思えんぐらいのレベルでガチなオーラを纏っておられる。なんかもう綺麗な翠色で可視化できてるんですけど。さらに言えばこの王子様系ドラゴンビューティー、口角が吊り上がってはいるものの目は全くもって笑っていないのが最高に怖い。

「……死んだほうがマシっていうのは」

「ふふふ、知りたいかい？ それはもう、君にとっては拷問に次ぐ拷問になるだろう。二度と正気には戻れないだろうね」

「ま、まさか……」

あの精神的ブラクラをまたやる気か!? 冗談じゃないあんなもんもう耐えられんぞ血反吐吐いて死ぬわアカン思い出しただけで吐き気が……きつつつ……。

「おい飄翠竜、流石にそれは……」

「ええ、少なくとも王と妹君の話聞いてからでも——」

「残酷……」

「おいおいおいおいマジで勘弁してくれそんな哀れみの視線浴びせるレベルのブラクラ用意してんの!? 畜生ふざけやがって! この鬼! 悪魔! ドスケベドラゴン!!」

「わかった! 全部話すからそれだけは勘弁してくださいお願いしますなんでもしますから!!」

「ん?」

「なんでもするつつつてんだよ! いやします! させてくださいだからアレだけはやめてくれきつともう耐えられない!!」

「ふはは怖かろう! なんせ僕たち竜人族の女1万にひたすら犯されるんだしかも死ぬまで延々と! こんなに恐ろしいことはないだろう!? そうだろう!!」

「くっ……!」

なんて卑劣な奴等だ信じらんねえこれがドラゴンのやる事かよ! 殺せ! いっそ

一思いに——ん?

ちよい待て今なんつった?

「くっ……自分で言っていて泣きたくなってきた………つらい」

「飄翠竜……いや、ネフライト。貴様を誤解していた、許せ」

「いいんだローゼフラム、王と妹君さえ無事ならそれで……」

「んん??」

「ネフライトさん……不肖この水晶竜、いえ、クオーツアイトもお供させていただきますわ」

「——ああすまない。心に深い傷を負うことになるだろうが……許してくれ」

「んんん??」

え、ちよ、え、なんでそんな悲壮感たつぷりに盛り上がっちゃってんの何この空気おじさんちよつとついていけない。だめだもう、わけがわからないよ……。

「なにがそんなに疑問なの」

「うおわ!？」

もう混乱極まって頭抱えてたら急に耳元で声が聞こえたので飛び上がってしまった。

「ええつと……」

「沃震竜。四元竜が一柱。土担当」

「あ、これはどうも」

なにやらえらいマイペースそうなのが出て来たな。ネラやゴルト程ではないが低い身長に全体的な肉付きが良過ぎて大変むちむちしておられる。最高です。全身に貼り

付けるように纏う服のような布切れはずぼらなのか所々ずれており、やわっこそうな肌色と健康的な日焼け跡とのコントラストが絶妙にエロい。そして柔らかそうに垂れた長乳の重量感が半端なく凄い。はねまくりのミディアムボブは茶髪だが優しい色合いで、彼女も例に漏れず透け気味の顔布で気怠げな瞳以外を覆っているが造形の美しさは全く色褪せないどころか際立ってすら見えるから美人は不思議だ。

「違和感があった。人間はネラとゴルトに触れられても嫌そうじゃなかった。どうして？」

「どうしてって、そりゃあの2人はとんでもなく美少女だからな。両手に花は男の浪漫だろ？」

「理解できない。あの2人を美少女、花と称する雄なんて初めて。興味深い」

「俺は別の世界の人間でさ。価値観がこことじゃ真逆らしい」

「異世界から来た？ 転移魔法にしても次元の壁を破るのは不可能とされてる。どうやって？」

「さあ、気付いたらいたんだよ。兎にやられたところをネラが助けてくれたらしくて」

「……ネラ、蘇生魔法を使ったの？」

「あー、なんだったか。宝玉つてのを使ってくれたみたいなんだけど……」

「……………そう、わかった」

「えっと……俺を生き返らせたのってかなりやばかったりするのかな」

「なんであれネラは貴方を助けた。それが答え」

「——そっか」

やっぱり普通じゃないんだろ。いくらなんでも。流石に心配になってきたが今も外で派手にドンパチやらかしてるから大丈夫そうではある動き速すぎて目で追えねーよバケモン過ぎんだろ。——今度ちゃんと聞いとこう。

「あの——」

「ん？」

「貴方は価値観が違うと聞いた。つまり、その」

「心配しなくてもここにいる全員、俺の目にはとんでもない美人揃いでくらくらしてるよ」

「——そっか」

控え目だけど羽と尻尾の先がびよこびよこ動いててくっそ可愛いんだがこの小動物衝撃的な愛くるしさだよなのに全身むっちむちのふかふか駄肉ボディとかこれもう犯罪だろ。いうて俺よりよっぽど年上なんだろうけど。

「イヴァール」

「ん？」

「私の真名。覚えてくれると嬉しい」

「あー……ありがとう？」

「こんな機会は多分、二度と来ない。だから心配いらない」

「そっか、じゃあよろしくな」

「第四夫人として尽くす。どんとこい」

「… What？」

「だいよ……なに？」

「……？ 妾（めかけ）か愛人の方が好みだった？ いつでもどこでも呼んで、がんばる」

「」

「何を惚けているんだ人間くん、ここからが地獄の始まりだぞ！」

「貴様にだけ良い格好はさせん、いざ参る！」

「さあお覚悟を！」

「もうやだこのポンコツ美人ドラゴンズ……」

#8 竜人族の恋愛偏差値

「我らを美しいと思う雄の個体……？　そ、そんなことが……いやでもそんな……しかし王と妹君が傍にいても……あれは確かに……」

「——いやいや、いやいやいやいや待て、待つてくれ。こんな都合の良い与太話が信じられる訳ないだろうローゼとにかく冷静になるんだそうさまだ慌てるような時間じゃない……え、マジ？」

「ちよ、ちよつとお二人ともおおお落ちて着いてくださいこんなの上辺だけですわ！　いつも通り！　醜いわたくし達を甘い言葉で誑かして結局己の利益にしか興味のないクズに違いありません！　これまで散々痛い目を見ましたのにもうお忘れになられましたの!?!　無意味な期待は絶望を生むだけですわ！」

「Oh..」

この世界にも美人局みたいなのがいるのか勉強になるなあ。……いや、ていうか水晶竜——クオーツアイトさんだったか？　とびきり綺麗な水色の長髪と透き通るような純白の肌が深窓の令嬢、高嶺の花という表現がピッタリなのだが……俺の世界に生まれ

ていれば蝶よ花よと愛でられ、その美貌だけで確実に世界に名を馳せる傾国レベルの美女なのにどうしてこうなった。色香に溢れる長乳も形が崩れることなく、艶やかに縊れた腰、豊かに実った桃尻から太ももへのラインと正に非の打ち所がない。そして例の如くの布切れとニカブもどきに加えて、彼女はすつけすけのローブみたいなのを羽織っていて高貴な感じが出ている。ドスケベの癖に気品すら醸し出すとはこれ如何に。美という点ではこれまで会った竜人族でも頭一つ抜けている気がする、のだが前述のセリフでどうしてこうなった感が余計に募る。要するに残念な美人異世界代表である——が必死過ぎて悲壮感が半端ないぞどんな仕打ち受けて来たんだよこの3人。でもまあ結局、揃いも揃ってチヨロそうな気配を存分に出してるのがまた救いがないというかなんというか……。

「——なあイヴァール」

「仕方ない。あの3人は特に」

目の前できやんきやん騒いでいる絶世の美女3人を眺めながら、俺の膝上にちよこんと座るイヴァールに尋ねるが何時ものことのように言っただけだった。どこもかしこもやわつこいしクツソ甘つたるい匂いはするしで頭おかしくなりそうなんです。が密着は勘弁してもらえませんかねえ……？

「ついでこの間の多民族会議でもインキュバスのクソツタレに散々絆されて領地持つてか

「れたのをもうお忘れですのローゼフラムさん!？」

「な!？」 あ、あれはすまなかったと何度も謝罪しただろう! それを言うならクォーツアイト! 貴様こそホブゴブリンの将校に利用されるだけされて散々内情をバラしまわったのを忘れたのか!」

「あ、あんなの逆らえるはずがありませんわ! 200年ぶりに目を合わせてくださった殿方ですよ!？」

「おい、2人とも少し落ちつい——」

「貴様もだネフライト! 嬉々として合コンを組んできたと思ったらコボルトとオーク共の引き立て役にされてどれだけ私とクォーツアイトが惨めだったと思っている!？」

「そうですね! あの後にはもう惨めやら情けないやらで寢室を蒼水晶で溢れさせてしまつて『またかコイツ……』な目でメイドに見られてもう主人としての威厳なんて欠片もありませんのよ屋敷に居づらくて辛いんですの!」

「それは散々謝つただろうが今更蒸し返すなあとお前の家の事情なんざ知るか! それに僕の秘蔵の魔映すらくれてやったのをもう忘れたのか!？」 ていうかあの時は僕が一番惨めな思いをさせられたんだぞ幹事までしたのに一生懸命プランも練つて!」

「それが利用されているだけだとなぜ気付かん?!」

「本当ですわもう何度同じことを繰り返すつもりですか!？」

「もちろん気付いてたけど今度こそもしかしてと思っちゃったんだよ！ ていうかお前
らも最初は毎度毎度ノリノリだろうがいい加減にしろ!!」

「おお……………もう……………」

辛……………非モテ種族辛すぎる……………。

「てかこんなガバガバ状態で良く国として維持できてるな……………」

「大丈夫。竜人族はそこそこ強い」

「他種族と比較しても?」

「うん。末端でも山の一つや二つは軽く消し飛ばせる」

「ヒューツ!」

そんなもん絶対そこそことは言わない気がするんですがそれは……………マジで下手に逆
らわんとこ生き物として格が違い過ぎる。膝上のこの愛くるしいぬいぐるみみたいな
のがガチでヤバい奴な件について。てか末端でそれならこの四元竜とか、ネラにゴル
トはどないなんねん……………うん、まだ外で瞬間移動バトルしとるわあの2人。竜人族。パイ
センマジパネエつす。

「そろそろケンカしだすから止める」

「お、おう、ほんとに何時もの事なんだな……………」

「ちゃんとできたら褒めてくれる?」

「んあ？ ああ、もちろん」

そう答えると、くしゅと見た目相応の笑顔を浮かべ、相変わず姦しい3人組にのんびり歩み寄って行くイヴァール。なんやねんコイツ可愛すぎんか後で犬のように撫でまわしてわやくちやにしてやろう覚悟せえよ。

「ローゼ、ネフ、クオーツ。そろそろやめないとダメ。ここでケンカしたら主様が死ぬ」

「おい」

「」

「」

「」

俺がいるのを忘れて赤裸々な言い争いをしてしまったことに今更気付いたのか、3人揃って耳まで真っ赤になってしまった。ホンマにさつきからどいつもこいつも可愛すぎんか？ なんかもう失礼だけどペット飼ってるみたいな感覚に思えて来たな尻尾あるし……、角と羽もあつてアホみたいに強いらしいけど。

「主様は他の雄と違う。だから平気」

「……なぜそうだと言いつける」

「そうだよイヴァール、理由を聞かせてくれないか。普段の君からすればらしくないくらいに言い切るから気にはなるが……」

「わたくしは何を言われても信じませんわよ……」

彼女らからすれば長い長い付き合いであろうイヴアールがはつきり言うので、訝しむようにこちらを盗み見てくる美女3人。ローゼフラムさんとネフライトさんは困惑の色が濃い、クオーツアイトさんに至っては疑心暗鬼MAXな視線を投げかけてくる。まあ彼女に関しては何がこの別嬪揃いの中でも抜けて美人だと思ふのだから、この世界だと……うん、悲しくなるからやめよう泣けてくる。そして少しでも目が合いそうになるとふいっと顔を反らしてしまうクソつよドラゴン娘3人組。中学生か。

「そこは心配ない。主様は私に、その……欲情してくれたから」

「」

「」

「」

「」

いきなりなんちゆうこと言うんやこの子は恥ずかしそうに俯いて可愛すぎるやろ。

……じゃないじゃない、てか他3人も首まで真つ赤にして固まってんぞ恋愛偏差値クソザコすぎんか。

「よ、よくじょう……?」

「浴場じゃなくて……?」

「翼状の間違いでは……?」

アカンIQ下がり過ぎとる。

「主様のお膝の上に座ってたら、お尻に硬いものが当たってた。これって……そういうこと、だよな?」

「えっ」

「……?」

「どういうことですか」

「サーセン」

#9 光の三原色竜（喪）

「いやだってあんなむっちりむちのドスケベボディで服ともいえないような布切れ貼っただけの超絶美少女に無防備で股の上に座られたら誰だってそうなるわ！俺だってそうなるんですわかってくださいお願いします!!」

「え、えっ……………は？」

「冗談だろう……………夢でも見ているのか僕は……………」

「そんな雄はこの世に存在しないんです貴方はあのクソツタレインキュバスの類ですネ そうなんですネそうと決まればブチ殺しますネ」

「好き」

「ちよつと色んな感情が交錯し過ぎじゃありませんかねえ……………」

あとガチでブチ殺してきそうなオーラ本気で出すのやめてもらっていいですか死んでしまいます。

クツソ良い笑顔で禍々しいDeepでDarkなBlueの気を放ちながらゆっくり近づいてくる傾国の美女がマジでヤバい目がイっちゃってる、周りに水晶生えてきて

ますよスペ○スゴジラかお前は。いくらなんでも病み過ぎやろアカン死ぬ。

「四元竜が揃いも揃って何をしておるんじや……」

「ネラあ！」

「ほわあ!?! あ、主様?!」

クオーツアイトさんのガチの殺気にマジでビビり散らかしてたらいつの間にか戻ってきてたネラに抱きつく。ああこの匂いほんまに落ち着くわネラ最高、お前が竜人王だ。もうどこにも行くな。

「ネラ」

「びっ?♡ ひゃひ♡」

「ネラは俺のモノで、俺はネラのモノだ」

「ふおっ?♡♡」

「だから助けてくださいお願いします」

「くくくううつぎゆ♡♡♡ ひぐ♡♡♡ ふぎゆ♡♡♡ ——ひ、ひようがにやいあ

るひひやまれひゆね……♡♡♡ ほっひゆ♡♡♡」

凄いい、ネラがここまでやっても潮吹かずに耐えてる。ほんとに王様やってたんだなこの子……。

そして今のやり取りを見て完全に固まった四元竜の皆さん+妹君。こちらもいつの

間に戻ってきたのか、顔を両手で覆ってはいるがバツチリ隙間を空けて俺がネラを抱きしめているのをガン見してふるると震えるゴルトちゃん、おっぱいもふるふるですよ神。あと全員鼻血出てんぞ小学生か。それからこつちが本題なんですけどローゼフラムさんは炎、ネフライトさんは鎌鼬みたいな、クオーツアイトさんは水晶、イヴァールは岩撒き散らすのをやめてください死んでしまいます。

「ふへへえ♡ 主様♡ あるじさまあ♡♡」

「ちよ、ちよつとお姉さま！ いつまで主様に抱きついているのよズルい！ ゴ、ゴルトだって、そ、その……んもおく！ お姉さまのばかあ!!」

「いやさつきまで普通に抱きついてたやん自分」

「う……そ、それは、だってその……あんな匂い嗅がされたら誰だってあんなっちゃうし……でもほんとにゴルト達を綺麗だと思ってくれてるだなんて思いも寄らなくて……どうせ口だけなんだから手足切り落として精子サーバーにでもしてやろうと思ってたし……」

「ヒェッ」

即墮ちしてたと思つたら可愛い顔して考えとる事えげつないわあ。まあこの子はこの子で色々大変だったのかもしれない——いや多分そうきつとそうむしろそうだと言つてよじやないと怖すぎるよお!!

てか改めてこの世界種族間の格差激し過ぎんか？　いくら個体値としては強いいうても良く心が折れずに済んでるな……。

「ハア……ハア……大丈夫、大丈夫だローゼフラム、落ち着け私の炎ツ……。こんな機会は二度とないんだ、さつきあの御方に真名だつて告げたのだし……。そうだ私は既に1歩先んじて——ああでもどうしよう、どうしよう！　大事な事なのに！　初めてだったのに！　あんな、あんなにも適当にしてしまつて……。なにが紅炎竜だ馬鹿バカ！

なぜ肝心な時に私はいつもこうなのだあ……」

「落ち着け、落ち着くんだ風の精達よ。ああそうさ、僕はいつも通りさ。この飄翠竜ともあろう者がたかが人間の雄1人どうとでも——え？　声震えまくつてんぞ？　あんな生意気な口きいたんだから相手になんてしてもらえない？　——……スウー…………いや、うん、あれはほら、その、なんだ、ちよつと動揺してただけで——嫌だイヤだそんなの無理無理どうすればいいんだ教えてくれよ頼むよおつ！　ああつ、見捨てないでえ!!」

「いやでもだつてこれまでの1500年間ずっとそうだつたじゃありませんか期待して

は裏切られ希望を持って上げて落とされええそうです今更こんな奇跡起きる筈がありませんわこれは罠です都合が良すぎますあの憎いモテ種族共の新たな陰謀に違いありませんわやはり邪魔な障害は排除しなければ王は既に洗脳されているのです妹君も他の四元竜もダメですねならばこの水晶竜クオーツアイトがタダシマス正さなければなりませんウフフフフフフフ」

「3人とも落ち着いて。四元竜の名が泣く」

「3人目が泣くほど怖いんですがそれは」

もう心折れちゃってる人いるじゃないですかやだー！

「ああもういい加減にしなさい！ お姉さま！ ローゼ！ ネフ！ クオーツ！ 主様に対して失礼だからシヤキつとしなさい！ イヴもこつそり主様に座ろうとするな！」
『すみませんでした』

——うん、オカンかな？

「——と、いう訳で僕は異世界から来たので、少々価値観がこの世界の方々とは異なるんです、はい」

「主様のそれは少々とは言わんのじゃが」

「真逆だよ真逆う〜」

「……だ、そうです。まあその、うん、なんだ、俺から見れば皆さん失神しそうなくらいに美人で魅力的な方々ばかりなので正直たまらんですんでアンタら揃いも揃ってそんなエロい恰好してんすかふざけてんすか視覚的に殺す気ですか？」

「エロ……ふつぐ♡♡ ——こ、こほん。……この世界の雄の個体は発情すること自体が稀なので少しでも興奮してもらえよう、雌の個体は大体このような服装が常なのです、主様」

「ただのぬのきれを服装と言う勇氣よ……なんちゆうことや、性の乱れってレベルじゃねーぞ」

「主様が不快に思うのならすぐにでも変えられるよ、僕らみたいなのがこういう恰好は確かにちよつとね……すまない、見苦しいだろう？ これらは全て各々の魔力で編んでいるから——」

「是非ともそのままです」

「えっ。いやでも——」

「そのままです」

「アツハイ」

とんでも恵体のハイパー美人がこんなドスケベ衣装とか最高に決まつとるやろいい加減にしろ。

……いや、そもそも。

「万歩譲つて見苦しいと思うのならやめればいいのでは？」

「着飾ることすら許されないというのか我々には……」

「いいじゃないかせめて流行にのるくらい許してくれたつて……」

「あ、いや、うん……なんかすみません……良く似合ってますよほんとに……滅茶苦茶魅力的ですハイ……」

いかんローゼさんとネフさんが死んだ魚の目に……。てかこんな服ともいえんようなドチャシコ衣装が流行りなのか異世界ヤバイ。——あのトラウマ共もこんな格好してたなそういやいかん思い出してまた吐きそう……。

「いやもうほんとに皆さん魅力的です蠱惑的です煽情的ですドスケベです目の保養になります最高です正直辛抱たまらんですExcellent!!」

「やっぱり主様は私達でも興奮してくれるんだね。嬉しい。本当に凄いこと。尊い」

「んえあ？ お、おう——」

「証拠を見せてくださいませ」

『えっ』

俺があれこれ説明している間も無然としていたクオーツアイトさんの凜と発せられた言葉に、彼女以外の全員が声を重ねた。この人拗らせ具合が飛び抜けてんだよなあ……、一番恐ろしいのはゴルトちゃんやけども。達磨↓精子サーバーの極悪コンボは発想からしてヤバすぎる外道過ぎんか、怖い。いやまあ竜人族の現状からして精子が必須なのはわかるけど、わかるけども。そもそも人間と竜人族って交配できるんか？ まあお互い人の形しとんやしイけるんやろ、知らんけど。

「し、証拠と言いますと……？」

「クオーツアイト、そなたいい加減に——」

「王は黙っていてください」

「……………くすん」

竜人王え……………。

「殿方で、かつ本当にわたくし達に興奮なさっているのならば示していただける筈です」

「クオーツ……………まさか！」

「ゴクリ……………」

「そ、それは……………ぼ、ぼぼ……………」

「あつ（察し）」

「ぼ……………くっ！————勃起したおちんちんを見せていただきますわ！ 今！

「ここのでっ!!」

「な、なんとという大胆不敵! かの現象は最早都市伝説ですわとか言ってた癖に! 貴様本当にクオーツアイトか!?!」

「クオーツ……君を見直したよただの喪竜じゃなかったんだね……」
「もりゆうてなんやねん毬藻の親戚?」

「このボンコツ光の三原色竜共ええ加減にせえよホンマに。」

#10 最強（）の矛と盾

「あのさあ……」

「やっぱり証明できないんじゃないやありませんの………よし殺そう」

「あ、この人ほんまにヤバいわ」

男がいなくて種がマズい状況すら頭からすっぽ抜けるまでに拗らせてるところが特
に。

「ちよつとクオーツ！ いい加減にしなさいって言ったでしょ！ 大丈夫よ主様はちや
んと勃起できるわこのお姉さまでさえイケたのよ!？」

「私でさえって………どうせ私は貧乳で侘しい身体だもん好きでこうなったんじゃないも
んネラ悪くないもん………」

「やめたげてよおー！」

あーあー隅っこで縮こまって床イジイジし出しちゃったよ竜人王様御年800歳。
ほんとに大丈夫かこの国………大丈夫じゃないから雄がないのか？

「ま、まあわたしが見たのもほんの少しだったし確証が欲しいのは確かね。あの時だけ

だった可能性も0じゃないし……」

「——ゴルトさん？」

「という訳で主様♡ ちよーつとだけ我慢してね？♡ 大丈夫痛くしないから♡」

「え、ちよ、ゴルトさーん!?」

「はーいバインドー♡」

「うおおっ!?」

くっそ玉座に両手両足縛られて動けん！ てか何この光の輪っか拘束系の魔法？
なにこれすつごおい！

——じゃなくてだな!!

「おいこらやめーやゴルト！ 直で確認とか絶対碌なことにならんぞ！」

「ふっぎゅ……♡♡ し、真名呼び捨ての威力やつばあ……♡♡ ——でもだーめ♡ こ

んなクソよわバインドでも身動き取れなくなつちやう主様がいけないんだよ？♡

くっふふ♡ ギーこぎーこお♡♡」

こ、こんのクソガキ……ただの人間がドラゴンボ○ルばりにバトれる人外相手に勝てる訳ないやろいい加減にしろ！ 絶対後でひーひー言わせちやるからな。

「ほらほらこつち来て、みんなで主様を誘惑しなくちや♡」

「ぐっ……主様、申し訳ありません。しかし私もまだ不安で……」

「ま、まあ？ 僕も興味がないわけじゃないし？ し、仕方なくお相手しようじゃないか」

「……………これでピクリともしなければ本気で死んだ方がマシな思いをしていただきませすわよ」

「主様。私のおっぱい、おつきいほうだと思う。エッチな気分になれそう？ なつてくれると嬉しい」

「う、おおお……………」

「ここが桃源郷、人類最後の希望、肉林、夢の最果て、理想郷か……………視界一杯にたっぷりぽいんぽいんのおっぱいしかないです素晴らしいです絶景です最高の高です甘つたるい至高の香りが最早媚薬じみてますこれで勃起せん男がこの世に存在し得ましようか。いや、ありえん（鋼の意思）」

「——今更なんだが我がドラゴンキラーめっちゃギンギンの筈なのに何故ズボンにテントすら張れないんだ、俺の息子くっそデカくなつてなかつた？」

「……………ん？ 主様の服、なんか魔力込められてる？」

「へ？ んなわけ——」

「ま、いつか。それじゃあ主様♡ ごたいめーん♡」

「え、あ、ちよ」

疑問も拭えぬまま、ゴルトが悪戯心満々な笑みで俺の股間に光を込めた指先で触れたかと思えば、パアン！ とズボンに下着、ついでにTシャツまで弾け飛び、抑えを失ったマイサンが勢いよく飛び出し――、

「ふえ？」

顔を近づけていたゴルトの鼻っ面を引つ叩いてしまった。

「こ、これが殿方の……♡」

「お、大きすぎやしないか……こんな魔映でも見たことない……♡」

「あわわわわわ……♡」

「主様……凄いい♡ かっこいい♡ 好き♡」

「なんやこの拷問」

全裸で見世物になるってこんな気持ちなんやな。こんな美人に蕩けた表情で囲まれる状況やから別に悪い気はせんけども……。

ところで妹君は大丈夫なんだろうか黙りこくつてうんともすんとも言わなくなったんですが――、

「おーいゴルトさー……ん……」

「――ほっひえ？♡♡♡」

あ、アカンわこれ。

「ふっぎゅ?♡♡ うっぎゅ♡♡ ふおお?♡♡ くっさ♡♡ おオ、っ? キッ
ツうおイッグ♡♡♡ いくいくいくいく♡♡♡ うお、くくく♡♡♡」

「ご、ゴルト様!? 一体どうし——ふおっ?♡ おっぐ?♡ のっおいつぎゅ♡♡♡」

「え、ちよ、なん——あっぐ♡ えあ?♡♡ ほっ?♡♡ くっほお♡♡♡」

「あわっ!?! え、やつ♡♡ くっさ♡♡♡ うっオ、クッサっ♡♡♡」

「すんすん♡♡ ふぎゅ♡♡♡ んっぎ♡♡♡ いっきゅ♡♡♡ くくっオ、♡♡♡」

「あーあーあー……」

結局いつぞやと同じ結果に。てかゴルトは一回経験したやろ学習能力ないんかこの妹君は。

これで竜人族はまずちんぼの臭いに勝てないことがほぼ確定した訳なんやけど……
なんなんこれ? 俺のおにんにはガチモんのドラゴンキラー的な伝説の武器なん?

山すら消し飛ばせる人外余裕で屈服させるとか戦略兵器か何かかな?

「おーいゴルトさーん、この拘束解いていただけませんかねえ……?」

「ふっお♡♡ オ、っ♡♡♡ ふんっぎゅ♡♡♡ くっほお♡♡♡」

「ああもうクソ強いくせにクソザコすぎる……」

「こうなるとわかっていたから、主様の衣服を私の魔力で編んでおいたのですが……」

「ネラ」

「はい、主様のネラはここに」

ふわつ、と天使のように微笑み、控えめに俺の斜め後ろに佇むネラ。さつきまで隅っこでいじけていたのはもういいんだろうか、ていうか心配すらせんかったぞ。案外ちやつかりしてそうだしやつぱ凄いいんじやねこの竜人王様（仮）。

「魔力で編んだ、っていうのは？」

「はい、主様。主様の男性器の香りはそれはもう天上の果実が齎す芳醇なそれで、私たちにとってはもはや恐ろしく強力な媚薬の類です。私ですら何ら抵抗できずに屈服させられたのですから。そもそも我々竜人族に毒や麻薬などまず効きはしないのですが……。とにかく危険ですので、無礼を承知で聳立（しよりりつ）と香りを抑えられるよう、遮断の魔法を付与した魔糸で編ませていただきました。ゴルトが木端微塵にしてしまいました」

「はー……。じゃあネラが今なんともないのも——」

「御明察です、主様。この顔布もそれで編んでおります」

言いながら俺の脇に立ったネラは両手をかざし、ぼう、と光ったかと思えば全身を暖かな黒銀の光が包んでいく。綺麗な糸のようにも見えるそれは無数に絡まりながら首元から足首にまで届き、一際強く輝いたかと思えば、先程消し飛んだ衣服が何事もなかったかのように元に戻っている。ついでにゴルトに掛けられた拘束魔法にもネラが

ちよん、と触れると粉々に砕けてしまった。

「おお……………凄いなんだな」

「えへへ。結構得意なんですよ、魔力結縫」

この世界では花嫁修業として必須の技能です、とドヤ顔でちつぱい胸を張るネラ。かわい。

「主様の身に万が一もあつてはなりませんから。絶対攻性防御に竜人王の加護、殺傷魔法の反射、素敵回避に迷彩魔法、身体能力の強化、あらゆる汚れと寒暖対策に、ヒーリングと虫除け、衣服がダメージを受けても時間経過で再生する効果も付与しております」

「えっ」

「見た目はそのままですから、その、勝手をして申し訳ございません。ですが、どうか私の編んだ服を、あの……………着てやってはいただけないでしょうか？」

「あー、いや……………うん。それはもう、有難く着させてもらうよ。ありがとう、ネラ」
「ほ、本当ですか!!? わあ……………ありがとうございます、主様！」

まるで大輪の花のような眩しい笑顔を咲き誇らせて、深々と頭を下げるネラ。

そんなネラを尻目に、俺は全身から冷や汗が噴き出すのを抑えられないでいた。なんだ今のとんでも効果の数々、ユニク〇一式のお手軽ファッションが一瞬で伝説級のスー

パーチート防具に生まれ変わったくさい。絶対攻性防御って何？リアクティブアーマー？ 索敵回避はつまりステルスってこと？ 迷彩魔法は光学迷彩か？ 装備者への全ステバフとヒーリング効果に耐久値自動回復。かいた冷や汗も即座に吸収速乾で着心地も抜群。サ終寸前のバランスブレイカーですらここまでしねーよ売ったらいくらするんだろこれ……。

「これで結構得意とは……結構とは、得意とはいいたい……うぐぐぐ!!」

「かなり大盤振る舞いはしました、はい」

「ですよねー」

これくらい普通ですよ、とか言われたら俺の常識が持たんかった。インフレにも程があるわ。

「——そういえば」

「はい。なんなりと、主様」

俺のふとした問いかけにもニッコニコで応対してくれる童人王様。もう（仮）とは言いません、この娘マジもんに凄いわ。そしてかわいい。なにはともあれかわいい。

「ネラが俺を助けてくれたことなんだけど」

「……そうですね、一度ちゃんとお話しさせていただいた方が良いでしょう。ですがその前に——」

一瞬目を細めたネラは一息つくど、どこか神妙な面持ちで頷いた。そんな彼女の横顔があまりに神々しくて、俺は思わず息を呑んで目が離せなくなる。

「そこで伸びているのを、とりあえずどうにかさせましょうか」

ネラがその小さな指で宙に円を描くと、今まで会ってきた6人よりも幾分か露出の少ない竜人族達が足音も立てずに玉座の間に入ってきた。召使かなにかだろうか、彼女らも例外なくニカブもどきで顔を隠しているが、それでもやはりその美貌は隠しようもないように皆が皆、絵物語からそのまま表れたかのような美しさである。こんな世界の価値観でなければこの世の春を謳歌していたであろうに……なんともやるせない気持ちになるなあ……。

「すまぬが、それらを各々の居にまで運んでやってくれ」

『王の仰せのままに』

文面だけ見れば大層仰々しい感じなのだが、運び方が……普通に脚引つ掴んで引き摺ってるんですがそれは……。

「雑う……」

「主様の前で無様な姿を晒したのですから当然です」

「それ、ネラが言うう？」

「知りません。ふふっ」

ああもうかわいいなあ!!

「それでは主様。邪魔者もいなくなつたことですし、私の寢室に参りましょうか」

「——案外図太いんだな、ネラは」

「伊達に王はやつておりませんよ。今なら信じていただけますか？」

「さあ、どうだかな」

肩をすくめて見せると、悪戯っぽい笑みを浮かべてしな垂れかかつてくるネラ。

「主様は私のものなのですから、これから存分に構っていただきます。嫌と仰られても、もう離れませんよ？」

見た目不相応にもほどがある、そんな老獪な笑みを零して俺の目を覗き込んでくるネラに対して、これはなんだかんで一生頭が上がりなくなりそうだと、確信めいた予感に駆られるのであった。

1 1 竜人族の王

「もう……主様は椅子にお掛けになって構わないですよ」

「勘弁してくれ、庶民の俺には逆に疲れるんだ」

「そういうものなのですか？」

「そういうものなんです」

俺の必死の説得になんとか了承してくれたネラと並んで、彼女のベッドの縁に腰掛け
ている。大の大人と、見た目は精々○学校高学年くらいの幼女とで居座るのがデカい天
蓋付きの寝床というのはなんとも背徳感というか、犯罪臭が凄い。まあその幼女はただ
の人間ではないんだけど。

ネラの寝室。初めての時はそれはもう色々あり過ぎて部屋の内装なんざ気にする余
裕もなかったが、今は違う。この幼女1人が住まうことを考えれば随分広いと感じる室
内は、金銀財宝をちりばめたような華美な部屋——元の世界の中東王族なイメージ——
ではなく、なんとも落ち着いた雰囲気だ。調度品などの類は殆ど置かれておらず、キン
グサイズのベッドは確かに豪華な造りだがシンプルでそれはもうフツカフカであり、化

粧台もテーブルも椅子も全て、俺のような一般人が一目見てわかるくらいに質の良いものばかりだが厭味つたらしい絢爛さは欠片も感じられなかった。一言でいえば非常に居心地が良い。唯一あるとすれば、最早小さな庭と見間違えるようなバルコニーには見たこともない植物達が陽光と風をたつぷり浴びては気持ち良さそうに花卉や葉を揺らし、美しい水晶が控え目に彩を加え、そしてその中央には水浴び用であろう大きな浴槽が添えられていることくらいか。水道の類は見当たらないので、恐らく魔法で水でもお湯でも汲むのだろう。便利だなあおい。

「お風呂が気になりますか？」

「随分立派なバルコニーだなと思って」

「私もとっても気に入っているんです。四元竜の皆が誂えてくれたんですよ。後で湯浴みもいたしましょう、お背中お流ししますね」

「それは楽しみだな」

私もです、と鈴が鳴るように小首を傾げ、目一杯羽を広げて見上げてくるネラ。かわいがゲシユタルト崩壊するわ。今した。

「それでは主様。お話を始めさせていただきますので、少々お時間を賜ります」

「ああ、よろしく」

そう答えると居住まいを直し、キュツと握り締めた小さな両手を太腿に置き、羽を畳

んで俺を真つ直ぐ見据えるネラ。その佇まいは十二分に、上に立つ者としての意思の強さを伺い知れるものだった。

「主様。先にもお伝えしました通り、我ら竜人族には既に雄の個体はおらず、最早緩やかに滅びを待つより他にありませんでした」

「本当に1人もいないのか？」

「方々を100年以上探し回りましたが……絶望的と言わざるを得ません」

「他の種族の雄と、交配は望めない？」

「はい。そもそもこの世界においては雄が発情し、精を残す時宜自体が稀であること。加えて種族も違い、醜悪とすら呼べる我ら竜人族にそのような機会はまずありえませ
ん」

こんな可愛いの化身みたいな子が自分を醜悪とか、やっぱり信じられんな。他種族間でも子を生せるは生せるっばいけど……。まあ価値観の違いなんて中々受け入れられるものじゃないか。地球もそれで散々戦争してるし。

「そんな折に、私は東の平原で主様を見つけました。微かですが血の臭いを嗅ぎ取り、そこに倒れられていたのが主様でした」

「あれはビビった、ほんとに」

「ええ、私も驚きました。雄の個体というのはどの種族も小さく、まず子どもの姿からは

成長せずにそのまま老いていくのが常でしたから。そして何より……」

ネラは深く一息つくと、ゆっくり噛み締めるように言葉を紡いでいく。

「信じられないような生命力を感じました。もう命も尽き欠けておられましたが、それでも雄の個体としては有り得ない程に。伝説にあった、力のあるインキュバスの個体が倒れているのかと勘違いをした程でした」

「伝説って……。インキュバスってというのはやっぱり雄？」

「はい。雄ではありますが主様と同じように大人の姿にまで成長する珍しい種族で、魔族の一種です。しかしながら、身体の成長と引き換えにか生まれた時から生殖能力を失っている場合が殆どで、仮に残っていたとしても子を成すにはとても足りないのだそうです。遙か昔には、強い生命力を有したインキュバスの個体も存在したそうなのですが……」

「はく……それで伝説なのか。でもなんでまたそんな」

「それは魔族にもわからないそうです。元からそういう種族だとしか。ですが、大きな雄の個体というのはそれだけでもう稀有な存在なので。外交や交渉の場では重宝されていますね」

「ああ、さっきの話ってそういう……」

「お恥ずかしながら……かくいう私も何度も……。生殖とは最早無縁であるからか、私

達のような種族の者にもそれなりに接してくれるので……」

この話の流れからすると、魔族は外交以外にもインキュバスをホストとして外貨なんかを大量に稼いでいそう。この世界の経済がどんなものかはわからないし、竜人族のような種族がどれくらいいるのかが問題だが。まあそれは今考える事じゃないか、気にはなるけども。

「何より大人の姿をした雄ってというのが珍しくて、俺を助けてくれたってことか」

「……………仰る通りでございます、主様。我々の滅亡を、回避する術があるのではないか。藁にも縋るとはまさしく、外道である事は承知の上で蘇生の魔法を施させていただきます。私の宝玉を触媒として」

「そう、それだ」

「——主様？」

ずっと聞きたかった話にやっと辿り着いたな。ほんとに話進まなかったけど。正直すまんかった。

「ネラは大丈夫なのか？ 蘇生魔法なんていくらネラでも凄いいことなんだろう。宝玉っていうのも。イヴァールが気にするぐらいには」

「……………主様は、私の心配をしてくださっているのですか？」

「当たり前前だろ。俺の命の恩人だぞ、ネラは。それもとびきりの別嬪さんときたもんだ」

「そんな……」

俺の価値観からしたら当たり前でも、ネラには相当予想外の言葉だったのだろうか。困惑するばかりで目を泳がせ、力なく俯いてしまう。

「ネラはまだ、俺に恐ろしい事をしたんだって後悔してくれてるのかもしれない。でもな、俺は本当に感謝してるんだ。こつちの世界じゃそりやおかしいのかもしれないけど、竜人族の人達は俺にとつちやとんでもない美人揃いでさ、ほんとに頭がおかしくなりそうなんだぞ」

「……………」

「——参ったな」

正直、これを言うのはかなり気恥ずかしかったりするんだが……しかも相手は姿形だけで見れば幼女だし、合法ロリとはいえロリコンはロリコン。いい歳こいたおっさんがこれだ。中学生どころか小学生は俺だったな。

——もうちよい意地悪してやろう、またネガティブになつちやってるし。

「なあネラ、さっきの随分積極的だったのはどこ行つたんだ」

「う……………」。えと、あの……すみません。先程は、これで主様と2人きりになれると思つて気分が高揚してしまつて……。ああ、恥ずかしい……」

あー、これを素でやってそうなのがな。ほんとにこの竜人王様は。

「……だーもう！ わかったわかった。観念するよ、俺の負けだ」

「え。あの、あるじさ——まあ!？」

急に大声を挙げた俺に驚くネラをむんずと抱きかかえ、ドデカいベッドに寝かせて覆い被さる。いい歳して、といつてもこの娘らにとつちやガキも同然だったな人間の俺なんざ。ああダメだ、こつ恥ずかしくてかなわん。

「いいかネラ。俺はな、人間にしてみりやそれなりに生きておっさんで、元の世界じゃ10年は社会人やったんだ」

「え、えと……あ、はい……」

「そんな俺がな、歳はともあれ見た目がこんな小さい女の子に一目惚れして欲情してんだぞ？ そりや気恥ずかしくもなるだろ」

「え、あ、あの………ひとめぼ………うええ!？」

俺の大分、相当に、かなく〜り情けない告白を理解しようとしているのか、身動きも取れない——実際は俺を押しつけることなんざ造作もないだろうが——ネラはあたふたと愛らしい顔を右往左往させるだけで殊更に困惑していた。控え目な胸の前で不安そうに握り締めている両手も、耳の裏からうなじまで、彼女の褐色の肌が判り易いくらいに色づいていて、これがまた実にエロい。

「え、そ、そんな……主様が私をなんて……で、でも、ひどいこともいっぱいしちゃった

し……………こんなので——んむっ!」

この期に及んで、まだグダグダ言ってくれるネラの唇を無理矢理塞いでやる。

「んんっ!?! ふっう?」♡ ちゅ♡ んちゅ♡ つは♡ ああ♡ あ♡ あっ♡ ちゅ♡

ちゅば♡ ある♡ あるじさまあ♡」

軽くバードキスをしただけでトロツトロに蕩けてしまうネラが、俺の服をか細い手で控え目に掴んでくる。うん、こんな可愛い生き物に勝てるわけないだろういい加減にしろ。

「ネラ」

「ううっ……………♡ ……は、はい」

「ネラは俺のもので、俺はネラのものだ。覚えてるな?」

「はい……………」

「俺はな、抱けもしない女にキスできる程図太くないんだ。例えばあのバケモノ共とかな!」

「す、すみません……………」

ああいかん、思わずあのトラウマを思い出してしまった。そしてまたネラがネガティブってる。——ど、どうしよう。

「……………主様」

「うん?」

殆ど消え入るような声で俺を呼ぶネラの、その大きな紅い瞳からは今にも涙が溢れてしまいそうだった。恐怖と微かな期待を両目に宿して、俺の服を握る力が俄かに強張っていく。

「主様は本当に……私を……。——……。好いてくださるのですか?」

「ああ」

「本当は、騙そうとしたりしていませんか?」

「しないしない」

「……ずっとお傍に置いていただけますか?」

「むしろこっちからお願ひしたい」

「……………ネラを」

「うん」

「——愛して、くださいますか?」

「もちろん」

俺がそう答えると、ネラはぼろぼろと大粒の涙を零して泣き始めてしまった。

竜の涙：竜人族が誠に感情を揺り動かされ流した涙が、宝石となって残ったもの。

高純度の魔力の結晶であり、滅多に世に出没らない貴重品。

魔法の触媒、武器・防具への加護、装飾品と、どれをとつても稀有な効果を発揮する。

あまりに希少である為か、手にした者への逸話や伝説が絶えることがない。

一説に依れば、所有者に“永遠”を約束するという。

1 2 ネラ 1

「——申し訳ありません、主様。赤子のように泣いてしまつて……」

あの後、本当に赤ん坊のように泣きじゃくつてしまつたネラをあやしていたら、それなりの時間が経つてしまつていた。陽はなだらかに傾いて、綺麗な紅の夕日がバルコニーから室内を真っ赤に染め上げている。

「いえいえ。本当に大丈夫なのか、泣き虫竜人王様？」

「……もう、意地悪なのですね」

俺の腕を枕にしていたネラが頬を膨らませて起き上がり、いそいそと馬乗りになつて見下ろしてくる。幾度か逡巡した後、ネラは自分から顔布を取り払つてしまつた。差し込む夕陽がネラの曝け出された横顔を暖かく照らし、まるで神話の天使か女神かのよう、その美貌を殊更に際立たせている。

そんな彼女に思わず見惚れていると、暫し黙りこくつていたネラはこくりと一人頷き、意を決したかのように目を瞑ると、その愛らしい唇を俺に押し付けて来た。

「んっ——。ふっ……はふっ♡ん、ちゅ♡」

たどたどしい、只々己の唇を相手にお押し付けるだけの、子どもじみた口づけ。

「んんっ♡ は、あ♡ ちゅ♡ ちゅま♡ はぶ♡ ん〜……!」

たったそれだけのことで、彼女にとってはとても勇気のあることであつただろう。多分、いやきつと——800年越しの、初めての、彼女自身からの、異性へのキス。

そんな竜人王様の、身震いするほどに貴重で有難いファーストキスを2つも奪つてしまった俺は、もしかしなくても地獄に落ちるんだろうな。おうとも、俺は一向に構わん。何ならあの世で閻魔様相手に、これでもかと自慢してやろう。

俺は! こんな二次元からそのまま飛び出してきたレベルの美少女の初めてを!

それはもう全部いただきたいちゃったんだぜ、つてなあ! そうです! 嫉妬に怒り狂う覚悟をしておいてください! いいですね!! Yeeeeee—haaaaaawww!!

「はあっ♡ ちゅ♡ ちゅっぱ♡ んんっ! んむ? はつむ!♡」

そんなお子様キスに夢中の竜人王様だが、その長い舌を使って俺の口を抉じ開け、もつと深くとせつついてくる。が、案の定、歯がカチカチと当たつてしまつて上手くいかない御様子だつた。

「ふっ♡ んっ? んん! うう~~~~~!」

「——ネラはキスも下手なんだな」

「う……。主様は本当に意地悪です……——ふつむ!」

俺の言葉にピクリと反応し、顔を真っ赤にしてそっぽを向くネラがそれはもう可愛くて。俺は上半身を起こして抱き締めると、驚く少女を無視してその艶やかな唇を奪つてやる。

「んっふっ! ふっうう? あふ ふあ んっちゅ ちゅま ちゅつぱ は
 ぷ んっんっ んつく んひゅ ぷあ あう あつい いく
 いつひゅ つはああ」

極上に甘く弾力に富んだ唇を吸い上げ、舌を絡ませ、唾液を流し込み、歯茎から上顎の裏、口内の隅々まで舐つてやる。

「ふっぎゅ おお っ あう ふっあ あひゅ んっちゅ! くっ
 ぷ ある あうじしゃまあ ちゅぶ ちゅつぱちゅつぱ! んーま
 ふっぎゅ? おお っグー! はっあいグー! いくいつぎゅ!
 うっお っ ふううくくくオ っ」

ディープキスだけであつて達し、ビクつくネラをきつく抱きとめて追い打ちをかけてやれば、あつという間にトロツトロの雌顔に仕上がってしまう。俺に逆らえないのか逆らうまいとしているのか、とにかく身動きの取れないネラには襲い来る快樂の波に抗えずにひたすら絶頂を迎えるしかない。

そんな圧倒的上位種の姿に、ぞくぞくと背筋を駆け抜ける寒気と危険な脳内物質が溢

れ出て止まらなくなる。

「んっばあっ!♡♡♡ つはっは♡ んっひゅ♡♡ うっうう、っぎゅ♡♡♡ ついう、
くくく♡♡♡」

「……ほんとにどうしようもないな、ネラは」

「あっえ♡♡♡ ひう♡♡ しゅみ♡♡ しゅみませ♡♡♡ あるじしやま♡♡♡ はっひゅ♡

♡ うっぎゅ♡♡ — あいつ!?!」

もう我慢する必要もない。たつた数分のキスでここまで乱れる幼い少女の痴態。下半身はネラのキスハメ潮でいつぞやのように濡れそぼってしまっている。

立ち昇ってくる極上の雌の発情臭と蕩け切ったアクメ顔に、人としての理性など欠片も残さず消し飛ばされてしまい、ネラの控え目な、それでもしつかりと実った乳房を片手で摘まんて捏ね繰り返し。

「おあっ?♡♡♡ あっい♡♡♡ お、おっば♡♡ つぶれ♡♡♡ ちゅぶれちやう♡♡♡ うっ
ぎ♡♡♡ ひぎゅ♡♡♡ ほっぎゅ♡♡♡ あうじひやま♡♡♡ やめへっ♡♡♡ ちゅよ♡♡♡
——っふおオ、っ?♡♡♡ ちっ♡♡♡ ぢぐびい♡♡♡♡ ぶっぎゅ♡♡♡ つま♡
うっオ、っ♡♡♡♡ ちゅまんじやりやめええ!! ほっひゅ♡♡♡ お♡♡♡ お♡♡♡ お
お、っ?♡♡♡ おオ、イツグっ♡♡♡ いくいくいくイク!! あ、——?♡♡♡?♡♡♡
うっオ、っ♡♡♡♡ つほおおオ、っ?♡♡♡」

く、くり♡ しょこ♡ ザコクリいじめにやいでえ♡♡
 「鳴いてないでさっさと答えろ」

「————つぎゆ!!♡♡♡」

ぴーぴー喚いてばかりで埒の明かないネラにイラついた俺は、撫でるだけで過敏に反応してイキまくるネラの肉芽を感情の赴くままに捻り上げてやる。

「ふぎよおおおオ、っ!?♡♡♡ ほっぎゆほっぎゃ♡♡♡ うっオ、イツグっ♡♡♡

っぎいいいっ! ひっひにゆ! 死にゆ!♡ お————♡♡ ぬっオ、いつ

ぎゆっ♡♡♡ イグイグイグイグ!!♡♡♡ しゅびばしえ♡♡ おにや♡ じゅつと

おにやにーしてまじだあ♡♡ じぶんでだくさんシコシコじでまじだあっ!♡♡♡

おオ、っ!?♡♡ にやんで?♡ ちゃんと言ったのに♡♡ もうやめへえ♡♡♡

ふっほおオ、くくくっ♡♡♡

顔中が涙と鼻水、そして涎の汁という汁に塗れ、愛らしい口を限界まで縦に割って長い舌を放り出しては目の前でイキまくるネラに心が躍る。もつとだ、もつと。この愛くるしい少女が、人間なんぞ片手間で虫けらのように殺せる筈の上位種族の王が、俺の手で快樂に狂ってどこまでも堕ちていく様が見たい。

「自分だけ気持ち良くなつて、主様の質問にも答ええないような反抗的な雌犬にはお仕置
 きが必要だよなあ、ネラ?」

「ひっ♡ うっぎ♡ おっう♡ やっ♡ やだっ♡ むりっ♡ もう無理♡ もうむり♡♡ しゅみましえ♡ あるじさま♡ ゆるして♡ ゆるしてえ♡ えへっ♡♡ おゆるしくだしやい♡♡ おねがいしま——おオゝゝゝゝっ?♡♡♡ 死ぬっ♡♡ ほんろにしんじやうっオゝ イツツツグっ♡♡♡」

#13 ネラ 2

「ふっぎゅ♡♡ ううっぎゅ♡♡ おっ♡♡ おっ♡♡ おっほ?♡♡ うおゝ!♡♡ あい♡
 ♡ おおゝゝゝゝ♡♡♡」

たっばたっば♡ たっばん! ♡ だっばん♡ へっこへっこ♡♡

口内と胸に乳首、そしてクリトリスを散々虐められたネラが、情けないアへ顔を晒して俺の背中を掻き抱いて必死にしがみつき、なんとか動かせる下半身で全身を駆けずり回っているであろう暴力的な快楽を逃がそうと必死に尻を振りたくっている。

「ひー♡ はへー♡ ういイツ!?!♡ うっおぐりゅ♡ なにもしないで♡♡ さわつでないのにいっぎゅ!♡♡♡ おおゝつ!?!♡♡♡ あうっ♡♡ ううゝゝゝツ♡♡」

ぶっしゅ♡♡ ぶしっ♡♡ ぶしゅ♡♡ びゅ♡♡ びゅびゅ♡♡

少し手が疲れたので抱き着かせるままにしていたら、放っておいても勝手にイキ散らかすクソザコ竜人王様に乾いた笑みすら零れる。絶頂の揺り戻しでもあったのか、俺の胸の中で彫刻のように美しい顔を見る影もなく歪ませてイキ狂うネラが甘いイキによる

潮吹きを繰り返していた。

「おオ、っ♡♡♡ うっオ、っ……♡♡♡ ひ……ぐっ♡ えひ♡♡ う……
っぎゅ♡♡♡」

「……いつまで一人で楽しんでるんだ？」

「ほっひよ？♡♡♡ あっい！♡♡♡ あぎやつ!!♡♡♡ やめ！ やめへえ！♡ ♪
のっ♡♡♡ ちゆのおオ、っ!!♡♡♡ ほっ♡ ほっ♡ ちゆかまにやいで♡♡♡ ごべ
♡♡♡ ごべんない♡♡♡」

待てども待てどもトリップ状態から帰つてこないネラに対して無限に湧いてくる支配欲を持って余しながら、出来の悪い飼い犬に言い聞かせるように低い声で窘め、角を掴んで顔を上げさせてやる。

俺の声で鼓膜を揺すられただけで感じているんじゃないかと疑えるくらいに過敏に反応するネラに、ドス黒い感情が脳と思考を支配していくようだった。

「謝るだけじゃなくて考えろ。まさか自分の主に奉仕させて終わり、じゃないだろうな？」

「ひっひっ♡♡♡ ごべっ♡♡♡ あっあっあ♡♡♡ つのきつちゆ♡♡♡ しゅみましえ♡
♡♡♡ ほっ♡♡♡ ほっへ♡♡♡ うっぎゅ……♡♡♡ ほーし♡♡♡ ごほーししましゅうっお、
♡♡♡」

目を白黒させて涙と鼻水、涎をぼろぼろ零しながらもなんとか受け答えするネラ。デイープキスでアヘリ、乳首とクリトリスで潮を撒き散らして跳ねまわり、絶対強者の証たる角を掴んだだけでここまで乱れて俺に媚びへつらつて許しを乞う。

「——こつちまで狂つちまうな」

「はへえ？♡ あるじしやまあ？♡♡」

「いいからさつさとしろ」

「ふおつぎゆ!?♡♡♡ あぎや♡♡♡ ほおつひよ♡♡♡ ごべんなしや♡♡ おゆるし♡♡♡ おオゝっ……………♡♡♡」

最早知性なぞ欠片も残していなさそうな目で覗き見てくるネラを、引つ掴んだ角ごと俺の股間に押し付けてやる。それだけでまた尻と尻尾を突き上げ、ぷじゅっ♡ と情けない音とともに潮を噴くネラ。

イってもイっても収まらないらしい地獄のような快楽に心と身体をもみくちやにされながら、それでもなんとか俺の股間にその小さな顔を埋めながらも辿り着き、ぷるぷる震える小さな手にたどたどしく光を溜めていく。例の遮断の魔法でも解除しているのだろうか。どういう仕組みかさっぱりわからないが、少しずつ俺のデカくなり過ぎた分身の形が下着とズボンを押し上げて浮かび上がってくる。

「ううっ♡ んっ……………♡ んんん♡ は——っ♡ んふ——っ♡♡ それ

では主、様♡ お待たせして申し訳つ♡ おお、っ！♡♡ ごじやいましえん♡♡♡
 おちんぼ様♡♡ イライラさせてごめんなさい♡♡ ほっほっ♡ し、失礼しましゅ
 ……♡♡♡

ネラが力を籠める——という表現が正しいかはわからないが——ごとに、凶悪な大きさを衣服越しでも誇示する怒張。それを間近で見るとネラの大きな紅い瞳が、これまでよりも一層深く淫蕩一色に染まっていくのが見て取れた。

「あつあつ……♡ おオっ？♡ すん♡ すんすん♡ ……♡♡♡ つぎゅ♡
 んえ……♡ おっふ♡♡ フー——ッ！♡♡♡ へっへっ♡♡ あえ……♡♡
 ♡ んれろれえ……♡♡♡」

遮る力が弱まっているらしく、下腹部から漂う性臭は加速度的に強まっていき、吸い寄せられるように鼻を鳴らして伸びていく少女の小さな唇と、まろびでていく舌の、その煽情極まりない眼下の光景に背筋の震えが止まらない。

「は——♡♡ はああ……♡♡♡ お♡ おおっ♡ 臭いすっご♡♡ うっお
 くっさ♡♡♡ 匂い♡♡♡ 主様♡ 主様の匂い♡♡♡ すき♡♡ しゅきい……♡♡
 ふっぎゅ♡♡ おいつぎゅ♡♡ い……♡♡♡——あ」

段々と強くなる雄の性臭に完全に頭をやられたのか、思いつきり顔を股間に押し付けて頻りに臭いを嗅ぎまぐるネラ。奉仕をするとはなんだったのか、すっかりそんなこと

も忘れて夢中で這い蹲り、浅ましく尻と尻尾を振りたくつて発情しまくるダメなペットに呆れていると、急に発せられた殊更に間拔けな声。

「ふおっ?」

いつぞやの妹のように、ちん嗅ぎイキで力を誤ったのかズボンを下着ごと吹っ飛ばしてしまつたネラの鼻つ面を、抑えが効かなくなつた長大で幹がでつぷりと太つた肉槍が引つ叩いた。

「——お、オ、ゝゝゝッ!?♡♡♡ お、ふっ♡♡♡ くんオお、っ?♡♡♡ くっさ♡♡♡ すゝゝゝ♡♡♡ んぐっぎゆ♡♡♡ おち♡♡♡ おちんぼお♡♡♡ ふちゆ♡♡♡ ちゆ♡♡♡ くっさふっぎや♡♡♡ うっお、キツツ♡♡♡ きつく♡♡♡ これきつつく!!♡♡♡ 濃っ!♡♡♡ おまんこくりゆ♡♡♡ おオ、グリユツ♡♡♡ 潮噴くツ!!♡♡♡ っ♡♡♡ イツグイツグ!!♡♡♡ くっほイ、い、ゝ、つつぎゆん♡♡♡」

鼻に押し付けられた雄そのものの臭いに絶頂し、鈴口から垂れる我慢汁を舐つてイキ、濁流のような快感を逃がすために吊り上がっていくムチ尻とは対照的に沈む顔は竿の付け根——最も臭いの貯まつた部分に埋められ、限界まで開いた下品にも程があるガニ股からは鉄砲水のように品なく潮とも嬉シヨンともつかない屈服の証を、ネラはひたすらに噴き出し続けていた。

#14 ネラ 3

「あつへ♡♡♡ ひつ♡ ひつ♡ うつオ、っ♡♡♡ ほっひゅ♡ んぎゅ♡♡ のおゝ
 ゝゝゝっ♡♡♡」

そのデカさと凶悪っぷりでなら元の世界のあらゆる人種相手でも余裕で勝てそうなレベルの肉の塊が、芸術品すら霞んで見えるネラの小顔にのしかかって我が物顔で蹂躪している。こつちの世界に來た影響なのかいつペン死んだからなのか、とにかくわからんが普通の女性相手ならエグ過ぎて危険極まりない極悪兵器と化した息子に若干引くが、そんな躊躇も遠慮も今更にも程があった。

今の俺にあるのは、主の股座でチン嗅ぎしてちよつと引つ叩かれただけで無様イキしまくって死にかけているクソザコ童人王様のネラを墮ちるところまで墮としたい。そんな畜生極まりないゲスな思考だけ——のはず、なんだが……。

「まあ死にはせんやろあんだだけ強いんやし。なあネラ？」

「あえ?♡♡♡ おつへ♡♡♡ おつ♡♡♡ はっひゅ♡♡♡ はひ♡♡♡ はひい♡♡♡ にゃ
 にゃんでしよう♡♡♡ あう♡♡♡ ほっ?♡♡♡ うつオ、イグっ♡♡♡ いっぎゅいっ

の、異常にエラ張った亀頭を、その小さな口に無理矢理啜えさせてやる。

「ふっご?! おおっ? ごっお♡ んぼお♡♡ んおっふ♡ ふーっーっ♡♡♡
フーっーっ♡♡♡ んっちゅ♡ ちゅ♡ ちゆるちゆる♡♡ ♪ あっ♡♡♡」

人心地ついたと思った途端の凶行に目を白黒させるネラ。あまりのサイズ差で啜えられるか気になったが、驚くほど柔軟に開いていく口内があっさり亀頭を飲み込んでしまふと、嬉しそうに目を細めて俺を見上げながらフェラチオを始めた。

「んんっむ♡♡ ちゅっばちゅっば♡♡ んつまんつま♡♡♡ んれえくくく♡♡♡
れろりゆるりゆるりゆるのおお♡♡♡ ほっぎゅ!♡♡♡ ンぎゅ♡♡♡ ちゅっこ
ちゅっこちゅっこちゅっこ♡♡♡♡♡ ちゅっぶ! ちゅぼぼ!♡♡♡ んっの♡♡♡♡♡
おいつきゅ!♡♡♡ おお、くくくっ♡♡♡♡♡ しゅき♡♡ ちんぼ♡♡♡ おちんぼ♡
♡ あるじさまのおちんぼお♡♡♡♡♡ ずろろろっろお!!♡♡♡♡♡」

「うっお……! ぐっ! ネラ……おまつ……」
「んっふっふ♡♡♡」

下半身から襲い来る異様な快感がのたうち回って脊髄を這い上がり、突き上げられた脳みそが快楽信号以外を受け付けなくなる。眼下で繰り広げられる背德的にも程がある痴態と、冒流的なまでに卑猥で、粘着質な音の数々。えげつないくらいに淫蕩な口淫に思わず声が漏れ、腰が引けてしまう。

♡♡ ぬろねろぬろろお♡♡ ちゅっこちゅっぽ♡♡ にゅっこにゅっこにゅっこ
 にゅっこ♡♡♡♡ くっぽくっぽ♡♡ はっも♡♡ んっぽんっぽんっもんっもお♡♡
 ♡ ずりゆりゆるるれろろお♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

「お………！ つ！ つぐう！ こ、こんのフェラ豚があ………！」
 「♡♡♡♡」

顎が外れてもおおかしくなくらいの大きさにも関わらず、なんら気にも留めずに啜え込み、下品にもほどがあるひよつとこフェラ顔を晒すネラ。伸びきった鼻の下と口吻、もちもちの柔っこい頬も見る影もなくコケて窄められ、蛇のように長い舌が肉竿へとにゅるっにゅる♡ に巻きつき、裏スジからあろうことか金玉までも舐めしやぶって舐り回し、射精欲をこれでもかと煽ってくる。

「ぶじゆるるるれえ♡♡♡♡ んっごんっぽ♡♡ ほっおオっ♡♡♡♡ ほっご♡♡
 おくくくイッグ♡♡♡♡ ぐっぽぐっぽぐっぽがっぽ♡♡♡♡ ぐちゅぐちゅぐちゅ
 ぐちゅ♡♡♡♡ んぐおれろるるれえくくく♡♡♡♡ じゅっぞじゅっぞじゅるぶじゅ
 るるるるっ!!」

「あつが！ 射精る………！ つぐう!!」

「ほっびょ♡♡♡♡」

ぶびゆるるるる!! ほっびゅほっびゅ♡♡ びゅぐっびゅぐっ!! どりゆりゆりゆ

りゆん!!♡♡♡ びゅっぽどぼぼっ♡♡♡ ぼびゆぐりゆるるるッ!!

「んおごおオ、くくくくっ!?♡♡♡ うつおごぼぼ♡♡♡ ぬお、♡♡♡ ほ
おおお?

♡♡♡ んごつきゅごつきゅ!! ぼっへ♡♡♡ おおオ、っ♡♡♡ おおつきゅいつ
ぎゅ!! イツグ♡♡♡ イグイグイグイグ!! ぬお、お、オ、ー、ー、ー、っ♡♡♡
♡」

まるで決壊したダムのように、金玉から殆ど固形物のようなザーメンが尿道を掻き分けていき、次から次へとネラの口内へと吐き出されていく。味わったことのない強烈な快楽が腰から脳髓を犯し、頭に電流が走って視界がぼやける。

それでももつと、もつともつとこの快楽を貪りたい。殆ど無意識にネラの頭に手を伸ばし、手頃な位置にある角を掴んで思いつき引き寄せて夢中で腰を振る。

「ほつきゅうおオ、ッ♡♡♡ ほつきやほつきや♡♡♡ うっオ、っ♡♡♡ ごぼお
おおおオ、っ!?♡♡♡ ごつきゅごつきゅ!! んごっつっつきゅん!!♡♡♡ ぐっ
べ♡♡♡ ごげえええ!!♡♡♡ ひぬっ♡♡♡ ふぎや♡♡♡ おつきゆしにゅ♡♡♡ ほん
ろにしにゅ!! おおイツグ!!♡♡♡ いくいくふっオ、んぎゅ♡♡♡ んごっ
きゅ! うおオ、っ?♡♡♡ のおっほおおお、お、オ、ー、ー、ー、ッ!!♡♡♡」

一体何分経ったのだろうか。

ふと気づくと、まるでボロ切れのようになぐちやぐちやのネラが鼻から口から精液を垂れ流し、腹を妊婦のように膨らませて気を失っていたのだった。

出された俺の脚に全身を預けきっており、うわ言のように甘い声を発しながら嬉潮を噴いている。そして何より――、

(おいおいガチでネラの腹膨れてんぞ……。どんだけ射精したんだよ……)

端正な顔立ちが台無しにも程があるアへ顔で、しかも鼻と口から精液を垂れ流しているのも相当アレだが、なにより目を引くのがその腹だった。幼年期にありがちな栄養を蓄える為のイカ腹とは訳が違う、ぽっこり膨れて妊婦のようになってしまったネラの腹部が異様に目立って仕方がない。

(これ全部俺の精液……？ 1回で、しかも口から？ ……俺ヤバくね？)

確かにとんでもない快感だった。出しても出しても収まらず、脳みその細胞があまりの快楽にブチブチとちぎられている感覚すらあったのだ。あまりの刺激に我を忘れて、その間に何をしたのかすら少々曖昧なレベルで凄まじかった。極めつけに、何分と続いたであろう吐精をしたにも関わらず、もはや人外な俺の息子は萎えるどころか更に隆起し獲物を求めてバッキバキに血管を浮かび上がらせている。

そんな下半身の状況を認識した途端、あまりのマジカルちんぽっぷりにドン引きしていた思考が一瞬で頭の隅に押しつけられ、またしても強烈な性欲が腹の底から沸々と沸き立ってきた。

そうだ、手元に手頃な雌が転がっているのに引いてる場合じゃない。しかもこの雌は

極上の獲物だ。ご馳走だ。姿形は天女のように、立ち振る舞いはポンコツ淑女の癖に、性技の腕前は遊女も真つ青な一級品ときた。幼い見た目と己の剛直の対比が異常な背徳感を与え、さきの行為でもそうだったが、普通なら本気で死にかねない蛮行もこの小娘なら嬉々として受け入れ、しかも快樂に溺れてイキ狂える頑丈さも兼ね備えているときたもんだ。

「やっぱ最高だなこの竜人王様は」

「おつう……♡♡♡ ふござ♡♡♡ ふつきゆいつきゆん♡♡♡ おつおイツく！♡♡♡ いつぐイツグ♡♡♡ うあ？♡♡♡ えへ♡♡♡ あうじしやま♡♡♡ あるじさまあ♡♡♡ ふおおツ！♡♡♡」

相変わらず伸びきって間抜け面を晒すネラを抱き上げ、彼女の二の腕ほどもある肉竿の上に座らせ、俺に背中を預けさせる。たつたそれだけで逸物からくる熱が柔らかな割れ目に伝わり、彼女自ら育ててしまったクリトリスが擦れて快感になったらしく、なお反り返る雌殺しの亀頭にイキ潮を噴きかけて達してしまった。いくらなんでも弱すぎるだろ、色々壊れるわ。

「そんなんだと虐めるのが癖になつちまうぞ？」

「ふおつ？♡♡♡ あえ？♡♡♡ しよ、しよんにや……おいつぐ♡♡♡ うつきひつきゆ！♡♡♡ うぎゆつお♡♡♡ あつ♡♡♡ あつ♡♡♡ りやめ♡♡♡ 主様♡♡♡ 乳首♡♡♡ ちくびい♡♡♡」

じつちやうつきゆん♡♡♡ お♡お♡ほっ♡♡♡ ほっ♡♡♡ ほおおろろろ
 っ♡♡♡♡♡

手慰みに乳首を軽く弄ってやれば忽ち顎を跳ね上げて腰が躍り、意図せず素股のよう
 になってしまつて即イキしてしまふネラに、嗜虐心が加速していく。

「なあネラ、この腹に溜まつてるのは俺の精液で合つてるんだよな？」

「うおオ、っ!?!♡ ほぎよ♡♡♡ しよ♡ しようれしゆ♡♡ あるじしやまのせーし
 ぎーめん♡♡ 子種汁う♡♡♡ いっぱい飲ませていただきましたあ♡♡ おオ
 っ?♡ やめへっ♡♡ おにやかなでなでしないでえ♡♡♡」

「イラマチオまでして胃に流し込んでた気がするんだけど、ネラは丈夫なんだな。人間
 だつたら死んでるぞ」

「へひっ♡ ふひゆ♡ おおっ♡♡♡ あ、あいつ♡ ありがとうごじやいましゆ♡♡ ネ
 ラ、これでもりゆうじんおーでしゆかりや♡♡♡ おオ、っふ♡♡ つよつよなんれ
 しゆうっオ、いっぎゆ!♡♡♡ イツギユイツギユン♡♡♡ やめでっ♡♡ おにやか
 おしやないでえ!♡♡♡ ほっぎよお!♡♡♡」

「ちよつと撫でられただけでイキ散らかしてる奴のなにが強いって?」

「のおオ、っ♡♡♡♡♡ つ♡♡♡♡♡ んぎい♡♡♡ ほっぎや♡♡♡ ごべ♡♡ ごめん
 なさい!♡♡♡ あるじしやまのほうがちゆよちゆよれしゆ!♡♡♡ ネラはよわよわ

ドラゴンでしたあ!♡♡♡ りやからゆるじで!♡♡♡ おにやかおしゆのやめへくりやしやい!♡♡♡ おおオ、っ♡♡♡ ふっぎゆおオ、くくくくッ♡♡♡

まさしく掌の上でよがり狂うネラの姿に愉悅が止まらない。

「俺の精子は美味かったか? 大事な赤ちゃんの素なのに上の口でたらふく飲みやがって。胃で妊娠する気かお前は」

「おおオ、っ!?!♡♡♡ しゅみましえ♡♡♡ おゆるしっ♡♡♡ おゆるしくだしやい♡♡♡
♡ おいしかつたれしゅ!♡♡♡ おちんぽもおせーしもお♡♡♡ もうしやいっ♡♡♡ おおれしたあ♡♡♡ おいしくっ♡♡♡ おいしくっ♡♡♡ ぜくんぶ搾り取っちゃいましたあ♡♡♡ えへっ♡♡♡

「ああ?」

「ぬおオ、ッ!?!♡♡♡ やっぱ♡♡♡ やめてえ♡♡♡ ちゅよい♡♡♡ でりゅ♡♡♡
せっかく飲んだのに戻しちゃうおっオ、っ♡♡♡

なんだかんだで舐めてんな……。今以上に虐めてほしくてワザとやってんのか?

「ごめんなしや♡♡♡ 主様のせーし♡♡♡ ぎーめん♡♡♡ お口とお腹でもぐもぐしてしゅみましえん♡♡♡ 貴重なお子様♡♡♡ ネラが消化しちゃうの許してください♡♡♡

……割とサイコなことやってんなこのクソザコドラゴン、腐っても上位種ってことな

のか……正直ちよつと怖いです。

「しよれにこのおせーし様♡♡♡　なんか魔力みなぎっててしゅごいの——おとおお
っ——！！♡♡♡」

「ふぎげやがってちよつとビビったじゃねえか。お仕置きだな」

「ふつぎやほつぎや!!♡♡♡　にゃんれ♡♡♡　あやまつた♡　ごめんなさいしたのおお

っ?♡♡♡　おイツグ♡♡♡　でりゅ!♡♡♡　うぼおっえ!!」

なんかむかついたのでとりあえず、天然なのか計算なのかわからん小娘のみつともな
く膨らんだ腹を思いつき締め上げてやる。決して恥ずかしかつたからじゃないぞ、ほ
んどだぞ。

「ごっぼ!!　ほつぎよ?!　ごっえ♡♡♡　うつぶ♡♡♡　くくくくつ♡♡♡　——ご

ぼええええええええええ!!♡♡♡　がつぼ♡♡♡　ふつぎや♡♡♡　うごお♡♡♡　うつオ

っ♡♡♡　おおオっ?♡♡♡　いく♡♡♡　うぼおイツギユ♡♡♡　もどじでイギユ!!

ぬおおオっ♡♡♡　ふおつぎゆり!!♡♡♡　くくくくつぐえええつぷ♡♡♡

なんら抵抗できずにザーゲロを撒き散らして無様イキしまくる竜人王様。はみ出た
羽と尻尾の先端が快感にのたうち回り、小さな足を限界までぴーん♡　と突っ張らせて
バタつき、非常識な快楽の濁流にのみ込まれつつも必死に無駄な抵抗をする様がなんと
も愛おしい。

絶頂に次ぐ絶頂で腰をかつくかく♡ にへこらせ噴水のように潮を噴き、最後の最後で耳を疑うよう濁音を喉から発したネラの痴態極まりない姿に、益々怒張の収まりがつかなくなる。

「ひっ♡へひっ♡ひゅーー♡かひゅーー……♡」

「すつきりしたか？　じゃあまた詰め込んでやるからな」

「あえっ？♡うひゅ？♡ひっひっ♡し、しぬ♡ほんろに♡ころしやれるう

♡♡ゆるじて♡えへっ♡おゆるしいうっおオ、イッツツグ♡♡♡」

#16 ネラ 5

「お、お……♡♡♡ くっぶ♡♡♡ けぶ♡♡♡ あっぐ♡♡♡ も、申し訳ございません主様あ♡♡♡
♡ お聞き苦しい音をおつ？♡♡♡ んふっぎゆ♡♡♡ ——ぐぐおええッ♡♡♡ うう
くくくっ♡♡♡♡♡」

身体をこちらに向けて寄せ、謝っておきながらも白々しくザーメン臭いげっぶを繰り返すネラに下半身が猛烈にイラつく。

煽つてんのかコイツ。

「ひっ♡♡♡、ごめんなさい♡♡♡ 主様♡♡♡ お顔が怖いです♡♡♡ でもカツコいいのお♡♡♡
♡♡♡ すきい♡♡♡♡♡ ——あっあっ♡♡♡ 違うんです♡♡♡ 舐めてないです♡♡♡ あっ
♡♡♡ で、でもお……♡♡♡ お、おちんぼ様ならいくらでも舐めます♡♡♡ んべええくく
♡♡♡ んれりゆれりよれりよくくく♡♡♡♡♡ ねるっ♡♡♡ ぬりよっ♡♡♡ ろうれふか？♡♡♡
♡♡♡ えへっ♡♡♡ ネラのなっが舌♡♡♡ 気持ち良くなつていただけそうですかあ？♡♡♡
♡♡♡ へっへっへっ♡♡♡♡♡」

どう考えても舐め腐っているとしか思えない態度と言動に自然と口角が吊り上がっ

ていく。それを見たネラが歓喜に震えて犬のように媚びへつらい、アホみたいに長く卑猥で、先端が二又に割れた舌先を器用に捏ね繰り回しながら目の前で煽り散らかしてくる。

やっぱ煽ってんじやねえかコイツ。

「えへへっ♡ 主様さえよろしければいつでもどこでもおしやぶります♡♡ お気軽にお使いくださ——いいイっ!? うっほオ、っ?♡♡♡ のおつきゆ♡♡ ほぎよ
おおお~~~~??♡♡♡」

見事に生意気しくさつてくださった竜人王様の、それはもうぐちちゆぐちゆでぶにぶにな無毛の土手を無遠慮に摘まんで好き勝手に弄んでやる。癖になりそうな柔らかさと弾力が素晴らしい。

いやもうどんだけ煽るんだよコイツ。

「おおオ、っ♡♡♡ あるじしやま♡♡ やめっ♡ ちゆよ♡ 力強いですう♡♡
おっおっおっ♡♡♡ ふオ、っ?♡♡♡ うっオ、っ♡♡♡ くっほおお~~~~
?♡♡♡」

押せば跳ね返ってくるレベルの柔軟なもりマンの割れ目をなぞり、指を少しずつ膣内に沈みこませる。みっちり肉の詰まった膣壁が異物の侵入に驚いて押し出そうとしてくるが、僅かに力を籠めればあつけなく道を開いて丹念に吸いあげてきた。

まん肉までクソザコなんかコイツ。

「ふっおぐっひいっ?♡♡♡ は、はいっ♡♡♡ はいってます♡♡♡ あるじしやまあ♡
 ♡ おま♡ おまんこお♡♡♡ しゅ♡♡♡ しゅごいのお♡♡♡ こ、こんなにやあっおオ、
 ♡♡♡♡♡」

「いちいち喚くな」

「ふっほおっ?!」

自覚があるのかないのか知らんが散々煽ってきた癖にちよつと弄つてやれば瞬で屈服し、膣内の柔肉すらあつけなく降参してへつらうネラに、嗜虐心と支配欲が滅茶苦茶にされる。

「あぎゅー! ほっぎゅ♡ はきゅ♡ ふひい♡ おまんこ♡ なかあ♡♡♡ つぼつぼ♡
 ちゅぼちゅぼつてへえ♡♡♡ きもち♡ きもちいいれす♡♡♡ おオ、っ!?!♡ しゅ
 き♡♡♡ あるじさましゅきい♡♡♡ あへえっ?!」

狭い肉壺の中は指がやけどしそうなほどに出来上がっており、まるで別の生き物のように媚肉がのたうちまわって奥へ奥へと生意気にも引き込もうとする。そのまま思い通りになってやるのも癪なので、膣の上側にあるしこりのような部分——いわゆるGスポットを指の腹で引つ搔いてやった。

「ふうおぎゅ!?♡♡♡ ほっっひゅ!♡♡♡ ぬっオ、そごっ♡♡♡ しゅごおおオ

く。

「ああつ?!♡♡♡ あいつ♡ あ、主様! そ、そんなところおオ、っ?♡♡♡ りやめ!
 ♡♡♡ らめらめえ!! きたな♡ 汚いですからあ♡♡♡ ほんとに——っふおおオ、ツ?!
 ♡♡♡ にゃんれえ?♡♡♡ 食べちやりやめ♡♡♡ あオ、っ?♡♡♡ のおつぎゆ
 ♡♡♡♡ ふつぐぎいっ♡♡♡♡」

ネラが信じられないものを見るかのようにその大きな瞳を開いて俺を見る。いやいや頭を振って押しつけようとしてくるが、その実全く力が入っていない。そんな抵抗など一切構わず、搗きたての餅のような口触りの土手を咥え込み、舌で割れ目をなぞり、クリトリスを転がして瑞々しい果実のようなそれを食っていく。

「おつぎゆうオ、っ?!♡♡♡♡ らめ! やだあつ!♡♡♡ なんれ♡♡♡ ある♡♡♡ あるじしや
 まあ♡♡♡ やだやだあ!! くっほおオ、っ?♡♡♡♡ ほんとにたべてるう♡♡♡
 うっお無理♡♡♡ 無理ムリむーり♡♡♡♡ もう我慢むりい!♡♡♡ でりゆっ♡♡♡ お潮
 でひやあ♡♡♡ ふつぎゆお♡♡♡♡ ぎひい!♡♡♡ あつきゆ♡♡♡ あう♡♡♡ あうじしや
 まあ♡♡♡ ほんろにやめへえ♡♡♡♡ マーキングしちやう♡♡♡♡ あるじさまのお顔
 にい♡♡♡♡」

珍しく駄々をこねてはいるが、生まれて初めてであろうクンニリングスの破壊力は絶大なようで、嫌とか無理とかほざいているが全く説得力がない。

それでも主である俺の顔に潮をぶっかけるのは流石に憚られるのか、もう本当に可愛
い顔が台無しな酷い面で歯を食いしばって耐えているのは感心する。ほんのちよつと
だが。……確かに顔にはまだないが、それ以外は最早引っかけられていない所を探す方
が困難なレベルだぞ何を今更。

なんて思ってたら最後にとんでもないこと言い出したので流石にビビる。こいつ潮
かけるのをマーキングだと思ってるのか。お仕置きだな。

「ひーっ もっ……うっ ほんろにむ、りい………いイ、!?」

幼い体付きに反して随分自己主張の激しい感度過多のクリトリスを噛んだらどうな
るかなんて、そりやあもうゾクゾクするよな。

「~~~~~ツツツ?!?!? あっが!? ふっごお ッぎゅっ びっ

? ひゅお ——ぬおオ ッツ!! んつの? ほっぎゅ

ほっぎゅ あ、——うお、オ ッツ ほっ

オほッ くくッ!! いくいくいく!! おイッグ いっぎゅ

いっぎゅ!! 死っ ひにゅッ!! しにゅい、い、つつぎゅん!!

♡

ぶっつしゅ!! ぶしッ! ぶしッ びゅつくびゅっば ぶっしやぶっ

しゅ びゅく ぶじゅじゅ ちよろよろ

あーあーあー……。もう完全にマーキングされたよ。

俺はネラのものだし、それはいいんだけどな？

「おーいネラー？ そろそろ挿入れたいんだけど、まだ生きてる？」

「おオ、っ……………♡♡♡ うっオ、っ……………♡♡♡ ふっぎゅ……………♡♡♡ ふっほ……………♡♡♡

つくおお!?♡♡♡ おイツグ♡♡♡ イい、い、ッツつ♡♡♡ のつお♡♡♡

うお……………♡♡♡」

……………ほんとに死ぬかもしれんな。

まあ挿入れるんですけどね。ええ。

「おいコラ、そんなに腰揺すつてちや挿入れらんねーだろ」

「ふおお!! ふんぎゅお♡ じゃ、じゃあやめへ!♡ お豆ちゅまみゆの禁止!!♡

腰へコとめるの無理ッ♡ むーっり♡♡ によおお!」

「はあ……。じゃあちゃんと支えてろよ」

「は、はひ♡ 支えましゅ♡ しゃしゃえましゅかりや抓るのダメ!! めすちんぽ虐め

反対っ!♡ おっおイッグ♡♡♡ ほぎやぎや♡♡♡ うううううううう♡♡♡」

もうどうしようもない雑魚雌つぶりを発揮するネラの突起を捻じり潰しながら放してやる。派手にマゾ潮をぶつびよ♡ と噴出させ、生まれたての小鹿みたく全身をビクつかせながら、180度開陳された下品なガニ股ちゃん媚びポーズをなんとか維持しようとする。

「うっ……ひ♡ あええ……♡ うっおきつちゅ……♡ このカツコきちゅいい♡♡」

「よっ(っ)せ」

「ほっへえ?♡」

背に回した両手でカクつく腰を必死に支え、雌の弱点を晒し続けるという被虐にマゾ性癖を刺激されまくるネラのイカ腹に、でっぶり太った肉竿を乗せ、たおやかな感触を楽しむ。

腹の脂肪を突き抜ける熱で子宮を撫でられ、あまりに長大な雄の象徴に目を見開いて

涎を飲み込むザコメスは、「ほっ♡ ほっ♡」と言葉にならない渴望の吐息を吐き出し、生意気にも腹をグイグイと押し上げてくる。ぶっ濃い精液が猛って渦巻く金玉袋におまんこを擦り付けてくる様が、1匹の雌を征服しているという高揚を否応なく感じさせてくれる。

散々に虐め弄ばれた結果、幼い蜜壺は白濁に粘ついた本気汁がとろつとろ♡ に溢れ続け、ちんぼの付け根と辜丸はあつという間にネラの分泌液でぬらぬらにコーティングされてしまった。

「凄いなネラ。これぶち込んだら心臓まで届くんじやないか？」

「おオっ♡♡♡ は、はひ♡ 届きましゅ♡ 主様のデカマラ♡♡ おちんぼ様♡♡
子宮ごとブチ抜かれてネラ死んじやいましゅ♡♡」

「だよな。じゃあやめとくか」

「えっえっ!! あ、やつ♡♡ だ、大丈夫です♡♡ ネラ竜人族ですから♡♡ 簡単には死なないんです♡♡ ねっねっ?♡ 主様♡ 主様っ♡♡ 犯して♡♡ 気にせずおまんこ犯してください♡♡」

「じゃあなんで嘘つくんだよ」

「ほおっぎゅっ♡♡♡ しゅみましえ♡♡ おっ♡♡ つおっ♡♡ つ!! クリちゃんごりゅごりゅやべへっ!! おまんこ削れりゅっ♡♡ うおオっ♡♡♡ ビビっでましゅ!!」

「こんにゃのじえんぶ入んない！ デカ雄ちゃんぽ凄すぎるのお♡♡♡」

イキ過ぎて頭がバグりっぱなしのネラはもう言ってることが滅茶苦茶だ。なのに身体はちゃんぽに媚びまくって爪先立ちのヘコヘコ♡ まんずりが止むことはなく、その滑稽さにこつちまで頭がおかしくなってくる。

「俺は別にネラじゃなくても良いんだぞ。ゴルトでも四元竜の皆でも、なんだったら召使の人たちでも良い」

「あつや！ ヤダヤダ！ ご、ごめんなさい主様♡ 肉人形のくせに逆らってすみません♡♡ お願いします♡ おちゃんぽ挿入れてえ♡♡♡」

俺の言葉に駄々っ子のように首を振り、へらへら笑って腰を突き上げ、必死におまんこアピールするネラ。

「もつと品なく媚びろ」

「ひぐう……………♡♡」

それでも足りないのと突き放される宣告にすら悦ぶクソザコドラゴンは、ぷじゅつ♡♡ と潮を吐き出すと、その立派な尻尾と羽を使って器用に身体を支え、小さな手でぶるぶる震えながら未成熟まんこをくぱあ♡ と開き、ニタア♡ とニヤけて媚びついてきた。

「あ、主様♡ 発情しきって子宮も降り切ったクソザコマンコの分際でお手を煩わせて

しまい申し訳ございません♡♡♡ もう膣内はぐっずぐずのとろっ♡♡♡ 狭くて浅くて窮屈かもしれないませんが♡♡♡ 主様のつよつよおちんぽで遠慮なくどつきまわしてください♡♡♡ 主様専用苗床いっぱい掘って耕して♡♡♡ 犯していただけたら嬉しくてすぐに卵プチュっちやいます♡♡♡ とつくに卵巢は準備万端♡♡♡ クソザコ卵子をつよつよおせーし様で輪姦して♡♡♡ よわよわおまんこ孕ませて♡♡♡ 主様の大事なお子種汁でえ♡♡♡♡♡ ネラの赤ちゃん袋たつぶたぶにしてえ♡♡♡♡♡

クチュ……………ぬりゆ、みちゆ。

「おオっ?」

ミヂツ! めりゆっ! むりゆりゆりゆりゆ♡♡♡

「ぶっ!! ほんつきゆ」

ぬっちゆ♡ のっちゆッ♡♡

「ほお、オ、くくく……………っ♡♡♡」

とっちゆ♡ ……ぬ、ぢゅぢゅぢゅんッ、!!!♡♡♡♡♡♡♡♡♡

「……………ッ、ウ、っオ、オ、ッ、ッ、?!?!♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

みつぢゆ♡♡♡ ぶっちゆ♡♡♡ ぐちゅぎゅちゅぐっちゅう……………♡♡♡♡♡♡

「ウっぐお……………?!?!♡♡♡ つびぎゆ!! お、っ、イ、ほつきやほつきや!?!♡♡♡ のお♡♡♡♡♡

ぬっほ♡♡♡ ……ッツギユ!! イッギユッイッギユッ!!!♡♡♡♡♡♡♡♡♡

明らかにオーバーサイズのそれを、ネラのおまんこは悲鳴をあげながらもじゅつるじゅる♡ に舐り上げながら呑み込んでいった。

異常にエラ張った雁首に膣壁の肉粒をぞりゅぞりゅ♡ とめくり上げられ、呆気なく到達されたグズグズの子宮口は、鈴口にぬちゅ♡ とキスされた途端に陥落して押し潰され、内蔵器すら押しつけられて道を開いた結果先端は鳩尾にまで届き、幼いイカ腹には蹂躪の証がくつきりと浮かび上がってしまった。

「がっ……………っは……………!!」

挿入しただけで脳天を貫かれる快感に余裕でイカされそうになって動きを止めざるを得なくなる。ミミズ千匹だのイソギンチャクだの言う名器つてのは、正にこの肉壺の為にある言葉に違いない。

「フ……………ツツ!! ンフ……………ツツツ、!!♡♡♡」

「うっお……………!! これ……………!!」

が、そんな表現など生易しいにも程があるということをすぐに思い知らされた。

「ふオ、っ♡♡♡ おおつきゅ!! ちんぽ! ちんぽお!♡ つオ、ツしゅつご♡♡

おっおっおっオツ、!! びっだり!♡ おちんぽびっだりはまっでゅツ!! ツ、お

ン、イギユイギユっ!!♡♡♡」

「ネラ……………! おま……………待っ……………!!」

「ほぎよおオ、~~~~~っ♡♡♡ おまんこけじゅれりゅッ！ かたぢがわっでえっへえ♡♡♡」

膣内にみつちり詰まった肉ヒダが、僅かに時間を置いただけでちんぽに馴染み始めて絡みついてくる。ウネウネグネグネと蠢き舐り回して中身を最適化していくかのようで、あつという間に限界を迎えさせられた。

「がっあ……！ も、射精するっ!! おおっ!？」

「ふっ(お?)♡♡♡ にげひやりやめえ♡♡♡」

異常にハメ心地の良いすぎる肉便器と、グツグツに煮え滾った固形物かと疑うような精液が尿道を飛び出していく地獄のような快楽に抗せず、無意識に腰を引こうとしてしまう。

が、小さな脚と長い尾でがっしり俺の腰をホールドしてきたネラに引き寄せられ、一層舐り締め付け吸い上げてくる肉壺に引き込まれたちんぽが爆発したかのように吐精を始め、思考が爆せて飛び散った。

どぶりゆりゆるるるッ!! ぼっびゅぼっびゅ!! ごぼぼぼっ♡ どっぼどっぼ

♡♡ びゅーっ♡♡ ツッ♡♡ ぶびゅーっ♡♡ ツ!! どっくどっくどっくどっく

♡♡♡♡ どりゆりゆりゆりゅん!!♡♡♡♡

「お、~~~~~ッ!! あっぎゃ!?! ふっぎよ?!♡♡♡ うっオ、あっちゅっ♡

♡ あっちゅあっちゅ♡♡♡ ぎーめんあっちゅ!!
 うつオ、おつもつ♡♡♡ セーし重つ♡♡♡!!!

「がアあつ!! ぐつう……………! おおつ……………!!」

「どぼどぼはいつでぐりゆううううつつ♡♡♡ ほぎや♡♡ 死ぬツ!! もう入りや
 な……………ほげつ♡♡♡ 膨らみゆ……………♡♡ おなか破裂しゆう♡♡♡ ふつきいぐいぐ
 !! イグイグイグイツッグ♡♡♡ うおおくく……………???」

びくつ♡ ぶるぶる……………♡♡

「あつや……………らめ♡♡ いま出ちやだめえ♡ 死ぬ♡ ほんひよに死んじやう♡♡」

ビグツ!! びぐびぐつ……………♡♡

「おおくくくくツ♡♡♡ りやめ♡ 排卵しちやめつ!! 今出たらレイプ♡♡

つよつよせーしにボゴボレイプされちやうのお♡♡♡」

「……………いいからさつさと出せ」

「つびぎゆ?!☆」

ぐりゆつ♡ ころゆつ♡ ぶつ……………ちゆん♡♡♡

「ツツウツオ……………ツ?!?! 卵巢おしやないでえ?!?!
 ふつきやほつきや♡♡♡ ふごおお?!?! ぶちゆつだあ♡♡♡ メス卵♡ クソザコ
 卵子♡♡ 排卵アクメじまじだあ♡♡♡ オ、イグつ♡♡♡ いぎゆいぎゆいぎゆ!!

おイツツギユン♡♡♡♡♡」

つんっ♡ つんっん♡

「ひゅっ!! ひっひっ♡♡♡」

ぐりゅ! くりゅくりゅこりゅ♡♡

「おおっ?? ま、膜……♡♡ 卵のまくがあ……うっひ♡♡♡」

ぶりゅ♡ ……ぶっちゅん♡♡♡

「あっえ……?? —— おオ~~~~っ??♡♡♡ は、はいっだ……♡♡

あう♡ あうじしやみやあ……♡♡ じゅせ♡♡♡ うひっ♡ 受精しまひ

ひゃあ……えへっ♡ えへへっ♡♡」

「……」

「あ、あるじしやま?♡」

イライラが収まらない。そもそもまだ挿入ただけだぞ。この無自覚クソザコ肉便器が……徹底的に立場というものをわからせなければならぬ。

「えっ? えっ? あ、主様? なんて腰挿んで……私もう孕ん——」

ぐどっつっぢゅぢゅん!!!

「——ほぎよおおおオオッ……」

ぼっぢゅぼっぢゅぼっぢゅぼっぢゅ!!!?!!?!!? どちらゅっ!♡ ばちゅっ!♡ どちらゅっ!

あるじしやまにおしやれたりや出ちやうのお……?? よわよわすぎゆ♡♡♡ ネラ♡

♡ クソザコしゅぎりゆのお♡♡♡♡ えへえ♡♡♡ うっオ、イグイグッ、ッ、

♡♡♡」

「はなつからわかつてただろろうがんなことお！ ぐっ……！！ ネラッ！！ また射精すぞ

！！

「ひっ♡ ひっ♡ しよんな♡ 主様♡ みへくらしやい♡ ネラのお腹♡♡ 子宮う

♡♡♡ ほっこり膨らんでゆの♡♡♡ もういっぱいなんれひゆ♡♡♡ ばんばんな

の♡♡♡ ざーめん出しすぎー！♡ 子宮虐めは断固拒否しましゆ！♡♡♡ ——のっお

ガチハメやつば♡♡♡ ぴしゅとんきつつく！♡♡♡ いくいくイグッ！！♡♡♡」

「ぐっお締まる……！！ 射精るッッ…………！！」

「ひゅぎい!?♡♡♡ にやんれえ♡♡♡ どうしておまんこしめちやうのお?♡♡♡

めっ！♡ 死ぬつてば♡♡♡ ネラほんとに殺されちゃ………ういおお、オ、くく

くくくっ♡♡♡ ツンイツギユ！！ いっきゆいいっきゆん♡♡♡ いぎゆいくイ

ッ、ギユ、ッ、——ッ、ッ、ッ、！！！！♡♡♡♡♡」

18 お前が言うな

「私、ママになりました♡」

「」

相変わらず玉座以外座することを許されない俺の膝上に、もう幸せいっぱいニッコニコな満面の笑みで陣取り、愛おしそうにお腹を撫でさすってぼえりまくっているゆるゆる竜人王様。昨夜あんだけ死ぬ死ぬ言うとったくせに元気やなあ腹もすつかりへっこんで……。いやまあ俺も大概なんですけどね？

「ずるいわお姉さまが一番最初だなんて!! でもまあ、その……と、とりあえず、えつと……お、おめでどうくらは言っておけるわ! 感謝してよねお姉さま!!」

「うん♡ ありがとうゴルト♡」

「ムキー!! なによお姉さまのくせに余裕ぶってムカつくー!!」

「おめでどうございます、我が王よ。既に祝賀祭の準備を進めておりますゆえ今暫くはご安静になさってください」

「ああ、こんなにめでたいことはない。一体何百年ぶりになるんだ?」

「ええとかれこれ……ひい、ふう、みい……4、500年ぶりくらいですわね。床屋のシエイナが確かそれくらいでしょう」

「そういえばそうだったな。あの時もまあ大騒ぎしたもんだったが」

「凄いい。本当に凄いいこと。ネラおめでとう。主様素敵。抱いて」

漬物石のゆるキャラと化したネラに食って掛かるゴルトを筆頭に、各々が祝いの言葉を述べる。中には願望駄々洩れなのもいたがとりあえずスルーしとこうしようしよう。

「君ら思ったより驚かないんだなあ……。あと床屋もあるんすね」

「我ら竜人族も、普段の生活は主様の人種の其れとそこまで変わりはありませんよ。多少力があるくらいで」

「絶対多少なんかじゃ済まないんだよなあ……」

両手を器にポポンっ！　っと小さめの炎を20個ほど生み出し、尻尾に羽まで使つて器用にお手玉しだしたローゼさん。案外お茶目だなこの人も。

「ていうか今の話だと、一番若い竜人族の方でも4、500歳つてことになりませんか？」
「ん？　ああ、そうだね。僕たちは長生きだからあまり気にすることはないんだが——」

「例え1000年生きていようが、人で言えばようやつと10歳を迎えたぐらいのもんですわ。わたくし達もまだまだ未熟者にございます、あ……ある……あう……ゴニヨゴ

ニヨ……」

「アカン……種としてスケールが違い過ぎる……。てかクオーツさんどしたんすか」

「ああ、意識しだしたら止まらないアレさ」

「ネフライトさん!？」

「やっぱ小学生じゃねーか……」

ネラと一緒にそれはもうぐつちよんぐつちよんになつてからの翌朝。

ベッドは目も当てられないくらいに酷い有様だしネラはどこにそんなに詰まつてんだつてくらいに腹が膨れてとんでもないことになつてるし気を失うくらい盛つても寝て起きたらまた普通に回復してたマイサン含めて色んな惨状にドン引きした。いやこれマジな。

途方に暮れて盛大にテンパリ、とりあえず誰か呼ぼうなんてアホなことを思いついて寝室を出ようとデカイ扉の取っ手を引いて開くと、折れ重なつて小山みたいになつた召使さん達が雪崩のように崩れ落ちてきて下敷きになつた。何を言つてるかわからねーと思うが俺にもわからん。発情しまくつた雌臭とか大洪水とかそんなもんじゃ断じて済まねえ。もつと恐ろしいものの片鱗を味わつたぜ……。

それで割と真面目に死にかけてたら駆け付けて来たゴルト十四元竜の皆さんがあつという間に汚れも死屍累々も綺麗にしてしまったのには助かつたし驚いた。魔法とはいえいくらなんでも便利すぎんだろ。

ていうか散らばった精液なんか回収してなかった？ 魔法でフヨフヨ集めてたよね？ そんなもん何に使う気なんです？

「あの……部屋を片してしていただいた時なんですけど……」

「あれは本当に申し訳ございませんでした主様。全ては管理者である私、ローゼフラムの不徳のいたすところでございます」

「あ、いや、そこは全然良いんです死にそうにはなっただけd「全くもってこのような体たらくでは方々に示しがつきませんのでどうか主様より直々に罰を与えていただきたく例えば昨晚の王に対する其れのような感じでは是非とも何卒この紅炎竜ローゼフラムにもお願いしますそれはもう遠慮なく容赦なく情など欠片も残さず翳ってなじっていたぶってポッコボコにキメちゃってくださいさあ、さあ!!」

「」

「おいこらローゼ！ 抜け駆けはやめようと何度も話しただろうが！」

「そうよそうよ！ そもそも次は妹君である私であるべきでしょう!？」

「あの……その……できればわたくしにも温情を賜りたくゴニョゴニョ……」

「主様。イヴ、主様のためならなんでもするよ。ネラみたいに沢山赤ちゃん仕込んで欲
つし」

「」

「そなたら少しは落ち着かんか……」

玉座の間できやんきやん騒ぎ出し、興奮して例のオーラを纏いだしたクソつよドラゴンズに盛大にビビってたなら、ネラが溜め息ついて声をあげてくれた。ひたすら幸せオーラばら撒くだけのポンコツ置物になっちゃった訳ではなかったらしい。

「王よ！ 貴方はもう主様にあのよう愛していただけたからそのように冷静でいられるのです！」

（愛して……？ いや、うん、愛してはいるんだけどアレは……ねえ？）

「そうよそうよ！ 私だつて主様の……そ、その……あ、赤ちゃんとか欲しいし……」（可愛いかよ）

「全くだよ！ あんなにボッコボコに犯してもらえなんてもうほんつつとに羨ま……んっ！ け、けしからんことこの上ないじゃないか!!」

（漏れてる漏れてる）

「わたくしも殿方にあのように組み伏せられて、言葉で殴られ、ひたすらに食らわたいですわ……♡ ああつ！ こんなことを願って叶う日が来るだなんて……生きてて良かった……」

（えらいこと望んで泣き出しちゃったよこの人……）

「イヴ、いっぱい卵出せるように頑張るよ。あ、でもネラみたいに虐めて欲しいな。……」

「どうしよう」

（可愛い顔してなんてこと言うのこの子は）

「心配無用じゃ。主様には我ら竜人族、その全てを孕ませていただくのだからな。案ずる必要はない」

（やっぱなんだかんだでネラは王様やってんだよなあ。クソザコだけど）

_____。

_____。

_____。

ん？

「確かに、昨日あんだけ出してたのにピンピンしてるんだもの。主様ってほんつとうに凄いのね！ ゴルト惚れ直しちゃった……♡」

「えっ」

「なんとという……。主様、このローゼフラムの見る目のなさをどうかお許してください」

「えっ」

「素晴らしいよ……。君は僕たち竜人族の英雄だ。歴史に刻まないとね」

「えっ」

「ああつ……。主様……。あんなにも後光が差して……。なんて神々しい……」

「えっ」

「主様。イヴの全てを捧げます。ありがとうございます。神。尊い」

「えっ。……………えっ？」

え、ちよ、またなんか勝手に盛り上がってらっしやいませんか？ ええ…………？

「あと気になったんじやがな。何故そなたらが昨夜の情事の内容を知っておるのだ、ん？」

「」

「」

「」

「」

「クオーツの水晶通して見てた。凄かった」

「」

「うーんこの…………」

「」

盗撮中の5大竜の皆さん。

『ほわわわ……………♡』

『はわわわ……………♡』

「しょうがないもん……皆だつて主様に犯されたらああなるもん……ネラ悪くないもん……」

「あーあーあー……」

ほーらまた隅つこでイジイジ始めちゃったよりゆるじんおーさま……。

「あの、もうちよつと加減というものをですな——」

『……………』

「アツハイ。私が戦犯でございます」

#19 ちんまくてでつかい

「とにかく！ 次は私なんだからね！ これは絶対！！ 妹君権限！！」

『ええ……』

「……横暴」

結局、今晚の俺の相手はゴルトが権限を濫用して無理矢理丸め込んでしまった。

その後の夕食。異世界に来て初めてまともに食べた食事はそれはもう旨いなんてものじゃなかった。ファイヤリザードのヒレ肉ステーキにマンドラゴラと海王エビのサラダ、コカトリスのものも焼きにクリスタルベリーのジェラートなどなど。見たことも聞いたこともないが超豪勢なのが一目でわかるレベルの料理が次々と運ばれてきた。それらをペロリと平らげてしまう銀金四元竜6人に恐れおののきながらもその味に舌鼓を打ち、盛り付けの華やかさも素晴らしいご馳走の数々は絶品の一言。明らかに人間1

人では食べきれない分量のそれらはネラやゴルト達に食べてもらったが、存分に腹も膨れて大満足だった。クオーツアイトさんなんかは、「殿方とこんなに楽しく食事ができるなんて……生きてて良かった……」と泣きながらもつしやもつしやと喰いまくってた。思ったより涙腺が弱いお嬢様系ドラゴンらしい。……お嬢様とは。

あと、俺が食べるところを実に心配そうに伺っていた料理と給仕担当の竜人族さん達に、大変美味しかったと礼を述べたらへブン状態で失神してしまったので申し訳ないことをしたかもしれない。……いやまあ皆幸せそうな顔してぶつ倒れてたのであれで良かったんだろう、うん。もう何も言うまい。

— そんなこんなで食後、ゴルトに誘われ彼女の寝室にお招きいただいた——んだけど。

「——ご、ゴルトの寝室へようこそ！ 主様♡」

「あ、ああ、お邪魔します」

「おじやましませす」

「はい、主様♡ 主様はこっちの椅子に座って待っててね♡ ——ねえちよつと！ なんでアンタまでいるのよイヴァール！」

こめかみに青筋浮かべながら俺を立派な椅子に座らせると、いつの間にかやついて来ていたイヴァールに掴みかからんばかりの勢いで一直線に詰め寄り、またきやんきやん

騒ぎ出した妹君。

竜人族には男を立派な椅子に座らせないといけない掟でもあるのか……？ まあありそうではある。慣れるしかないのね……。

「気にしなくていい。私も一緒に孕ませてもらうだけだから安心して」

「できるか！ 何勝手なこと言ってるのよ妹君権限って言ったでしょ！」

「そんなの知らない。ゴルトだけズルは良くない」

「ず……！ じゃ、じゃあお姉さまはどうなるのよ！」

「ネラは最初に主様を見つけたから良い。それに王様だから」

「私だって妹君なんですけど!？」

「そうだね。……それで？」

「ムキー!!」

そしていつも通りにあっけらかんと言つてのけ、ゴルトの猛抗議もどこ吹く風なイヴアール。相変わらずマイペースなやつちやなあ……。

そんな2人を尻目に室内を見回してみるが、なんとも女の子らしいといつかかなんというか。価値観がさっぱり違うはずの異世界なのに俺がそんな感想を抱いてしまうほど、ゴルトの寝室は可愛らしい内装だった。この世界の愛玩動物だろうか、それらを模した愛くるしいクツシヨンの数々に、パステルカラーを基調にしたカーテンや絨毯、調度品

の数々は可愛らしくも品を失うことなく、広大な寢室を明るく彩っている。そして一際デカイ天蓋付きのキングサイズベッド。まああれなら3人だろうがその倍だろうが余裕そうではある。何がって？ そりやナニですよ旦那！

「主様からもなんとか言つてよお！」

「へ？ うつおおおお……お、俺？」

喧噪を余所に室内を眺めていたら、いつの間にか俺の胸元に飛び込んできたゴルトが大きなサファリアの瞳に涙をためて見上げて来た。当たり前のように瞬間移動するなほんとに……。

あとこつちのがまつこと大変で重要なんですけどね？ うんやつぱゴルトのおっぱいやつべえ！ でつつつか!! やわっこむにゅむにゅのぼいんぼいんで乳臭い甘ったるさが最高ですよ神!! こんなドスケベロリ巨乳が許されていいんですか？ いいですともッ!!!

「——んふっ♡ 主様のエッチ♡ やつぱりゴルトのおっぱい好きなんだあ……♡

ほおくらむにゅむにゅう♡♡♡ んひゅ♡♡♡ つはあ♡♡♡ ——いひひっ♡♡

「うぐ……あ、いや……まあ、多少はね？」

しかし、しかしだ。散々ネラをブチ犯しまくった挙句に即☆妊☆娠させ今更弁解の余地なんざ欠片も残されちゃいないが、俺にはまだ元の世界の常識が幾分か残されてい

る。いやほんと今更なんですけどね？ やっぱりこんな2次元にしかないようなデカ乳むちケツぷにゆロリメスガキでしかも角羽尻尾付の金髪碧眼色白美白超絶美少女とか属性森杉先輩も真つ青なドスケベの権化とは言え、見た目は幼女なんですよ。一応まだちよつと罪悪感沸くよね？ ——うんまあそれが背徳感とかいう業の深いアレに直結するからもう救いようがないんだけどSA☆ ちなみにこんだけ年がら年中発情してる動物、他に中々いないらしい。流星は万年発情期ホモサピエンス、繁殖猿なだけはあるぜ……。

「……」

「うおおっ……!?!」

「あ、ちよつとイヴ！」

とかなんとか脳内で高速詠唱してたら後頭部にこれまたとんでも柔らかかもちも感触が襲ってきてもうどうでしょうおいちゃん幸せ過ぎて死んじゃう。

「わたしのおっぱいも負けてない。主様、気持ち良い？ ……んっ♡ あっ♡」
「おおお……」

「~~~~っ！ わ、わたしだつて！」

「うぶっ!?! ちよつ……まっ……!」

この世の極楽全部ひつくるめたようなおっぱいサンドを堪能してたら顔真っ赤にし

たゴルトが滅茶苦茶おっぱい顔に押し付けてきた。

いや待ってこれ嬉しいけど息……………！ 息できなっ……………おぼぼぼ！

「んんっ！ ふっう ♡ あっ ♡ あんっ ♡ 主様どう？ ゴルトのおっぱいのほうが気

持ち良いでしょっ？ んあっ ♡ はっ ♡ はひゅ♡」

「そんなことない ♡ あうっ ♡ い、イヴのだって気持ち良いから ♡ 主様 ♡ イヴ、な

んでもするよ…………… ♡ 主様のためならなんだってする…………… ♡ んう♡」

「——うう~~~~っ！ わ、わたしだっ！ 主様のお願いならなんでも……………聞いて

ちやうんだから！」

「…………… ♡ 必死なゴルトかわいい ♡ 無理しちゃって♡」

「してない！ してないもん！ んあっ ♡ んゆう♡」

「ちよ……………ほん……………し、死ぬ……………」

これヤバ……………渡つちやダメな川が……………いやでもめつちや気持ち良くていい匂いなんだけど酸欠きつつコレ……………あ、死ぬ。

「え？ ………………あ、あれ？」

「……………ゴルト、やり過ぎ」

「えっえっ!! ど、どどどどうしようどうしよう?! お兄様が死んじゃう!!」

「大丈夫。こういう時はショック療法って相場が決まってる」

「そ、そっか！ わたしの雷で！」

「——あっちよつまっギリギリ大丈夫だったからあああああつ?!」

『ごめんなさい』

「ごめんで済めば警察はいらないんだよ？」

「……けいさつ？」

「……?」

「んーそもそも統治機構がないかー」

そりやまあこんだけ個々が強けりや要らんか。竜人族の国で盗み働くとかそれもうアホか自殺志願者でしょ。他の種族がどれだけ強いかわらんけども。

てかネラの作ったユニ○口のTシャツマジですげえなおっぱい酸欠にもサンダーボルトにも耐えられて回復してくれる素敵仕様ですよ避雷針の罨カード常時発動中かな？

「やっぱりお姉さまが編んだんだ……」

「流石ネラ。ゴルトの防御貫通魔法も防いでみせるなんて。凄い」

「え、アレ貫通効果あんの？」

「ゴルトの攻撃は基本的に防御系統の魔法や能力が効かない」

「えへへへ」

「……そんなもんブチ込んだら普通の人間は死ぬんですよ？」

『ごめんなさい』

ちよつと種族の違いつてものをわからせてあげてあげますねえ……。いやもうこつちは散々わからされた後なんですけどもね、ええ。

「——ゴルト」

「な、なによ……」

「さつき主様のこと、変な呼び方してた」

「ぎくうっ!!」

「うーんまた古典的な反応を……」

口に出して言うやつ中々おらんやろ……。ほんま愉快やなこの娘ら。実際はめつちや年上つぽいけども。まあ人間年齢に換算したら今んとこ俺より皆年下くさいしええんか？ ええか。

「ナ、ナンノコトカナ？」

『お兄様が死んじゃう!!』

「おいバカヤメロオ!」

「イヴ、モノマネ上手いんだな……」

「ふんす」

ああー! もうヤダー!! と顔を隠して転げまわるゴルトと、褒められて思いつきりドヤりまくるイヴアール。どっちもおっぱい暴れまわってえらいことになるとる。

2人とも可愛いが過ぎませんか? おいちゃん頭おかしなるでほんま。

#20 ちんまくてでっかい 2

「いいもん……どうせわたしなんておっぱいくらいしかお姉さまに勝つてるところないもん……」

「こらいヴアール、妹君拗ねちゃったぞどうすんだこれ」

「大丈夫。いつものことだから」

「ええ……」

デカイベッドの上にぬいぐるみ抱きかかえて丸まっちゃったゴルト。最早どつちがぬいぐるみなのかわからんくらいに可愛いな。

しかし慰めようにもベッドの周りが雷の壁みたいなのに完全に包围されて近づこうに近づけん。いやほんとコレどうなってんの凄くないこれ？ マジで魔法なんでもアリやな……。

「ねえゴルト。なんで主様のことお兄様って呼んだの？」

「アンタってほんつと遠慮ないわよね!？」

「何を今更」

「うぐっ……」

「やっぱつえーわこの娘」

基本的に何に対しても我関せずなところが特に。

「……のよ」

「聞こえない」

「うっさいわね！ お兄様が欲しかったんだから仕方ないでしょ!!」

「どうして？」

「どうしてって……そんなの、ずっと懂れてたんだもん……」

「かわいい」

「わかる」

「2人してイジめたいわけ?!」

いやもう可愛いに決まってますやんこんなクソザコツンデレくそちよろ金髪ロリ巨乳。イヴァールも中々見る目があるな。

「もういい！ イヴァールもおに……主様も嫌い！」

「かわいいがすぎる」

「禿同」

「いい加減にしなさいよね!？」

くりくりまんまるなサファイアのお目目に涙をたつぷり浮かべて威嚇してくるゴルトが可愛くて愛くるしくてしようがない。

俺とイヴァールは努めて真顔で目を見合わせ頷き合う。やはり同志、言葉は不要か……。

そうして俺は極めて自然な動きでイヴァールの後ろに回り込み、むにむにの脇を掴んでそのちんまい身体を抱き上げる。

「よし、征くぞイヴァール」

「うん」

「え、ちよ、なにし——」

「——壁よどけツ!! 俺がお兄様だぞツツ!!」

「突破はわたしにまかせろーばりばりー」

「やめてっ!?!」

イヴァールを掲げたまま強引に雷の壁を突破していく。

何やらビリビリバリバリと痛いし辛いしやかましいがそんなことはどうでもいい。

「今お兄様が優しく抱き締めてめったくたに可愛がってやるからな覚悟しとけよゴルトオ!!」

「そうだぞ観念しろゴルトお」

「流石に怖いんですけど!? てかイヴも普通に突破してくんなー?!」

「雷ごときが土の四元竜たるこの沃震竜に勝てるとても? 片腹痛いわ」

「やかましいわ!!」

「ネラの服が無ければ即死だった」

「流石はネラ。私たちの王」

「うう~~~~~………♡」

所々焼け焦げてプスプスいつてた身体も少し経てばこの通り、余裕の回復力だ、(作り手の)格が違いますよ。やはりりゅーじんおーさまは竜人王様だった。

ていうかマジでネラ特製ユ○クロー式チート防具とイヴアールがいなきや死んでたと思う。このお2人には加減というモノを覚えていただかないとその内ガチで死んでしまいますねえ……。

ま、いつか。今そんなことはどうでもいい。

「うゆ♡ ちょ……やめて……♡ おに……主様撫ですぎ……♡」

「ほくれ素直にならないと一生こうして撫でくり回すぞ〜ゴロゴロ〜」

「ふう♡ はっはっ♡ あ、やつ♡ も、もおやめへえ♡♡」

「ゴルトばかりズルい。主様、わたしも撫でて、いっぱい褒めて」

「ああ、イヴアールがいなきや死んでたよ、ありがとな」

「♡♡ ……んっ♡」

竜の巣かよと言いたくなるような雷の壁を見事突破した俺とイヴアール。

実際竜の巣であるゴルトのベッド中央に陣取って胡坐をかき、右足にゴルトを、左足にイヴアールを侍らせて存分に2人のもちもちほっぺを堪能し、さらっさらの髪を撫でといてやっている。アカンこれ癖になるわどこもかしこも触り心地が良すぎる。

口では嫌々言いながらも身体は完全に弛緩しきって俺にされるがままのゴルトと、せつついて求愛してくるイヴアールの顎を転がすようにあやしてやれば、とろん♡ と目にハートを浮かべて吐息が熱を帯び始めた。

「いつまで意地張ってるつもりなんだゴルト。んー?」

「うう……♡ だつて、だつてえ……♡ ——はひゅっ?♡ ふわあ……♡♡」

沁み一つない綺麗なうなじから首筋に優しく線を引くように触れ敏感な反応を楽しむが、案外しぶとい妹君にどうしたものかと考えていると、イヴアールがじつとこちらを見つめていることに気づく。目を合わせてやれば、いつもの気だるげな瞳に僅かだが不満の色が宿っているようで、途端に悪戯っ子のように目を細めると微かに口角が吊り

上がった。

「ゴルトがそんなに嫌なら、わたしのお兄様になつてもらう」

「……ふえ？」

普段の無表情とは違う、外見相応に子どもっぽい、しかしどこか蠱惑的な笑みは駄々をこねるゴルトに向けられる。そんなイヴアールの言葉に鳩が豆鉄砲を食つたかのようになり、言葉の意味を理解できず反芻するゴルトを余所に、俺もイヴアールの思惑に乗つかることにした。

「そうだな、俺もイヴアールみたいな可愛い妹がいると嬉しいぞ」

「あ、えと……」

「♡♡ わたしも嬉しい♡ イヴのお兄様になつてくれるの？」

「ああ、ゴルトはなんだか嫌がつてるみたいだな」

「ち、ちがつ——」

「イヴアール、こつち向け」

「……♡♡ はっ♡♡ ふっ♡♡ ん♡♡」

「あ、やつ……」

演技なのか、それとも本気なのかさっぱり見当のつかない小麦色の美少女の色香に中てられながら、俺はゴルトを横目に見つつ、イヴアールの顎を掴んで唇を奪う。それに

つられて豊満な乳房が胸板に当たって押しのけようとしてくる弾力が堪らない。

「んふっ♡ ちゅ♡ ちゅむ♡ ちゅま♡ ふっふっ♡ んれ♡ ちゅっちゅ♡ ぶ
ぐ♡ はむ♡ んべ♡ れろにゆる♡♡ れりよれりよれりよれりよお♡♡
ぺろれりよんにゆるお♡♡♡ ちゅ♡ ぢゆるるるお♡♡ ちゅま♡ ちゅっ
ばあ♡♡ ぷはっ……♡♡♡ んあ……♡♡♡」

「あ……」

困惑するゴルトの目の前で交わすイヴアールとの口づけは情熱的で、とても初めてとは思えないほど巧みに唇を擦り合わせて啄み、長い舌で俺の口内を余すところなく舐り回しては唾液を啜り上げてきた。しかも俺からこそぎ取って口内に溜め込んだそれをゴルトに見せびらかすように、にちや♡ ちゅ♡ と口をめいっばい開いて舌で転がす有様だった。

「んぐっ♡ こくっ♡ こくんっ♡ ……けぷっ♡ ——お兄様のよだれ♡ おいし
……♡♡♡」

「~~~~っ!」

終いにはゴルトの顔の真ん前で俺の唾液を飲み干し、わぎとらしく嚙下音すら立てて、可愛らしいげっぷまで響かせて煽り散らかした。

澄ました顔してなんちゅうエロガキやコイツ……。

「い、イヴァールウ……!」

「ゴルト、欲しいモノは力づくで奪わなきゃダメ」

「……わかつてるわよ!」

そんな同族の舐め腐つた態度にいくらなんでも頭に來たのか、さつきまでのしおらしさが一変してス〇パ〇サイヤ人めいた金ぴかオーラをパッチパチに放ちまくるゴルト。怖いしなんか痛いです。

「わたしだつて負けない……! ——んむっ!」

「うおっ……」

あまりの強者オーラにビビつてたら今にも泣き出しそうな顔のゴルトが俺の首に小さな手を回し、一瞬泳いだ目をぎゅつと瞑つて、小さく瑞々しい唇を押し付けて來た。ついでに俺とゴルトの身体に挟まれ潰されぐつにぐぐにゅ♡に形を変えるおっぱいがまさに至福の感触である。ロリぷにゅおっぱい最高ですよ神。

「んっ! ちゅ……♡ ——んんっ!? ふむっ! んれ……? あう……。んっ!

んーっ!! ——ひぐつ、ふぐつ……ぐすつ。なんでよお……こんなんじや嫌われちゃう……」

イヴァールと違つて気が空回りしているのか単純に下手なだけか、満足にバードキスもできず、デイーブキスをしようにも齒が当たつてしまい上手くいかないご様子。つい

にはポロポロと大粒の涙を零して泣き出してしまった。

流石は姉妹、こんなところまで似ているとは……。だが可愛いから許す。当たり前だよなあ？

「あー……ゴルト。悪かった、意地悪すぎたな」

「ひっ……ひぐっ……。ゴルトのこと、嫌いになったの……？」

「そんなわけあるか。可愛いからつい意地悪しただけだよ、ごめんな」

「……ほんと？」

「ほんとほんと」

「じゃ、じゃあ……ゴルトも……。お、お兄様って、呼んでいい……？」

「ああ、もちろん」

泣きじやくっていたのが安心したのか、俺の胸元に顔を押し付けてぐりぐりしてくる妹君。まるで天使のような義妹の頭を撫でてやると、嬉しそうに羽がびよんびよん跳ね回り、美しい純白の尻尾が俺の胸に巻き付いてきた。仕返しなのか正直ちよつと苦しいんですがそれは……。ち、力入れすぎじゃありませんかねえ？ ——ぐえつ。

「良かったね、ゴルト」

「……ほんつと性悪ねこの土トカゲは」

「今更今更」

「ふんっ」

「ちよ……ゴルト、尻尾苦し……」

「お兄様もこれぐらい我慢して」

「わ、悪かったって……ぐっほ!？」

「これはお仕置きなんだから。いっひひ♡」

「ずるい。わたしもひつつく」

「ちよ、まつ……う、おお……?」

巻き付く尻尾が2本に増えてしかもそれが絶妙な力加減で締め上げられたり緩められたりで変な性癖目覚めそう。しかも前はゴルトのふわふわわらかマシユマロおっぱい、後ろはイヴアールのむちむち弾力ゴムまりおっぱいの爆乳サンドイツチ状態。

「なんやこれこゝろが天国か。でもなんか足んねえよなあ?」

「んっ♡ 主様、気付いた……?♡」

「わたしとイヴはね、乳首が引っ込んでるんだあ……♡」

「……は?」

「だからあ♡♡」

「誰かにほじくつてもらわないと……♡♡」

「恥ずかしがって出て来れないんだよお♡♡ ね、お兄様……?♡」

2 1 ちんまくてでっかい 3

「わたしも主様じゃなくて別の呼び方が良い」

「ええ……」

「今そういう流れじゃなかったでしょ……」

「ゴルトだけ特別なんてずるい」

あ、そういう問題？

「特別……——ふふん！ そりやまあ？ わたしは妹君なんだから特別なのは当たり前

よね！」

「そんなに特別なこと……だったな、うん」

ゴルトにとつてはまさしくそうだろう。

そもそもこの世界では元の世界の一般的な成人男性であれば特別なんでもんじやないレベルの希少性が発揮されるわけだから無論そうなる。——きつと、多分、M a y b e.

「——うん。やっぱりご主人様が良い」

「主様と何が違うつてのよ……」

「こつちの方が飼われてる感があって良い」

「ええ……」

「Oh..」

沃震竜様さあ……。

「主様の世界にもドラゴンはいた？」

「んあ？ ああ、空想上の生き物としてだけだな」

「空想上……」

「え、ドラゴンいないの!？」

「イナイヨーイナイヨー」

いてたまるかこんなクソ強とんでもチート生物。世界のバランスおかしなるで。あの米軍ですらこの竜人族×1万相手にしたら勝てるか相当怪しいぞ。

Q. 死者の蘇生すら可能な生物○相手に現代兵器は通用すると思いますか？

A. なんか無理そう。

Q. では核の炎での滅却ならばいかがですか？

A. ハリウ○ド映画の見過ぎですネクオレハ……。

「——じゃあトカゲは？」

「んえあ？——ああ、いるよ。爬虫類って元の世界じゃ分類されてる。ヤモリとか可愛いよな」

「可愛い……」

「えへへ……」

「なんでそこで喜んでるんですかねえ……」

君らはどう間違つても爬虫類なんてカテゴリーには収まりきらないんですがそれは……。というか比べるのもおこがましいレベルの上位種様だろ。

でもまあ本当に今更なんだけど、竜人族の皆さんの眼球は爬虫類のそれっぽい見た目をしている。ゴルトもイヴもそうだが、そのくりくりで愛らしい瞳はヤモリのそれに似てるかと言われれば……。うん、まあ似ている、のか……。？

何はともあれヤモリは普通に可愛い。風呂場の明かりに吸い寄せられて集まった虫をハントするヤモリを窓越しに眺めるとか田舎の夏じゃよくある話だ。触るのは流石に勇気がいるけども。

「やっぱり私はご主人様が良い。そう呼んでも平気？」

「——うん、いや、まあ……。今更かあ……」

「ご主人様はトカゲと多分同種のはちゆうるい？ であるやもり？ が可愛いって言った。つまり、わたしたちと似た種を愛玩用として飼うような価値観も持ち合わせてる。

違う?」

「……色々言いたいことはあるけど、爬虫類をペットにする人間は確かにいるな」

あまりに価値観が違い過ぎてふぎけるように思いがちだけど、やっぱり知能も相当高いんだよな、竜人族。普通に考えて人類より頭良さそう。ますます米軍、というか人類に勝ち目無いな……。

——そんな訳だからね、君らと爬虫類を同種扱いするのはどう考えても無理だつての。恐竜なんかよりよっぽどおつかないんだからな。……あれ、恐竜って今は鳥類として考えられてるんだっけ? ああもう頭がこんがらがってきたぞ。

「……お兄様の世界の人間って凄いのね。私達竜人族の容姿を好ましく思ってくれただけじゃなくて、ファイヤリザードとかフレアワイヴァーンなんかもペットにしてるってことでしょ?」

「——ん?」

「その通り。やっぱりご主人様は凄い。好き。だからイヴも飼って」

「——んん?!」

なんかまた変な方向に話が飛躍してませんか? この世界のトカゲってもしかなくてもヤバい奴しかいないのでは?

あと飼うって本気で言ってるすかこの沃震竜様は。

……イヴァールのことだから本気なんだろうなあ。

「あのねイヴァール……飼ってもらってアンタ、いくらなんでもペットじゃないんだから——」

「ペットが良い」

「えっ」

「うーんこの——」

「その方が、ご主人様はたくさん可愛がつてくれそうだから……♡♡」

イヴァールが放ったその意味するところに、俺とゴルトは一瞬言葉を失ってしまった。

「え……ええっ!?!」

「……………」

「……………♡♡ ご主人様……♡ 最強種の一角と呼ばれる竜人族、その上位に位置するこの沃震竜イヴァールを、飼い慣らしてはいただけませんか……?♡♡」

いつそ底冷えしそうなくらいに蠱惑的で、どこか挑発するかのような瞳と声音。胸の内を見透かされているような寒気と、どうなるかわかったうえで誘うように媚びる圧倒的強者の姿。そして、匂いをマーキングするかのように俺にしな垂れかかってくる彼女の情欲に火照った柔らかな恵体——。

全てがまるで濃密な媚薬のごとく、俺の全身に流れる血を一瞬で沸騰させ、倫理やら理性やらを吹き飛ばされた。

「ふぐつ♡ うおつ……?♡♡ あいつ!♡ ほつ♡ ほつ♡ おお……♡♡
♡」

「はっひゅ♡ んむつ♡♡ ……?♡ ちゅま♡ んちゅ♡ ふーっ♡♡
フー……ツツ♡♡ おつ♡ おつ♡ ちゅむ♡ ちゅば♡ おに♡♡ お兄
様♡♡♡ ちゅっぱちゅっぱ♡ ちゅぶ♡ ぴちやりゅれりよ♡♡ ちゅっちゅ
♡ れろれりよべろれえ……♡♡」

「……んっ。——んいつ?!♡♡ ふっき!♡ おオっ♡♡ のほ♡♡♡」

右手でゴルトの嬬（たお）やかな長い乳房を、左手でイヴアールの弾力豊かな爆乳を無造作に弄びながら、ゴルトの唇を貪り、甘い蜜のような唾液が溢れる口内を舌で舐め回してやる。

座高も低い妹君は必死に顎を反らし、俺を迎えられるよう愛らしい顔を差し出してく。胸に巻き付いていた純白の美しい尾は、初めての深い口づけに圧倒されて力なくへ

たり込んでしまっていた。

対照的に、豊かな土壌のように優しい土色の尾が、控えめだが不満気に俺の左手に巻き付いてくる。

「ふっぎゅ♡♡ ご主人様……♡ おっぱい潰れちゃ……ひぎい?!♡♡ あいつ♡♡
うっオ、っ♡♡♡ あ、——♡♡♡」

「……ふー。ペットのくせにご主人様に口答えするのか？ ゴルトももつと舌使え」

「あつ♡ やつ♡ ごめんなさいお兄様♡♡ する!♡ ちゃんとするからちゅう♡
もつとちゅうしてえ♡♡ はぶつ?♡ んんっ♡♡ あは♡ ちゅまっちゅま♡♡ ベ
ろべろれるろお♡♡♡ ちゅーぱちゅーっばあ♡♡♡ おオ、いぐっ!♡♡
いつきゅいつきゅ♡♡♡」

「ふぎっ!?!♡♡ おオ、っ?♡♡♡ ご、ごめんなさい!♡♡ イヴはだめなペットですっ
♡♡ はぎゅ?!♡♡♡ オ、っなんれ♡♡♡ 力ちゅよ♡♡♡ ひっひっ♡♡ ふごお
♡♡♡ いい、くくく♡♡♡ ——っぐ♡♡♡ イツギユ!!♡♡♡」

ぶしっ♡ ぷしやつぷしやつ!♡ ぶしゅっ♡ ぴゅっぴゅ♡ ぶしっぶしっ!!♡♡
右手の白金竜様は、少し力を籠めるだけでぐにゅ♡ ぎにゅ♡ と卑猥に形を歪める
長乳と甘い蜜壺のような口内を。左手の沃震竜様は無造作に鷲掴みにされ、握り潰そう
にも跳ね返るほどに虐げられる爆乳で、呆気なく潮を噴いてイってしまった。

2人揃って俺の膝上に落ち着いていた腰が刺激を与えるたびに未知の快楽を逃がそうとくねり、情けなくくいつ♡くいつ♡と揺すらせてずり落ちていき、終いには股が開き切って迎え腰のガニ股ちん媚びポーズをとってしまふ。顎は完全に反り返って瞳をひん剥き、雄が与えてくれた初めての潮吹きアクメに陶醉しきつた顔は発情で崩れ、蛇のように長い二又の舌がだらしなくまろび出て力なく垂れ下がりがくつ♡ひくつ♡と小刻みに跳ねる様が堪らない。

「——ぷあっ♡♡……おっ♡ふぎゆ♡ふっふっ♡しゅ♡しゅごかった……♡♡おイツグ♡あええ……♡♡」

「つぎゆ♡ほぎゆ♡はへえ♡ほっひゅ♡ご主人様……♡ご主人様あ♡♡うっオ、っ……ぎゆん♡♡」

「ほじくってやるから陥没乳首見せろ」

「ふぎゆ……♡♡は、はい……♡♡」

「……♡♡わかりました、ご主人様……♡♡」
初めて雄に嬲られたことによるマゾアクメからようやく戻ってきた2人に語気を強く命令すると、嬉しそうにぶしゃっ♡とザコ潮を噴いてふらつきながら俺の前で膝立ちになった。

「う……♡♡や、やっぱり恥ずかしい……お兄様あ……♡♡」

「ふっ……ふっ……ふっ…… あう……こ、こんな気持ち初めて……♡♡」
 「……さっさとしろ」

「んぎゅ……♡♡ ——のオ、っ♡♡♡」
 「ご、ごめんなさい……おイツク♡♡♡」

普段から服とすら呼べんような前張り張ってるだけのドスケベどもが今更何を恥ずかしがっているのかさっぱりわからん。

苛立ちが言葉に現れ、俺の怒りに軽く触れただけでまたマゾ潮を吐き出してイキ散らかすクソザコ雌ガキに益々抑えが効かなくなってきた。

「はー……♡♡ はー……♡♡ んんっ♡♡ はふっ……♡♡ ああ……取っちゃった……♡♡」

「ふーっ♡♡ フーッ♡♡ ……♡♡ はがすだけでこんなあ……♡♡ お、っ♡♡」
 普通ならどう足掻いたって勝てない最強種族。その更に上位の2人が、本来虫けらほどもにも価値のない俺に対して媚びへつらい、恥ずかしそうに赤面して震えながらも嬉々として従う。

ネラで慣れたと思っていたがとんでもない。これは麻薬だ。ヤバい薬でもここまで脳みそが震えるような圧倒的快楽は味わえないだろう。

しかも——、

「ゴルト、イヴァール」

「は、はひ♡♡」

「なに……♡♡」

「乳輪デカすぎんだろ、なんだよこのドスケベ性器は」

「ふぎゅお!! お兄様♡♡ いぎなりさわつじやあ♡♡♡ うつおオ、っ?♡♡♡」

「ほっぎゅ?! おっ♡ おっ♡ ——くっほお♡♡♡ ひっひっ♡ あええっ♡♡」

胸だから比較的大きな布張っつけてるだけだと思つてたら、全部この馬鹿でかい陥没乳首を隠す為だったとは……。どちらも乳輪の真ん中に横に線を引いたようにして乳首が埋まつているようだが、乳房に乳輪だけでなく乳首も相当な大きさがあるようにしか見えないくらいに膨らんだ乳輪が殊更にエロい。

さらにゴルトはもともと肌が真っ白と言えるレベルの色白で、それに映える綺麗なピンク色。イヴァールは布の部分が日焼けせず跡が綺麗に残っており、焼けて健康的な小麦色とそうでない桜色の乳頭とのコントラストが絶妙で凄まじい破壊力である。

「お、お兄様♡♡ そんなに撫でないでえ♡♡♡ んん♡♡ いい♡♡♡♡♡」

「ふあっ♡ あっ♡ んふっ♡ はっふっ♡ ご主人様……♡♡ 見て……これ……♡♡」

♡♡」

俺があまりに2人の胸に夢中になっっているからか、少しばかり調子を取り戻したらしいイヴァールが悪戯っぽく、それでいて妖艶な笑みを浮かべてその小さな手を胸に持つてくる。

「あつ……イヴァールのばか……!」

「なん——」

それを見たゴルトが焦ったように声を出したが、それもその筈だった。

「んんっ……♡♡ ふつぐ……!♡♡ あつあつ♡♡ 入っちゃう……ご主人様の目の前でえ♡♡♡♡」

あろうことかイヴァールは、両手の指を乳首が埋まっている左右それぞれの乳輪の割れ目にゆつくりと沈みこませていく。しかも2本ずつ。

「ああつ……♡♡ おっほ?♡♡ うお、っ♡♡ これすっご♡♡♡♡ ご主人様に見てもらいながらするのきもち♡♡♡♡ おっ♡♡ おっ♡♡ んのお、くくくっ♡♡♡♡」
「くくくっ♡♡♡♡」

蕩け切った顔で長い舌を放り出し、自分の爆乳を自分の指でゆつくりゆつくりと犯す小麦色の人外幼女。最早声にならない悲鳴を上げるゴルトとともに、俺はそんなアブノーマル極まりない卑猥に過ぎる公開オナニーに見入られてしまう。

そして遂に、イヴアールの小さな指はその4本全てが彼女の胸に収まりきってしまった。

「――」

「ふーっ♡♡♡んふーっ♡♡♡ ……♡♡♡ ご主人様♡ ゴルトもコレ……♡♡♡ できるんだよ……♡♡♡♡♡」

「ば、ばかっ……♡♡」

「……………」

「あっ……♡♡ やっ……♡♡ お兄様の目……♡♡ 怖い♡ 怖いよ……♡♡♡」

「……♡♡♡んっ♡♡ ね、ご主人様♡♡ わたしとゴルトのおっぱいおまんこ……♡♡♡♡♡」

「っばいっばい♡♡♡♡♡ ほじくりまわして……♡♡♡?♡♡♡♡♡」

2 2 ちんまくてでっかい 4

「そこに並んで乳差し出せ」

「うう……♡♡」

「はい……♡♡」

ゴルトのベッド中央に我が物顔で胡坐をかく俺の目の前に、4つの肉毬が恭しく差し出される。下品と言っても差し支えない程豊かに実った脂肪の塊が、小さな手によって支えられ卑猥に形を崩し、持ち主の熱っぽい吐息とともに眼前で揺れ弾む。

「息っ♡ お兄様の息があ♡♡ やっ♡ オッ♡♡」

「……♡♡ ふっ♡♡ へっ♡♡ おお、~~~~♡♡♡♡」

ぶじゅっ♡ ぶしゅっ♡

よっぽど敏感なのか普段から弄り過ぎなのか、まさか息を吹きかけただけで潮吹きアクメを決めるとは思わなかった。この最強種様方は自分でどんだけ開発してきたんだ、なんか腹立ってきたな。

「……どんだけクソザコなんだ？」

「ふぎゆ♡♡ あいつ♡ ご、ごめんなさいお兄様あ♡♡♡」

「おおっ♡ いくつ♡♡ イックイック!!♡♡ あ~~~~♡♡」

バッチイイイツ!!

「え……………」

「……………???

「ペットのくせに返事もしない……お仕置が必要だよな? イヴァール」

ばぢっつ! べちいいいッツ!!

「~~~~ッツツ?! ほぎや?! ふぎい!? うおッツ?!♡♡♡」

ばっぢ!! びしやっ! ばちっ! バヂイイイイツツ!!

「??♡♡?!♡♡ ——にぎゆッ♡♡ ふっぎい♡♡♡♡ ごめっ♡ ごめんなさいご主人

様——おおっ?! 叩きすぎっ♡ おイッグイッグ♡♡ おっぱいぶたれてイグッ♡♡

♡」

「誰がイって良いって言った?」

「ふぎゆお!?!」

パアンツ!! べしっ! ッパアアアンツツ!!

「あぎやつ?! ふんぎゆッ♡♡ もっ許じでっ♡♡ ごべんなさい♡♡♡ イヴのクソ

ザコおっぱい♡♡ 叩かれるたびにイっでましゅ!!♡♡ ふおっ?♡♡ おイック♡♡

いくいくいく♡♡♡ イグの我慢無理♡♡♡ むーり♡♡♡
 お乳虐められていきゅいきゅ!! ほおおくくく??♡♡♡

ぶしっ♡ ぷしゅっ♡ ぴゅっぴゅ♡♡♡ ぴゅくっぴゅくん♡♡♡

飼われる側として全くなっていないイヴアールを躡ける為、割と本気で引つ叩いたのだがこのクソマゾペットにとってはご褒美でしかなかったらしい。そもそも人間の力じゃどうあつても傷ついたり出来なさそうではあるが衝撃は通っているらしく、たつぷり肉の詰まった小麦色の乳球が紅く腫れ、手跡が鮮やかな紅葉の如く無数に残る様がこの上なく征服欲を満たしてくれる。

「これじゃお仕置きにならないな。……どうしたゴルト」

「えっ♡ あっ、あのっ……♡♡♡ お、お兄様……♡♡♡ あのっ♡♡♡」

一方的に甚振られるドM快楽に溺れ、潰れたカエルのようにベッドに沈み込んで腰がカクつきマゾ潮を飛ばすイヴアールを横目に、真っ白な肌を薄い桃色に火照らせた妹君が期待一杯の瞳とともに嬲やかな長乳を差し出してくる。少し視線を落とせば、もじもじと擦り合わせているむっちむち♡ の太ももはしとどに濡れそぼり、動く度に卑猥な粘着音が鼓膜を揺らして煽ってきた。

「仲間が黴られるのを止めるどころか羨ましがってたのか? どうしようもないマゾメスだな、竜人族の妹君は」

「~~~~~♡♡♡」

蔑むような視線にも、見下した声色にすら歓喜に震えるクソザコドラゴンは声にならない喘ぎを発して絶頂を迎えてしまった。

あまりのDMっぷりに自然と口角が吊り上がるのを感じながら手を振り上げると、へえ……♡ と心底嬉しそうに表情が崩れる妹君の柔っこい長乳に、真つ赤な紅葉を咲かせてやった。

—

「おおっ……♡♡ ふっほ♡ ふひっ♡ ひっい♡♡ あ~~~~~っ♡♡♡」

「ふつきゅ……♡♡ ごめ……ごめんさいい……♡ おっおオっ……♡♡♡」

こつちの手が痛くなるまで蹂躪し、2人の乳袋が紅く腫れ上がって散々イキ散らかしても、隠れた乳首はまだ顔を出さない。よほど深く埋まっているのかなんなのか。

それとは別に、翩られてさらに膨れ上がった乳輪とその割れ目からはとぷ♡ とぷっ

♡ と白い液体が滲み出しており、花の蜜のような甘ったるい香りを辺りに振りまいていた。

「……母乳？」

「ふー……」

「のぎよお!?」 うつぎ?! ひつひつ??♡♡♡ おオ、ー……ー……ツツ♡♡♡♡」

「い、イヴ……イヴのおっぱいが……♡♡♡ おっぱいにい……♡♡♡」

小柄な、ともすればまだ幼いくらいのイヴアールにのしかかり、巨大と言つて差し支えない規格外の代物と化した息子が挿入るか多少気にはなつたが、何ら問題なく飲み込んでいったペットの陥没乳首に感動すら覚える。まるで潤滑油のように止めどなく溢れる母乳が絡むように纏わりつき、程好い弾力が揉み解すように締め付けてくる極上の挿入感が、この世のものと思えない快感を尽きることなく与えてきていた。

「マゾメスガキが性懲りもなく煽りやがって……。どうだイヴアール、お望み通りほじくつてやつてるんだぞ?」

「ふぎいつ♡♡♡ うぎゆオ、♡♡♡ ほつきやほつきや♡♡♡ おっぱ♡♡♡ おっぱいがあ♡♡♡」

「無視するな」

バツヂイイイツツ!!

「ほぎよおおオ、!? うつオ、つ♡♡♡ やべっ♡♡♡ やべへくりやしやいごしゅじんひやま♡♡♡ 今おっぱいぶつちやりやめ!! ゆびつ!! 指でじでもりやえりゆとおもつてまじだあ♡♡♡ ほおおっ?? ぱんぱん止めへっ!♡♡♡ ちゅぶれりゆ♡♡♡」

おっぱいまんこいっぱいinyのおオッツイぐ!? イッグイッグ!! お乳犯されてい
ぎゅ!! いぐいぎゅいっぎゅん♡♡♡♡ あー……っ♡♡♡♡

「……実はイヴァールが一番躰けづらいんじゃないか? なあゴルト」

まるで杭でも打ち込むかのように、小麦色と肌色のコントラストが艶めかしい乳マン
コを犯し潰す。かき混ぜられて白濁とした母乳を撒き散らし半狂乱のイヴァールを横
目に、大人しくなった妹君に声をかけるがこちらにも反応がない。

「イヴ……あのイヴがあんな……♡♡♡♡ すご……♡♡♡♡ おっぱいミチミチいつてる……
♡♡♡♡ そ、そんなに気持ち良いの……?♡♡♡♡ あんなおっきいの……お胸壊れちゃう
よお……♡♡♡♡」

「答えろつつつてんだろ」

「——んにいつ?!」

ぶちゅっ♡ どちゅっどちゅん! ごちゅっ!! ぼりゆりゅん♡♡♡

本来胸からしてはいけない音を盛大に立て鳴らし、爆乳がひしゃげるほど押し潰され
犯されているイヴァールに釘付けなゴルト。

こっちもこっちでなっていない妹君は四つん這いで恐る恐るという風に、長大な肉杭
で蹴られ放題に「ふぎやッ♡♡♡♡ ほぎやぎや♡♡♡♡」と無様に鳴く仲間を覗き込んでい
たが、何かにつけて煽ってくるメスガキに苛立ちっぱなしの俺に無防備に揺らす長乳を

引つ掴まれて間拔けな声を響かせる。

「何他人事みたいに眺めてるんだ？ 次はゴルトの番なんだぞ」

「ひぎゆっ♡♡♡ しょ、しょんにや……♡♡♡ む、無理ですお兄様あ♡♡♡ ゴルト死ん

じやう——おぎよっ?! ふつきゆ?♡♡♡ によおおッ♡♡♡ おっぱ♡♡♡ おっぱい

ちゅぶれりゆ♡♡♡♡ 握りすぎ——いおっ??♡♡♡」

「呆けてる暇があつたら乳でも差し出してろ。評判なんだろ」

「ふぎよ!? ほひよお♡♡♡ は、はい……♡♡♡ 気の利かないザメスでしゆみましえ

ん……♡♡♡ ——ど、どうぞ♡♡♡ ほんとはお兄様に仕込んでもらう赤ちゃんのためのお

乳♡♡♡ たくさん飲んでいただけると嬉しいです……♡♡♡ ——おおっ?? のおお

~~~~♡♡♡」

普段は小生意気な顔を耳まで真っ赤にして、母乳が溢れるたっぱたば♡♡♡ の柔長乳を

差し出す妹君に、獣欲が更にいきり立つのを感じながら貪るように吸い付いてやる。

「うおオ、っ??♡♡♡♡ おに♡♡♡ お兄様に吸われでりゆ!!♡♡♡ おっぱ♡♡♡ おっぱい

じゆるじゆるつでへえ♡♡♡♡ うっオ、っすっ♡♡♡♡ これしゅっご♡♡♡♡ おっ

ほ??! ほひよおオ、~~~~♡♡♡♡」

「おああっ?! おぢんぼまらおっぎぐう……♡♡♡♡ も、もおゆるひへ……♡♡♡♡ ご

ひゆ♡♡♡ ご主人様あオ、いッぐ♡♡♡♡ まらいギユイギユ♡♡♡♡ しいっ……♡♡♡♡ ツ

ッググ オッツ ッ♡♡♡♡♡ — ふぎゆ♡♡♡ 死ぬ……ひぬう……♡♡♡

人間だと大の大人が母乳を飲むのは倫理面からも健康面からも推奨されない——まあ当たり前だが、これは確かに病みつきになりそうなレベルで美味い。匂いの時点でもそうだったが非常に口当たりの良い甘さですつと飲んでいられる気にさせるくらいだ。ついでに栄養満点でもあるのか、飲めば飲む程腹の底から力が湧いてくるような感覚すらある。

その勢いのままに、杭打ちピストンでひしやげ潰していたイヴアールのおっぱいまんこを、今度はオナホールで抜くかのように両手で掴んでごちゆ♡ ごしゆ♡ としごき倒してやる。潰され犯され醜態を晒し、「んぎよほお!? ふぎぎ……いつ♡♡ ぴゅぎい♡♡♡」と無様極まりないオホ声が下から響いてくるが嬉しそうなので気にしない。

「ほぎやぎや♡♡♡ まっへ♡♡♡ やべでえ♡♡♡ おっぱいごしゆごしゆ♡♡♡ ふっほ?? んのおくくく♡♡♡ わ、わらひのおっぱいい……♡♡ ご主人様のオッつ?!♡♡ フーッ♡♡♡ ンフーッ♡♡♡ ——お、おちんぼ抜き用のおもちやにさえでゆ……♡♡♡ うおオッつ?? オッ♡♡♡ オッ♡♡♡ くっほ♡♡♡」

「まるでオナホだな」

「お、おなほ……っ♡♡♡」

「オナホールって言うんだ。ぬちやぬちやの穴にこうやって雑に突っ込んで遊ぶんだよ」

「んぎよお?!」

「ほんぎゆ♡♡♡♡♡」

もうとづくに実演しまくっていたが、これも説明の為だ。吸い付き舐めしゃぶっていたゴルトのクソでか乳輪の割れ目にいきなり指を2本突っ込み、呆けた間抜け面を晒すイヴアールの雑魚乳オナホに思いつきし杭打ちピストンを叩き込んでやる。

急な衝撃に2人して顎が跳ね上がり、壊れたブリキのように腰がカツクカク♡に暴れ回ってももう何度目か知れないマゾ潮を噴き出してイキ散らかす様が最高に昂る。

「おっぐ♡♡ のぎや♡ ひっひっ♡♡ お、おっぱいにはいつでゆう…♡♡♡♡♡」

♡ ほっへえ?!♡♡ おお♡♡♡♡♡♡♡♡♡

「うっオ、っ♡♡♡ も…♡♡やめへ…♡♡♡ 乳首ちゅぶれりゆ…♡♡なくなっちゃやうう

…♡♡♡♡♡ んぎやあ?!♡♡♡♡♡」

「こんな風にな、男がちゃんぽシゴいて精子扱き捨てて気持ち良くなる為だけの玩具の事だよ。今のゴルトとイヴアールの乳マンコみたいにな」

『~~~~♡♡♡♡♡』

ぶじゅっ♡♡ びしゅっびちや♡♡ びゅぶ♡♡ ぶしっ♡♡♡

「今の話聞いても潮吹いて喜びやがって……。道具扱いされるのがそんなに嬉しいか？」

「ふぐう♡♡ ——う、嬉しいでしゅ♡♡♡♡ ほんとは恥ずかしいけど……。こんなのダ

メだけどお♡♡ あ、貴方だから……。♡♡ お兄様だからあ♡♡♡♡」

「おっ♡ おっ♡ んおおッ、……。♡♡♡♡ ——い、イヴ、ペットだから……。♡♡ ご主

人様の所有物だから……。♡♡ それに、こんな一方的だなんて初めてで……。興奮する

……。♡♡♡♡」

「……」

ゴルトは純粹に俺に弄られるのが気に入ったようだが、イヴアールは少し毛色が違う。

これまででは、恐らく敵なしと言って良い程のその力で相手をねじ伏せて来たんだろう。ローゼさん達みたいに合コンとか行って凹みまくってた訳でもなさそうだし。そもそもこの子は外交とか交渉事には向いてない気もするし当然かもしれない。ネラ達もその辺はわかっていそうだ。

——しっかしまあこんだけ乳をぐつちよんぐつちよんにされてアヘり散らかしてもまだ煽るようなことを言えるとは……。わかっていのか素でやってるのか最早わからんが、生意気にも誘うような目つきで俺を見遣る沃震竜様には畏敬の念すら抱く。



……やっぱりわかってやってんじやねーかコイツ。

「そうかそうか。玩具にされて興奮するんなら、もつと使つてやらないと……な!!」

「……♡♡♡ うつ——ほぎよお、ツ、!?!♡♡♡」

どちゅ! ぶちゅ♡ ばつちゅばつちゅ!! ほりゅ♡ ぐどつつぢゅん!!♡♡

「ふつき?! うつオ、つ♡♡♡ んぎやつ♡♡ ほぎや♡♡♡ オ、お、

♡————♡♡♡♡」

「ああ……♡♡ イヴ……イヴがあ……♡♡ ——んみいつ!?!」

「魅入つてないで奉仕しろつつてんだろ」

「ふぎゆいッ!?!♡♡ ごべんなしやい!! お兄様ごめんなさいいつ♡♡♡ しゅりゅ

!! ちゃんとごほーししましゅかりやあ♡♡ おっおっ♡♡ お乳ほじくりやにやい

でえ♡♡♡ ふおおつ!?!♡♡♡」

どうにもわかつてない妹君にイライラが募りながら、どこもかしこもマシユマロみたいに柔らかかモチ肌ゴルトの長乳を引つ掴み、ぶちゅ♡ ぶびゅつ♡ と母乳が噴き出す乳穴へと無造作に指を突つ込む。その深さに感動すら覚えながら押し込んでいくと、固いシコリのようなモノに指先が辿り着いた。

「んのお~~~~♡♡♡ ひーっ♡♡ んっひ??♡♡ お、おにいしやま♡♡ しよ、しよ

れえ……♡♡♡」

「……どんだけ奥に隠してんだよ」

「んぎよお?!♡♡♡」

大人の男の中指と人差し指が全て埋まり切り、ようやく先が触れる位置にあるとか……。

「マジでチンコ突っ込むための穴だな」

「ふっぎぎい♡♡♡ んおオ、っ♡♡♡ やめへっ!! お兄様あ♡♡ 乳首こねこねしないれへえ♡♡♡ ほっひよ?? によおお~~~~♡♡♡」

「~~~~おオ、ッ、?!?♡♡♡♡♡ ちゅ、ちゅぶれりゅ……♡♡ ごしゅじんしやま……体重かけしゅぎ……♡♡♡」

「いいから黙って締めてろ、こうすんだよ」

「ふっごお?!♡♡♡」

右手はゴルトの乳首をほじくるので忙しいため、ブチ犯してぐっちよぐちよ♡ に白く染め上げられたイヴアールの左胸を、空いた左手でギリギリと鷲掴みにしてやる。

「うっぎい?!?♡ ごれりやめっ♡♡ うっオ、っ?!♡♡♡ わ、わかりまじだ♡♡ やるっ!! 自分でやりましゅからおっぱいゆるじでッ♡♡♡ お乳虐めが過ぎましゅ!

♡♡ おっぱいごわれぢやあぁ?!♡♡♡」

「虐めてほしくて煽ったんだろぅが」



母乳を撒き散らしながらまろび出てしまった乳首は、その余りの長さで重さに耐えられないのか重力に負けてだらしなく垂れ下がり、そこまで育てた張本人が絶頂で痙攣し腰がへこつたたびに、ぷるっ♡ ぷるん♡ と跳ね回る始末。

「あ……ああつ……♡ ゝ、ゴルト……♡♡」

先程までとは逆に、今度はイヴアールがゴルトの痴態に圧倒される番となった。俺にのしかかられている為に首だけ動かし、無様に快樂地獄を味わう仲間を見遣るイヴアール。

「次はお前の番だなあ？ イヴアール」

「ひっひっ♡♡ やっ……♡♡ いやあ……♡♡♡♡」

そんな彼女にまるで宣告の如く告げてやれば、口では嫌がりつつも顔は蕩け切り、嬉しそうに身じろぎして俺から熱に浮かされ続ける視線を外そうとしない。

そもそも力で敵う筈もないのだから、俺を押し退ける事なんぞ造作もないのだ。本来なら――。

「とりあえずー発抜いとくか」

「えっ……うお、ッ、?!」

「ごちゅっ！ ぶちゅっぶちゅ!! どっちゅどっちゅ♡ のちゅ♡♡ のちゅん♡♡」

「ふぎえ?!♡♡♡ ぐっおオッ♡♡♡♡ ま、まつで♡♡ はげしっ——うぴっ??♡♡♡」

「ゴルトの相手もしながらとは違うからな」

「んおオッ♡♡♡♡♡ ふぎっ! あぎゅっ♡♡♡」

ぶっちゅ♡♡♡ ばっちゅばっちゅ!! たっばたっぽん♡ のちゅっむりゅ♡♡

のっぢゅのっぢゅん♡♡♡♡

「おオッ♡♡♡——♡♡♡♡♡ うおオッ♡♡??♡♡♡♡ ちゅぶれっ♡♡♡

ご、ごわれぢやう♡♡♡♡ おっばいごわれりゅツ♡♡♡♡♡ つ、おギツツ♡♡♡ ごれ

ギツぢゅいっ♡♡♡♡

「あー……やばいな。具合良すぎ」

「フ——♡♡♡♡♡ ツ♡♡♡♡♡ ンフ——♡♡♡♡♡ ツ♡♡♡♡♡ ごっ♡♡♡♡♡ ほげっ??♡♡♡♡♡ おオッ♡♡♡♡♡

ごしゅじんしゃまつ!! まっへ♡♡♡♡ どまつで♡♡♡♡ じぬっ!! イヴ死んじやう♡♡

♡♡♡♡♡ んっほお~~~~♡??♡♡♡♡♡

「大丈夫大丈夫。竜人族は頑丈だつてわかつてるから、な!!」

「しよ、しよんな……♡♡♡♡♡ もおゆるひてえ……おごおっ!! まら激しぐツ♡♡♡♡♡

——おイッグイッグ♡♡♡♡♡ お乳ぶっ壊しやれでイグツ♡♡♡♡♡ いぎゅいぎゅい

ぎゅ!!♡♡♡♡♡ んおオッ♡♡♡♡♡ うお、イック♡♡♡♡♡ まらイギユツ!! ほっへえ

「~~~~♡♡♡♡」

小麦色の生意気爆乳幼女を組み伏せたまま、その乳球をまるでオナホのように両手で引つ掴んでごっつちゅごちゅ♡ に扱きまくる。

元の世界のそれとは比べ物にならない極上の生乳オナホの使い心地。加えてこれまで我慢していたのも相俟ってか、あつという間に精巢から射精感が込み上げてきた。

「つぐ……射精る……」

「あええ……………??？」

びゅぐつ。どぶつ……………どぶつ……♡

「おお……………??」 膨らん……………でてつ……………??♡♡♡♡」

びゅぶつびゅつぐ!! どつぐどつぐ♡ びゅつぐ! びゅばつ♡ ごびゅびゅつ!!

びゅるるるるッ♡♡ びゅーーーッ!!

「——んのおつっ?!?!♡♡♡♡ おあつ?? あつあ……………♡ あ……………♡♡♡♡ あ

ぢゅ??♡♡ あつちゅあつちゅ♡♡♡♡ おオ♡♡♡♡ くくつ♡♡♡♡ おつぱ

いい!?!♡♡ ぢゅびやげりゅ♡♡♡♡ うおオ♡♡♡♡ ふぎよおお♡♡♡♡」

「まだ射精るぞ……………!」

「ひーっ♡♡♡ らめらめりやめえ♡♡♡♡ もういっぱい!! おっぱいまんこもお

いっぱいいやのおオッ?!?!♡♡♡♡ もうびゅつびゅりやめ♡♡ ギーめん禁止し

ましゅ!!♡♡♡ うおオ、くくくくッ♡♡♡」

「黙って受け止めてろ」

「ひゅぐう……♡♡♡♡」

びゅぐびゅぐッ!! ぶびっ♡ びゅちゅちゅ!♡ ぶじゅっ! びゅばッ♡ ぶりゅりゅりゅ♡♡♡

「ぐっひい♡♡♡ オ、ッ♡♡♡ オ、ッ♡♡♡ イッグ♡♡♡ いぐいぐいぐいぐッッ!!! おオ、ー、ー、ー……♡♡♡ いきゅ……いきゅう……♡♡♡

ふっふっ……♡♡♡ ……♡♡♡ うっオ、っ♡♡♡ も、もおパンパンれしゅ……♡♡♡

おっぱいふぐらんじやっだあ……♡♡♡ ふへっ♡♡♡ だ、だいじなぎーめん……♡♡♡

お乳に射精じでも赤ちゃんできにやいのお……♡♡♡ あええ……♡♡♡ うオ

ッ♡♡♡♡♡」

この世界に来てからというもの、俺の射精量は凄まじいものとなっており明らかに人外レベルのそれを多少抑えたつもりだったが、ゴルトの母乳を飲んだからか何なのか、さっぱり抑えられていなかった。

オナホ扱いされた左胸は大量の精子で蹂躪され膨張してしまっており、ぽっかり空いてしまった乳輪からは、ぶぶっ♡ ぶびっ♡ と情けない音を立てて粘っこい精液が止めどなく溢れてしまっている。

「……お陰でまだまだ元気だが、どうする？ ゴルト」

「……………♡♡♡」

いつの間にか回復していたらしい妹君からの、舐めるような熱っぽい視線を浴びつつ問いかける。答えなんざわかっているようなものだ。

とてもではないがその幼い見た目にそぐわない、快楽に溺れ切った妖艶な笑みをニタア……♡ と浮かべ、まだ埋まったままの長乳を差し出してくる妹君に対して、俄かに股間の血が騒ぎ出していた。

「ふーっ♡♡♡ ンフーっ……♡♡♡ お、お兄様あ……♡♡♡ お兄様の大事な精子……♡ ぐっぐっザーメン♡♡♡ 私達竜人族を孕ませる為の大っ切なお子種汁♡♡♡ このお……卑しい欲しがりメスガキお乳マンコ♡♡♡ クソ雑魚ドラゴンオナホールに♡♡♡ どうか無駄打ち♡♡♡ 抜き捨てオナニーしてくださいさぁ♡♡♡」





生意気にも勝ち誇ったかのようにへらついてくる妹君に対して、腹いせに剛直を奥目掛けてぶち込んでやる。

「ふぎゆッ♡♡♡んおっ♡♡♡おオッ♡♡♡おっ♡♡♡おっ♡♡♡ふおおおっ?!♡♡♡」

まるで絹のような触り心地の柔乳を弄び、甘ったるい母乳でぐつちやぐちやの乳内で暴虐の限りを尽くす。

ぼぢゅッ! ぼぢゅっ♡ だっばたっばん♡♡ ちゅぼっちゅぼ♡ ぐちゅ♡ ぐりゅりゅん♡♡♡ ぶっちゅ♡ のっちゅん♡♡♡

「ひっぎ♡♡♡ふぎい!♡♡♡おオッ♡♡♡おあ~~~~♡♡♡おっばい♡♡♡おっばいがあ♡♡♡ふぎゅお!?♡♡♡んにい♡♡♡おに♡♡♡お兄様あ♡♡♡しゅごい♡♡♡しゅごいのお♡♡♡私でこんな♡♡♡ゴルトでこんなに……興奮してくれてるの♡♡♡うれしいオッ♡♡♡ほっぎゅ??♡♡♡ふっぎやほっぎや♡♡♡オっお死ぬ♡♡♡いぐっ♡♡♡いぎしゅぎでしにゆう♡♡♡ひっひっ♡♡♡ひゅおオッ♡♡♡~~~~ッ♡♡♡♡♡♡♡」

「お前見て、興奮しないわけない、だろ……が!」

「ふっぎゆいっ?!♡♡♡♡♡♡♡」

当然と言うかなんというか、今までの価値観がまだまだ抜けていないゴルトの言葉に余計に昂りを覚える。

こんな極上の雌を相手に萎える奴の感覚が全く理解できんし、しようとしても無理だろう。

足元に佇んで異様な快楽にも必死に耐え、俺がやりやすいようどうにか胸を支え続けるゴルトの姿はグツとくるものがある。そんな健気さとは裏腹に、非の打ち所がないほどに整った幼い顔立ちは涙やら涎やらでもうぐつちやぐちや。それでも顔の良さは崩れることなく、悦楽の虜ですと誰が見てもわかるほどに蕩けきった表情の妖艶さたるや。

この妹君、アンバランスに過ぎる。しかしそのギャップが堪らない。

「こんの……マゾメスがっ……！」

「んぎやつ♡♡ ふぎやあ!?!♡♡ はげしつ♡♡ お兄様♡ おにいしやまあつオ

っ♡♡♡♡ イツグイツグ♡♡ まりやイキユ♡♡♡♡ じゅっひよいつへりゆう♡♡

♡♡ んのおくくくく♡♡♡♡」

濁流のような快感に、真っ白な肌を余すところなく桜色に染め上げて痙攣し、幼い蜜壺からは止めどなくイキ潮を噴き出し続ける。

小学生と見紛うような低い背と、不釣り合いにも程がある長乳。しかもそれに化け物じみたサイズの剛直を突っ込んでいるのだから頭がバグって仕方がない。

「うぐっ……射精る……！」

「ふおっへえ……………う?…?」

ぐびゅっ!! びゆるっ!! びゆちちっ♡♡ ぶびゆるるるっ♡♡♡ びゅっぐ  
びゅぐんツ!! びゆちちい♡♡ どっぐどっぐ♡♡♡

「おっ?? おオっ??♡♡ ういつぎイイツ♡♡♡ ひっ?♡ ほっへ?♡♡ でへ  
りゅ♡♡ せーし…………♡ お兄様のぎーめんう♡♡」

「がっあ…………… まだ……………」

「んのっほお??」

びゅっ♡ びゅどっびゅと♡♡ びゅぐっ! どぼ♡ ごほほお♡♡

塊のような精液が尿道から飛び出すたびに全身を貫く射精感に鳥肌が立ち、意識が遠くなるほどの快楽に眩暈がする。それでもこの快感を1秒でも長く貪ろうと、殆ど無意識のうちに手が伸びて、ゴルトの長乳オナホを両手で掴んで強引に引き寄せる。

「んぎゅお??♡♡♡ —うおオオッ♡♡♡ まっ♡♡♡ まっへ♡♡♡ やべ

♡ やべへくりやしやい♡♡♡ おっぱいはなじで!♡♡♡ お乳破裂しゆりゅ!!♡♡♡  
♡ なかでじゃーめんあばれでゆのツツ♡♡♡ —うっオっ??♡♡♡?!♡♡♡

ま、まだでへりゅ…………♡♡♡ とま♡♡♡ どまつへえ…………ほひよお♡♡♡ うっオっ♡♡♡ キツツ

♡♡♡ おっぱいふぐらみゅう…………のおおっ♡♡♡ ふおっぎゅ♡♡♡ ほひよおオ  
っ♡♡♡ ツ♡♡♡!!♡♡♡♡♡♡♡

「オ、っ……………♡ ふぎゅ……………♡♡ うあ……………♡ ひ……………ぎ……………♡♡ 死にゆ……………♡ 死にゆ……………♡♡♡♡ おオ、っ♡♡♡」

「……………やりすぎた」

片方の乳だけを異様に膨らませ、ひしやげたカエルみたいな醜態を晒すゴルトを目にした瞬間に我に返った。……………うん、なんかこの頃性欲が爆発しすぎて理性がヤバイ。

いや待て。しかしだな、これは仕方がないんだ。周りの異性という異性が揃いも揃って粒ぞろいなんてレベルじゃないくらいに別嬪しかいないのが悪い。しかもひたすら煽るような身体付きしかしてないし格好もドスケベすぎるのがいけないんだ。そうだから、そうだ！

俺は悪くねえ！ 俺は悪くねえ！！

「ご主人様、相変わらず交尾の時は鬼畜」

「うおお!!」

なんてー人自問自答( )してたらいつの間にもやら復活してたイヴアールが俺の背にもたれかかってきてビビった。

普通に気配消すのやめろつつてんだルルオ!? あとおっぱいの存在感が凄いだよほんとにポインポインですよポインポイン!!

「……イヴ、ビックリするから気配消して近づくのやめてくれ」

「やだ」

「なんで!?!」

「ご主人様の驚いた顔好き。だからやめない」

「ええ……」

心臓に悪いんですがそれは……。あと耳元で囁くのもやめろ、まあたおちんちんイライラしちゃうでしょうが。

全く尽きる気配のない性欲に恐怖すら感じていると、イヴアールはおもむろにピクピク痙攣中のゴルトに摺り寄り、ジッと俺の精液で膨れた乳を見つめた。……何してんのこの子は。

「……♡ ——ゴルト」

「おおっ……♡ ——ふえへえ?!♡♡」

「もらっちゃうね♡♡」

「——?!♡ ……ふっぎゆいッ?!」

ぢゅじゅるるるっ♡♡ ちゅぼっちゅぼ♡ ずろろろろお♡♡ ぐくっぐきゅっ!

♡ ちゅぞぞぞぞぞおツ!! ♡♡♡

「ひぎゆいおツ?! な、にやに?! —うっおオ、ツ?♡♡♡ や、やべへツ♡♡ おっ

ばいしゆわにやいでえ!!♡♡♡ んのおおっ♡♡ ひよほ?♡♡ なくなりゆツ!!♡

♡♡ おっぱいなくなつちやああ♡♡♡ おオ、————ツ、♡♡♡♡♡」

「うわあ……」

あろうことか、沃震竜様は妹君の乳にたつぷり詰まった俺の精液と今も噴き出す母乳を纏めて吸い上げ始めてしまった。

「んぐっ♡ (っ)きゅ(っ)きゅ♡♡ ちゅーばちゅーつばあ♡ じゅぢゆるるるぞぞ

ぞぞおツ!!♡♡♡」

「ふぎやぎや?!♡♡ やめっ♡ もおにやい!! おっぱいからつぼれしゅ!! りやか

りやしゅうのやべへえ♡♡♡ うっオ、イツツグ!!!♡♡♡ ふぎっ♡♡ ひぎゆ!!

ふによお、ツ、♡♡♡♡♡」

ドラゴンだから吸引力も桁違いなのかなんなのか。イヴアールがエグい音を立ててゴルトの乳から吸い上げると、異質に膨らんでいた片乳はあつという間に元の大きさに萎んでいってしまった。

鬼畜なのはお前もじゃねーか。

「んぎゆ♡ (っ)きゅ(っ)きゅ♡♡ ちゅくちゅく♡♡♡」

「おお、ッ♡♡♡ お、っ?♡ お、いつく……♡♡♡ ふひよお……♡♡♡」  
 「ふっつきゅ♡♡♡ ——けぷっ♡ ……んぐおええええつつぷっ♡♡♡♡♡」  
 「……」

乳は均等の取れた美しさに戻ったものの、少しばかり落ち着きかけていたゴルトの身体はまたしても跳ね回り、肉付きの良い尻がベッドに叩きつけられる度に卑猥に潰れては形を取り戻すのを繰り返している。

彼女をそんな風に追いやった張本人はその様子を気にも留めず、こちらを向いたかと思えば生意気にも挑発するように微笑み、両手の人差し指で口を目いっぱい拡げ、えぐみと甘ったるさの入り混じったゲップをこれ見よがしに披露してくる有様だった。

「ご主人様も知ってると思うけど」

「……なんだよ」

そんな痴態極まりない姿を数瞬前に晒したとは、とても思えないような澄まし顔といつもの口調でイヴアールが語りかけてくる。

「私達竜人族は頑丈。ちよつとやそつとじや壊れたりしない。ほら、ゴルトのおまんこ……♡♡♡ 嬉しそうにヒクヒクしてる……♡♡♡」

「ひっ♡♡ やっ♡♡」

完全に脱力しきってベッドに身体を預けるゴルトに寄り添うように寝転ぶと、湯気が



立ちそうなくらいに雌臭いゴルトの秘唇を、その小さな手で拵げて俺に見せびらかしてくるイヴァール。

「だから、ね、ご主人様。あんなに酷いことされたのに、私もゴルトも悦んでたでしょう……♡」

「ふぎゅ……♡ ……♡ いひひ♡ 見て、お兄様♡ イヴのここ……♡♡ 期待してひくひく動いてるよ♡ やらしーね……♡♡」

「んっ♡ ゴルトのだって♡♡」

「あっ♡ やだっ……♡♡」

2匹の雌が互いの濡れそぼった秘所をぬちや♡ くちや……♡ と拵げ弄り合う。

空いた手でイヴァールはむっちりとした右脚を膝裏から抱え込み、ゴルトも同じようにむちぶにの左脚を抱え上げ、涎が垂れつばなしのぷっくり実った割れ目を惜しげもなくひけらかしてきた。

「……」

「ふっ♡ フーツ♡ また怖い顔してる……♡♡ ご主人様、遠慮なんていらぬ……♡♡」

「なあにお兄様あ♡ 私達のこと心配してくれてたのお?♡♡」

「そう。ご主人様は心配性、優しい……♡」

「あは♡ 大丈夫大丈夫♡ お兄様じゃ殺そうとしたって殺せないからあ……♡♡」

「また、ヤダ♡ とか、死ぬ♡ ってほざくかもしれないけど……♡♡」

「気にせず犯して♡ ぐちやぐちやにして♡♡ ゴルトとイヴのクソザコちびまんじや

絶対勝てないつよつよおちんぼ様でえ♡♡♡」

「死ぬほど犯して♡ ハメ潰して♡♡ 赤ちゃん袋膨らませて♡♡♡」

「お姉さまの時みたいにい……♡ 容赦なく孕ませて♡♡ ね、お兄様……?♡♡♡」

# #24 ちんまくてでつかい 6

「このクソガキどもが……」

「ひっ♡ やっ♡ 怖い♡ お顔怖いのヤダっ♡♡」

「おちんぼ凄いい……♡ バツキバキ♡ ほんとに死ぬかも……♡♡」

足元で片脚を掲げ持つて煽り散らかしてくるザコ雌2匹への怒りに呼応するように、これ以上ないくらいに勃起し血管の浮き出た肉槍を見せつける。

たつたそれだけで、先程まで生意気な態度で挑発していた白金竜様と沃震竜様は喜色満面の笑みで媚びへつらい、晒け合う恥部をくいっ♡ くいっ♡ と誘うように前後に揺すつて白濁とした粘着液を垂れ流し続けている。

「気にかけてやったのにバカにしゃがんで、覚悟できてんだろうな……ああ?」

「ふぎゅっ……♡ は、はい……♡ ゴルトのちびぎごよわよわおまんこ♡ 狭くて

窮屈かもしれません♡ もう孕む準備はできています♡ お兄様のお好きなように

ご使用ください……♡♡ 卵もすぐに出てきちゃ——いオ、おッ、?!♡♡♡♡

「あ……ゴルト……♡♡」

姉妹だからかなんなのか、姉と同じように情けないハメ乞いをするゴルト。

しかしその様子もまだ余裕を感じさせるものであり、苛立ちの募った俺は無遠慮に純白の角を引つ掴んで強引に立たせる。が、勢いがつきすぎたか力が有り余っているのか、ゴルトの両足はベッドに着くことなく宙吊り状態となつてしまつていた。

「ほっぎゅ?! ふおっぎゅ?!」 お、お兄様っ♡ 角♡ 角掴んじやらめれしゅっ♡  
♡ 力入んにやい♡ こんにちは雑にしちやらめにやのお♡♡ オっっ♡♡♡ ほ  
ぎゅっ♡♡♡

「煽つといて一丁前に反抗する気か?」

「んみいイッ?!?」

どうにも躰けのなつていないペットに溜息を吐きながら、右手は角を、左手は無駄に馬鹿デカい乳袋を驚掴みにして握り潰してやる。

「ふぎよおお?!」♡♡♡ まっへ♡ やめっ——ふひいッグ♡♡♡ オ、いつつぐッ!!  
お乳ちゅぶしやれてイギユッ!!♡♡♡ お許しッ♡♡ 生意気言つてごめんなしや  
いっ!!♡♡♡

「もう逆らわないな?」

「はひッ♡♡ もおしやりやいません……♡♡ まだおちんぼ様してもらつてないの  
に♡ こんにちはザゴメスでしゅみませえん……♡♡♡」

「んじや挿入れるか——」

「うおオ、っ?!?♡♡♡♡ ほっへえ……?!?♡♡♡♡」

ほんの少し翳られただけでアへ顔を晒し、マゾメスつぷりを発揮する妹君に少しばかり溜飲が下がる。

結局クソザコでしかない、目の前でぶらぶらと情けなくされるがままのゴルトの角を両手でそれぞれ掴みなおし、これまたアホみたいに血の滾った肉竿の上に乗つけてやると、間の抜けた声が室内に響いた。

「おおっ……?!? ——でっつか♡♡♡♡ ふお?♡♡ あっちゅ♡♡♡ おちんぽあつちゅ♡♡♡ お、お兄様……?!?♡♡ や、やっぱりおつきすぎましゅ……♡♡ おっばいまで届いちゃう♡♡♡ 子宮潰れちゃうっ♡♡♡ こ、こんにやの入んにやいい♡♡♡♡」

「あぁ?」

「ひっひっ♡♡♡♡ べんなしやい♡♡♡♡ でも無理!♡♡♡♡ これ無理でしゅ♡♡♡♡ 無理無理むーりっ♡♡♡♡ 絶対死んじや——うおオ、っ?!?♡♡♡♡」

「ごしゅっ!♡♡♡♡ ごりゅっぐりゅっ♡♡♡♡ ちゅっこちゅっこ♡♡♡♡ ぬちやつちゅっ♡♡♡♡ ごりゅっ♡♡♡♡ ごりゅりゅんっ♡♡♡♡」

「ふおおっ♡♡♡♡ おっ♡♡♡♡ お兄様!♡♡♡♡ 身体揺すらにやいでっ♡♡♡♡ オ、ッ、♡♡♡♡」

おオ、っ♡♡♡ ちゅぶれゆ♡ グリちゃん削れりゅッ!!♡♡♡

陰莖の付け根にゴルトを乗せ、まるで物差しのようにマゾメスのイカ腹に熱した鉄棒のようなそれを押し付け、ここまでブチ抜くんだぞとでも言うように威圧してやる。

すると案の定、すぐに日和ってまた逆らいだしたザコマゾの角をハンドルのように扱って肉竿に本気汁を塗りたくっていく。

「逆らわないって言ったよな?」

「ふぎゆう……………♡♡♡ しゆ、しゆみましえ……………♡ オッ♡ れもこんにやのお……………♡

♡ 死んじやう♡ 絶対死んじや……………うう……………???

びくっ……………♡ ぶくっ♡ ぶるぶりゆ……………♡♡♡

「え……………? あ、え……………? あっ、やっ♡ やだ♡ うそうそうそ♡♡♡」

ぶくう……………♡ びく♡ ぶちっ♡

「おっおっおオ、くくくくくッ♡♡♡♡♡ で、でひやう……………♡ らめッ!♡♡♡ 今出ぢやあ……………オッ!?!♡♡♡ どりゅっ♡♡♡ どりゅ出るでゆう!!!♡♡♡♡♡」

ぶっ————ちゅんっっ♡♡♡♡♡

「————ほぎよおッ、ッ、ッ、ッ!?!?!♡♡♡♡♡」

「……………ゴルト」

「ひっ♡♡♡ ひぎゅ!!♡♡♡ ふぎらッ♡♡♡ —————ひゃ、ひゃい……………♡♡♡ で、

出ちやいまちだあ……♡♡♡ 卵……♡ 排卵アグメ決めまちだア……♡♡♡」  
 嫌だなんだと散々駄々をこねていたくせに、目の前で勝手に排卵してアクメを貪り、  
 背骨が折れそうな勢いでエビ反りに仰け反って母乳と潮を噴き出しまくるゴルト。眼  
 前で逆さに晒された芸術品のような美貌は快楽中毒者のように陶醉しきり、大きな瞳は  
 裏返つて白目を剥き、蛇のような長い舌はだらしなくまろび出て先端がビクついてい  
 る。

「お兄様……♡ おにいしやまあ……♡♡♡ いませつくしゆ……♡ こーびしたら赤  
 ちやんできましゆ♡♡♡ れもゆるじでえ♡♡♡ おつきすぎましゆ……♡♡♡ おちん  
 ぼ様凄すぎゆのお♡♡♡ こ、こんにやのお……♡♡♡ 妊娠する前に死んじやいましゆ  
 ♡♡♡ らかりやあ——ふつぐゴお、オ、ツ、ツ、♡♡♡♡♡♡♡♡♡」  
 みぢミチミヂイ!! むりゆりゆりゆつ♡ ♫ ぐぼ!♡ ♫ がぼつ!♡ ♫ ぐつちやごつ  
 ちゆツ!!♡♡ ♫ りりゆりゆつ!! ♫ ぐどつつつちゆぢゆんツ、ツ、♡!!♡♡♡♡♡♡♡♡♡

「——うぴっ?? おおっ……?? ——?♡ ——??」

「手間かけさせやがって……孕み袋が排卵までしといて今更何言つてんだ、ああ?」  
 小さく軽いゴルトの身体にはどう考えても不釣り合いな剛直で、彼女の温かく柔つこ  
 い体内を激情に委ねるがままに、情け容赦なく蹂躪していく感覚が堪らない。

内臓器を無理矢理押し退け一瞬でデカ長乳の付け根まで長大に過ぎる異物が侵入し

たためか、文字通り串刺し状態で全身を弛緩させ、手足も尻尾も力なく垂れ下がってしまっている。気を失ったらしい。

「ふぎつ……うつオ、つ……おつ、ほつ？、あおお……?!」

「ああ……ゴルト……ゴルトがあ……」

「イヴ、次はお前がこうなるんだからな」

「ひゅぐ……おオ、ツ、は、はい……」

今しがたまでへたり込み、ゴルトの黴られように見惚けていたイヴアールに釘をさしておく、昂り熱の籠った小麦色の柔肌が震え、ぶじゅつと見せびらかすように迎え腰で突き出して潮を噴いた。

そんなイヴアールの痴態で更に硬度を増した極悪カリ高ちんぼは、中で触手でも飼っているのかと思える程にぐちゅぬちゅあ……と腔壁に舐られ、絡み、纏わりついては射精をおねだりしてくる。まるで温泉にでも浸かっているかのような量の熱い腔液と体温も相俟って、ネラと同じように長持ちはしなさそうだった。

「ぐあつ……失神しといてこれか、このメスガキ……」

気を失ったメスガキ相手に一方的にイカされるのも癪なので、気付けの一発をお見舞いしてやる為にゆつくりと肉棒を引き抜く。

ぐちゅ、ずるつぬろろお……ぶちゅ、じゅるるるう







ッ♡♡♡ も、むりい……♡♡♡ おに、じやまあ……♡♡♡ お腹おつつも……♡♡♡  
 死ぬ……♡♡♡ しきゆ♡ おにやか破裂しゆゆう……♡♡♡ ぐおオッ♡♡♡ い、  
 イヴ……たしゆ♡♡♡ たしゆけへえ……♡♡♡ ぎーめんギッツヅィ……♡♡♡  
 ほひよおお???

「あ……あ……♡♡♡」

「チツ……」

「ほっぎやぎや?!?!」

「ひっ♡♡♡」

——ぐりゆりゆッ♡♡♡ ずにゆるるんツツ!! ……ぶびびっ♡♡♡ ぶつびゆびゆつ

ばッ♡♡♡

どうにも堪え性のないゴルトからデカマラを強引に引っこ抜く。やめろと言うから抜こうとしたら必死に吸い付いて離そうとしないもんだから余計にチンイラが募るがまあいい、まだもう1匹いるしな。

臨月のように膨張した腹から股へ大量の極太ザーメンをぶびっ♡♡♡ ぶびゆびゆッ♡♡♡ と下品極まりない音を立て、息も絶え絶えに角を掴まれ宙吊り状態の妹君を、放心状態のイヴアールに見せつけてやる。

「オッ♡♡♡……♡♡♡ うおオッ♡♡♡……♡♡♡ ——ほっひよ!?!♡♡♡ ふぎや??♡♡♡

♡ ほんぎやあツ!!?!♡♡♡♡ ——— ♪、ぷぢゆつだあ……♡♡♡♡ ごれ……♡  
いまあ……♡♡♡♡ じえつだいじゆせいしひや……♡♡♡♡ お、おにいしやまのあが  
ぢやん……♡♡♡♡ はりやみまじだあ……♡♡♡♡ あ、あいあとごじやいましゆ……♡♡♡♡ おにい  
しやまあ……♡♡♡♡

「——次はお前の番だな、イヴァール」

「ひっ♡ ひっ♡ は、はい……ご主人様あ……♡♡♡♡」

## #25 ちんまくてでっかい 7

「おいゴルト。せつかく詰めてやったんだから零すなよ」

「うっおオ……イツぎゅ♡♡♡ —— ふへ……?? ……はへえ♡♡」

「……はあ。後でもつかい躡けなおしだな」

「——ぶぎゅっ!?!♡♡♡」

べちやつ♡ と粘着質な音を立て、股からひり出し続けて広がった精液溜りにアホほど情けない鳴き声とともに落下する妹君。小柄な体に比して異様に肥大化し重量を増した腹から落ちたため、「のおオ、ツ、?!♡♡♡ でりゅっ!! ながみでちゃう、オ、ツ♡♡♡♡♡」と、これまた無様に雌射精してはビクつき羽と尻尾が暴れ回っている。愉悦気味に見下ろし眺めていれば、のたうつ尻尾がせつつくように脚を叩いてきてうっとおしい。

「……よ、っつと」

「ほおおっ……?? —— んっの、ぎゅみいッ、ツ、?!?!?♡♡♡♡♡」

幾らか頭に来たので、相変わらず跳ね回る尻尾の付け根辺りを雑に踏み抜いてやる

と、どこから出してるんだと思うような悲鳴が足元から発せられた。ついでの踏まれた衝撃で全身が力んだのか、これまた派手に腹に溜まった精液を噴射する勢いで吐き出している。

「ふんぎユのおオ、っ、ッ、!!? うっぎー! ひっぎゆい?! やめでっ!♡ しょご弱いっ♡♡ しっぽやめでえ、ッ、♡♡♡」

「こんなところが弱点なのか。やっぱ付け根の辺りって神経多いからかな」

「ひゅぎゅううっ♡♡♡ おーーっ、!!♡♡ お、おにいしゃまつ!! なんでグリグリっ!?!♡♡♡ ふっほおオ、ッ?! ひっひっ♡♡ のおオ……っ♡♡♡ ——  
——んぎやぎやあつ、ッ、!!?!♡♡♡♡♡」

うっ伏せで転がるメスガキドラゴン様の尾の根元の上、丁度背中とそこから伸びている尻尾の境目——人でいうところの尾骨よりちよい上辺りか——を殊更に力を籠め、無理矢理ほぐすように踏み潰してやる。まるで陸に打ち上げられた魚のように全身が跳ね回り鳴き喚く絶対的強者の姿に、雄としての征服欲がこの上なく満たされていく。

「ほっひゅ……♡♡♡ うおオ、くくく……♡♡♡ ひぎゆ……♡♡♡ ほっへえ……♡♡♡」

「殆どひり出しやがって……変なところも力凄いな——ん?」

やっぱり色々と規格外なのを見ると、俺には害が及ばないよう実は気を使っていたり

するんだらうか。前にもゴルトの馬鹿力でブツ飛んできた無駄にデカイ門みたいな扉を、ノールックで弾き飛ばしたネラの尻尾なんてのもあったしな。さつき脚をぺちぺちしてきた眼下で伸びてピクピクピクピクついてる妹君の尻尾なんかも、気にせず振り回せば人の其れなんざ余裕で挽げる——どころか当たった部分が消えてなくなったりしてそう。

……………で、だ。

「お前は何をやっているんだ」

「ご主人様の精液集めてる。もったいない」

「ええ……………」

いつぞやで見た、複数のデカイシャボン玉みたいなのに俺の精液が包まれてフヨフヨと宙を漂っている。

なんやねんこの光景は……………。

「理由を聞きたいような聞きたくないような……………いや知りたかったは知りたかったんやけども」

「ん。ご主人様の精液は魔力と生命力の塊。凄い力で溢れてる。エリクサー並」

「うせやろ……………」

なんだらう、伝説級の霊薬に土下座して謝りたくなるようなこと言うのやめてもらっ

ていいですか？

「なんか随分ケロツとしてらっしゃいますね沃震竜様……」

「今後の為にもストツクはあるに越したことはない。またクオーツに冷凍保存してもらおう。それに、性欲も飽和が過ぎると一周回って冷静になるのかも。不思議」

「アツソツスカ」

「あと」

「？」

冷凍保存までできるとか魔法何でもアリやなホンマ。

なんて思っていたら、イヴァールが珍しく非難するような目つきを向けて来た。珍しく饒舌だと感じたが、何時もは気だるげな垂れ気味の瞳が少しばかり吊り上がっている。

あれ、もしかして怒ってらっしゃる？

「……真名」

「へ？」

「ご主人様に二つ名の方を呼ばれるのは嫌。しかも様付けだなんて、もつと嫌」

「——ああ、そういう……悪かったよ、イヴァール」

「ダメ。許さない」



「うおおっ!!」

妙な所で怒るもんだなと内心苦笑していると、瞬きもせぬ内にイヴアールに組み伏せられてしまった。

「……イヴアール、ご主人様にするこじやないよな?」

「……………♡♡♡」

力で逆らおうと無駄にも程があるので、少しばかり怒気を含ませながら睨んでやると、嬉しそうに腰をくねらせて竿の付け根にぐちゃぐちゃの雌穴を擦り付けてくる。

「ほっ……………♡ おっほ……………♡♡」

「ザコメスが主の身体使つてオナニーか、いい度胸だな」

「オッ!!♡♡♡ ……くっふ♡ ね、ご主人様……………♡♡」

「媚びないでさっさと排卵しろ、孕みたいんだろ?」

「……………も、もうしてる♡♡♡」

「……………は?」

いきなり何を言い出すのかと思えば、へこらせていた腰を落ち着け、愛おしそうに胎を撫でてニタつくイヴアール。僅かに腰をずらしてパンパンに膨れた金玉の上に労わるように尻たぶを乗せ、人としては明らかに異常なサイズの肉槍を、まるで物差しのようにぶに腹に添えて撫で擦ってくる。

「お乳オナホをほじくり姦された時に1個♡ ゴルトが檻樓(ボロ)切れみたいに犯し潰されてる時にも1個……♡♡」

「……」

「ほおっ?♡ ちんぽ♡♡ すごい♡ ご主人様のおちんぽバツキバキ♡♡ 匂いキツツ♡♡♡ 犯して♡ ご主人様♡♡ 犯し潰してっ♡♡♡♡ ネラやゴルトみたい♡♡♡ イヴも可愛がつて♡ 好き♡♡ イヴでもおちんぽ勃起してくれるご主人様が大好き♡♡♡ 愛していま——おっ? ……オッ♡♡ ふっほ??♡♡ おくくくっつっ??♡♡♡ ……うっオ、でりゅっ、っ、♡♡♡♡ 卵プチュる♡♡♡♡」

びぐっ♡♡ ぶるっぷりゅっ♡♡♡ ぴゅくっぴく♡♡ ぷっ——りゅりゅんっ♡♡♡

「ふっほお!♡♡♡♡ うおオ、っ♡♡♡ くくくいつギユツ♡♡♡ いきゅいキユツッ♡♡!! ふ——っ♡♡♡ ンフ——っ♡♡♡ ツ♡♡♡」

「………イヴ」

「は、はひっ♡♡ 今増えまぢだ……♡♡♡ 孕ませてもらえるって……♡♡♡ 卵巣が喜んで……です♡♡ ひっ♡♡ やっ♡♡ こわいっ♡♡♡ ご主人様のお顔こわいのお♡♡♡♡ あっ——オ、オッつきゅんっ、?!?!?♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ ふっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ ふっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ い、いまあ

……♡♡ 子宮♡ 赤ちゃん孕み袋に……♡♡ クソザコ卵子4つあります♡♡  
 受精♡♡ 着床待ちしてま……しゅ??」

コイツは煽りの天才だな。どうすれば雄をイラつかせられるかが本能的にわかつて  
 いるらしい。

たつぷりと肉の詰まった触り心地抜群の腰を引つ掴み、萎える気配など微塵もないバ  
 ケモンみたいな息子に狙いを定める。

「ご、ご主人様?♡♡ こ、これ……♡♡ ふっ♡♡ ふっ♡♡ 串刺し♡♡ このまま下ろさ  
 れたらあ……♡♡♡♡ し、死ぬ♡♡ 胎が壊れちゃ——うっ??」

ぐどつちゅツツゝ!! ボゴオ♡♡ ——つごぢゅぢゅんゝツゝツゝゝ  
 !!!!

「……………つひゅ??」

ミヂツ♡ ぎにゅ♡?♡?♡?♡ むりゆりゆりゆう……♡♡ ぐぼっ♡ ぼっごおっ♡♡♡

既に限界まで降り切っていたらしい子宮をそのままぶち抜き、突き破るんじゃないか  
 という勢いで腹に浮き出た己の分身を確認した時点でまだ半分。そこから更に無理矢  
 理押し込んで残り半分を?み込ませたせいとか、ちんぽの形がくつきり分かりそうなくら  
 いにボゴオ♡ とイヴの正中線上を我が物顔で蹂躪する光景に、背筋を電流のような快  
 感が駆け上がった。



「突き上げる度に腹の形がドゴオ」と音を立てて盛り上げられては歪みまくり、跳ね上がった顎に先端までピン立ちした両脚、羽、尻尾。背骨が折れそうなくらいにエビ反りにへし曲げられた先の表情は伺えないが、竜人族特有の蛇のように長い舌が管を巻いて暴れ回っている様が余計に興奮を煽ってくる。

「気持ち良いかって聞いてんだろうが」

ドゴツ！　　ぐボツがぼつ！　　ぼちゅぢゅ！！　　ボツゴオ！！　　♡♡♡

「ふんぎやああアツッ！！?!?!　　♡♡♡♡♡♡♡♡　　やべへっ！！　　ぎっ♡♡　　ぎぼぢいいれしゅッ

♡♡♡♡♡　　よしゅぎれちにゅっッ、♡♡♡♡♡　　死ぬしにゅぢにゅうっ♡♡　　もっ

おゆるしっ♡♡　　ゆるじでッ、♡♡♡♡♡　　もうぼちゅぼちゅ禁止ッ!!!♡♡♡♡♡　　卵が

ちゅぶれぢやいましゅ♡♡♡♡♡　　無理っ♡　　無理無理むーりーりっ♡♡♡♡♡♡♡♡

「……はあ、ちよつと黙ってる」

「ほっへ……?!?!　　——　　ぐっ………ええ?!?!♡♡♡♡♡」

想像以上に喚き散らすのが頭に響くので、馬乗りには仰け反るイヴアールを押し倒して種付けプレスの体勢でがっちりホールドし、子ども特有の短い首を思いつきり締め上げてやる。

「いッ………いしゅじ、しま………♡♡♡♡♡　　にや、んで………♡　　ぢがら、ぢゅよいい

………♡♡♡



♡♡♡♡♡

「ひっー♡ ひっ♡♡」

「ごちゅっ!! ほっぢゅほりゆりゆっ♡♡♡♡♡ ごっぢゃぼっぢゃッ! ずどっがぼっ♡♡♡♡♡ どぢゅぼぢゅごりゆぼぢゃ!!!♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

「お前が散々煽ったんだろぅがッ!! 責任もって孕めオラア!!!」

「んぎゃぎゃ?!?!♡♡♡♡♡ ふっぎよほっぎよオツッ♡♡♡♡♡ しゅびばぜっ♡♡♡

はりやむ!♡♡♡♡♡ ごしゅじんしやまのあがぢゃんほぢいッ♡♡♡♡♡ ら、りやかりや

子宮によにやかかド突きまわしゆの禁止!!♡♡♡ ぷちゅった卵怖がつてましゅっ♡♡♡♡

よわよわイヴのおまんこじやつよっよおちんぼ様から守れないのおっ♡♡♡♡♡

「黙って明け渡せこのマゾメスがあ!!!」

「ふっぎゅおおオっ♡♡♡♡♡ ツっ♡♡♡♡♡ ツっ♡♡♡♡♡ ツっ♡♡♡♡♡ ツっ♡♡♡♡♡ ツっ♡♡♡♡♡

ぶりゅっ♡♡♡♡♡ どびゅっくぼっびゅ!!! のちゅっ♡♡♡♡♡ ごっぼっびゅぼっびゅ

!!!! びゅぐっどぐびゅっ♡♡♡♡♡ どりゆりゆりゆりゅんッ♡♡♡♡♡ ツっ♡♡♡♡♡ ツっ♡♡♡♡♡

「うっぎいおほおおっ♡♡♡♡♡ ツっ??♡♡♡♡♡ あぎやッ♡♡♡♡♡ うっお出しゅぎっ♡♡♡

うっオっ♡ ふぐらみゅッ♡♡♡♡♡ おっばいまんこと全然違う♡♡♡♡♡ せーし♡♡♡

ぎーめん♡♡♡♡♡ 孕ましえ汁う♡♡♡♡♡ オッいっぎゅイギユいぐいっつっぎゅん!!!

♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ ンいっつっつグッ!!♡♡♡♡♡ ぐっほおオっ♡♡♡♡♡ っ♡♡♡♡♡ ほっへ♡♡♡♡♡

ンフー~~~~ツ♡♡♡♡♡

「ゴルト、イヴの卵巣押してやれ」

「ひっ!?!♡♡」

「えっ、えっ♡ あ、あのっ♡♡ イヴ、もうほんとにぐちやぐちやで……♡ これ以上

はほんとに……」

「ご、ゴルト……♡」

「あつそ。じゃあもうゴルトは犯さないから、さつき孕ませたし」

「押しまーす♡♡♡♡♡」

「えっ!?! ちよっ、ま、待って……♡♡ ご、ゴルト、嘘だよね……?♡♡ あっ……♡♡

ひっ♡♡ ひっ♡♡ ほ、ほんとにやめてっ♡♡♡♡ まってまってまって♡♡♡ や

めっ!?!♡♡ な、なんで魔力込めて……♡♡ ひっ?!♡♡♡♡ 無理! もう無理無理むっ——

——り???)

「はいドーン♡♡♡♡♡」

「おオ~~~~ツ~~~~ツ~~~~ツ~~~~♡♡♡♡♡」

!?!?!

——





「ほぎやああああアっ  
?!?!?  
♡  
♡  
♡  
♡  
♡  
♡  
———  
おイツツツグツッ  
ッ  
♡  
♡  
♡  
♡

# #26 Dirty deeds done dirt cheap

「やはり聞き間違いとしか思えません。もう一度仰つていただけませんか王よ」

「お、落ち着け、頼むから落ち着いてくれローゼ。目がヤバい」

「僕たちが今日この日をどれだけ待ち侘びたか、まさかわからないとは言わせないよ——?」

「だ、だから申し訳ないと何度も——」

「いくら竜人王といえどわたくし達3人が本気で挑めば勝負はわかりませんわよふふふふふふふフフフフフ」

「ひいっ!」

「どうしてこうなった……」

ゴルトとイヴにしこたま種を仕込みまくった翌日。

ゴルトの寝室を片すのにもやはり匂いで参ってしまふ召使いさん達の代わりに、イヴアールを除く四元竜3人が例のシャボン玉魔法で部屋中に散らばった俺の精液を回収

した後、クオーツアイトさんが凍らせてどこかに持って行ってしまった。

時間の経った精液なんて何に使うのかとローゼフラムさんに尋ねると、熱に浮かされたような蕩げ顔で、「何にでも使えますので。……ふへっ♡」とニッコリ素敵な笑顔で答えてくれた。

いやナニに使ってんだよマジで怖いです。

そして冒頭。時刻は昼。

散々「そ〜れ! ハッスル ハッスル!」しまくった為腹の減りまくっていた俺は、示し合わせていたかのように用意されたご馳走をたらふくいただき大満足だった。何やら性欲だけでなく食欲もとんでもないことになっているような気がするが、竜人族の食べる量とは全くもって比べ物にならないので感覚がおかしくなりそうだ。

ちなみに料理と給仕係の竜人族さん達は俺ががつつき食いまくっているのを見ただけでへブン状態になって仕事にならなくなるので、眺めていたのに直視できないとかいうジレンマに難儀しているらしい。どういうことなの……。

——とまあ、玉座に詰め寄る光の三原色竜様方の圧倒的威圧感に現実逃避していたのだがどうにも冗談じゃ済まされなさそうな雰囲気です正直チビりそう。

ネラとゴルトは仲良く俺の胸元にしがみついて震えてるし、イヴアールはしれつと便乗して「こわいよーこわいよー」とか棒読みも甚だしく背中に抱きついて来てて、恐ろ

しいやら柔っこいやらオーラで肌が切り裂かれそうやら良い匂いやらで頭がバグっちゃうので勘弁してもらえませんかね……。

「し、仕方ないでしょ急に向こうから指示がきたんだもの！」

「それは……妹君の言う通りですが……」

「万歩譲って王と妹君はともかくだね」

「その土竜は納得いきませんわ」

「正直すまんかった」

『は?』

「火に油を注ぐんじゃありません」

「ごめんなさい」

相つ変わらずマイペースな沃震竜様に軽く拳骨を喰らわし手が痛つてえ！ とかなんとかなりつつ、とにかく状況を整理しよう。これじゃあ埒が明かん。3人の怒りが増すことにプレッシャーが高まり過ぎて心臓と玉がヒュンヒュンしっぱなしなんや誰か助けて。

「と、とりあえず状況が呑み込めてないんだがローゼさん、今は何がどういうんだ？」

「……そうですね、まず主様に詳しくご説明するべきでした。申し訳ありません」

俺から質問を投げかけたのが良かったのか、幾分か冷静さを取り戻してくれたローゼ

さんがオーラを解いて一息ついてくれた。それに倣ってネフライトさんとクオーツさんも渋々と言った風に肩の力を抜き、逆立っていた羽と尻尾が大人しくなる。

とりあえず助かった……竜人族と比べたら単細胞生物レベルの俺にはガチギレモードな3人の目の前でじつとしてるとかS A N 値的に無理ゲーすぎる。

「——本日未明、オーク族・ゴブリン族・コボルト族の3大種族、その各々方から早文が届きました。どれも最近発見されたミスリル鉱山の所有権をそれぞれが主張するもので、我ら中小の種族に立場を明らかにするようにとのことです」

「うーんこの……」

地球の石油利権とかと全く同じで草も生えない。ここ異世界とちゃうん……？ イメージ崩れるでホンマ。

んやまあ現在進行形でハイパーウルトラアルティメットドチャシコ美人上位種相手にハーレム状態の俺が言えた義理では全くなかったわ。まさに夢のヒモ生活！ の筈なんだけど一々妙に心労が募るイベントが多発するのは仕様なんですかね……さつきもおおにんにん縮みあがったし……。

「そ、それで皆さんの対応は……？」

「無論、先方に向いて立場を表明いたします。ただあの方々は、その……私達のような種族に対して個別に対応などしてはくたさらないので……。同じ立場の他種族の者

と合流し、先方の指定した日時、場所に赴くこととなります」  
「ああ……そういう……」

今度は下請けにアホほど横柄な親会社みたいな話だな……。世界が違っても上下関係というか、パワーバランスとかでこういうのはなくなったりはしないらしい。種族毎に差異があればこうなるのも仕方ないか。

「その、同じ立場というのは？」

「僕たち竜人族のように、力は強いが容姿に優れず数も少なく、特に繁殖力が乏しい種族……といったところかな。魔族、エルフ、天使族、吸血種が代表的だね。竜人族も加えて5部族と呼んだりするよ」

「それ以外にも更に小さな種族は種々様々にあります。が勢力としては小さすぎるので、わたくしたちのような中規模の勢力に属しているのが普通です。中には外界との関りを完全に絶ち、独自に生き抜いているドワーフや妖精種のような者たちもいたりしますわ。極少数ではありますがすけれど」

おー、異世界物では聞き慣れた種族が次々出てきたな。

……いやしつかし、今拳がった”中規模”の皆さんは一大勢力を築いてたりするのが普通だったりするもんだが、つくづく妙な価値観の世界だよなココ。おかげで俺は美味しい思いができてるんですけども。

「それで、日時の指定はもう？」

「今日です」

「ん？」

「本日夕刻、陽が沈み始める頃だそうだ」

「えっ、朝通知が来たんじゃ……」

「いつものことですよ」

「あつ、ふーん……」

「これはひどい。」

「普段なら3人とも喜んで向かってくれるんじやが」

「今はお兄様がいるもんねー♡」

「不憫」

「——イヴアール」

「今ここで」

「縊り殺して差し上げましょうか？」

「ごめんで」

「煽るんやめーや」

いやマジでやめてもろてまたプレッシャーが、圧ががが——。



「——そ、そもそも！ 今から行って間に合うもんなの？」

「あ、はい、それはもう。例え無理でも何とかします」

「むしろ今回は楽な方さ」

「深夜に急な呼び出しとかもあつたりしますわね。飛び起きて飛んでいきますわ」

「発想が社畜過ぎる……」

「しゃちく……？」

「あ、いや、こつちの話。皆は知らなくて良いよマジで」

「というか知ってほしくない。異世界まで来てあの概念に振り回されるとかシャレにならないぞ。……もう振り回されてる気が多分にせんでもないが気のせいにしてこう、そうしよう。」

「ていうか個体値高すぎて全然苦にしてなさそうなのがヤバい。やっぱ色々オカシイてこの娘ら。」

「あー……立場的にはどうする予定で？」

「いつも通り日和見じゃろうな」

「さんせー」

「そうですね、それがよろしいかと存じます」

「僕らが下手に首突っ込んでもね」

「碌なことになりませんわ」

「藪蛇」

「お、おう……」

思ったよりあつさりというかなんとというか……。

「そんな軽い感じで良いんすね……」

「妾ら5部族は、確かに容姿はアレじやし数も少ないが力だけは他を圧倒しておるでな」  
「他の連中も中々のモンなんだよー、敵に回したくはないよね。特に天使族。アイツらはヤバイ」

「そういう訳ですので、基本的に5部族はどの勢力にも過度に与するようなことはいたしません」

「パワーバランスが狂ってしまっからね。ま、古来から続く暗黙の了解というやつさ」

「へえ、仲の良し悪しとかは？」

「もちろんございますわ。我らはエルフと比較的関りが深く、魔族と吸血種は元は同じ勢力として扱われておりました。天使族は……ええと、何と言いましょか……」

「唯我独尊。猪突猛進。下手にかかわらない方が良い」

「え、なに、天使ってそんなヤバイ連中なの？」

「そうさなあ……あ奴等には独自の教義というか、信仰のようなモノがあるんじゃないか」

……」

「かなーり盲目盲心なんだよねー。教えに反するとかなんとか言い出すと手が付けられなくなるっていうか」

「普段は別に悪い連中でもないんだ。ただ、何かしらの琴線に触れると、ね」

「——うん、関わりたくないようにしようそうしよう」

触らぬ神に何とやらだ。

というか——、

「5部族がそんな力持つてるなら、結託して3大種族降して従えさせれば良いんじゃない？」  
竜人族だけでも末端ですら山の1つや2つ軽く消し飛ばせるらしいし。その竜人族と互角らしい種族が4つもあるなら余裕な気がするんだけど。

俺のふとした疑問を投げかけられた6人は、信じられないモノを見るような目で俺を見て絶句していた。え、あれ？もしかしてヤバいこと言った？また俺なんかやつちやいました？

「そ、そんなこと、考えたこともありませんでした……いやでも……ううん……」

「お兄様……鬼畜なのはベッドの上だけじゃなかったんだね……」

「………考えてみれば、我らだけでも3大種の一角くらいは滅せられる、か……？」

「い、いや、仮に可能だとして、そんなことするメリットがあるのかい？4部族との結

託……盟でも結ぶと？ エルフは百歩譲つて有りだとしても、他は不可能じゃないか

……？」

「そ、そうですね。魔族と吸血種どもとは元より折り合いが悪いですし……。これまでだって、3大種族の方々からは僅かばかりでも精を分けていただけでしたのですから――

――」

「それだって、まず無意味だった。でも今は――」

『あ』

「… Oh」

いやちよつと待つて。これもしかせんでも星〇一先生のショートショートであつた話みたいな流れになつてない？ 大筋はかなり違うけど、劣等感で下に付くのが当たり前だつた潜在的強者に頂点に君臨できる可能性を示唆してしまつた気が……。

そもそもこんなだけ力持つてんのに一切その可能性に思いも寄らんとかおかしくない？ なんか遺伝的な欠落とかございません？ 最早作為的なレベルでしょこれ。……単純に人間はすぐそういう発想に至るのがヤバいつつだけの可能性も微レ存？

あとネラまたのじゃキャラボロ出てんぞ。

「……………」と、とにかく、この話は一旦無しじゃ。何より今は主様の存在を隠さねば。バレたらそれこそ他の4部族、下手をすれば3大種族も挙つて襲つてきかねん」

「ヒエツ」

「と、いう訳でローゼ、ネフ、クオーツ？ よろしくね♡」

「お、お待ちください！ それとこれは話が別です！」

「そうだよ！ ようやつと僕たちの番が来たのにお預けだなんて！」

「そうですわ！ やはり納得できませんの！」

「しかしな……。現状では3大種族に対して四元竜以下の者を行かせるわけにもいきま  
い」

「うっ……」

「そうだよー。そ・れ・に・い♡ 私とお姉さまとイヴはもう孕まされちゃったから身重だ

し♡♡♡」

「くうっ……」

「胎に子がいると実力者にはすぐわかる」

「え、そうなの？」

「魔力の源は一個体につき1つ。私は……お腹にいっぱい光がある……♡♡」

「」

「う、羨ましますすぎますわ！」

「またもやキャンキャン騒ぎ出した3人娘の抗議も虚しく、せっかくの美人も台無しな

くらいに号泣しながら各々一条の光となってカツ飛んで行った。

……うん、戻ってきたらいの一番にお相手して差し上げようしよう。  
なんかもう不憫過ぎる……。

# キャラクターとか紹介

ヒモ男

一応主人公。

転生した途端に即死した後ネラに助けられ、「その時不思議なことが起こった！」現象でマジカルちゃんぽを手に入れ異世界の雌に対して特攻持ちに。ベッドヤクザ。

種族関係なくこの世界の雄の特徴として、数が少ない（大体♂・♀||:i:0000）、身体付きが子どもの段階で成長が止まる（そのまま年老いていく）、性欲も生殖能力も低いとかいう謎異世界なので、相対的にとんでもなく稀有な存在。

竜人族に保護されハーレムを満喫する傍らどういふ訳か気苦労も絶えない。

竜人族

異世界における中規模勢力である5部族の一つ。それぞれが雄々しい角、羽、尻尾を生やし、瞳に舌も爬虫類のそれと良く似ている。

前述の雄の性欲を少しでも沸き立たせる為の“ファッション”として、現在異世界で

流行している服とも呼べんような当て布を要所要所に貼っ付けただけの恰好をしており、とにかく煽情的。

地球人から見れば揃いも揃って傾国レベルの美女しかいないが、残念ながらこの世界では美醜が逆転しているので悲惨なことになっている。その為か普段は顔を隠す二カブに似た顔布を常時身に着けるくらいには劣等感が骨の髄まで沁み込んでおり、長年の慣習もあつて後述の3大種族相手には全く頭が上がらず、都合良く雑に扱われがち。

5部族の例に漏れず数は少ないが個体能力が非常に高く長命で、末端ですら山の1つや2つ軽く消し飛ばせる。

雄の個体は存在が確認できなくなつて久しく、このままでは自然淘汰の危機に晒されていた。

### ネラ・アルジエント

通名を黒銀竜。竜人族を統べるりゅうじんおーさま800さい。黒っぽい銀の長髪が美しい褐色の幼女で種族内では珍しくちっぱい。妹と比べるとあまりに貧相な胸を気にしている。

普段はのじゃキャラだがこれは彼女なりに威厳を出そうとした結果であり、すぐボロが出る。周りはそんなもん承知の上で生暖かく見守つていたりする。



性格はネガティブ気味ですぐ泣く、落ち込むと隅っこに縮こまって床をイジイジしだすなど威厳の欠片もないが強さは異世界内でもトップクラスで、後述の四元竜クラスでは纏めてかからないと相手にならないレベル。

シユネーヴアイス・ゴルト

通名を白金竜。通称は妹君でネラの妹。プラチナブロンドの長髪に背丈は姉と同じく幼女のそれだがとんでもない長乳の持ち主で肌も驚きの白さで光を反射する。どうなってるんだそれ。

小生意気で事あるごとに姉であるネラに食って掛かるがただの照れ隠しでお姉ちゃん大好きっ子。力も姉には及ばず、「勝ってるのは胸だけ」と気にしている。しかしながらネラとタイムマン張れるのはゴルトか他の5部族の長くらいしかいないので十分強い。メスガキらしくヒモ男を「ぎーこぎーこお♡」と煽ったりもするが、実は竜人族内では比較的常識がある方で意外としっかりしている。

ローゼフラム

通名を紅炎竜。四元竜の一角。博識で“普段は”落ち着いており口調も丁寧な知的美人。竜人族の宰相的ポジション。

燃えるような真紅の長髪に抜群のプロポーシオンを誇りヒモ男曰く、「丸の内では敏腕秘書とかやってそう。絶対眼鏡とタイトなパンツスーツが似合う」とのこと。

ネラとゴルトが幼い見た目をしているので、必然的に外交などの対応で他種族と関わることが多く、苦勞人。根が真面目なので吹っ切れると反動が凄い。実は可愛いものが好き。

異性関係は外交もあつてか非モテ種族の竜人族内でも特に壊滅的で、武勇伝○に事欠かない。

### ネフライト

通名を飄翠竜。四元竜の一角。吹き抜ける風のように爽やかなエメラルドグリーン  
の髪を短めに纏めた、王子様系イケメンビューティ。一人称も僕で、口調もボーイッ  
シュ。しかし引つ込むところは引つ込んで出るところはバツチリ出てるボンキュッポ  
ン（死語）

普段は飄々としているが実は仲間意識が非常に強く、ヒモ男が現れた時は人一倍警戒  
心を露わにしていた。しっかりしているようで従えている筈の風の精にダメ出しされ  
る残念なイケメン。

仲間思いが故にしんどい役をいつも買つて出ており、会合や合コンなどでは引き立て

役にされるのをわかっていながら進行役を務めたりと、彼女もまた苦勞人。

クオーツアイト

通名を水晶竜。四元竜の一角。ヒモ男曰く、「絶世の美女揃いの竜人族でも頭一つ抜けた美しさ」とサファイアブルーの長髪を持つ深窓の令嬢。布張りの他に薄いスケスケのローブみないなのを羽織っている。お嬢様口調で家も竜人族の名家らしく、専属の召使いが何人もいる。

が、悲しいかなここは美醜が逆転している世界。地球人から見て美人の中の美人、トップオブ美女ということとは……。

結果として生まれてこのかた1500年、異性関係は散々も散々な扱いを受け続けて情緒不安定気味となっており、名家の家主でありながら召使いからすら残念キャラ扱いされている。

イヴァール

通名を沃震竜。四元竜の一角。はねまくりなミディアムボブの茶髪は優しい土色で、ネラやゴルトほどではないが低い背に全身むっちりむちな恵体の持ち主。

気怠げなタレ目に違わずマイペースでズボラな為、全身の布張りは所々ズレており、

良く陽に焼けた小麦色と肌色のコントラストが大変エロい。

空気を読まず思ったことを口にする為外交などの政には向かず、普段はもっぱら領内を転々とし土壤管理（土の精とお喋り）しながら日向ぼっこして過ごしている。わかっ  
てて煽るのが好き。

### 3 大種族

オーク・ゴブリン・コボルトのこと。異世界で最も大きな勢力を誇り、雄の数も多い。互いの仲は良好とは言えず、元は同じ種族だったこともあつて国境が隣接しており諍いが絶えない。

普通は醜い種族代表として扱われがちだが、この世界は価値観が逆転してしまつてい  
るので最も美しく尊い種とされ、世界的に発行されている多民族女性誌の表紙をこの3  
種族以外が飾ったことが無い。つまりリア充種族でその他の非モテ種の憧れ。爆ぜろ  
（by 某水晶竜）

力は5部族ほどではないが上位に位置する者はそれに追隨する程度の実力は備えて  
おり、数も多いので大とつくその名は伊達ではなかつたりする。戦いは数だよ、兄貴。

### 5 部族

竜人族、魔族、エルフ、天使族、吸血種のこと。異世界において数は少ないが個体能力に秀でており、中規模の勢力と見做されている。そして揃いも揃って格別に醜い種とされ、その癖強いもんだから他の種族からは敬遠されがち。でも強いから属している小規模の種族は多い。

破格の実力を持ち合わせていながら劣等感が非常に強いので基本的に3大種族の言いなりであり、同じ非モテ種であるお互いを僻み合ったりと自尊心の欠如が甚だしい。あとちんぼ臭に死ぬほど弱い。

ただし馬鹿ではないため、紛争など大きな事態に発展しそうな場合は安請負したりしない。

竜人族とエルフ、魔族と吸血種は比較的關係は良好だがその強さ故に協力したり盟を結ぼうなどとは考えもせず、天使族に至っては独自の教義もあって完全に孤立した勢力となっている。

現在、5部族の全てが致命的なまでに雄の個体が減少しており、存続の危機に陥っている。

#27 Dirty deeds done dirt  
cheap 2

オーク領近辺 とある丘

「あら、これはこれはお久しぶりですね紅炎竜様……え、大丈夫ですか。ただでさえ醜いお顔がもつと醜く、うわぁ……」

「……………久々にしては随分なご挨拶だな、セレスティア。そもそも五十歩百歩だろう」「それはまあそうなんですけれど、今日は輪をかけて酷い有様でしたので」

5部族の集合場所にいの一番に辿り着いて即座に瞑想に耽り、精神的ダメージから幾分立ち直ってきたと思つた矢先にこのエルフは……。

そんな酷い顔をしていただろうか、と火の精に心中で尋ねると、皆一様にウンウンその通りと頻りに頷いてくれたので余計に凹んだ。辛い。ぬいぐるみ抱き締めた。

……よし、考えるのはもうやめよう。今はさっさと役目を果たして帰還することのみに集中するんだローゼ。……そうでもしないと辛すぎる。あ、また泣きそう。

「……本当に大丈夫なんですか。まさかそんな状態でオークの方々にお目通りなさるおつもりで？」

「……………いや、もう大丈夫だ」

なんとか気を取り直し、久々に息苦しく感じて外していた顔布を着けなおして件の性悪エルフに向き直る。

「まあ、大丈夫と仰るなら構いません。ですがこちらまで先方の不興を買うのは御免こうむりますよ」

「相も変わらずクドクドと……これだから年寄りのお説教は敵わんな」

「口の利き方には気をつけろと何度言えば覚えるのです？ ああ、小娘風情には過ぎた望みでしたね、これは失礼」

「今日の私は虫の居所が悪くてな。此方の自制に期待はするなよ？」

「ええ、ええ。可愛げのない赤トカゲにそこまで期待はしていませんよ」  
「……………」

どうにも怒りが募り、力を抑えきれずに可視化できるほどのオーラを身に纏ってしまった。このままだと挑発どころでは済まなくなるが我慢が効かない。向こうもネフライトのそれより濃い深緑の薄膜を発現させて此方を見据えてくる。

突然の事態に周囲の動植物達は気配を押し殺し、足元の小石や土が僅かな悲鳴をあげ

て浮かび上がる。エルフ特有の長い耳に飾られた、複雑な意匠を施された耳飾りが力の奔流に弄ばれて発する金属音のみが、か細く静寂に響いている。

暫くそうして睨み合っていたが、セレスティアがふつとオーラを解いてこちらに柔和な笑みを向けてきたので、毒気を抜かれハツとする。いかん、流石に冷静さを欠きすぎていた。

「……すまない。無礼を許してほしい」

「いえいえ、私も大人げなかったですね。それはもう猛省しておりますよ」

「ぐっ……」

喧嘩を売ってしまった手前何も言い返せず、勝ち誇ったセレスティアの見下ろす視線が心底憎らしいがここは耐えねば。ああもう泣きたい……。

それにしたつてエルフもまあ醜い。……いや、全くもって相手のことを言えた立場ではないがどうしてもそう思う。別に悔しくて言っている訳ではない。断じてない。

3大種族とは似ても似つかない、か細く、肩幅もなく、肉ののらない華奢な身体は貧相そのもの。そのくせ乳房や尻、腰回りに太ももばかり肉がつくものだからチグハグで均整さの欠片もない。顔も小さく体毛だつて頭髮以外は極端に薄い。全くもつてその姿形からは力強さを感じることなく、しかし内包した力は他種族と隔絶した妙ちくりん極まりない存在——それが5部族だ。



そもそも体毛に関してはどうしようもなかったし、身体付きも雌としての部位以外はどうあつても肉がのらないので皆諦めざるを得ないのが実情なのだ。我が王は胸にもならないと常々嘆いておられるがそれもまあ仕方ない、忘れよう。

——が、そんな醜い我ら竜人族を、格別に美しいと称してくれる雄の個体が現れた。しかも私の姿を見て嫌悪を抱くどころか欲情すらしてしまうという稀有な存在。

まさしく、ああまさしく、主様は存在が奇跡。紛うことなき奇跡そのものだ。堪りません。一刻も早く抱いてくださいお願いします。

え？ 主様だつて線は細いし体毛も薄いだろつて？

そもそも私より背の高い雄という時点で色々とおかしいので何の問題もありません。あとあの雄！ つて感じの匂いも堪りません。抱いて。

……だめだ、思い返せば返すほどにここ最近ありえない幸福に満たされ過ぎててまた泣きそう。

「……今日の貴方は本当にどうかしていますね、あの程度で激怒したかと思えばまた泣きそうに。何かありましたか？」

「あ、いや、すまない。最近水晶竜の奴のがうつつたか情緒不安定気味でな」

「なるほどなるほど、それはそれはご愁傷様です。——そういうことにおきましようか、今は」

「……何？」

一方

ゴブリン領辺境伯 敷地内 応接の間

「で、お前もまた曖昧な立場に終始するとうのだな」

「誠に恐縮ではございますが、此度は中立とさせていただきます」

「此度は、ではなく此度もだろうが。チツ……醜女どもめ。もうよい、下がれ。視界に入られては気味が悪くて敵わん」

「お目通りが叶い幸甚にございました、それでは此の身はこれにて——」

「全く、こんな化け物どもの相手をしなければならん身にもなつて欲しいものだ。聞いているのか、おい！」

「はあ……」

おやおや、今回お相手の殿方様は随分と高圧的だね。まあまだ若そうだし、若気の至りつてやつかな。うん、そんなところも可愛いくて堪らないね。子どものように小さな

身体で威勢良く声を張る姿は実に良い……。いやはやゾクゾクしてしまうよ!

——なんて、今までなら罵倒されようが周りのお目付けリア充雌どもに笑われようが何だろうが感慨に耽りながら妄想を膨らませていたものだが、今回は何の感傷も抱かなかった。というより単純にイライラする。あれ、これヤバくないか? こんなこと初めてだぞ……抑えろ、抑えるんだネフライト。ここで事を荒立てたら後々面倒なのは確定だ。さっさと終わらせて主様に目一杯抱いて廻ってハメ潰してもらわないといけないのに……やばい、涎が——、

「罵倒されて涎を垂らすとはいよいよもって気色の悪い! おい、お前! お前だ緑トカゲ! わかっているのか? こっちは忙しい合間を縫って会ってやっているんだぞ! 全くこんな出来損ないどもに僅かでも我らの精をくれてやらねばならんとは……恐ろしくて身の毛もよだつわ! 大体——」

あ、キレそう。

「おい緑の。貴様どうかしたのか?」

「……いいかいナキル、何度も言うが僕を緑って呼ぶのはやめ——」

「ほんとほんと。どうしちゃったの緑ちゃん、らしくなかったよー全然らしくなかったよー」

「……………バルバトス、だから緑と——」

「ま、緑の失態のお陰で我ら吸血種の株も上がったというものだな！ 我のフオローには感謝するのだぞ！」

「そーそー！ これはウチら魔族に融通してくれる精の量が増えちゃうかも！ もちろん増える分は緑ちゃんのところから来ちゃうって寸法なわけ！」

「な——！」

「ね——！」

「ちよつと砂漠に行こうぜアホ蝙蝠にバカ鳥……久しぶりに……キレちまったよ……」

「さつきも殆どキレかけておつたろうが、何を今更」

「うぐつ……」

「そーそー。ほんとにどしたの？ 悩みごと？ また派手にふられちゃった？」

「うるさいやめろ思い出させるんじゃない」

いつも通り派手にやかましいバカコンビに心底疲れつつ、それでも確かにフオローしてくれたので一応、念のため、誠に不本意ながら感謝はしてる。

「しかしまあ、我らにならともかくあの方々相手にあの態度は流石に不味いのではないか？」

「そーだよー。ウチらも大概ヤツバいけどさー。竜ちゃんたちもかなーりきびしーんで

「しよ?」

「いや、うん、まあそうなんだけどね……」

一々気の抜けるやり取りも相変わらずでこつちまでおかしくなりそうだ。……いや、今色々とおかしいのは間違いない僕だな。この2人はいつもこんなだし。吸血種と魔族の中でもとびきり変な奴代表だし。僕ら竜人族とよく似たアレな見た目だし……ン? てことはこの馬鹿2人も主様から見ればとんでもない美女に見えるってことか?

……今更だけど主様の感性とか価値観ってとびきりおかしいんだね。とてもじゃないけどこの2人を目の前にしてそんな風には思えないよ。ああ、もう駄目だ、1秒でも早く主様の胸に飛び込みたい……くんくんしたい……いっばい無様に鳴かされたい……。

「はあ……早く帰ろ……」

「なあ飄翠竜」

「だから縁って……?!」

ウンザリしながらそう言うと、ナキルの異様な気配に飛び退いて身構える。が、即座にバルバトスに背後を取られたので完全に挟撃される形となってしまうていた。

常時ふざけているもんだからつい忘れてしまいがちだが、この2人は馬鹿だが強い。本当に馬鹿なんだが普通に強い。1対1ならやり方次第でなんとでもなるだろうが、1

対2では勝機など欠片もないのが正直なところだ。我が王なら軽くあしらえるんだけどね……。

「また我のことを馬鹿だ馬鹿だと馬鹿にしておるんだろう、全く心外よ」

「良く気付いたね流石だよ。で、これは一体どういうことかな」

「んー。これはなんとなくなーくなんだけどさー。飄翠竜、すつごく良いことあったんでしょ?」

「はて、何のことかな。そんな曖昧さでこれはどうかと思うんだけどね」

ドス黒いオーラを周囲にバラ撒きながら微笑みかけてくるナキルとバルバトス。この2人のは久々に見たな。元は同じ種族だからかオーラの色もよく似ている。

——呑気に考えている場合じゃないか。なんせ口元は吊り上がっているが目はどちらも笑ってない。あれ、もしかして主様のことバレてる……?」

「……………はっ! この程度でビビったのかあ? んく? 緑のお?」

「……………はっ!」

「ぷーくすくすw ウチとナキちゃんが手組むわけないじゃーん! 緑ちゃんとやるならタイムマンに決まってるっしょ!」

「……………はっ!」

なんだコイツら。

「貴様の様子がおかしいもんだからちよ〜つとからかつてやっただけよ。いやはや傑作であつたなあ!」

「んっふふ〜! 戻つたら皆に言いふらしちやお〜つと! じゃ〜ね〜!」

馬鹿2人は言うだけ言つて満足したのか、クソ憎たらしい笑顔を張り付けて飛んで行つてしまった。

「……帰ろ」

「バルバトス」

「ナキちゃん」

「緑絶対変だつたよな」

「緑ちゃん絶対変だつたよね」

2人は屈託のない笑顔でに〜つと笑い合つと大声で叫んだ。

「報告だな!!」

「報告だね!!」

## # 2 8 D i r t y d e e d s d o n e d i r t

## c h e a p 3

「はあ……どつと疲れましたわ……」

コボルト族の辺境領主に報告できたまでは良かったものの、散々に罵倒されて己を抑えるのに必死で疲れ果ててしまいました。こんなこと今までなかったですのに……。それこそ、「ああ♡ もつとなじって虐めて蔑んでくださいまし♡♡」とか考えて最高に昂っていたのですが……やはり主様の存在があるからでしょうか、どうにも調子がおかしいですね。ローゼフラムにネフライトは大丈夫か心配になってしまいます。

それにしても——、  
「最近是对応が露骨になっていきますわね。3大種族の方々もそろそろお冠、ということでしょうか……」

ここ100年で、元々開いていた3大種族と5部族の差は俄かに拡がり始めました。あの方々の数が減るといふ話は特段なく、我ら5部族は徐々に、ですが確実にその数を減らすばかりで、このままではいずれかがいずれかに吸収されて従属する未来は火を見



るよりも明らかでした。

正直それも悪くないのではと思っていました。どうせ自国に引き籠っていて枯れて精神が死ぬのを待つだけでしたし、余程のことがあってもなんとかなるのが我ら竜人族です。戦争の道具にされるのは考えものですね。

しかしそんな懸念も何もかも、主様の存在が全てをひっくり返してしまいです。

「何と言いましようか、奇跡なんてものではありませんね」

正直、ここ数日の出来事は全て夢なのではと疑うことがあります。こうしてあのお方のお傍を離れてしまうと特に。

今回のように5部族以外の地を訪れば、奇異の視線を向けられ、笑われ、気分を悪くされ、人だかりでは道が開ける、目が合えば悲鳴をあげられる、挙句の果てには泡を噴いて卒倒される等々それが普通……ああ、考えただけで泣きたくなくなってきましたわ……。

「やっぱり夢なのでは……いやでも、しかし……ぶつぶつ……」

「随分とお悩みの方ですね、水晶竜殿」

「……これはセラフイム様、ご機嫌麗しゅうございます」

うげつ、と内心で叫びつつにこやかに応答するこのクオーツアイト、素晴らしい対応ですわ。まあ実際それを口に出したところでこの天使はなんとも思わないでしょうけ

ど。

とにかく帰ったら主様に褒めていただかなければ。きつと笑顔で抱き締めてわたくしの愚痴にも嫌なお顔一つなさらずお耳を傾けてくださり、頭を撫でて労をねぎらい、その後滅茶苦茶に犯して黽つて孕ませていただけなのです……ああんつ、堪りませんわあつ♡♡

………主様つて本当に実在するんですの？都合が良すぎますわそんな殿方……でももう3人も孕ませてしまわれましたし……ああどうしまししょう、遂にわたくしも雌の喜びを噛み締める時が来てしまいますわ!!

夢だつたらもう本当に無理でございます、水晶に籠つて冬眠いたします……。

「………今日は随分と表情豊かですね。いつもの貴方はその名の通り冷静で、そのように顔色を変えることはなかったと記憶しておりますが」

「………こほん。大変お見苦しいところをお見せしました。わたくしもまだまだ若輩者故、セラフイム様の徳に肖りたく存じます」

「それは実に良い心がけです。現在の我ら5部族の苦境も、“神”に対する敬虔な心の欠落が招いた試練。ともに手を携え合い、教義と信託の元にこれ乗り越えようではありませんか。そもそも我ら雌のなすべき使命とは——」

「は、はあ……」

始まつちまいましたわ……相も変わらず教義とやらの話になると目が怖いんですの……完全にイっちゃってましてよ。無機質な笑みも余計に恐怖を煽るんですもの……いつも通り此方のことなどお構え無しに語り倒してますし……。

ちなみに天使族にとつて神とは雄のことであり、雌は神にその全てを捧げ尽くして滅私奉公を極めることこそかけがえのない美德とし、それを教義と呼ぶのだそうです。

ちなみにその実態は雄が生まれ落ちたならば即拘束し一切の自由を奪い、「貴方はこの世で最も尊く気高く美しい存在なので自らの意思においての食事や排便、睡眠に至るまで何一つせずとも良いのです（超意識）」だのなんだのと洗脳し尽くし、生命維持も含め完全に管理下に置いていきます。しかも自分達のその考えと行いが正しいと心の底から信じ切っているものですから、嬉々として自国の現状を語ってくれますのでその……なんというか……。

それつてもう本当に生きているだけで、ただただ死んでいないだけではありませんの……？

……改めて怖すぎますわ。

あと、ともに手を携え合いとか抜かしていやがりますが価値観があまりにもかけ離れ過ぎていて、共に生活する≡彼女らの教義（○）とやらの最低限を満たすことすら他種族には地獄過ぎて到底不可能なので共存は無理です。

結果として天使族は属する小規模勢力も一切おらず、完全に孤立した勢力となつていきます。それでも5部族の1つに数えられるのは、その底なしの奉仕精神から引きずり出されるとんでもない戦闘力に依ります。ひとたび戦いともなれば種族丸ごとバーサーカーと化し、たたでさえ個体能力が高いのに一切の防御をかなぐり捨てて形振り構わず特攻してくるもんだから危険極まりない——。

こつわ……マジでヤバすぎますわこの種族……。

「———ということであり……水晶竜殿、聞いておられますか？」

「あ？ え、ええ、はい、とても興味深いお話ですわねおほほほ」

「そうでしよう、そうでしようとも。加えて——」

「ああつ！ あのつ、セラフイム様！ こうして会談後にわざわざいらしたのには、何か理由がおありだったのでは？」

「おっと、そうでした。教義を説くことは私の使命でありますので」

危ない……上手く話を逸らさないと、それこそ延々とありがたい説法（○）を聞く羽目になりましてよ……無理に止めるとそれはそれで危険ですし……ああ、疲れる……。

「水晶竜殿。最近貴方の国で何か、ごございましたか？」

「——はて。何か、とはなんでございませうか。ご質問が漠然としすぎでは？」

流石、頭のネジがハナから吹っ飛んでいようが腐っていようが、天使は天使という訳

ですか。

「……いえ、失礼しました。貴国に対してぶしつけに過ぎる問でしたね」

「大方我が王と妹君の姉妹喧嘩が少々いき過ぎていたがために、そちらの注意を惹いてしまったのやもしれませんね。いつも通り、お詫びいたしますわ」

「水晶竜殿」

「……はい？」

頭上に光輪を戴き、三対にも及ぶ純白の大翼を厳かに解き放った上位天使の放つ強大な圧を全身に受けながら、それでもわたくしは笑顔で相手を見据えます。目は笑っていないが、なかつたかもしれませんが。

「我ら天使族は何より神と、その教義を重んじます。努々お忘れなく」

「もちろん、重々承知していますよ」

「——それではまた。機会がありましたら、是非我が国にお越しくください。……貴国の”主”とともに」

「——ふふ、その機会とやらがあれば、ですが」

そうしてお互いにこやかに言葉を交わし、大天使は神々しいほどに美しい光跡を描きながら空の彼方へと消えていきました。

「……はあ、疲れますわ……さっさと帰りましょう……」

「で、これは一体全体何がどういう……?」

俺は困惑していた。ネラとゴルトとイヴが、「あとは任せた!」とでも言いたげなサムズアップをした後速攻でどっかに行ってしまったと思ったら甘ったるい雌の匂いやらあつちやこつちやが柔っこいやら気持ち良いやら耳元で囁かれて脳みそふやけそうやら何よりしこたま酒臭いやらでそれはもうげんなりするくらいにたつぷりと。

「主様あ! あいつら酷いんですよ私が気にしてること全部ぜんぶ言ってきたえ!

あんの年増エルフもいつもいつも上から目線で見下してきてあの顔思い出しただけで腹が立ちます! もう……悔しくて悔しくてえ……ひぐう……うぎゅ、ふぐつ、うええ……」

「聞いているのかい人間くん! 今まであんなことはなかったのにもう抑えるので必死だったんだよ! 君のせいなんだからなよりもよつてあのバカコンビに慰められるなんて屈辱過ぎたよ?! あともつと飲むんだ飲め飲みたまえよ杯が空いてるじゃないかあぐへへ」

「ねえ主様聞いていらつしやいますわたくし頑張ったんですこれまでもずっとずうつと

馬鹿にされようが泣き叫ばれようがキラキラとしたものを吐き出されようが耐えて耐えて今日も頑張ってきたんです褒めてください聞いていますか……貴方はそこにいますか……?」

「とりあえず落ち着け皆さん落ち着いてください本当にお願ひしますローゼさんそんな泣き上戸なのに飲んだんですかネフライトさんは絡み酒がすぎるセクハラ親父かあと尻撫ですぎクオーツさんはマジで怖いんですけどどこぞの珪素生物じみてません? 何俺消えんの……?」

## # 2 9 残念喪竜はリア充種族の夢を見るか

「主様！ 起きてくださいお願いします!! 主様あ!？」

「いやー……調子にのって飲ませ過ぎたかな？」

直前でお預け食らった反動か、出向いた先で盛大に味わったストレスの影響か、はたまたその他諸々ひっくるめてか。

3人十生贄のヒモ×1匹で盛大に飲んで騒いでを繰り返した結果、白目を剥いて泡まですりつぶつ倒れたヒモ男をローゼフラムが号泣しながら介抱する様を、ネフライトは頭を掻きながらバツが悪そうに見遣っていた。

「ネフライト……貴方一体何を飲ませたんですの?」

「……」

「ネフライト?」

「……、獄竜酒……」

「…………は?」

あまりの圧に気圧されたか観念したのか、視線を泳がせ滝のような汗を流すネフライ



トが絞り出すように白状したその名と、彼女がチラチラと視線を送る先の、いつそ禍々しい程に真つ赤な染色が施された酒瓶が空になつて転がっているのを見て、クオーツアイトは気が遠くなる感覚とともに思考が停止してしまった。

「——何てモノを飲ませてますの貴方は!？」

「だ、だってもう手元にそれしかなかつたんだよ?!」

「だってクソもありませんわポンコツ駄竜! よりにもよつてアレを主様に飲ませる馬鹿がいますかこのお間抜けドラゴン!!」

「ひいん……」

獄竜酒とは竜人族が造る中でもかなり特殊かつ非常に強力なお酒で、家畜として飼つているファイアライダーやランブルバツファローなどを興奮し発情させる為に用いるものだったりする。一応飲めはするが当然の如く種族内でもよつほど酒に強い者に限られるくらいにはヤバイ。そうでない者にとっては最早劇薬である。あまりの強さに虜になるアル中が5部族内にも少数だが存在し、密かにカルトの人気を博する品物だったりもするのだが——。

そんな劇物をネラの加護などがあるとはいえ所詮はヒトであるヒモ男に飲ませるといふ蛮行暴挙に、声を荒げて叱りつけるクオーツアイト。

「そもそも! なんでこんなモンがここにあるんですの! 城内にあつてはいけない代

物でしょう?!」

「あ、あの、水晶竜さん……?」

「ちよつと黙っててくださいませんか?!? このへっぽこ緑!!」

「ひいん……」

「主様あ! 死なないでください主様あ!! せめて私に種を仕込んでからにしてください主様あ?!」

「どさくさに紛れて何をほざいてやがりますかこんのアホフラムう!! ……つておいイ!? どうして馬鹿みたいに回復魔法かけまくってるんですの?! 今すぐ止めろお!!」

「その、えと、クオーツ、これ……」

「もうっ! 本当になんなんですかの!?!」

蛇に睨まれた蛙のように縮こまってしまったネフライトが差し出す紙切れを分捕り、息を荒げつつ水晶をあっちゃこっちゃに生やしながらそこに書いてある大変個性的な文字を読み解くクオーツアイト。

『いちおうすめといた たのしんで いぶあーる』

「……………」

「く、クオーツ……?」

「いっぺん絞めてきますわあんのアホ土竜」

「ちよ、まつ——」

「あ！ 主様っ！ お気づきになられま……し、た………う？」

こめかみに浮きまくった青筋がブチ切れそうなくらいに目の据わったクオーツと、それをどうにか止めようとするネフライト。

惨劇という名のしようもない馬鹿喧嘩が竜人族内で勃発しようとした矢先、ローゼラムの嬉しそうな声が一転して先細り、その異様な気配に振り向いた2人は一瞬で身が竦み、こう思った。

あ、死んだ——♡

「ごっぽおオ、ツ、?!♡♡♡ ごっえツ、?!♡♡♡ ぶぼおエ、ツ、♡♡♡ ふつぎゅ  
 いイツ、♡♡♡ うっお死ぬツ、♡♡♡ ごれぢぬツ、♡♡♡ ふぎやつ♡♡♡ ぶ  
 ぎいつ?!♡♡♡ キツツツ♡♡♡ おにやか破けぢやあアツ、?!♡♡♡ ぬっお  
 ギツツツツ、♡♡♡ ンギヤツ、?!♡♡♡ ほぎやぎやアツ、ツ、♡♡♡♡♡」

強者としての矜持など最早欠片も残さず、喘ぎ倒してハメ潰される1匹の雌。

背後から脇にかけて抱え込まれ、そこから伸びた腕に厳めしい双角をふん掴まれて頭

を固定され、邪魔な尻尾に思い切り噛みつかれながら、これまでよりも更に凶悪さを増した圧倒的デカマラに胎をブチ抜かれて不自然に腹部を凹凸させハメ廻られるローゼフラム。

突然の事態についていけず床にへたれ込み、仲間が獣以下の雌声を響かせながら壊されていく様を眺めるしかないネフライトとクオーツアイトだったが、全身から発せられる汗と媚びた発情臭は隠しようもなく、無表情にローゼフラムを犯し続ける雄を余計に昂らせた。

「ふっぐおおおオ——ツ——?!?!?」

ほっへえ〜♡♡ かひゅっ……♡♡ こひゅー……♡♡ た、たすけっ♡♡ ぐぶっ……♡♡

♡ たじゅげへえ……♡♡ ネフ……クオーツう……♡♡ ふぐおオ、ツ?!♡♡♡♡

「あ……あっ……♡♡」

「ろ、ローゼフラムさん……♡♡」

「お、おねがい……♡♡ ほんろに死ぬ♡♡ ハメ殺されちやああ、っ、?!?!♡♡♡♡ ぷ

ぎゅっ♡♡♡♡ ふんぎゆのお、おオ、くくくくっ♡♡??♡♡♡♡♡♡

いきなり背後から犯し姦され、狂ったように真つ赤な長髪を振り乱しながら無様に鳴き喚いていたローゼフラム。

男の動きが急に緩慢になり、漸く言葉らしい言葉を発して助けを求められた2人は反





らと宙を漂っていた。

「ひいつ♡ やつ♡ やだっ♡ 目が怖いよ……♡♡」

「ふっふっ♡ あ、主様♡ 主様あ……♡♡ んおっ♡♡」

仲間が黴られ犯し潰される様を、涎を垂らして羨ましがる2匹のマゾ雌の前に無言で仁王立ちとなつて見下ろし、身を寄せ合つて恐怖と歓喜に震える絶対的強者の姿に自然と口角が吊り上がっていく。

本来なら指先1つ使わず消し飛ばせる筈の相手を捕食者と断じ、些細な変化にさえ敏感に感じ取つて無意識に腰を揺すり、情けないにもほどがあるハメ乞いアクメを披露してしまう。

既に強者としての誇りなど欠片もなく、2匹の哀れな獲物はのそのそと這い蹲つて支配者たる雄の足元に摺り寄っていく。いち早く慈悲を賜った仲間を心底羨みながら、そのハメ潮で汚れた主の爪先から足首にかけて唇を這わせ、長く淫靡に濡れた舌で満遍なく舐め上げていった。

## #30 残念喪竜はリア充種族の夢を見るか 2

「うおオッッ?!?♡♡♡♡ ふぎやッ♡♡♡ うぎゆいイツ♡♡♡ おイツグイツグ!!  
♡♡♡ まりやいぐっ♡♡♡ いっつく……!!♡♡♡ うっおすぐイギユッ♡♡♡  
ぐおおくくく??♡♡♡」

抱え込んだザコ雌の胎を無表情のままド突き上げ続ける雄に対し、ただただ良いように  
に嬲られ犯されて嬌声を喚くしかないローゼフラム。

ただでさえ狂気じみていた肉槍は更に硬度を増し、生物として無類の強さを誇る竜人  
族、その上位種を見る影もなく屈服させ串刺しにし、腹部を異常な程凸凹に歪ませてハ  
メ倒していく。

「ふぎやつ♡♡♡ んぎゆう♡♡♡ や、やめっ♡♡♡ 僕の顔を踏むなんて——んぎゆいッ  
♡♡♡♡ 角ッ♡♡♡ グリグリりやめッ♡♡♡ のおオッ♡♡♡」

「あうっ♡♡♡ おオッ♡♡♡ あ、ありがとうございますっ♡♡♡ 主様♡♡♡ あるじしやまあ♡♡♡  
♡♡♡ うっおキクッ♡♡♡ 無様すぎてイグッ♡♡♡」

ローゼフラムが地獄のような快楽で半狂乱に陥っているその足元では、ネフライトと









にされへえ♡♡♡ —— うおイツグ♡♡♡ くふつ……んぎゆひ♡♡♡ クソザコ卵子♡♡♡ 一生懸命孕まされてまひゆ♡♡♡ 主様あ♡♡♡

これまででに味わったことのない異常な快楽に視線も空ろなローゼフラムは、それでも愛しい飼い主の精子で受精していることを伝える為に、服従し切った飼い犬のように仰向けになって精液ボテの腹を晒し、ニタア……♡ と蕩けきったメス顔を披露する。

「偉いな、ローゼさんは」

「……♡♡♡ ふへつ♡♡♡ 嬉しいです♡♡♡ 主様♡♡♡ あうじしやまあ♡♡♡」

「——んじゃ、もつと卵出せるよな」

「ふおつ……?? ——ぐっおオッツツツ……?!?!♡♡♡♡♡♡」

幾らか表情の戻った男に優しく褒められ、幸せいっぱいにくつちやぐちやの顔を綻ばせたのも束の間。無防備に晒されたボテ腹、その卵巣があるであろう位置を適当に目星をつけて踏み付けられたローゼフラムは突然の暴拳に目を白黒させ、それでも歓喜のマゾアクメ声を室内に響き渡らせるかのように絶叫した。

「んぎゆのオおッツツツ……?!?!♡♡♡♡♡♡ やべへつ♡♡♡ きつつつ♡♡♡ うつおギツツツぢゅ!!♡♡♡♡♡♡ お腹っ♡♡♡ 卵潰れぢやうつおイツグイツグ!!!♡♡♡♡♡♡

「大丈夫大丈夫。竜人族は頑丈なんだから、な」

「うおオッツツ……?!?!♡♡♡♡♡♡ ぐっひ♡♡♡ ごおつ♡♡♡ ほつきよぶぢゆる!!♡♡♡♡♡♡ ひ



既に狂乱状態のローゼフラムは突然増した重量に更に腹部を圧迫され、白目を剥いて股からぶびびっ♡　ぶびゅっ♡　ぶびよびよっ♡　と無様におまんこ射精を繰り返す羽目に。

「クオーツさん、良いんですか？　ローゼさん死にかけてますけど」

「だ、大丈夫です！　この程度でわたくし達は死んだりしません♡　そ、それより……！♡」

「何です？　飢えた豚みたいに物欲しそうに見つめて」

「ひゅぐう……♡♡　——んおっ♡　ふごっ……♡♡　おくっさ♡♡　すんすん♡♡　ほっひゅ♡♡　くっおクツツサ♡♡♡♡　のっほおくくく♡♡♡♡」

びくびくと痙攣するばかりで動かなくなったローゼを下敷きにクオーツアイトはその美しい顔を、まるで威嚇するかのよう脈動する極太デカマラに必死に近づけ、鼻を鳴らしては仲間の淫水と精液がブレンドされた濃厚な性臭で肺を満たしてハメ乞いマゾアクメをキメてしまう。

失神した仲間に自身のマゾ潮をぶっかけようが気にも留めず、主の脚を舐め回した蛇舌で、凶悪ちんぽの匂いが貯まった根本をまるでへりくだるかのように舐めずつて、「犯して♡　ハメ潰して♡　赤ちゃんいっぱい孕ませて♡♡」と情けを乞う始末だった。

「あ、ああ……クオーツまであんな……♡♡」

「ネフライトさん、2人ともしつかり堕ちてくれましたけど？」

「ひっ♡ や、やだっ♡♡ やだやだやだあ♡♡♡」

この期に及んでまだ孕み袋としての自覚が足りないネフライトを見下ろして、男は口角を吊り上げさせる。

底意地の悪い笑顔を見せつけられ、それでも全く笑っていない目を目の当たりにし、ネフライトはへたり込んで己を掻き抱いたまま、無意識の内にびゅっ♡ びゅくんっ♡ とクソザコマゾアクメをキメてしまうのだった。





も碌にできないザコ雌で申し訳ございません♡♡♡」

恍惚とした表情で雄様の象徴に頬擦りをし、長く卑猥に蠢く触手のような舌で舐めずりながら媚びる水晶竜様に幾らか満足しつつ、それにしても全くもって足りない刺激にうんざりした男はわざとらしく溜め息を吐いた。

「あ、ああ……♡ も、申し訳ありません主様♡ お慈悲を……♡ 出来の悪い醜女を、どうかお許しくださいませ……♡♡」

こちらの態度に露骨に反応するボンコツ上位種が殊更に征服欲を刺激してくる。

ただ、必要以上に自分を貶める態度は如何とも感心しない。これまでのこともあるだろうが、これだけ極上な形(なり)をしておいて、しかもそれに獣欲を煽られる側にとつては些か不満であった。

「あ、あの……——」

「クオーツさん」

「は、はいっ♡ ——……んぴっ?? ——ふおっ?!♡♡ つ、角掴んじや——くっほおオ、ツ、?!♡♡♡♡」

「もう俺がいるんだから、これから自分を卑下するのはやめましょう、ね」

「おオっ??♡ しゅ、しゅみませ——ゴボおっ?!♡♡♡ ——ぐつつボごおオ

、えツ、ツ、?!♡♡♡♡♡♡





ずつつ……るろろろおくく………♡♡♡♡

「ツグおオ、っツ?!♡♡♡ つつんのっほぎよへえエくく♡♡♡♡」

——がぼッ、ッ、ごつつちゅちゅんッ、ッ、♡♡♡♡♡♡♡♡

「——ごブびよッ、ッ?!?!♡♡♡♡♡♡♡♡」

ぶびっ!♡ ぼびゅびゅびゅびゅ♡♡ ドグッドグンっ!! ぶつびゅびゅつば♡

♡♡ びゅーっ♡♡ ぼびゅるるるるッ、ッ、♡♡♡♡♡♡♡♡

「——くくくくッ、ッ?!?!♡♡♡♡♡♡♡♡ つ??♡♡??♡♡♡♡ オ、ッ、♡♡

♡ ウツおオッ、………♡♡♡♡♡♡♡♡」

性処理オナホとして遠慮も配慮も一切ない排泄ピストンに耐え、不安定な筈のガニ股エロ蹲踞を強靱な脚力と尻尾で必死に支えてマゾ快樂地獄に脳みそを焼き切られ続けるクオーツアイト。

そんな健気な彼女に追い打ちをかけるように、雑に挿んだままの角ハンドルを思いっ切り引き寄せて生口オナホの間抜け面に陰毛を擦り付け、気持ち良く精液を排泄する為だけに極上美女の喉を抉り胃に直射するという強烈無比な背徳感が男を襲い、無意識の内に前のめりになって腰を振りたくる。

意識と視界がバツバツに明滅しながらも、ただひたすら己の主が気持ち良くなれるよう身体は従順に動いてしまい、顎を限界まで上げて喉を反らせ、規格外の肉槍で文字



しきって、釣り上げられた魚のように雄ちゃんぽに吸いつきオホ声を響かせるクオーツアイト。

「ぶっじゆるるろろおっ………つッぽんっ♡♡♡

「ごおっひよ♡♡ オ、ツ、ウ、♡♡♡♡♡ ——ぐぶっ……♡♡ げっふ♡♡  
くくっツグっおお、ええエツ、つぶッ、♡♡♡♡♡」

無意識すっぽんフェラで吸いつく雑魚メスドラゴンに対し、男は少し鬱陶しそうに泡立った白濁液に塗れた剛直を引っこ抜く。

あまりの射精量で妊婦のように膨れ上がった腹を抱えながら、クオーツアイトは床のマゾ潮溜まりに顔面から突っ伏してしまった。その勢いもあり、己の体重で腹部を圧迫した結果、膨れた腹を支点にして無様なガニ股尻へコダンスを晒しもって、アホほど情けないザーメンゲップを大音量で披露してしまう始末だった。

「あ……あ……く、クオーツがあ………♡♡♡」

「ひゅー……♡ かひゅー………♡♡ ごぼっ♡ ぐっふ………♡♡♡♡♡」

ローゼフラムに続いてクオーツアイトまで、まるで見たことのない無様な姿を目の前に転がされ、ネフライトは全くもって身動きが取れなくなってしまうていた。

「きゃ、と………」

「——ぶっひよオ、ッ、?!♡♡♡♡♡」

「——ごっぽおエッ、?!?♡♡♡♡」  
 「ひっ♡ ひっ♡♡」

男の足元でひしゃげた蛙のように転がるクソザコ上位種様。その膨れた腹をまるで値踏みするかの如き軽挙さで踏み荒らし、失神していた2匹が救いようのないドマゾ快樂で覚醒させられて家畜以下の鳴き方で喚く。

おまんこ射精とザーゲロを繰り返す様は、良く知る強く逞しい仲間の面影など最早欠片もなく、ネフライトは随分と可愛らしい悲鳴を漏らすしかできないでいた。

「んじゃ、ネフライトさんにはどうしてもらいま——」

「ひ、酷いじゃないかー」

「……は？」

まるで親からはぐれた子どものようにへたり込んで鳴き声をあげるだけの、最後のクソザコマゾドラゴン様をどうしてやろうかと思案していた男は自分の耳を疑った。

「ふ、2人をこんな目に遭わせるなんて……♡ いくらなんでもあんまりじゃないかつ♡ さ、流石にもう少し手心を加えたってバチは当たらない!♡ ぼ、僕たちは逃げたりしないんだから……——ふおっ??♡♡♡」

何やらキャンキャンと喚いている孕み袋に無言で歩み寄り、言い切るのを待たずに萎える気配など全く見せない肉槍で、やかましい口とは裏腹に媚びた笑みを絶やさないう

ケメン王子様フェイスを思いっ切り引っ叩いてやる。

べちっ♡ ペち♡ ばちっばちい♡♡ べちやつ♡ ぴしゃっ♡♡ ばちいい♡♡♡

「オ、ツ、??♡♡♡♡ あうっ♡ や、やめっ——ふんぎゆい♡♡ こ、こんにやのおっほオ、ツ、♡♡♡♡ くつさ♡♡ おちんほ様クツツサ♡♡♡ ひぎっ♡♡ ご、ごめんなしや♡♡ 生意気言っつてごめんない♡♡♡♡ ゆるしてえ♡ ——っツ、んのっほぎよおオ、ツ、ツ、??!!?♡♡♡♡♡♡♡♡」

どうにも舐め腐った態度を取るザコ雌の顔を軽くちんぽビンタしてやると、それだけで即屈服して下半身は迎え腰でへこつきが止まらなくなっていく。

一体何を勘違いしてあんなことをほざいたのか、これは更に徹底的に躡ける必要がある。男は無感動にネフライトの角をふん掴み、ローゼとクオーツを犯し潰し散々淫水を浴びて匂いを溜め込んだ剛直と睾丸の付け根に、彼女の中性的に整った美しい顔を強引に押し付けてやった。

「ほっぎやふっぎやツ、♡♡♡♡♡♡♡♡ くっつさ♡♡♡♡ うっおこれギツツツ♡♡♡♡♡♡♡♡ すーっはすーっはあ♡♡♡♡ ふんぎいツツグ!!♡♡♡♡ おいつぐイツギユ♡♡♡♡♡♡♡♡

うオお、ツ、??♡♡♡♡ 腰へこ止まんにや♡♡♡♡♡♡♡♡ おオ、いグツ、ツ、♡♡♡♡♡♡♡♡ 「今まで他のザコ雌も散々犯してたの知ってるだろうが。今更何ほざいてんだ、ああ?」



「は、はひっ♡ しゅびぼしえ!♡♡ トチ狂つてまぢだッ♡♡♡ 怖くて頭バグつて  
 まぢだあ!!♡♡♡ ごめんなしい♡♡ おゆるしっ♡♡ うっおマジこれきつつく  
 ♡♡♡ くんっほおオッ♡♡♡♡♡」

「酒盛ったのもお前だったよなネフライト、二度と舐めた口利けなくしてやるからな—  
 —?」

雄の性臭が最も濃い部位に顔面をグリグリと押し付けられ、ようやつと解放された頃  
 には、その端正な顔立ちは見ると影もなくアヘリ散らかしていた。

これからコイツでブチ犯すぞでも言わんばかりに隆起し切った怒張を顔に乗つけ  
 られ、見せ槍で目隠しされたネフライトは愛おしそうに長い舌を管を巻いて伸ばし、と  
 めどなく溢れる先走り汁を鈴口ごと、先端が分かれた舌先で舐り回す。

「ひぎゆう……♡♡♡ ゆ、ゆるぢでくだしい……♡♡♡ なんでもしましゅ……♡♡♡  
 もう卵もいっばいプチュってましゅかりや……♡♡♡ おねがいます♡♡♡ ザコ  
 雌ゆるしてえ♡♡♡ —うおオッ???

## #32 残念喪竜はリア充種族の夢を見るか 4

「や、やべへっ♡♡ うっお??♡♡ ふゴっ♡♡ ぶひゅ♡♡ んつのオ、イいつグツ♡♡♡♡ ご、ごんにやあふびよ??♡♡♡♡ くつつさ♡♡♡ つお、ぎつつぢゅ♡♡♡♡ ふごおオ、くくくくくツ、??♡♡♡♡」

どうにも躰けがなっていない飄翠竜様。その、名画も恥じ入るであろう程の中性的美貌を誇る顔をベッドの上に敷き、あろうことか座布団代わりにして一息つく鬼畜男。

立ちっぱなしで疲れたからという雑極まりない理由で、ネフライトのイケメン王子様フェイスを臀部と肥大化してまだまだ重みを増す睾丸で下敷きにし、濃密に過ぎる雄の性臭を直に嗅がされ溺死しそうな程にくぐもった呻き声をあげるクソザコドラゴンに苛立ちを募らせる。

「ピーピー鳴いてないでさっさと舐めろ」

「——うんぎよほおオ、ツ、?!?!?♡♡♡♡♡♡」

本来ならば手も足も出ない筈の上位種様を文字通り尻に敷き、あまりにも情けないザコマゾっぷりを見せびらかしてくる飄翠竜様に延々とアドレナリンを噴出させられる。

騒ぐだけで碌な奉仕もできないクソザコドラゴンの張りのある美しい長乳を握り潰してしごきあげ、既にピン勃ち状態のデカ長乳首を振り姦して遊んでいると、肉座布団が無様な嬌声をあげて必死に蛇舌で舐り回してくる。

「ごっぶおオッ、ッ、?!♡♡♡♡♡ しゅ、じゅびばじえん……♡♡♡♡♡ んべつべえつろべつろお♡♡♡♡♡ んじゅっぐぢゅぢゅ♡♡♡♡♡ ふっおクッッッ♡♡♡♡♡ ——ぐおオッ、ッ、?!♡♡♡♡♡ やめっ!♡♡♡♡♡ ぢゅびいじめギッッッ!!♡♡♡♡♡ なめるッ!♡♡♡♡♡ ぢゃんど舐めましゅがりやあつ♡♡♡♡♡ ぶつひよ♡♡♡♡♡ じゅつぞ♡♡♡♡♡ ちゆるちゆるぢゅつぞぢゅつず♡♡♡♡♡ ほお♡♡♡♡♡ ぶっほいぐイぎゅつっお、イツッッグっ、っ、っ、!!!♡♡♡♡♡」

休憩がてらの手慰みに丁度良い玩具として、肌理細やかで極上な手触りのクソデカ重長乳を好き勝手に弄んでやる。こんな物以下の扱いを受けて尚、喘ぎ散らかして腰と尻尾はびつくんびつくん♡♡♡♡♡ に跳ね回ってベッドを軋ませ、ピーン♡♡♡♡♡ と突っ張って破滅的なドマゾ快樂に耐える美しい美脚を眺めて悦に浸る。

「主様♡♡♡♡♡ 申し訳ございません、気を失っておりました……♡♡♡♡♡」

「まあ……♡♡♡♡♡ ネフライトつたら主様に使ってもらえて嬉しそう……羨ましいですわ♡♡♡♡♡」

「うおオ……♡♡♡♡♡——ふんぎよのおオッ、ッ、?!?!?!♡♡♡♡♡」

まさしく畜生極まりない愉悦を味わう男の両脇に、マゾアクメ地獄から意識を取り戻したローゼフラムとクオートツアイトが重い腹を幸せそうに抱えながら摺り寄ってしな垂れかかる。

2人分の体重が加わった圧力が顔面に加わってしまい、腰ヘコが激しさを増してマゾ潮をびじゅつ♡ ぶじよじよツ♡♡ と飛ばしまくるネフライト。

まるで救いようのないムチ肉クツションのドマゾっぷりに男の性欲と征服欲は無限に刺激されていく。

「仲間が鳴き喚いてるのに良いのか？ 薄情な上位種様だな」

「わかっておられる癖に……♡ 本当に意地悪な主様ですね♡♡」

「そうですね♡ それに、今のわたくし達はただの雌……♡ 主様にお慈悲を賜ることしか考えない、浅ましい孕み袋でございます♡♡ ——んむう!？」

「あつ……♡♡」

「びぎい♡♡♡♡ おオッ♡♡♡♡ やべへっ♡♡♡ 動がにやいでえいつグおオッ♡

?!?♡♡♡♡♡」

繁殖交尾の為だけに生まれて来たかのようなドスケベ恵体を男の身体に擦り付け、耳元で媚びついて蠱惑に囁く2匹のドマゾドラゴン。

生意気にも煽ってくるクソザコ雌にイラつきが収まらず、瑞々しいにもほどがある

クオーツアイトの唇を強引に奪い、次から次へと溢れ出てくる媚薬の如き極上の蜜を啜り上げ、その様子を心底羨ましそうに見つめるローゼフラム。

そして、男が身動きする度に顔を押し潰されるネフライトが無様過ぎるマゾアクメに陥り懇願するも、全くもって相手にされず完全に無視されていた。

「んっふう?!?」 ふむっ♡ んっちゅちゅっば♡♡ んじゅ♡ ちゅむ♡ ちゅま♡

ふっぎゅ♡ うっおしゅわれりゅ♡♡ ふーっ♡ んふーっ♡ ふっほ♡ おっ

ほお♡♡ ンじゅるっ♡ ぶじゅるるるっべええくく♡♡ オッッ♡ キシゅ♡

これが殿方とのキスう♡♡ えっろ♡ おイッグ♡♡ 幸せしゅぎていぐっ♡♡♡

——うおオッッ!!?!?♡♡♡♡♡

「ああっ……♡♡ お願いします主様♡ 私もキス♡ お口セックス♡♡ えっろい唾液

交尾したいですっ♡♡♡ 主様っ♡ あるじさ——うぴっ?!? ——くっほおオ

ッ♡?!?♡♡♡♡♡

「おオ、死ぬッ♡♡♡ ぶじやましゅぎへぢにゅッ♡♡♡ ほっぎよ?!?♡♡ ぶ

ぎよオッ♡!!♡♡♡ ンのっごおイギユいっぐッ♡♡♡♡♡ ぶんもおオ

ゝ————ッ♡!!?!?♡♡♡♡♡

デーパーキスをしてやれば陶醉し切つてがつつきまくり、それを傍で見て余計に発情するザコ雌が耳元でやかましくせつつくのも鬱陶しく感じたのか。男は荒っぽく雑な

手つきで、重力に引かれてクツソ重そうにぶるんっ♡ だっぶん♡ と垂れて揺れる2匹の淫靡過剰な重長乳をふん掴み、自己主張の激しいクソデカ乳首を握り潰して思いつ切り下に引き延ばした。

いきなりの苛烈な乳首虐めにローゼとクオーツは揃って目をひん剥き、口を伸ばしてなっかがい蛇舌をべっろんべろん♡ に振りたくって極上のマゾアクメを貪る。

そんな飼主とマゾ犬2匹の下敷きになり、尊厳も何もかも踏み荒らされてそれでも延々とアクメ地獄が続くネフライトは、脳みそを濁流のようなドマゾ快樂でぐっちゃぐちゃ♡ に掻き混ぜられながらイキまくっていた。

# #33 残念喪竜はりア充種族の夢を見るか 5

「くっほ……♡ うっおキクっ♡ クソザコ乳首いつギユツ♡♡♡ さ、最っ高  
 ……♡♡ 一生主様に飼ってほしいです……♡♡ つくんおオ、くくくツ、??♡♡  
 ♡」

「おっぐおツ……♡♡ ふーっ♡ ンフーッ♡♡ あ、主様あ……♡ わたくし、本當  
 に幸せです……♡♡ 心から愛しております——のおオ、ツ、♡♡♡」

「ほぎゅ……♡♡ ふっふっふっひゅ……♡♡ んちゅ♡ ちゅまつちゅぷれりよくく♡  
 ♡ オ、ツ、♡♡ くっほおくく……♡♡ も、ゆるじで……♡♡ ぢぬ……♡♡ た  
 しゅけへ……♡♡——んオっぎゅっイツッグッ……♡♡♡♡」

初めて会った時はそれはもう凜々しく、気高く、美しく——神々しさすら感じられた  
 誇り高き四元竜。全くもって非の打ち所がない、女神も霞む美貌と絶対的強者の威光は  
 どこへやら。

こうして乳首を虐め潰してやれば無様に鳴き喚き、言葉汚く蔑んでやれば震えて悦  
 び、モノ同然に甚振ろうとその頑丈さ故に気にも留めずイキ狂ってマゾ潮を嘖きまく





周り、耳とその中に至るまで、まるで磨き上げるかのように卑猥に蠢く長蛇舌で余すことなく舐り回していく。

「そ、それでは失礼いたします……♡♡♡ んんっ……?♡♡ でつつか♡♡♡ すっご……♡♡ やっぱり大き過ぎます、主様……♡♡♡ んおっ♡♡♡」

名家のご令嬢にあるまじきガニ股を惜しげもなく披露して男に跨ろうとするクォーツアイトだったが、あまりに巨大かつ禍々しい肉塊を啜えるために頭は低く、そしてたつぷりと肉の乗ったデカ尻を天井に向けて高く高く吊り上げなければならず、卑猥かつ無様極まりないチン媚びポーズを取らねばならなかった。

「むー!? ふんぐーー!!」

「黙って舐ってろ」

「ぴっ?? ——ほんギユのおオ、ツ、ツ、??!?!♡♡♡♡♡♡」

そして、完全に顔面に蓋をされたネフライトが必死に騒ぎ立てるが男を余計にイラつかせるだけであり、ローゼフラムにもたれかかる男でも余裕で手が届くクソデカ長乳を引っ掴まれ、先端でぶるっぶる♡♡に自己主張するザコマゾ乳首をダルそうに抓り潰されてマゾアクメをキメまくる。

「い、挿入れますわ……♡♡」

「さっさとしろ」



主に視線を向けた。

その先にあつたのは、懨然としてこめかみに青筋を浮かべる男と、なんとも言い難い表情を浮かべたローゼフラムであつた。

「……」

「あ、主様……?」

「クオーツ……気持ちにはわかるが……」

主の沈黙と良く知る仲間の言葉の意味が分からず、粗相をしてしまったのかと困惑するクオーツアイトを余所に、男は無表情に自分に跨る見事にくびれた腰をがっしり掴み、思いっ切り下に引き込んだ。

「ふお?!」

「——☆▽#≡\$○±▲※\$&?!?!」

「ひっ♡」

ぐつつぽッ!! ぐぢゅづぢゅつつ—— つゴリゆりゆりゆんんッッッ  
 「——ひゅ♡♡ ……~~~~~~~~つぐんのごっほひようおオッッッ  
 ?!!!?♡!!!!♡♡

♡♡♡♡」

「ぶっひゅおおオッ?!?!♡♡♡♡♡」

「うっわえっぐ……♡♡ 私もあんなだったのか……おイツグ♡♡ 思い出しただけで

いぐっ♡♡♡」

日に日に人外じみた力を振るうようになるヒモ男によって秘唇から胎、鳩尾に至るまで力任せに凶悪肉槍でブチ抜かれ、無様過ぎる間抜け面とオホ声絶叫を鳴き散らかす水晶竜様。

そして、現在進行形で使い潰されていく座布団代わりの飄翠竜様もまたアホ程情けない豚声をあげ、苛烈且つ淫蕩極まりない光景を男の背後から眺めるローゼフラムは自分の翩られていた姿をクオーツアイトに重ねてマゾアクメをキメていた。

「ごちやつっ!♡ ぶぢゅっ!♡ ポリユリゅんっ!!♡♡♡ ぐほっ♡♡♡ がっほぐっほ♡♡ ぼぢゅほりゅばっぢゅん!!♡♡♡ ドほっっぐっほほおっっ!!!♡♡♡♡♡♡♡♡♡

「うおおっっ♡♡♡♡♡ ぐっお!?♡♡♡ やべっ♡♡ ぶぎやつ♡♡♡ ひっぎゅほぎやぎやつっ!!♡♡♡♡♡ ゴれぢぬっ♡♡♡ 死♡♡♡ くんのおおっ!ー!ー!ーっ

「ッ♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

「ぶぎゅ♡♡♡ ほぎよ♡♡ ぐっお♡♡♡ うっおやめ♡♡ っごおおっっ♡♡♡ ちゅぶれっ♡♡ ちぬっ♡♡ ぶぎやぎやアッ♡♡♡♡♡」

「半分しか、挿入って、なかつただろうがこんのザコ雌があ!! 舐めてんのか? あア!?!」

ぐっほがっほっ!!♡♡♡ っごぢゃ!♡♡ どっぢゅぐどっぢゅっぢゅん!!♡♡♡ ば





「ひゅっ……♡ かひゅっ……♡♡ はひ……でへましゅ♡♡ も、もう何個プ  
 チュったかわかりましえん♡♡♡ ——グっおやべへ!!♡♡♡ どちゅどちゅ  
 りやめ!♡ 子宮ド突がれでいつツグ!!!♡♡♡ うおオ、くくくツ、♡♡♡ |  
 —おいつぐ!♡♡♡ ぐっオ、まりやプチュるツ、♡♡♡ ひっ♡♡♡」  
 ぴゅく♡♡ ぶく♡♡ ぴちぴち♡♡

「オ、ッ?♡♡ オ、ッ??♡♡」

ぴゅくびちゅ……♡♡♡ ぶつくうく……♡♡♡ ——ぽつつっこん♡♡♡

「ぐっおオ、————ッ、ッ、??!?!♡♡♡♡♡♡」

「……♡♡♡ お……♡♡♡ ふぎゅ……♡♡♡」

「ふーっ♡♡ ンフーッ♡♡♡」

卵巣を子宮ごとひしゃげ潰され、精液で膨れた胃も何もかも圧迫されて強制排卵アク  
 メを叩き込まれるクオーツアイト。もう鳴くことさえままらなくなってきたザコマ  
 ゾクツション状態のネフライト。過激どころではない眼前の繁殖交尾ショーを食い入  
 るように見つめ発情しまくるローゼフラム。

繁殖欲しか頭がない4匹は蛭螭が絡みつき合うように汗と愛液でぐっちやぐちや♡  
 にぬめり、湯気が立ち昇りそうな程の熱気と、濃密過ぎて媚薬のような甘ったるい性  
 臭に包まれていた。







最早檻樓切れ同然のネフライトはピクピクと震えるばかりで、か細い鳴き声をくぐもらせるだけであった。

ごびゅッ♡♡♡ どつぐどつくん♡♡♡ びゅちっ♡♡♡ びゅちちッ♡♡♡ ぶ

びゅっ♡ どぼぼッ♡♡♡ びゅぐりゅ!!!♡♡♡ ごっぽごっぷん♡♡♡

「うおお、くくく………ッ♡♡♡♡ ぐえッ♡♡♡ ごびゅ♡♡♡ むおお………ッ

♡♡♡ も、ほんひよに………むりい………ろー、ぜ………さん♡♡♡ うっぷ♡♡♡

「え………ま、まさかクオーツ、貴様!!? やめっ——ぐむう?!?」

「ふびゅ♡♡♡ ぐっ………ごえええええッ♡♡♡ ごっぽ♡♡♡ うっびゅ♡♡♡

ぐオ、つえうぼろろろッ♡♡♡♡♡♡♡♡♡

「ひゅっ!?!♡♡♡ ふっごおおえ♡♡♡?!♡♡♡ やべっぐおお♡♡♡?!?!♡♡♡ ——○

×△▽※±?!!??

「あー………まだ射精る」

「——ほによおお、ッ?!?!♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

ぐびゅッ♡♡♡ ぶぼっびゅぼっびゅ!!♡♡♡♡♡♡♡ どつぐどつぐん♡♡♡ びゅちち♡♡♡

びゅつとびゅとと♡♡♡♡♡♡♡ びゅびゅりゆる♡♡♡♡♡♡♡ ぼっびゅぐびゅる♡♡♡♡♡♡♡

「おお、ツんにい♡♡♡♡♡♡♡ おイッグイッグ!!!♡♡♡♡♡♡♡ ウッオ孕むっぐおお、ッ、???♡♡♡

♡♡♡♡♡ ほっぎゅギッッグ♡♡♡♡♡♡♡ 受精アグメぎつつっ♡♡♡♡♡♡♡ ほんぎゅッ!!

♡♡♡♡♡  
「♡♡♡♡♡」  
♡♡♡♡♡  
♡♡♡♡♡  
びっ  
♡♡♡♡♡  
♡♡♡♡♡  
びんごん  
♡♡♡♡♡  
♡♡♡♡♡  
♡♡♡♡♡  
つぐんのゴおオ  
ー  
ー  
ー  
ー  
ツ  
ツ  
ッ  
ッ  
!?!?!?  
♡

## #34 残念喪竜はリア充種族の夢を見るか 6

「ひゅー♡ かひゅー……♡♡ おいつく……♡♡ ぐぶつ……♡♡ おつ♡ おつ♡  
うっお♡ のお~~~~♡……♡♡」

「ごえ♡ ぐつ……♡ぶ♡ ごぼ♡♡ ぐっおオ……♡♡ ——んびゅ♡ ツつぐごえ  
えええええつぷっ♡♡♡♡♡♡」

口から戻して胃の中身が減るよりよっぽど多く、びゅつとびゅど♡♡ に子種汁を子宮に排泄されまくり、胎だけが異様に膨れた無様な姿で伸びるクオーツアイト。

そんな仲間にあるうことか口移しでザー汁をたらふく流し込まれ、盛大にザーメンゲップを披露してしまうローゼフラムもまたベッドの上でアホ面を晒し、膨張済みの孕み袋に加えて胃まで拡張させられる始末だった。

「きゃー、と——」

「お……♡♡ ひゅつ……♡♡ ぶぎゅつ……♡♡ んおオ……♡♡♡♡」

ようやくと一息ついたとでもいうように、男がゆつくりと重い腰を上げる。

長時間、顔面を雄の臀部と睾丸に押し潰されるといふ弁舌に尽くし難い蛮行で被虐と



精力だけではなく、なにやら腕力まで人外じみて来たヒモ男。とんでもない硬度を誇りそうな角と長大な尾に羽まで持つ竜人族はその分人間より数段重量があるが、片手で難なくザコ雌ドラゴンを吊るし上げにしてしまう。

「ひぎゆ……♡ やら……♡ 見ないで……♡ こんな顔……おオ、ツ、!?♡♡♡♡♡」  
「見るか見ないかは俺が決めるんだよ」

「ふぎゆ♡♡ で、でも……♡ ただでさえ醜いのにこんな……み、見苦しいだろう……♡……♡……?」

この期に及んでまだいやいやを続けるネフライトに溜息が出るが、男は最後の言葉に一段とイラついた。仕方ないとはいえ、どれだけ骨の髄まで劣等感が沁み込んでいるのだろうか。こんなトンデモ美人が地球でそんなこと言ったら恨まれるどころか呪われそうだ。

「だ、だからわざわざ見なくても、顔布で隠すから——んむう!! ふみゆ?♡ んちゆ♡  
ちゆふ♡ ちゆまつ♡ ら、りやめえ♡♡ あゆじしやま♡ 汚れちや♡ んむおオ♡  
っ♡♡♡♡」

やはり根本的な意識改革が必要だ。兎にも角にも、一先ず男の前でくらは劣等感に苛まれるようなことが今後ないよう矯正してやらねばなるまい。

——などど至極真つ当なことを考えてはいるがそんなものは極一部で、男は無限に湧

いてくる性欲を発散するためにアプローチを変えてみることにした。

嬉しそうにがつついてくる飄翠竜様がどんな姿を見せてくれるか楽しみではない男に、急に優しくされて幸せ一杯のネフライトは、もちろんそんなことは知る由もないのであった。

「ふぎゅッ、♡♡♡♡♡　むおオ、ッ、♡♡♡♡　おツ♡　ほっ♡　ふむう♡♡　んっちゅ♡  
ちゅまっちゅぶぽ♡♡　くっほオ、くくくッ、??♡♡♡♡」

愛おしい男に抱きすくめられながら頭を撫でられ、優しくゆったりと、絶妙に緩急を付けられながらの甘い口づけに脳みそをとろとろ♡　にふやかされてしまったネフライト。長年の妄想であった己を好いてくれる雄との蕩けるようなキスが現実となったことに彼女の幸福度はカンスト振り切つて脳内麻薬が限界突破していたのだが、生憎この男はそこまで優しい男ではなかった。特にベッドの上では。

「おオ、っぎゅ??♡♡♡♡　ふっほイグ♡♡　むおツ?♡♡　おっやめ♡♡　うつおイツ♡♡♡　いっぐいっつぐンッ♡♡♡　ほっひよ??♡♡　んぎゅうッ♡♡  
ふーっ♡♡　ンフーっ♡♡♡♡」

ひたすらに甘い口づけを堪能して幸せ絶頂だったのも束の間。

男はおもむろに耳から首筋、大きな乳輪に脇、美しく引き締まった腹部からすべの太ももへとフェザータッチを繰り返してはまた戻るといふ、これまでの苛烈なそれとは随分と違った軽い愛撫をひたすら続けていた。ネフライトが軽い甘イキはできても深いマゾアクメまでは決してキメられないほどに弱い刺激のみであり、彼女が切なそうに身悶えて唇を離そうものなら頭を押さえてそれを遮り、延々と続けられる口づけに2人の唇は既にふやけきってしまったている。

「んお♡ あ、あうじしやま……♡♡ も、ゆるちて……♡ ふんもお♡♡ んつちゅ♡  
ちゅつぱちゅつぱ♡♡ ぶちゅ♡ ちゆるつちゆるる♡♡ ふっほ♡ おおくく  
く??♡♡」

男が触れる箇所もこのマゾメストドラゴンにとつては十分に性感帯だが、これまでのような長く深い絶頂をもたらしてくるものではなく、しかも軽く触れるだけなのでもどかしいことこの上ない。

所謂寸止め地獄を味合わされているネフライトだが、もつと虐めてもらいたくて訴えようとしても甘く蕩けるキスの嵐に骨抜きにされてどうすることもできず、ひたすら浅く軽い甘イキを繰り返すしかなかった。



「くっひゅ……♡♡ ふひゅいいつぐツ♡♡♡ おお……?!♡♡ むおオっ♡♡ おっ♡  
 おっ♡♡ ほっ♡♡ ほっ♡♡ ふみゅ♡♡♡ んっじゅじゅっば♡♡ むちゅぢゅる  
 ぢゅるぢゅちゅぢゅりゅりゅりゅりゅ♡♡♡ おー♡♡ ふっほ♡♡♡ ほっひよへえ♡  
 ♪♡♡♡」

一体どれだけ時間が経ったのか。長かったのか短かったのかすらわからないネフライトは焦点の合わない目でひたすら続けられる甘イキ寸止め地獄に耐えていた。

離すことを許されない甘く深い口づけと、角や乳首、秘所に肉豆には一切触れられずその周囲をなぞられて焦らされ続け、彼女の腰は破滅的なマゾアクメを欲してヘツコヘツコ♡ のカツクカク♡ にへこついて下品にも程があるガニ股ドマゾ腰振りが止まらない。唯一強めの刺激が得られる舌をぐっちよんぐっちよんに絡め合う蛞蝓お口セツクスと、男の気紛れで腹の上から子宮と卵巣をさすられる至福の悦楽に必死に食いき、救いようのないハメ乞いよわよわアクメを貪り続けていた。

## #35 残念喪竜はリア充種族の夢を見るか 7

「ぶひゅっ♡♡ かひゅっ♡ うおオっ……♡ ひっ♡ おっ♡ おっ♡ お  
っ♡♡ んのお~~~~…♡♡」

底意地の悪い男の掌の上で散々に弄ばれ、深いマゾアクメをキメたくてもどうにもならないもどかしさに狂いそうになりながら、ようやく解放されたネフライトが白目を剥いて背中からベッドに倒れ込んでしまった。

「伸びてないで媚びるくらいしろ」

「うぎゅッ?!♡♡♡ ふおっ♡ ご、ごめんしやい……♡♡ くっふ、うう~~~~  
……♡♡♡♡」

仰向けで放心状態のネフライトに苛立ちを募らせる男が怒気の籠った声で命令すると、骨抜きにされて力の入らない飄翠竜様は弱々しく両脚を抱え持つて恥部を露わにする。

所謂まんぐり返しのポーズを取ったのだが、何故か雄々しくも美しい尻尾が器用に動いて肝心の部分を覆い隠してしまった。





「この程度で死ぬわけないだろ。さっさとイキ死ね」

「ほっへ??♡♡♡♡ ——ぶぎよっんほおっ。っ。っ。っ。??!??♡♡♡♡♡♡♡♡」

ぴゅくっ……♡♡♡♡ ぷるっ♡♡♡♡ ぴゅくっひゅくっ……♡♡♡♡

「おっ?♡♡♡♡ ふおっ。っ。っ。♡♡♡♡ やっ♡♡♡♡ らめっ♡♡♡♡ また出ちやあ……♡♡♡♡」

ぐりっ♡♡♡♡ ぐりゅんっ♡♡♡♡ ぐつみゅぐう~~~~♡♡♡♡

「ほおおっ。——っ。っ。っ。??!??♡♡♡♡♡♡♡♡ 卵♡♡♡♡ ぷちゅりゅ♡♡♡♡

「こんな酷いごどされへえっ♡♡♡♡」

「さっさと出せ」

「ぶ。お。っ。っ。??!??♡♡♡♡♡♡♡♡」

どずんっ、と鈍い音がネフライトの腹から響く。

至極面倒臭そうに、それでいて勢い良く、欠片の容赦も無く雌の胎を強烈にスタンプする男の暴挙に、飄翠竜様は踏み潰されたカエルよりも間拔けな声を腹からひり出し、エメラルドグリーンの美しい瞳がぐりんっ♡とひっくり返ってしまった。

「ぐっほおっ。っ。っ。!!?♡♡♡♡♡♡♡♡ うっおっ。これギツツ♡♡♡♡♡♡♡♡ ふぎやっ。♡♡♡♡ ぶ

ぎいっ♡♡♡♡♡♡♡♡ おっ。っ。っ。プチュるっ♡♡♡♡♡♡♡♡ くそぎこ卵子ぷちゅりましゅっ♡♡♡♡♡♡♡♡

どすっ♡♡♡♡ だごっ♡♡♡♡ ぐりゅん♡♡♡♡ ぼぐおっ♡♡♡♡

「うおおっ。っ。??!??♡♡♡♡♡♡♡♡ ぴぎゅっ♡♡♡♡ ぼぎやぎやっ♡♡♡♡♡♡♡♡ 踏みしゅぎっ♡♡♡♡

♡ もつゆるじでッ♡♡♡ 卵怖がつてまじゅッ♡♡ ぬっお??♡♡♡ ひっ♡  
 ひっ♡ きつつっ♡♡♡ ぷちゆれにやいのギツツツいっぐいくいぎゅイギユ!!!♡♡  
 ♡♡♡」

連続で踏み荒らされると引つ込むのかなんなのかダメらしく、男の理不尽極まりない怒りを一身に受け続けて蹂躪し尽くされるネフライト。

どう考えても無茶苦茶な仕打ちを受けているにも関わらず、心底嬉しそうなアホ面を晒してクソ長乳首は勃起し切り、踏み付けられる度にマゾ潮を撒き散らしては爪先がピンンッ♡ と突つ張つて快楽に溺れる姿が余計に男の憤慨を誘ってしまう。

「チッ……出せつつつてんだろぅがッ!!」

「んぎやぎやアッッッッ??!?!?!♡♡♡♡♡♡♡♡」

終いにはズドンッ!! と男の足が胎にめり込んで子宮と卵巣を踏み潰されてしまい、無様過ぎるドマゾ喘ぎを喉から絞り出し、ぶちゅッ♡♡ と音が聞こえそうな排卵アクメに脳みそをマグマのような快樂信号にぐっちやぐちや♡ に焼き切られてしまった。

「ひゅっ……♡ かひゅーっ……♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ のっおいきゅ

♡♡ おっ♡♡ おっ……♡♡♡」

ぐみゅっ……♡♡ ぐちやつべちよ♡♡

「ふおっ??♡♡♡ おによっ♡♡ あっちゅ♡♡ おっ?♡♡ おっ??♡♡♡」



♡♡ やべへっ♡♡ 死ぬ死ぬッ♡♡♡♡ ————ぶぎゅっ??♡♡♡♡♡♡

「死ぬ死ぬうるせえんだよマゾメスガ」

「バ）え……………♡♡♡♡ ふひゅっ……………♡♡♡♡ しゅ、しゅびばしえ……………♡♡♡♡ オ、ッ♡♡

「これいグッ……………!!♡♡♡♡ 首……………締……………♡♡♡♡ ぬっオ、ッいぐいぎゅッ♡♡♡♡」

嫌々ほざくネフライトの秘裂を無理矢理ブチ抜いた先の膣内は熱々のとろつとろ♡  
 にほぐれ切っており、無数の肉ヒダによる絡んで舐り回すような極上の締め付けに剛直が溶けてなくなりそうな快感を味わっていた男。

だが、散々焦らし虐め抜いて鬨り続けたからか、半狂乱に陥って叫び続けるやかましいドマゾ上位種様の美しい喉笛を、渾身の右手で思いつ切り締め上げて黙らせる。

それでも幾分か苦しそうにするだけで、あまつさえ感極まつて悦に浸りイキ散らかすクソザコイケメンドラゴン様。最早無限に狂気と獣欲を煽られる男は、空いた左手を力一杯握り締め、無防備に晒されへこつきまくる腹部へと思いつ切り振り下ろした。

ドゴッ♡!!♡♡♡♡ ボリュッ!!♡♡♡♡ ぼぐっボゴオッ♡!!♡♡♡♡ ばぢゅっドちゅちゅ!!♡♡♡♡ ころりゅん♡♡♡♡ ぼりゅりゅん!!♡♡♡♡

「&#x%\$?<?#(##♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ ぐえッ??♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ おびよッ!!♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ ぬオ、ッ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ ツグいぐイギユいイツツぎッ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」









美しく引き締まった彫刻品も霞む曲線美を描いていた腹部は、見る見るうちに膨らんで歪に膨張し続け、あつという間に支配者たる雄の苗床兼精液便所としての無様な精液ポテ腹を晒すに至った。

極悪ちんぽから延々排泄され続ける精虫がぎつしり詰め込まれたザー汁は、勢いのままに子宮を内側からボッコボコ♡に荒らし回って逃げ惑う卵を貪り尽くし、全くもつて物足りないとしても叫ぶかのように、卵管を押し通って直接卵巣にまで殴り込んでしま

う。  
 「おによおオッ??!?!? のおっつきゆっ♡♡♡ ぎでりゆッ♡♡♡ ネバ重  
 ざーめんっ♡♡ ぶりゆぶりゆぐりゆうおオッ♡♡♡ ウツオあつづ♡♡  
 あつちゆあつちゆッ!!♡♡♡ ぬおオッ♡♡♡ 犯されでゆっ♡♡♡ たまご♡  
 クソザコ卵子ぷちちゆぷちゆ♡♡ おせーし様にボコされでいグいきゆっッ!!♡♡♡  
 ♡♡ んほおっ??♡♡♡ ぶちゆぶちゆッ♡♡♡ 卵巣もぶちゆられでイギま  
 しゆッ!!♡♡♡ ぐっほいぐいきゆイギユッ♡♡♡ いつきゆイツギゆ  
 ンッ♡♡♡ うおオッ♡♡♡ ツ♡♡♡ ツ♡♡♡ ツ♡♡♡ ツ♡♡♡  
 ????

「んうおつ……♡ ほぎゆ……♡♡ ♪ ふひゆ♡ ♪ ふぎゆ……♡♡ ♪ おつほ……♡ ♪  
 おオッ……♡♡♡♡」

ぴくっ♡ ぴくんっ♡ と、まるで打ち上げられた小魚のような痙攣を繰り返しながら、膨れた胎に圧迫された尿道からぶじゅっ♡ びじゅじゅっ♡ となっさけない音を立ててマゾ潮を噴き散らかし続ける飄翠竜様。

「あ……最っ高だわこのクソザコオナホ」

「くっほ……♡♡ んおオ……♡♡ あいつく……♡♡ イックイック……♡♡♡♡」

そんな上位種様を散々に貪り尽くしたヒモ男が満足そうに息を吐くと、最早戦斧かと疑うような剛直を力んで震わせる。たつたそれだけでネフライトの雌膣は嬉しそうにわなないて収縮を繰り返し、絶頂に達して潮を吐き出す。

どこにそれだけの水分を蓄えているんだと男が不思議に思う程に噴き出しっぱなしのソレのせいで、キングサイズの立派なベッドはもうびっちょやびちゃであり、豪華な天盖にまで無数に沁みを残す有様であった。

「おい」

「ほおオ……♡♡ はへっ……♡♡ んひ♡ ♪ ほっひよ♡♡」

「ちっ……まだ尿道に残ってんだろうが」

「んぴっ??」

「ふぎよっほおオッ……♡♡ ♪?!?!? ♪♡♡♡♡♡」

竿の奥にある残尿感に似た感触に苛立ちを覚えた男は、いつも通りに理不尽な怒りを、眼下で伸びてほぼ失神しかけのクソザコドラゴン様にぶつける。力なくへたった尻尾を膝でぐりぐりと押し潰し、両手はアホみたいに伸びた長乳首を抓り潰し、従順に反応するドマゾオナホを使って尿道に残った別格に濃い雄汁を絞り出そうとする。

「ぐおお、ツ、?!♡♡♡♡ やべっ♡♡ ごっおギツツ!!♡♡♡♡ ぐりぐり♡ ぢぐびどれりゆうおっ♡♡♡♡ んげっ♡♡♡♡ ひっ♡♡ ひっ♡♡ まだでへりゆ……♡♡♡♡ もっゆるぢで——おお、っあっちゅっ♡♡♡♡ あっづあっつぢゅっ!!♡♡♡♡ うおお、くゝゝゝゝ……♡♡♡♡♡」

極太肉棒の奥に残った最後の一塊とでも言うべき特濃残り汁をひり出させた頃には、イケメン王子様は見るも無残なアへ顔を晒し尽くして失神してしまっていた。

「ネフライトめ、酷い顔だな……♡♡ でも幸せそう……♡♡」  
 「幸せに決まっていますわ、漸く雌の悦びを手にしたんですもの♡」

ローゼフラムのお前が言うな感満載に引っ掛かりつつ、まあどうでも良いかと気を失ったネフライトから鬼の金棒もかくやと言った肉杭を引っこ抜くヒモ男。と、抜こうにも生膣がクソザコのくせに惨めに吸い付いてくるのにイラついたのか、舌打ちしながら勢い付けて強引にぶっこ抜く。

ぶりゅりゅっ♡♡♡♡ ずろろりよぐつつボンッ!!♡♡♡♡ とエグい音を立てて

剛直が引き抜かれて行き、猛烈な刺激に無理矢理覚醒させられたネフライトが「おぎよッ、?!?!♡♡♡ んぎよぎよオツ、ツ、?!?!♡♡♡♡♡」と、無様極まりないオナホ声を腹からひり出して気絶してしまった。

「主様は本当に鬼畜ですね♡ ネフライトのこんななつさけない姿は初めて見た……♡」

「仕方ありませんわ♡ 主様にかかれば世の雌は須らく屈服させられてしまいますもの♡ どれだけ力があれど、主様には敵わないのだと思いい知らされましたわ♡♡」

「クオーツの言う通りだな……♡ さ、主様。我らを孕まされて大層お疲れでしょう、今食事と湯浴みの準備を——おお……?!?!♡♡♡」

何を勘違いしているんだ、このドマゾオナホどもは。

もう終わった気である紅炎竜様の、正気を取り戻してこちらを見上げてくる神美の如き麗しいお顔を、今にも暴発しそうな程に猛った肉竿置きとして使うヒモ男。

突然の事態に困惑し切っているのか、「ふおお……?!?!♡♡♡」と心底間抜けな声を上げ、それでもおちんぼ様置き場として使っていただけの悦びを嘔み締め出したでしょうもないドマゾドラゴンは鼻息を荒くして濃密性臭で脳と肺を満たし、自然とちん媚びガニ股エロ蹲踞のオナホポーズをとって即マゾアクメをキメてしまう。

「ウォ、ッ?!?!♡♡♡ ぐっほギッツ♡♡♡ 匂いギッツ♡♡♡ おちんぼ様とギトギト

ザーメンと雌汁のブレンド臭♡♡♡ ほっによごれギグッ♡♡♡ うっおくつつさ  
 ♡♡♡ 腰へ♡♡♡ 揺するの止まんにやい♡♡♡ ヘコヘコちゃん媚び♡ マゾ雌アピー  
 ル♡♡♡ もう孕ませていただいたのに♡♡♡ ぬっおイツグ♡♡♡ いっグいぐイ  
 ギゅッ♡♡♡♡♡♡♡

いきなりの蛮行にも即座に屈服してハメ乞いアクメに酔い痴れるローゼフラムを見  
 下しながら、それを間近で見ても「あつ……♡ え？♡ ああ……♡♡♡」と言葉にならな  
 ず渴望の眼差しを仲間に向ける、究極の美を誇るクオーツアイトを眺めて悦に浸る。

しかしながら、散々こちらの性欲を刺激するだけでは飽き足らず、媚薬酒と過剰回復  
 で無茶苦茶にして来たクソザコドラゴン様が勝手に終わらせに掛かってきたのは舐め  
 腐っていると言わざるを得ない。

沸々と湧いてくる怒りと無限の獣欲がヒモ男を追い立て、紅炎竜様に乗つけたままの  
 鎌首もたげた肉棒がザコ雌の荒い鼻息でくすぐられる煽りに脈動する度、「ひっ♡  
 おおっ？♡♡♡ ふーっ♡♡♡ ンフーっ♡♡♡」と発情しまくるクソザコドラゴンに怒  
 りが収まらない。

「何勝手に終わって気にいるんだ？」

「ひぎゅ♡♡♡ しゅ、しゅびばしえん……♡♡♡ おっイク♡♡♡ 怒られてイギユッ♡♡♡♡♡」  
 ちよつと語気を荒げただけでぶじゅっ♡♡♡ ぴゅくくっ♡♡♡ とイキ散らかす上位種



様に恐ろしいほど征服欲を刺激されつつ、ヒモ男は続ける。

「こっちはまだこんなのだろうが。誰のせいでこうなってるんだ？ あア？」

「おびよっ♡ おちんぼ様でべちべち♡♡ お顔べちべちやべへっ♡♡ おっほくっつ

せ♡♡♡ おちんぼ臭クツツサ♡♡ ぬッオ♡♡ まりやいぐっ♡♡♡ イッグイッグ

……ッ♡♡♡

雑にちんぽを掴んで彫刻品すら恥じ入りそうな美貌を蹂躪してやると、それだけで屈服マゾアクメをキメまくる紅炎竜様に大いに苛立つ。

「何無視してんだ……??」

「うおッ♡♡♡??」

「角折るぞ?」

「んぎやぎやッ♡?!♡♡♡♡♡ ぐっおっつっよ♡♡♡ 力ぢゅよいイツ♡♡♡ ご

べっ!♡♡♡ ごめんなじやい!!♡♡♡♡♡ おッ!♡♡♡ んぎやアッ♡♡♡♡♡ わたしっ♡

「わだちのせいだしゅッ♡♡♡ バカみだいに回復魔法かけまぐりまちだっ!!♡♡♡♡♡」

「ほぎよッ♡?!♡♡♡♡♡ お♡♡♡……♡♡♡ あええ……♡♡♡ そ、そうれしゅ……♡♡♡ バ

カ雌ゆるぢでえ……♡♡♡♡♡ ほによッ♡?!♡♡♡♡♡ うっほおオ♡♡♡♡♡ ???!♡♡

♡♡♡♡♡

「そ、そんな……♡♡ もう力がそんなに……？♡ ああ……主様……♡♡ わ、わたしも、もつと黽つてくださいませ……♡ もつと惨めに♡ 屈服させられたいのです♡♡」

何やら本気で人外じみて来た自分の力に内心引きつつ、それでもこのクソザコオナホドラゴン様を甚振る愉悦は止められない。

相も変わらず虐げてやれば返答もせずにマゾアクメを貪り散らかすドマゾオナホの角を思いつ切り締め上げ、少しばかり捻じめるように力を加えてやると鼻水を垂らしながら許しを乞うてくる紅炎竜様。

そして、最早ヒトの範疇を超えた力を振るい出して仲間を片手間に捻るようになってしまった己が主の、それはそれは底冷えするような嗜虐の眼差しに釘付けになるクオートアイトもまた、竜人族としてこれ以上ないくらいの屈辱を味合わされているにもかかわらず悦びマゾ潮を嘔き散らかすローゼラムを心底羨み、救いようのないマゾ快樂の沼に嵌ってハメ乞いするしかないのだった。

# #37 残念喪竜はりア充種族の夢を見るか 9

「ひっ♡ ひいつ……♡♡ あ、主様！♡ 待って♡ お待ちください♡♡ も、もう子宮いっぱいなんです♡ ほ、ほらっ♡ お腹たつぷたぶ♡♡ 子袋ばんツばんなんです♡♡ お腹おつも♡ クソザコ卵子♡ 大切にとつておいた卵も全部食べ尽くされちゃいました♡♡ こ、これ以上はあ……♡♡」

受け答えも碌にできない竜人族の宰相様（的ポジション）の角をへし折りそうな勢いでふん掴んでわからせ、今はまんぐり返しのポーズをとらせてクオーツアイトに抑えつけさせ、バツキバキの肉槍で威嚇してやる。

そうすると本気で怯えた風に口答えするローゼフラムは、それでも言葉の節々から期待の色が隠せておらず、表情もへらへら♡ と情けなく媚びへつらつてとても最強に近い上位種とは思えない有様であった。

「ほーん」

「ふーっ♡ ンフーーツ♡♡ あ、主様♡ お許しくださいっ♡ もう無理なんです♡ ほんとに無理♡ 無理無理むーりっ♡♡ せっかくくつついた卵♡ 大事な大事な

私の赤ちゃん♡ これ以上あのギットギトザーメンぶりゆぶりゆ♡ おせーし様排  
 泄されたら潰れちゃいます♡♡ おっイグツ♡♡♡ 思い出したりやいぎゅイギユツ  
 ♪♡♡♡♡♡」

許しを乞うているのか煽っているのか全くもって訳が分からん。

男がそう思うくらいには言っていることと表情や身体の反応が無茶苦茶なローゼフラ  
 ムに嘲笑すら浮かび、それを見た紅炎竜様は嘲られているにも関わらず余計にマゾ潮ア  
 クメをキメていた。

「ひっ♡ ふひっ♡♡♡ おおっ……お潮とまんや……♡♡♡ やりや♡ あかちゃん  
 ♡ わらひのあかちゃんう……♡♡♡」

弱点の角を虐めすぎたせいで本気で壊れてしまったのかなんなのか、支離滅裂に讒言  
 を繰り返しながらも、大量に孕ませられて着床しているであろう孕み袋を愛おしそうに  
 撫でるローゼフラム。

初めて会った時のあの凛々しく、気高く、流れる真紅の長髪の美しさたるや……。  
 神々しさすら感じられるほどに後光を浴び、威厳漂う紅炎竜様のあまりの変わりよう  
 に、背筋をゾクゾクとしたものが駆け抜けるこの感触。

「……ま、そういうことなら仕方ないですね」

「えっ?♡ あ、あっ♡ や、やった♡♡ 主様♡ ありがとうございま——」

「じゃ、別の穴使いましうか」

「——す？」

「や、やだっ♡ やだやだやだッ♡♡ 離せクオーツ♡ そんなとこ汚い♡♡

ひっ♡ ひいっ♡♡♡

「いけませんわローゼフラム♡ 主様に逆らうだなんて……♡♡ これはきつくいお仕事置きが必要ですね♡♡」

「だ、だって♡ お、お尻の穴だなんてそんな……♡♡」

「本当に汚いんですか？」

「あえっ……？？」

魔法もあるこのトンデモ異世界で、しかも単体がヤバい力を持つ竜人族なのだ。身体の汚れくらい余裕で何とかなるだろう。

ベッドの隅で今も伸びてるクソソザコ緑を散々顔面クツションにした時も、仄かに魔力めいた力が働いていたような感じがあつたから、多分勘違いではない。

その証拠に、俺の問いに対して言い淀んで顔を反らす、普段の凛々しさなど欠片もな

く可愛らしい紅炎竜様と、厭らしく憎たらしい笑みを浮かべた水晶竜様を見比べて確信を持つ。

「それはもちろん……♡ わたくし達は原始の力を操る竜人族……。身体の間から隅——それはもう内外問わず至る所まで。水浴び湯浴みなどせずとも、魔力さえあらば汚れ穢れとは一切合切無縁にございます♡♡」

「く、クオーツ貴様……！」

「ふふっ……♡ 強く尊く愛しい……。幾星霜待ち侘びた殿方に抱いていただくのです。我らが皆例外なく、常時魔力を張り巡らせて身を清めておくは当然のこと……。そしてその程度の魔法など、竜人族にとっては児戯にも等しいものですわ♡♡」

「あっ……ああ……♡」

恍惚とした表情で語るクオーツアイトの話を聞きながら、激しく脈動しては更に硬度を増し、威圧するかのよう張り詰めていく戦斧の如き剛直をローゼフラムに見せつけていく。

圧倒的存在感を誇る巨根の前にはただただ無力でしかない紅炎竜様は縮こまるばかりで、それでも雌としての本能はしっかりと働いているのか、強い雄に使ってもらおう為のガニ股エロ腰をふりふり♡ 浮かせて揺すつてのちん媚びアピールを欠かすことはなかった。

「ローゼさん？」

「ふーっ♡ ンフーっ♡♡ ……ひ、ひゃい……♡」

「自分の身可愛さに主人に嘔吐くようなザコ雌は、どうするべきですかね？」

「え、えと……あの♡ それはもちろん……♡ に、二度と逆らうようなことがないように……ひいつ!?♡♡ お、お仕置き!♡ よわよわマゾメス叩きのめして♡♡ 上下関係骨の髄までわからせてえ♡♡ ボッコボコに屈服させる必要がありますしゅっ!!♡♡」

オドオドと目を泳がせては媚びへつらう紅炎竜様のはつきりしない態度に苛立ち、虫を見るような目で睨みつけてやれば可愛らしい悲鳴を上げて自らオナホ宣言を叫ぶ。

頭の天辺から爪先まで無様極まりない姿を晒す眼下のマゾ雌が、本当にあのローゼフラムなのかと疑うようなクソザコ蛞蝓っぷりに歪な笑みを抑えられないヒモ男。

そんな主の、心底意地の悪い獐猛な笑顔を見せつけられる度に子宮が痛いほど疼いてしまうローゼフラムは、絶望と情欲がぐちやぐちやに煮詰められたような引き攣った笑みを浮かべるより他になく、「ああ……♡ 言っちゃった……終わった……♡♡」と、無力な小娘のようにへらつく以外にしようのない有様であった。





「ッ??♡♡♡」

「いいから黙ってケツ穴締めろや」

「ほげっ??♡♡♡ おぎゆ……………♡♡♡ 首……………絞め……………グっおいぐイギユ……………♡♡♡

♡ イツツグ……………♡♡♡♡」

いつものようにぎゃーぎゃーやかましいクソザコ竜人族様の首を片手で絞め上げ、万力の如き力を持って黙らせてやる。

どうにも人外の腕力を手に入れつつあるが、この程度ではローゼフラム並の実力者相手だと焼け石に水らしく、多少は苦しそうにするだけで寧ろドマゾ気質相手には良いスパイスくらいにしかないようだ。

つくづくとんでもない上位種様だと感心する。そして、そんなクソつよ種族を一方的に翹って屈服させてしまう息子に感謝しもって極上のアナルほじりを愉しみつつ、嬉しそうに飛び跳ねる、己の精液で膨れた胎を軽く引っ叩いては殴り潰してやる。

ごりゅッ♡♡♡ ぼぢゅッ♡♡♡ べぢッ♡♡♡ バッチイインッ♡♡♡ ぼりゅんッ♡♡♡♡ がボッドゴオッ♡♡♡ こっぢやごっぢやぼっぢゆどぢゆぢゅッ♡♡♡♡ ぼぢゅぼぢゅぼぢゅぢゅんっッ!!♡♡♡♡

「おぎぎゅッ……………??……………♡♡♡♡ ぎよほッ!?!♡♡♡♡ うっおゝやべへ……………♡♡♡♡ ほげっ♡ ぶぎゅっ……………♡♡♡♡ 胎っ♡♡♡ 子宮ッ♡♡♡ 卵びつぐりぢでまじゅッ♡♡♡ 上

も裏もボゴすの禁止ッ♡♡♡ おによおッ?!♡♡♡♡♡」

散々に煽つてもまだ反抗する気力と驚異の頑丈さ具合に感嘆しながら、それを良いことに腰を揺すつて無意識に煽ってくるクソザコドラゴンに沸々と怒りが湧いてくる。

こちらの動きに合わせてヘッコヘコ♡ に浮つく腰を渾身の種付けプレスで叩きのめして固定し、異常に反り返った極悪カリで子宮を腸壁越しにド突き姦す。今一度立場をわからせてやらねばならない。

「このマゾメスがふざけやがって……」

「ほぎよッ?!♡♡♡♡♡ うおおッ?!♡♡♡♡ やめっ♡♡♡ 殴りしゆぎ♡♡♡ ぬおおッ♡♡♡♡♡ ぐっほぎッッッ!!♡♡♡♡♡ ぶぎよおおッ?!?!♡♡♡♡♡♡♡♡」

ギットギトの激重ザーメンが詰まった胎を表と裏からボッコボコに殴り倒され、目を白黒させながらイキ散らかすローゼラム。これまで寸での所で耐えていた膣口が、あまりの暴虐っぷりに耐え切れずに開いてしまい、ぶびっ♡♡♡ ぶびよびよッ♡♡♡ と情けない音を立てておまんこ射精を繰り返してしまう。

「……おこ」

「ひっ♡♡♡ ひいつ♡♡♡、こべんなしや——」

「せつかく詰めてやったのに何吐き出してんだ?」

「——いんぎよっほへえッ?!?!♡♡♡♡♡ あぎやッ♡♡♡♡♡ ほぎいッ!♡♡♡ しょ、

しょんな……♡♡ 無理♡ ごんにやの無理でしゅッ♡♡♡ 我慢なんてむりむり♡♡  
 り♡♡ ぬおオッ、ッ、??♡♡♡ やべへッ♡♡ おにやかボゴしゅのぎんぢっ♡♡  
 ほによッ!?!♡♡♡ うおオ、—————ッ、ッ、?!?!♡♡♡♡♡♡

理不尽を通り越して無茶苦茶極まりない難癖をつけられ罵られるローゼフラムだったが、それでも心底嬉しそうに脳細胞がブチブチ♡ と音を立てて焼き切られる極悪マゾ快樂に溺れてイキ狂う。

腹の上と腸壁越しから滅多くたに殴打されて子宮が跳ね回り、全身から体液という体液を噴き出し続け、到底異性に見せて良いものではない間抜け面を晒し雄の射精欲求をこれでもかと煽り立てる。

最早危険なレベルで溢れ続けるアドレナリンに脳髄から背筋まで震えさせながら、男はこれまで以上に苛烈にマゾメスを責め立てるのであった。



……♡♡ だしゆげへ……♡♡ お尻ごわれりゆ……♡♡ ぐっほ!!??♡♡ お  
 によつ?♡♡ ——んぎやぎヤッ!!♡♡♡♡ ぼりゆぼりゆギツツ♡♡♡♡ ぬ  
 おオ、くくくくくくッ、ッ、?!??♡♡♡♡♡♡」  
 「ひっ♡♡♡ ふーっ♡♡ す、すごい……♡♡♡♡ こんな、こんなあ……♡♡♡ お、つい  
 グッ♡♡♡♡ 見てるらしいぎゅッ、♡♡♡♡♡♡」

完全に脱肛させられながら、それでも容赦なく掘削され続けて間抜け面を晒しまくる  
 ローゼフラムと、そんな仲間の痴態に中てられただけでイキ散らかすクオーツアイト。  
 いくらなんでもクソザコすぎるクソつよドラゴン2匹の無様アクメつぷりに男の射  
 精欲は一気に吊り上げられ、そんな状況を癪に思いながらもあまりの名器つぷりに我慢  
 が効かない。

「ぐお……!!… クソ生意気に締めやが、つて!!」

「むぎよっほびよおおうッ、ッ、?!?!??♡♡♡♡♡♡」

アホみたいに伸びて吸い付いてくるケツマンコを限界まで引き延ばし、ザコマゾのく  
 せに媚びついてチンしゃぶしてくるドマゾアナルを捻り潰しながら渾身のちんぽプレ  
 スをお見舞いしてやる。

結果、太さも長さも規格外なんてレベルじゃない肉槍がS字結腸もブチ抜いて串刺し  
 にしてしまい、あまりの衝撃にこれまでで一番のケツ穴アクメをキメてしまったローゼ









「まだ射精すからな」

「ほげえ……………?」♡♡♡ ———♡♡♡ ひっ♡♡♡ やだッ♡♡♡ むり♡♡♡ もうむりで

しゅっ♡♡♡ ぐえッ♡♡♡ ぐふっ……………♡♡♡ ひゅーっ♡♡♡ かひゅっ……………♡♡♡ む、

むーっ♡♡♡ おねがいれしゅっ♡♡♡ ゆるちで♡♡♡ あうじしやまつ♡♡♡ おねがい

ぢまじゅっ!!♡♡♡ お許しっ————♡♡♡ ンっほぎゅひいッ……………!!??「

びゅぐッ!! ドグッドグンッ♡♡♡ ほびゅっ♡♡♡ ぶりゅりゅりゅりゅ♡♡♡ ご

びゅッ♡♡♡ ほこっ!♡♡♡ ボゴオッ!!♡♡♡ びゅぐっぼりゅっどりゅりゅんッ♡♡♡

♡ 「ぶんもおオ、お、—————♡♡♡ ツ……………♡♡♡ うお、ッ……………♡♡♡

おう、ッ……………♡♡♡ ぬぎゅういつつぐッ……………♡♡♡ 死ぬッ……………♡♡♡ いぐいぎゅッ……………

♡♡♡ 死……………♡♡♡ ほぎよッ……………♡♡♡ ———♡♡♡ ツ……………♡♡♡ うびゅ……………も、

でりゅう……………♡♡♡ ぐつぶ……………♡♡♡ ぐびゅッおオ、ええええええッ……………つぎゅんッ……………♡♡♡

♡♡♡ おびゅっ……………♡♡♡ ぐふッ……………♡♡♡ お……………♡♡♡ ———♡♡♡ ツグごげエええええつぷッ

♡♡♡ ツ……………♡♡♡

♡♡♡

とつくに限界を超えている紅炎竜様の、必死に許しを乞うて嫌々首を振りたくる様には目もくれず、止めの追い射精を無慈悲に喰らわす鬼畜男。

既にみっちみち♡♡♡ に詰め込まれたネバ重ギトギトザーメンを無理矢理押しやられ、

唯一の逃げ場となってしまうた食道を押し通って無様な貫通ザーゲ口噴射とザーメンゲップを惜しげもなく披露してしまう。

生き地獄すら生温い過激極まりない激重快樂が中枢神経を駆け巡って暴れ狂い、全身の骨と筋肉が軋むほどに耐えても尚お構いなくブッチブチ♡♡に脳細胞を引き千切られるような悦樂の果てに、ローゼフラムの生存本能は強制的に意識をシャットアウトしてしまった。



クメを貪り続ける。

「ふぎよッ、??、♡♡♡♡♡ ほげっ♡♡♡♡♡ ふぎいッ♡♡♡♡♡ ぐっおいグッ♡♡♡♡♡ イッグ♡♡♡♡♡ いぎゅッ、ッ、♡♡♡♡♡ ぬっほいいつつぐッ♡♡♡♡♡ うおオ、♡♡♡♡♡……つつ♡♡♡♡♡」

極悪肉棒を思いつ切りブチ込まれては腹を歪に凸凹され、引き抜かれる時はあまりの長大さに腸壁が捲れ上がってしまい、それでも必死におちんぼ様に吸い付いて離そうとしない。

結果、想像を絶するケツ穴快樂が延々と暴れ狂うという生き地獄をこれでもかど体験させられる羽目になってしまっていた。

「ふーっ♡♡♡♡♡ ンフーッ♡♡♡♡♡ んのオ……♡♡♡♡♡ イグっ♡♡♡♡♡ うおッ♡♡♡♡♡ ふぎゅ……♡♡♡♡♡ も……♡♡♡♡♡ ゆるちでぐだしやい……♡♡♡♡♡ ぐオ、ッ♡♡♡♡♡ おごっイグいぎゅッ♡♡♡♡♡ おによっ♡♡♡♡♡ んぎやあッ♡♡♡♡♡ ゆるちて♡♡♡♡♡ たしゆけへえ♡♡♡♡♡ お、っ♡♡♡♡♡ おオ、ッ♡♡♡♡♡」

「クオーツさん」

「はひえ??、♡♡♡♡♡」

これまで無言でケツマンコをド突き姦されていたクオーツアイトに、男が動きを止め、妙に落ち着き払った声で名を呼ぶ。

普段ならそれだけでクソマゾアクメをキメていたであろうことは確實だが、今はそれを遙かに上回る屈服アクメの奔流にもみにもまれていた為、辛うじて反応を返すことができていた。

「そこで転がつてるローゼフラムさんが死にかけてた時、クオーツさんは何してましたっけ？」

「えっ、あつ♡ あ、あの……そ、それはあ——ぐおオ、ツ、?!?♡♡♡♡♡」

道端で引っくり返ったカエルもかくやな醜態を晒して失神し、そんな中でも穴という穴から半固形レベルの熱々ザーメンをぶびっ♡ ぶびびっ♡♡ と品など欠片もない音を立てながらひり出す紅炎竜様を一瞥しながら、男は極めて平坦な物言いで問いかける。

そんな主の言葉の一つ一つに身を震わせ、何度となく手合わせした好敵手の失神しても甘イキし続けるという信じ難い有様に数刻先の自分を重ねながら、クオーツアイトは期待と恐怖のどん底に叩き落とされる被虐に脳みそを焼かれ続けていた。

「さっさと答えろよザコ雌が」

「う「!?!?♡♡♡♡♡ ふげッ?!?♡♡♡♡♡ ぴぎゅっ♡♡♡♡♡ ンぎゅいイっ、♡♡♡♡♡」

相も変わらずわかりきった質問にも答えられないマゾ肉オナホに苛立ちを募らせながら、ごりゅッ♡♡♡♡♡ ぼぢゅッ♡♡♡♡♡ ぐぼっつどぢゅがぢゅっ♡♡♡♡♡ と本来聞こ

えてはいけないような音とともに激重ピストンを再開する鬼畜男。

『そもそも誰のせいだよ』なんて言葉がクオーツアイトの頭に浮かぶはずもなく、いつも通り理不尽に理不尽を乗算したかのような無茶振りの極みに虐げられる。それでも1500年という、地球人類からすれば気の遠くなる様な歳月を男日照りで過ごした身体は喜んでドマゾ潮を飛ばし散らして媚びついでしまう。

「答えろつつつてんだろ」

「むぎよッ?!?♡♡♡♡ ♫つほいグイギュッ!!♡♡♡♡ 乳首っ♡♡♡♡ 先っぼどりゅッ、♡♡♡♡ ほによおオッッ?!?♡♡♡♡ 角お♡♡♡♡ 角折れぢやいましゅッ♡♡♡♡ やべへッ♡♡♡ ウツオいぐ♡♡♡♡ ギツツツ♡♡♡♡」

散々竜人族を、しかもその中でもトップクラスの強者と目合ったからか、男の力は明らかに人外のそれを獲得し出していたが故に、本来とんでもない強度を誇る竜角がみしみしっ♡ と鈍い音を立てて悲鳴を上げる。

そんな破滅的暴力をも快楽に変換してしまう、最早救いようのない名家のお嬢様ドラゴンは涙と鼻水と涎で傾国の美を台無しにしながら、「言いましゅッ♡♡♡♡ うおオッッ?!?♡♡♡♡ ち、ぢやんど答えましゅがりやゆるぢでくだしやいッ♡♡♡♡」と、どうしようもない屈服宣言を叫びながら漸く手を離してもらえたのだった。

「ほぎゅっ……♡♡♡♡ あええッ……♡♡♡♡ おっ♡♡♡♡ あ、ありあとごじやいましゅ……♡♡♡♡

♡♡♡ うおいグツ♡♡ おオ、くくくくツ、……♡♡♡」  
 「さつさと答えろ」

「ほぎやぎやあツ、ツ、♡♡♡♡」

どう足掻いても逃れられない快楽に呑み込まれ、言葉を発しようにも延々続くマゾアクメに脳みそを焼かれてのたうち回るクソザコドラゴンの胎を握り拳で押し潰すヒモ男。

まだたつぷりと溜め込まれている子宮内のザーメンを、無理矢理圧迫されてぶびゅりゆりゆツ、♡♡ と噴き出すメス射精の快楽に犯されながら、クオーツアイトは漸く言葉らしい言葉を紡いでいった。

「オ、ツ、♡♡ んぎゅつ……♡ わ、わたくしが悪いんでしゅ……♡♡ ローゼフラムさんがハメ潰されてるのに……おっ♡ は、早くわたくしにもおちんぼ様を恵んでいただきたくってえ♡♡ 生意気にも射精煽り♡ 主様のお耳元でえ♡♡ ザーメンびゅつびゅ♡♡ おせーし様排泄催促♡♡ してしまいましたあつ♡♡♡」

言いながら身を振じらせては腰をへこつかせ、媚びつ媚びに白状するクソつよドラマゾドラゴン様。

男は、そんなよわよわ肉オナホの言い分などわかりきっていただろうに、この期に及んでハメ乞い腰へこをする度にマゾ潮をびゅつびゅ♡ と飛ばしまくるクオーツアイト

トの腰をがっちりと掴みなおし、肉槍の硬度を更に増してこめかみに青筋を浮かばせる。

「マジでイラつくわ」

「ひっ♡ ひっ♡♡♡ そ、そんな♡ なんدهえ?♡♡ あ♡ やっ♡ お、お許しくださいませ♡♡ ふおおっ??♡♡♡ あ、主様♡ おちんぽ様がもつと硬くなっております♡♡ 死ぬ♡ 本当に死んでしまいます♡♡」

「さっさと死ぬ」

「はっへえ……??♡♡♡」

ぼぢゅっ♡♡♡ ぐどつちゅんっ♡♡♡ ぐちやつ♡♡♡ ごちやつ♡♡♡ ぼりゅつ  
ごりゅりゅんっ♡♡♡ がぼっ♡♡♡ どぼっ♡♡♡ ぼつちゅばつちゅ♡♡♡ だっしだっし  
だっしだっし♡♡♡

「ぴっ?♡♡♡ ——— ほびよっ?!♡♡♡ オっ♡♡♡ ほげっ??♡♡♡ ぐっほおオ  
————— ツ♡♡♡♡♡」

肉と肉のぶつかり合う音が弾けて空間に木霊し、本来は美しく透き通っている筈の音が、濁音交じりの低いオホ声として腹からひり出される。

完全に肉便器扱いのクオーツアイトがどうしようもないケツマンコ快樂に頭を掻き抱き、錦糸のように美しい長髪を振り乱しては、汗ばんだ肌に貼りつく。加えて、ケツ



穴に凶悪肉杭を叩き込む度にだぼっ♡ だぶんっ♡♡ と跳ね回る、別格に柔らかく重  
力に垂れた長乳が男の繁殖欲を無限に掻き立てていく。

「うぎいッ♡♡♡ ぐオッ??♡♡♡ んぎやつ♡♡♡ 主様っ♡ やめっうおオッ  
?!♡♡♡ 胸♡ おっぱい潰れりゅっ♡♡ ちぎれでしまいましゅっ♡♡♡ のっ  
ほおッ?!♡♡♡」

とても掴み切れない大きさの長乳を無理矢理鷲掴みにして握り潰し、スライムのような  
に形を歪ませられるそれを取っ手代わりにするという暴挙に、目を白黒させて無様にイ  
キ狂う水晶竜様。

凍て付いた氷塊のように、それでいて不純物など一切を排除したかのような神美の化  
身が己に組み伏せられて情けなく鳴き喚いてはイキ狂い、排泄器官を掘り耕されてマゾ  
アクメをキメまくって絡み舐め回すように纏わりついて締め付けてくる極上を超える  
快楽に男は一気に射精へと昇りつめさせられていく。

「がっ……… も、射精るぞ………!!」

「ふぎゅ♡♡♡ おっ♡♡♡ おっ♡♡♡ やべへッ♡♡♡ まっへ♡♡♡ 死ぬ♡♡♡  
♡ ———— ぬおオッ??♡♡♡」

ずろろろろお………ぐぼっつちゅぢゅんっッ!!♡♡♡♡♡

「んぎゃんッ♡♡♡ ———— ほぎゃぎゃアッッ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡!!??!」

止めとばかりに限界まで引き抜かれた長大に過ぎる逸物に、肛門がアホほど情けなく吸い付いて離さない。

そんな無様な生肉オナホを脱肛しきった腸壁ごと思いつ切り捻り潰してハメ潰し、精巢をフル稼働して新たに作り出され続ける煮え滾った白濁汁が尿道を駆け上り、爆発したかのように噴出して瞬間間にクオーツタイトの腹を歪に膨れ上がらせていった。

ぼびゅっ!! ♡♡♡♡ どぐっ!! ♡♡♡♡ ドグンッ!! ♡♡♡♡ ぶびゅっ ♡♡♡♡ ごびゅりゅりゅりゅんッ ♡♡♡♡ びゅぐっびゅぐぐッ ♡♡♡♡ どりゅりゅりゅりゅりゅんッ ♡♡♡♡

「ふぎぶよッ ♡♡♡♡?? ♡♡♡♡ ンのおオ ♡♡♡♡ーーーーーッ ♡♡♡♡??! ♡♡♡♡♡♡♡♡ ぐえッ ♡♡♡♡ あぎやッ ♡♡♡♡ ぶびゅっ ♡♡♡♡ 射精しゅぎッ ♡♡♡♡ あうじしやまつ ♡♡♡♡ もっいつぱい ♡♡♡♡ むりい ♡♡♡♡ 無理無理むーりっ ♡♡♡♡ おぎよッ ♡♡♡♡!?? ♡♡♡♡ ♡♡♡♡ ぶっひゅ ♡♡♡♡」

みちみちみぢいッ! ♡♡♡♡ とヤバイ音を立てながら膨らみ続ける腹を目の当たりにし、「ひっ ♡♡♡♡ ひいつ ♡♡♡♡ ぴぎゅっ ♡♡♡♡」と、家畜以下の呻き声を上げながら己が主にもう無理だと懇願するクオーツタイト。

当然許されるはずもなく、ダマのような精液を天上の肉嫁に排泄するしか頭がないヒモ男は容赦なく噴火のような吐精を繰り返していく。

ごぼっ！♡♡ ぶりゆりゆッ♡♡ どつぐどつぐん♡♡ びちやつびゆとどッ♡♡  
 ぶびびッ♡♡♡ ぼつびゆぼびゆンッ♡♡♡♡

「うおオ、~~~~~つッ、???

♡ お、ッ♡♡ おんッ♡♡♡ やめでッ♡♡♡ ほんろに無理でしゅッ♡♡

♡ 死ぬ死ぬッ♡♡♡ ふぎやぎやア、ッ♡♡♡♡ ごびゆッ♡♡ ぐえエッ♡

♡♡ ほぎやつ♡♡♡ おつう♡♡♡ ンぎよおッ、?!?! おびゆッ♡♡♡ つ

ぐぼええええッ♡♡♡♡ ほぎゆッ♡♡ うおオ、ッ♡♡ |——| つぐオ

えええええつッ♡♡♡♡♡ ほおオ、—————ッ♡♡♡?!?!♡♡♡

♡♡「

握り潰され引き延ばされまくった柔長乳を真っ赤にしながら、腹を破裂寸前の風船みたいに膨れさせられたクオーツアイトが、背骨が折れそうなほどにエビ反り返ってザッゲロを吐き出していく。

この世のものと思えないほどに破滅的な快楽と衝撃で全身の穴という穴から体液を噴き出し、汗腺からは玉のような汗を垂らし続け、脳細胞を一つも残さず焼き切るような電気信号が全身を駆け巡った後に脳天を直撃してしまった。

「うおオ、………ッ♡♡♡ む、りい………♡♡ も、ほんひよにしにゅ………♡♡ ぐオ

ッ♡♡♡ おオ、ッ♡♡♡♡ お、っ♡♡♡ おう、ッ♡♡♡♡ ふぎゆ………

♡♡ あええ……………♡♡♡♡

「チツ…………おいつ！ ネフライトツ!!」

「——へっ?? は、ひゃい!!」

「こつちに来てケツ穴差し出せ」

射精しても射精しても収まらない、完全に人外と化した射精量を受け止め続けるクオーツアイトだったが流石に限界のようで、ピクピクと痙攣するばかりで反応が鈍くなつてしまつていた。まだまだ性欲が収まりそうにないヒモ男が、いつの間にやら覚醒して覗き見ていたネフライトを呼びつける。

飄翠竜様はバレていないと思つていたのか飛び跳ねて驚き、とうに気付いていたヒモ男はただただ吐精の排泄先としてネフライトを使おうというのだつた。

現在進行形でどぐつ♡ ドグンツ♡♡ と脈動してばんっばん♡ に膨らみ続けては口から吐き出すしかないクオーツアイトと、同じような醜態で転がされて失神してもイキ続けているローゼラムを見て、自分の未来が確定してしまつた恐怖と期待に怯えるクソザコ緑は必死に反抗するが——、

「ひっ♡ や、やだっ♡♡ 今度こそ死んじや——」

「ね、ネフライトさんツ♡♡ はやぐうっおオッ?!♡♡♡ 死ぬツ♡♡ もっほんひよに無理イイツグイツグ♡♡♡ うお、いぎゆいぎゆツ、ツ、♡♡♡♡ ふげツ

♡♡♡ (ぼえエツ、♡♡♡♡♡ おひゅつ……??) のお、~~~~~………つッ♡♡

「く、クオーツがあ……♡♡♡ うおオ、ッ、!?!♡♡♡♡♡ ふぎゆいイツつぐッ、♡♡♡  
角ッ♡♡♡ 掴まないでえっ♡♡♡ おによ、ッ、??♡♡♡♡♡ 力ちゅつよ♡♡♡ づのお  
れぢやあッ♡♡♡♡♡」

過剰に過ぎるマゾアクメの連続からか、遂に動かなくなってしまったクオーツアイトの姿を見て、おずおずと這って近づくと、ネフライトに業を煮やしたヒモ男は、手が届く距離にきた途端、その立派な角を万力の力を込めて握り掴んで引き摺り寄せてしまった。

「さっさと来いってのがわかんねえのか? あア??」

「ひっひっ♡♡♡ や、やだっ♡♡♡ あんなのやだあッ♡♡♡ ぴぎゅっ??♡♡♡♡♡ ふぎやッ  
!?!♡♡♡ うっぎいイ~~~~~♡♡♡ ツ、~、!?!??♡♡♡♡♡」

引き寄せた勢いのままに放り捨て、四つん這いのポーズを取らせて覆い被さり、後頭部を抑えつけて一気にケツ穴をプチ抜いてしまう鬼畜男。

あまりの衝撃に全身が暴れ回ろうとするが、頭を完全にベッドに押し付けられている状態では暴力的快楽を逃がすこともできず、初めてのアナルアクメを容赦なく身体に覚え込ませられる。

「ふいっ♡♡♡♡♡ おによっ♡♡♡♡♡ ほぎよッ♡♡♡♡♡ ぐっお死ぬッ!!♡♡♡♡♡ 主様ッ♡♡



## #40 種の存続

「あゝ……マジで可愛すぎて生きるのが辛い……」

普段から覇気など欠片もない顔を幾倍にも緩めに緩めて破顔しまくる。

気負っている様子など殆ど見せなくなつてはいたが、それにしたつて相も変わらず玉座がこの上なく似合わないヒモ男が小さな赤ん坊をあやしていた。

男に抱き抱えられる赤子は愛くるしい瞳をせわしなくキョロキョロぱちぱちとさせ、小さな手の動きに合わせて羽と尻尾もぴこぴここと跳ねさせている。

「うむ、うむ。本当に主様に似てめんこい娘じゃ」

「いや、どこをどう見て熟考しても俺の面影なんて欠片も無いと思うんですがそれは……」

というか無い方が良いだろう、常識的に考えて。

男の隣に腰掛け、己が娘を慈愛に満ち溢れた瞳で見守るネラが嬉しそうに発した言葉に、ヒモ男は首を傾げざるを得なかった。

彼女の周りには他にも4人の愛らしい子ども達がじゃれつき、母に縋ろうと角に羽、

尻尾にしがみついている。

なんだこの桃源郷、ここが楽園か。楽園だったわ。

本当にただの人間である自分の血が混ざった子どもなのかと疑いたくなるくらい、自分の腕に抱かれた娘は非の打ち所がないほどに美しい。

多分に親馬鹿としての惚気も含まれてはいるが、まあ母親であるネラがそもそも彫刻品すら恥じ入る美を持ち、そもそも竜人族そのものが絶世の美女しかいないのだから当然と言えば当然か。

女の子は父親に似ると地球では良く言うが、そうでなくて本当に良かったと思う。

そもそも混血とかなんか諸々大丈夫なのかと一時期不安になりはしたが、

『竜人族の血は強いから大丈夫』

などと科学的根拠など欠片もないがしかしこれ以上ない説得力ある当人達の一言で、男はもう考えるのをやめていた。

(そらそうよ、山一つ軽く消し飛ばせる種族の血がちよつとやそつとで薄まるか? いや、ありえん)

この世界に来てからそれなりの時間が経ち、まあ色々とありはしたがその間にこの竜人族とかいう種族は本当にとんでもないということは心の底から思い知らされた。

なんでこの種族こんなに強いのに俺のちんぽには勝てないんだろう。



謎である。

「ちよつと、お姉さまばかりずるいじゃない。この娘たちの相手もしてあげて、お兄様——じゃなかった、ぱぱ。♡」

「ゴルトにその呼び方されると犯罪臭が半端ないな……」

「?」 何言ってるの、ぱぱはぱぱでしょ。ね♡♡ 意地悪なお父様だねえ♡」

これまでのメスガキっぷりが随分と鳴りを潜め、最近は母親としての貫禄が竜人族内で抜きん出ているゴルトがゆつたりとした足取りで歩み寄りながら、我が子に女神のような微笑みを向けて話しかけている。一番ロリロリしいのが一番母親としてしっかりしているとはこれ如何に。

いや、別に他の皆がダメとか言うんじゃない。滅茶苦茶てんやわんやしているだけで、精一杯愛情を注いで育ててくれている。イヴアールはいつも通りな感じだが、あれで何でもそつなくこなすので心配いらないだろう。

そんな母性MAXなゴルトもまた全身に娘たちを抱きかかえ——引っ付けて?——器用に羽と尻尾を使ってあやしていた。白金竜の名に違わぬ純白の美しさは子ども達にもしつかりと受け継がれており、やっぱり光が反射しまくって眩しいことこの上ない。

いやもう目に入れても痛くないくらい溺愛してるから良いんですけどね、マジで可愛

いが過ぎんだろ……護らねば。

え？ お前は護られる方だろって？ ——ツスネエ。

「そういうやゴルトだけか？」

「そうよお兄様。ほら、前にも言ったじゃない。私達にはそれぞれ適した場所があるって」

「ああ……」

自分の娘たちが可愛すぎてただでさえ考えなしの脳みそが溶けまくっているのですが、そういうやそんなことも聞いてたな。

ネラとゴルトは例外として、竜人族にはそれぞれ属性みたいなものがある。所謂四大元素ってやつで、炎・水・風・土だ。それらに応じて力を発揮しやすい場所があり、ローゼさんは火山、クオーツさんは水晶の洞窟、クツシヨ——もといネフライトさんに至っては空中に漂いながら子育てをしている。

地球の常識が通用しないのはわかってはいたが、未だに規格外過ぎる生活様式やら風習なんかを見せつけられると目をひん？きそうになることが後を絶たないこの異世界である。お空にぷかぷか浮かびながらの育児ってどういうことなの……。ちなみにイヴァールはいつも通りどこぞの草原で子ども達と一緒に殆ど寝て過ごしている。

いやまあ天敵なんて天敵はそうそういないんだらうけどさあ……。

「いくらなんでも無警戒すぎませんか？」

「大丈夫じゃよ、主様。竜から子を奪おうなどと考える愚か者はそうそうおらん」

「いやまあ、強いのは知ってるけど……」

「ふふ、お兄様は心配性ね。大丈夫、子を産んだ者には相応の護衛がついているもの。それに、この城の近辺から必要以上に離れることは禁じてあるわ。何かあればすぐに駆け付けられる。だから——」

「?!」

「そういう不届き者には、相応の罰をくれてやらんとな」

「うおっ——!?!」

話しながら僅かばかりに気配を鋭くしていく2人に怪訝なものを抱いていると、いきなり現れた召使いさん達に抱え上げられて玉座の裏に隠され、何やらよくわからん力の壁に娘達と一緒に閉じ込められてしまった。

いつもお世話をしてくれる彼女らに、「申し訳ございません、少しばかりご辛抱なさってください」と、本当に申し訳なさそうな顔で言われて黙って頷く。ちよつとでも不服そうにしたら自害でもしそうな目で思い詰めてるもんだからそうするしかないだろう。突然のことで目をばちくりさせる我が子らを抱き寄せながら気配を探ると、四元竜やら種族内でも腕の立つ竜人族らが一斉に玉座の間に集まっているようだった。

「これはこれは。招かれざる客にしては、随分な面々じゃな」

表向きはにこやかに対応しつつ、ネラの目は一切笑つてなどいなかった。

遠見も転移も防ぐ頑強であった筈の阻害結果。しかも王城且つ玉座の間という、最も強固な筈のこの場に直接転移を行使し、実行できている目の前の四柱を見遣りながら。

「久しいな小娘。まあそうカツカするでない」

「突然の無礼は詫びましょう、竜人王」

「正直ありえないのはわかっているけどさあ。ま、しよーがないじゃん？」

「……」

魔族の王、エルフの長、宵闇の主、そして熾天使。

竜人族を除く5部族の長が一堂に会し、しかも他勢力の本丸にいきなり飛び込んできたという異常事態。有り得てはいけない現状に、警戒するなどというのは無理な話であった。

玉座を前に双壁となるネラとゴルトの両脇を固める四元竜。その一角たるローゼラムが一呼吸置き、前に出て問う。

「——どうやってここに転移なされた。貴公らが力を持つ者なのは重々承知しているが、我らの心臓部に直接だなど……いくらなんでも、常軌を逸している」

ローゼフラムが探るように言葉を紡ぐ間に、この世界でも別格の存在4人との間を少しずつ詰めていく四元竜以下の竜人族達。

できれば戦いたくはない。戦闘ともなれば、ここにいる大半が無事に済むはずもない。何よりも、今この場で目の前の化け物4人とやり合うのだけは避けなければならぬ。だが、いざという時は——この場にいる竜人族の全てが覚悟を決めた時であった。

「できちゃった☆」

「……は？」

場の空気にあまりにそぐわない吸血鬼の言葉に、鳩が豆鉄砲を食ったような声を反射的にあげてしまうローゼフラム。

そんな間の抜けた隣の蝙蝠に頭を抱えるエルフと天使を尻目に、やれやれと目を細める魔王が口を開いた。

「お前たちの内で何かあったのはすぐに勘づいておった。バルバトスらが報告を挙げておったしな。だだ、下手に手を出すわけにもいかんぞな」

「……ですの、貴方方を除いた4部族で話し合った結果、協力して遠見を試みたのです」

「そしたらビックリ！ 見事に覗き見できちゃったわけ！ いやーもう今までの苦労はなんだったんだっつー話じゃん？」

「……はあ」

何やらとんでもないことをペラペラと喋り出した四柱の前に、開いた口が塞がらない竜人族の面々。協力？ 目の前のこいつらが？ 冗談だろうか？ 云百年、それこそ云千年といがみ合ってきた連中だ。自分達も含めて。

とんでもない話の内容に目を点にする竜人族なんぞお構いなしに、心底不服ですと溜め息を吐く熾天使以外が話を続ける。

「いやはや。儂も随分と長く生きしたが、まさかこうも上手くいくとは思わなんだ。年を食つても新しいことには挑戦してみるもんだの」

「年齢の話はしないでいただけます？ ——まあそういう訳ですので、竜人族の皆様が随分と良い思いをされているのが白日の下に晒されたのです」

「ほんつつとあんな恥ずかしハレンチ羨ましい——やば、鼻血垂れてきちゃった……」

「許されざる冒瀆です。ええ、全くもって許されません。神に対してあのようなら——あんな不敬な………んんっ♡」

「セラフイム様が鼻血出して……」

「ええ……」

信じられないものを見させられている。そんな心情が零れるようにクオーツアイトが吹きゴルトがドン引きすると、熾天使様は慌てて鼻を手で覆うと力を行使し、何事も

なかつたかのように澄まし顔で咳払いした。

何やら妙な雰囲気にも呆れ半分、それでも警戒は解かずにネフライトとイヴアールが問うた。

「あく……そのだね、揃いも揃って異種族の最奥に乗り込んできたのは、まあ理由は察するけど看過できるものじゃない」

「わかるけど、話して」

「わかりきっていることを一々問い質すとは、あまり賢いやり方とは言えんな、小童どもが」

自分達を囲む面々を見渡し、最後に玉座の奥を見透かすように目を細める四柱。

それに気づいたネラとゴルトが隙間を埋めるように身を寄せ合って視線を遮った。狙いなどわかり切っていたこと。彼女らにしてみればあまりに強引なやり口に疑念を抱き、この場に跳躍するために余程の代償を払ったであろうことも容易に想像がつく。それでも、力づくで奪おうというのなら、例え刺し違えようとも許す訳にはいかない。そんな想いが具現化するように、この場にいる全ての童人族が魔力の鎧を身に纏い、それに伴い四柱も悍ましい程の力をその身から解放した。

「——我が子というのは、良いものか？」

力と力が干渉し合い、壁や柱に亀裂が走り、張り詰めて弾ける寸前の玉座の間に、独白のような魔王の声が静かに響き渡った。

「我らをここに送るのに、我が民たちの殆どは疲弊しうずくまっておる」

「この転移は、そう安いものではなかったのです。当然ですわ」

「あたしたちがやり合っちゃったら、お互いタダじゃ済まない。だから——」

「甚だ不服ではありません。業腹ではありますが……致し方ありません」

四柱がそれまで放っていた力の奔流が？のように静まり返り、膝をついて頭を垂れた。

この世界でも無類の強さを誇る彼女たちのこの行為は、本来あつてはならなかった。膝をつき、腰を折り、頭を下げる。いくら自尊心が傷つけられていようと、3大種族以外にこのような姿をみせるなど屈辱の極み。

それでも彼女達がそうしたのは——、

「……今しかないから、ですか」

普段の口調も忘れ、ネラが力を解いて問いかける。

それは己自身にも投げかけているような、そんな声色を秘めていた。

「そうじゃ、そなたらの主は人間。その命は我らに比べればあまりにか細く、脆い」



「このような奇跡は又と起きはしないでしよう。この機を逃せば、私達にあるのは緩やかな死だけ。……ですが、心得違いは起こさぬように」

「そうよ。あたしがこうしてるのは、アンタらに対してじゃない。——絶対に」

「我が種の存続の為。我が天啓に殉ずる為。我らが崇拜するはただ一人。御身に天上の奉仕と至福を。どうか我らに、一滴（ひとしずく）の加護と祝福を」

## 最終話 異世界の主様

「……んで、ええつとお名前は——」

「ひうつ!? い、いきなり名を名乗れとは、す、少し性急すぎやせんか……? ♡ あ、あと儂の真名は、ちよつと……そのう……♡」

「ええ……」

なんか妙に既視感のあるやり取りだなこれ……。

あ、そうだ、これネラと初めて話した時と似てるんだな。この人……人? まあいつか、この魔王様も背格好がネラと良く似てるし。やっぱ角と羽と尻尾が生えてるし、竜人族のそれとは違うけど。あと背が低いのか他と比較して大分ちつぱいとか。ただし下半身、特にお尻は誠にムチムチしておられて大変よろしい。何より肌が青色でこれぞ魔族、つて感じ。御髪は漆黒つて言っただ方が良いくらい真つ黒かつくせ毛なのかびよこびよこハネまくってるのがこれまた可愛い。そんな感じのちつぱいロリ青肌魔王様の服もこれまた服と呼んでいいものか相当怪しく、複雑な意匠が全身に絡みつくような感じのドえらく高そうな布に煌びやかな刺繍が施され、んで肝心な部分はまあなんとか

隠れてる気がせんでもないレベルだけれどもそれがまたエロい。

ほんまこの淫乱ドスケベクソ強ポンコツ種族どもはさあ……。

「——む、そなた今少しばかり失礼なことを考えとりやせんか？」

「へ？ あ、いやまつさかあ。そんな訳ないですよ、ハハツ」

「ほうか？ むう……何やらとっても腹立たしい感じがしたんじやが」

「ただちよつとネラに似てるなつて思——」

「この儂がそのクソ生意気なちんちくりんと同じじやお!？」

「私がこんなチビロリBB Aと一緒にだつて言うんですか主様?!」

「あ?」

「お?」

「Oh..」

え、なにこれは。この2人もしかしくなくても仲悪いん?

あといつものことだけのじやキヤラ忘れてんぞネラ。んやまあもう1人のじやキヤラ増えたから紛らわしくなくていいけど。

「やはり貴様とは決着をつけにやならんようじやなあ……? コンの小娘が」

「——ぷっw」

「何を笑つとるんじやこのチビトカゲめがつ!？」

「え〜？ だつてえ?? 妾はもう究極に完璧で素敵な殿方様に手籠めにされてしもうた  
 しい??? しかもお……いのい・ち・ば・ん・にい??? お子種を仕込んでいただけでえ♡  
 ふへっ♡ 赤ちゃんもお——ほらあ! こおんなに可愛いんじやもんなあ??? 主様  
 に似て、主様に似てツ!! 雌として最っ高の幸せ♡ 手にしちやつたんじやもんなあ  
 「?????」  
 「んなつ……が……こ、き、貴様あ……」

((うつつつわあ………))

クツソ憎たらしい笑みで俺の腕にしな垂れかかつて絡みつぎ、大層誇らしそうに頬ずりして我が子をいつものように羽と尻尾であやしなから見せびらかす外道つぶり。あーあー魔王様青いお肌なはずなのにお顔真つ赤、カンカンのぷるっぷるに震えてるよ……。

とりあえずこの場にいる全員でネラのアレつぶりにドン引きした。ていうかネラってこんなキャラだっけ……? あと俺には欠片も似てないつつつてんだろ脳内どないなつとんねんこのくそちよろりゅーじんおーさまは。

「ま、そういう訳で」

「ちよ待つ——」

「もう勝負ついてるから♡」

「ガーン!?」

((古い……))

((憐れ……))

さつきまでの圧倒的強者感はどこへやら。それはそれは見事な古典的反應で頭を抱え、orzなポーズに移行した魔王様の御姿からは途方もない哀愁と絶望が漂っている。ひでえ……オーバーキルってレベルじゃねーぞ……。

「なあネラ……」

「はい、主様?♡」

それはもう喜色満面の笑みで俺を見上げて首を傾げるあざと可愛いりゅーじんおーさま、クツソかわいい。

とはいえいくらなんでもあんまりなネラのやりように少しはお小言くらい言わねば。あの魔王様可哀想すぎんだろいつの間にか隅っこで縮こまって床イジイジしてるし……やっぱネラに似てるな、うん。

「いやほら、仲悪いのか知らんけどちよつとやり過ぎなんじゃ……」

「いいんですよあんな性悪青虫♡ 昔っから私に先輩風吹かせてくるし虐めるし顎で使われるして散々だったんですから! あ、ちなみにあそこでいじけてる憐れな魔王様(笑)はパーピーヤって名前なんですよ♡ かわいいね♡ ぶふーっw」

「きつ、貴様あろうことか儂の真名をお!? しかも最後馬鹿にしおつたなこの名前気にしておるのに!!」

「知ってるからかわいいねはーと(笑)って言ったんですけどお? そんなこともわからないなんてもうボケてきちゃったんじゃないですかあ?」

「ボケ……?! こ、このクソガキい……!」

「これ は ひ ど い」

いやもうほんとに色んな意味で酷いなんやこの低レベルな争い。見た目が2人とも幼いから余計にそう感じるわこは小学校かしかも低学年。

何はともあれ本気でドンパチやらかしそうなくらいにヤバいオーラを纏いだしたのでここは止めなければやばいアカン脇のネラの圧だけで俺の精神的物理的ストレスがマッハで死ぬ。

「ま、まあまあ魔王様。パーピーヤだなんて本当に可愛い名前じゃないですか、僕は好きですよ」

「か、かわつ……!?! す、好きイッ?!? —— おふうっ♡」  
「うーんこのクソ雑魚っぷりよ……」

実際はとんでもない価値があるであろう真名を子どもじみた嫌がらせであつさり告げられた魔王様(憐)があんまりにもあんまりなので少々現実逃避しつつ雑に褒めたら

鼻血噴き出しながら氣絶した。なにを (ry

いやほら、わかつてたけどなんか久しぶりで新鮮な感じですねあとネラさん？ 嫉妬なんですよけどあんまり腕絞め上げるのは止めていただけませんかね筋やら骨やらがヤバイ音立ててるんですけどおツ——アカンこれ死ぬう!？」

「まったく竜人王ともあろう者が、そのようは態度は感心しませんね」

どうにも駄々っ子で仕方のないネラをどうしようかと痛みに白目剥きつつジト目上目遣い可愛いと思っていたら、ハーブの音が鳴るかのような耳心地の良い声音が玉座の間に奏でられた。ハーブの音なんて生で聞いたことなんざないけども。

もうこれぞエルフ、といった御姿は後光が差しているのかと錯覚する究極美人。クオーツアイトさんとも余裕でタメ張れる傾国別嬪さんで彼女の周囲が少女漫画ばりにキラキラと輝いて見えるレヴェル。イメージ通り艶つ艶なプラチナブロンドの腰まで届く長髪ストレートに真っ白な陶器柔肌。美しい金の刺繍が施された緑翠のローブ的御召し物は大層高貴な出で立ちを醸し出してはいるがそれがもうスツケスケでデザインされたもんだからクツソだらしない長乳がモロ見えでエロいってレベルじゃねーぞ。

そんなアルティメットドスケベエロフの吸い込まれそうな深緑の瞳は目が合いそうになった途端にふいつ、と反らしてしまった。頬+ピコピコと忙しない笹穂耳がめつ

「ちゃ紅くなつててなんやこの美人も可愛いなやつば中学生以下やんけ………どいつもこいつもキア!？」

「な、なんですか急にこちらを見つめて! 貴方もやつぱり私が醜いとお考えなのですか!？」

「え、いや——」

「ええそうでしょうそうですよそうですともどーせ私は酷い顔ですよ醜悪ですよ晒して良い面してませんわよ人混みに立てばそれはもう綺麗に割れて道ができ悲鳴を上げられ泣いて叫ばれるのが私ですよ何か文句あります!？ ありますか?!？」

「あの、ちよ、落ち着——」

「落ち着けえ???’ 落ち着いていられる訳ないでしょうなんなんですか貴方様はあの魔王をかわいいか好きとか正気ですか本気で言ってます信じられませんかわどうせなら私にも仰ってくださいませいやしかしこれはアレですかまた私たちを騙すためのクソツタレ共の同類ですかそうですかそうなんですしやねそうに違いありませんいやもうずうえつとうわいにSAWなんですな縊り殺しますよ?????’」

「おお……もう……」

「こわい……エルディールこわい……」

いきなりもいきなりな豹変っぷりに俺の腕に抱き着いていたネラと身を寄せ合つて



ビビり散らかす。そもそもこの俺ことヒモ男はそんなご尊顔を見つめられているんだからとかそういう思考に全く行きついてない辺りやっぱこの人も相当色々と拗らせてる。冷静になれば絶対それくらい気付ける頭は持つてると思うんだけど………なんたつてエルフだし。

しかもこの人………人？　もう人でええわ基本見た目人間やし。

なんにせよエルフでも上位のハイエルフとかフェアリーエルフとかそんな感じの存在なんでしょきつと、俺は詳しいんだ。

「あらあら随分と情けない御姿をお晒しになられますのねエルデイル様？　エルフ族の皆様が嘆いておられるのが目に浮かぶようですわぁ特に妹君のセレスティア様とか」  
そんな風にいつも通り思考という名の現実逃避をしていると、またなんとも厭らしい目付きと声を垂れ流しながら死ぬほどワザとらしくモデルウオークで歩み寄ってくる水晶竜様。それはもうヤバいくらい様になってんのがまた腹立つな。

……いやてかお前もなんかい。そもクオーツさんだつてこのエルフの長様——エルデイルさん？　とおんなじような境遇やったやろなんで致命傷に塩たつぷり塗り込むような真似しようとしてるんですかねえ………？

「な、なんですか藪から棒に………」

「いやはや、深き者と呼ばれる貴方様がそのような醜態を晒してはいけませんわ。エル

フ族の長なのですからそれはもういついかなる時でも威厳を保っていなければ、ねえ？」

「んなっ……！　ぐっ……あ、貴方にだけは言われたくありませんでしたわ……」

どの口が言うんだと当の2人以外が唾然としているのにも気づかず、いつそ清々しいほどのドヤ顔でのたまつてくださった最強種で四元竜の一角、水晶竜様ことクオーツアイトさん。

威厳も何も名家の当主なのに召使いに常時残念キャラ扱いされてる自分のことは天高く棚の上しぶん投げまくっている模様。その召使いさん達は心底呆れたとでもいった風でそれはそれは深い溜め息を吐き、勝手にしてとばかりに主人他四元竜の子ども達をあやしていた。流星は歴戦の召使いさん達、有能である。

ホンマこのくそちよろポンコツ水晶竜様はさあ……。

「ええ、ええ、それはもう。わたくしとエルディール様、それに妹君のセレスティア様はそれはもうドブに包まれた泥団子みたいな扱いでしたものねえこれまでは……これまではツ!!」

「やめてくださいまし！　おやめになられて!?　こうしてここにいるだけでも本当に！　本つつつ当に!!　なけなしの！　搾りカスにも満たない勇気を掻き抱いてここに立っていますのよ?!　妹のセレスティアなんて『もう無理ですお姉さま、どうか私の代

わりに生贄となつてきてくださいこれ以上上げて墮とされるとかほんとに無理なんです死んでしまいますいつそ殺して』とか死んだ海王魚みたいな目で虚数空間眺めながらぼそぼそ呟いてましたのよまたトラウマが増えましたわ!!」

「……………うわあ……………」

またとんでもないこと言い出したぞこの2人……………ほんまにどんだけ虐げられてきてんねん……………」

「件の3名は本当に……………その、何と言いますか……………主様から見れば群を抜いた美女、ということになるのでしようから、まあ——」

「僕らも大概だったとは思うけど、あの3人は特にね……………」

「ああ、いや、うん……………」

側に控えていたローゼさんとクツシヨンさ——もとい、ネフライトさんが今にも泣きそうなくらい神妙な面持ちで語った内容に俺はもう天を仰ぐしかなかった。何回言ったかわからんくらい美人美女美少女しかいないこの楽園で、クオーツアイトさんとエルデイルさんはほんとに抜けて綺麗なんだよな。

イコールこの世界だと……………なにこれやつぱつらい。

遂にお互い抱き合つて膝をつきオイオイ泣きじやくりだした絶世の美女2人にどうしたもんかと頭を抱えるのも束の間。今度はいつぞやのクツシヨンさんみたいに俺の

目の前にフワツと浮かんで覗き込んでくるこれまたドチャクソ顔の良い女。

顔面偏差値メーター振り切ってるのが多すぎて色々とゲシユタルト崩壊してしましますわほんま最高です。スカウター何個あっても足りひんやろがいどないなっとなねん今更やけど。

「ふーん……顔は——ま、まあ良いんじゃない？ きょうだい点！ そ、それなりに  
はね！ ほんとよ!? ビビってなんかいないんだから!!」

「何勝手に喋って勝手に狼狽えてるんですかねこの超絶美少女は……？ あときょうだ  
い点じゃなくて及第点（きゅうだいてん）な」

「あ……う、うるさいわね！ なによ!? なんか文句………ん？ 今なんて？」

見るからにビビり散らかしているというか焦ってわちゃわちゃしているというか、まあそ  
んな感じでいきなり矢継ぎ早に捲し立ててきたとんでも美少女ちゃん。綺麗な目が  
あっちゃこつちやと泳ぎまくってんぞ。

これが地球だったらその容姿だけで一生遊んで暮らせるくらい稼いで何不自由なく  
暮らせそうなハイパー美少女は、急にハツとしたかのような表情を見せたかと思うと身  
を乗り出して何やら問い質してきた。

うーん顔立ちが整い過ぎててすげえわ……毎度のことながら語彙力が壊滅してしま  
いますねクオレハ……。

「え、うん？ 勝手に一人芝居してる？」

「あと！ そのあとお!？」

「超絶美少女？」

「……」

「……？」

「……」

「あの～……??」

「……」

「……もしもーし??？」

「ちようぜつびしようじよ??？」

「アカン、IQが逝ってしまわれた」

本来ならあらゆるスペックがチート飛び越してマジヤバレベルな筈の眼前のちようぜつびしようじよ様は完全にフリーズを起こし、壊れたカセットテープみたいに同じ単語をひたすら真顔で反復復唱し続けている。……最近の子にカセットテープとか言ったところで伝わるんだらうか？

何はともあれ絵面がヤバいしこわい。

「んぐぶつ ♡ おっ? ♡ ぢよ、はなぢがつ ♡♡」

「うーん……」

いったい何回目だよこのやり取りなんて思っていると、漸く理解が追い付いたらしい目の前のちようぜつびしようじよ様はド派手に鼻血垂れ流しまくってアタフタしだした。てかこの娘もめちやくちや乳デカくてクツソ長いなゴルト並やぞあと尻もでっけえな!! おお、ほんとにデっけえな!! 太もも太いね♡

そしてこれまた見事なまでに桃色一色のくせつ毛気味な良い匂いのする長髪。ピンクは淫乱だつてはつきりわかんだね。ついでに蝙蝠を彷彿とさせる真つ黒な翼と先端がハートの形をしてふりふりと忙しく振りたくられる細長い尻尾に羊のようなドデカい巻角と口元から覗く鋭い牙もまた良い。

吸血鬼とサキユバスを安直に合体させてぼくがかんがえたさいきょうの搾精美少女みたいなのが玉座の間で盛大に血溜まり作ってる。

なんだこれ。

「あくもうアンタまでなにやってんのよ大事な血を……」

ツツコミが追い付かないこのカオス極まる現状に匙を投げかけてたら、それまで『アホくさ』とでも言いたげな雰囲気全開で距離置いてクオーツさんの召使いさん達と一緒になが子をあやしていたゴルトが、まるでオカンみたいな口調で身の前の鼻血ナイアガラな吸血サキユバスにフヨフヨと浮かび寄っていく。

いやまあオカンみたいも何も立派なオカンそのものなんですけどね。ていうかこの場にいるポンコツクソつよ童人族ママさん連中の中ではぶつちぎりでオカンしてんのが一番幼い見た目——乳と尻は規格外も良いとこだが——のこのゴルトというのもまたなんとというか。んまあローゼさんもだいぶマシな方ではある、あまりにも我が子にデレツデレ過ぎるだけで……うん。

「な、なんなのよゴルト……その余裕綽々な態度……」

「いいからさっさと鼻血を止める。ただでさえ貧血気味なんでしょ？ 死んじやうわよほんと」

「ぐ、ゴルトお………ぐしゅっ」

なんとという爆尻長乳ドスケベロリおかん、俺でなきや見逃しちゃうね。

ゴルトが泣きつ面サキユバスっ娘の鼻を手で覆いぼう、と柔らかな光を灯したかと思うと、壊れた蛇口みたいに噴き出してた鼻血がとんと止まった。相も変わらず訳わからんな魔法つてのは……。

サキユバスっ娘は高校生くらいの見た目で女の子座りで床にへたり込み、幼女みたいな背格好のゴルトがその鼻を拭ってやってるわ、魔王様はまだ隅っこでうづくまって床イジイジしてるわ、エルデールさんは相も変わらず玉座の間のド真ん中でクソザコ当主とわんわん泣きじゃくってるわ——。

うん、いや本つつつ当に今更なただけさ……君らクソ強種族としての誇りとかないんか？

とうの昔にそんなもん碎け散っちゃったんかなあ……。

「んう……あ、ありがとゴルト……」

「5部族の長が揃いも揃って……。ま、私もあんま人の言えないか。ね？ ♡ ぱあぱ？

♡」

「!？」

「あ、ゴルト！ せっかく主様を独り占めしてたのに！」

「わ、わ……あわ!? ひやつ……わア……ア………」

サキュバスっ娘のお世話をし終え、ニツタア♡ と破顔しまくって空いた俺の右腕に  
しな垂れかかってくる妹君様のクソ柔おっぱいの感触で現実に引き戻された。ああ、  
くやつぱゴルトの長乳はいっすねえ〜。

そんなゴルトに即座に嘔みつきりゅーじんおーさまに、どこぞのなんか小さくてかわ  
い畜生みたいな反応で顔を両手で覆うクソザコサキュバスさん。指の隙間からしつ  
かりこちらを覗いて首から上が真っ赤になるほどアワアワしまくっているが。

なんでこの異世界にはこういうクソザコしかないんですかねえ……？

「フィラティア」



「おひゆう!! ちよ、な、なに!! いきなり後ろから話しかけないでよビックリしたでしょ?!」 ……つてイヴァール!! アタシの真名い!」

「もう今更。どうせご主人様に飼ってもらえるんだから一緒」

「い、今更だなんてそんな……ていうか飼ってもらうつて………そ、そんなあ♡♡」

えらい嬉しそうやなこの……フライティアちゃん? 今度は両手を頬に当ててめちゃくちゃクネクネしでしたし。その度に全身のあらゆる肉がぽよんぽよん揺れまくつてて最高ですよ神。

普段なら絶対背後なんか取られそうになさそうやけど、どんだけ前後不覚に陥つとんねん。まああんだだけ鼻血ドバドバ垂れ流してたらそうもなる、のか……?」

「フライティア」

「ちよつと! そんな何回も真名で呼ばないでよ! は、恥ずかしいでしょ!」

(恥ずかしいんだ)

「大体、ネラとゴルトでもないのになんでアンタになんかに! アタシにだって吸血種の王としてのプライドが云々かんぬん——」

「そう、ならしょうがない。ご主人様に血を分けてつてお願いしようと思つてたけど、残念」

「犬とお呼びくださいイヴァール様」

「プライドとは一体……?」

5部族の長は同格でそれ以外とは一線を画してゐるのは聞いてたから、そういうもんなのかなとか思っていた時期が僕にもありました。

そりゃ吸血種なんて大層な名前だから血くらい吸うだろうし、血と精液の成分つてよく似てるそうだからまあ、地球基準の成人男性の其れなんてご馳走なんてレベルじゃないんだろうけど……それにしてもこの遜（へりくだ）りっぷりよ。

見事なジャンピング土下座をかまされたイヴアールはうむ、苦しゆうないとか言つて満足そうにふんぞり返つてる。相変わらず容赦ないなこのメスガキ……。

「そこまて言うのならこの沃震竜としても吝かではない」

「ははーっ！ ありがとうございませす沃震竜様!!」

「……吸血種の連中が見たら泣くわね、コレ」

「ま、まあ主様の血なんて引き合いに出されたらそれはもう……」

「さもありません、という訳ですか」

もうどないもこないもしようがないような状況にゴルトが引き攣った顔でドン引きし、ネラはネラでネラとはいえ辛うじて為政者ではあるんだからしてんまあ分かんないもないといった風に一応の理解を示した矢先、それはもう眩いばかりの白光に煌めく輝きと荘厳な大翼をはためかせた熾天使様が割つて入つて来た。

いやもう威厳たっぷり感が半端ないな他のクソチヨロちゃん達も本気で見習って、どうぞ。特にネラ、お前のことやぞ。

天使というだけあってこれまたイメージ通りの神聖かつ神々しさたっぷりな純金の長髪、一切感情が籠つてない瞳も金、肌は病的と言つて差し支えないくらい真っ白で最早生気が感じられないレベル。その割に身体つきはどうしようもないくらい雌で極上のムチ肉がたっぷりのつて大変素晴らしい。

んで例によつて例の如く、これは服と呼んでいいのか……？　どこぞの覚悟が決まっちゃつてるシスターみたいなハイレグレオタードは殆ど肌が透けて見えるくらい極薄生地で全然隠れてないし、金でできてるっぽい高そうな首輪から所謂二つ割り暖簾みたいな乳前掛けでとりあえず乳首だけ隠しました的なドスケベ上半身に、下半身に至つては前述のスケスケレオタード以外なんにも身に着けてない。

つまり色々と丸見えである。

どうということなの……。

「神の御前でこのような醜態ばかり晒すとは。やはり我ら天使族以外に敬虔なる誇りなど望むべくもなし、と」

なんだろう、アホみたいな特級痴女衣装着込んでるくせに涼しい顔して真面目そうな話するの止めてもらつていいですか？　別にそれはこの熾天使様だけじゃないけど

さあ……。

……まあ、誇りとかその他諸々は遠い昔にそこらの野原にでも捨てて来たんじゃないかなこのチヨロインたち。

そんなもんも今更どうでもいいとして……なんか今とんでもない呼び方なさいませんでした？

「——か、神い？」

「主様のことですよ。以前にもお話したではありませんか」

「全く、彼女は本当にいつもの調子だね」

それまで黙って呆れ果て、それでいて何やら逡巡でもしていたかのような熾天使様が一步前に進んで口を開くと、両腕にひつついていたドラゴン姉妹が殊更にくつついてきた。どうにも眼前の天使が苦手らしい。

まあそれもそうかなんて思いつつあるうことか神呼ばわりまでされて余計に頭おかしなるで状態に陥っていたら、ローゼさんとネフライトさんが玉座の前に立ち塞がる形で前に出てくれた。

ヤダ……かっこよくて頼り甲斐のある竜人族だなんて召使いさん達くらいしかいないと思つたのに……クツシヨンさんだなんて呼んでごめんねクツシヨ——ネフライトさん！ キヤー！ ローゼさんもステキだわ!? どっちも普段は死ぬほどポンコツ

なクソザコドラゴンだけ!!

「全く救いのない。私たちが力を行使する前提で転移し、本当にそうなっていたとして、そこにおわす神に危害が及びでもしたら——その程度も理解できないと?」

「あの、神って呼ぶのはやめてもろて——」

「例えそうであつても、我ら竜人族はあらゆる犠牲をもつて主様の盾となりましょう」

「いざという時の対策も施してあるさ。主様には指一本触れさせないよ」

「その……」

「やはり完璧とは言えません。神の身には京が一、無量大数が一、那由他の彼方に一すらあつてはならないのですから。3大種族以外にとつての紛うことなき奇跡、至高至福の存在……そのような天上の御方にあるまじき無防備——竜人族には心より失望いたしました」

「えつと……」

「主様は貴女方の言う”揺り籠”には辟易されていましたよ。とても個人としての生き方ではないと」

「そもそも主様が君たちの誘いを受け入れることはできないさ、善意の押し付けほど厄介で恐ろしいものもないしね。……と言っても、理解できないだろうけど」

「もしも——……?」

「理解などできませんし、するつもりもありません。そもそも神の御霊を完全なる安寧とともにお守りして何が悪いのです？　我が主、父なる存在、病んごとなき天上神にはこの先も未来永劫、我らの頭上に光あれかし——福音となっていたただかなくては」  
「ウソでしょ……」

この熾天使様、というより天使族の想像以上の宗教キ〇つぷりに金玉縮みあがりですよ。永遠の存在とか言ってるし……え、ヤダよ？　無限に管理されてただ生き永らえるだけとかそれなんて拷問？　脳髓だけ生かして液体漬けにされて保存されるやつの親戚？

やべえよ……やべえよ……。

「主様、大丈夫ですよ」

「ローゼさん？」

「そうさ。ふふ」

「んおお……？」

正直ビビリ散らかして両脇のネラとゴルトと身を寄せ合っていたら、ローゼさんとネフライトさんが自信满满といった顔で微笑みかけて来た。えっ……ほんとにこの2人ってこんな感じだっけ……？　もうダメ、心がトウンクしちゃう♡

なんていつも通りアホなこと考えてたら、当の2人に耳打ちされた内容に一層困惑す

る羽目になった。ネラとゴルトはそれに感心したのか頻りにうんうんと満足げに頷いている。

あの、俺が元はどこにでもいるしがないサラリーマンの中年おっさんでしかないってわかってらっしゃいますこの方々？

え、わかるわけない？

デスヨネー。

「それはその……色々と大丈夫？」

「ご心配なさる必要など欠片もありませんよ。なにせ主様が仰ることですもの、むしろ悦び勇んでやってくれますから」

「ええ……」

「僕らにもつと自信を持ってと言ってくれる割りに、主様にはないんだねえ。というより、まだ自分の価値が本当に理解し切れていないだけかな」

「いやでもさあ……」

「何をコソコソと話しているのです？」

少し不満な声色とともに投げかけられた言葉に、玉座の間にいる全員の視線が熾天使様に集まった。

もう待つのも時間の無駄といった風な彼女。ほんとに実力行使してきそう……え、本

気か？

「えつと……セラフイムさん？」

「ああ、神よ……御身に我が名をお呼びいただけるとは、正に今生に於いて今が至福の時にございます。今暫くお待ちいただけますよう。直ちに、即座に、今直ぐに、御身を悠久の安息へとお連れいたしましょう」

「こっわ」

アカンマジやこの人……俺が名前呼んじやったからか全身を掻き抱いてヘヴン状態な上に目が完全にイっちゃってる。なんか凄い勢いで力というかオーラというか出し始めちゃったし。それ見て周りの皆様方が臨戦態勢入っちゃったし。俺がこっわ、つて思わず呟いちちゃったのも全く耳に入ってないし。まあ聞こえてたとして意にも介さんだろうけど。正義って怖いね。青き正常なる世界のために!! とかと同類でしょコレ。

ええいもう知らん、なるようになれだ！

南無三!!

「現状戦力差は絶望的ですがどうかご安心ください神よ。この身を賭して御身を保護いたします故。直に我が天界の精鋭たちが——」

「セラフイム!!」

「は、はひっ!?!」



「おすわり!!!」

「わんっ♡♡♡♡」

……。

「……」

「……」

「[[……]]」

……。

「……」

「……」

「[[……]]」

……。

「……」

「……」

「[[……]]」

どうすんだよこの空気。

「あのお……セラフイムさん……?」

「……な」

「なっ？」

「なっ……ななっ……なん……なっ……」

熾天使様壊れちゃった。

それまで無表情の鉄面皮だったご尊顔は茹蟄もかくやなくらい首から耳の先まで真っ赤っ赤、口はパクパク、恥ずかしさで全身が熱を帯びたのか只でさえドエロいレオタードが汗ばんで透けに濡れが加わり、それでいてガニ股蹲踞のワンちゃんポーズを崩さないんだから淫猥極まりない忠実なドスケベ雌犬熾天使様の出来上がり。

どえらいことですよクオレハ……。

「こ、こんな……熾天使である私が……こんなあっ……くうんっ♡♡」

「結局悦んでるう」

頭おかしなるわこんなん。

結局、激ヤバ狂信過激派の天使族すらヒモ男の言動には一切逆らえないということが判明したため、5部族はこの冴えない元中年サラリマンを共通の主とし、種族根絶の危機を脱することができた——とまあそうそうすんなり話が通ったはずもなく。

せつかく大人しく順番待ちしてもうすぐ自分の番だとウツキウキだった竜人族の皆さんが急な割込みを入れられる形となってしまう——しかも元々仲の悪かった魔族が盛大にやらかした——危うく内紛からの大戦争という名のドンパチ5部族☆大乱闘ポッコツヨロインズが勃発しそうになるくらいの騒ぎに陥ったのだ。

これまで散々足蹴にされてきたお顔が特に残念な方々（異世界基準）がヒモ男にガチ恋しすぎて神格化してしまい——殊更エルフ族に多かった——天使族と続々共鳴反応起こしまくってより一層過激な新興宗教ができちゃってヒモ男が散々な目に遭ったのだ。

栄養失調続出で一番危機的状況だった吸血種に緊急措置としてヒモ男を派遣し輸血——という名の直接吸血を実施した結果、極端な男日照り×そんな種族丸ごと非モテ（異世界基準）にも無駄に優しいヒモ男×地球基準の健康的な成人男性で栄養満点且つ極上な血Ⅱ種族丸ごと重篤なヒモ男中毒♡とかいうシャレにならない事態に陥りヒモ男がミイラになりかけたのだ。

3 大種族にもヒモ男の存在がバレて世界大戦になりかけた矢先、オーク・ゴブリン・コボルト内でもヒモ男が見惚れるレベルのお顔が残念な方々（異世界基準）が、「これでもう虐げられずに済む！」と一斉蜂起して大反乱が起こってしまうのだの e t c e t c .:

兎にも角にも種々様々なイベント目白押しな異世界ではあったが、結局最後はマジカルチンポ持ちの鬼畜チートな異世界の主様が夜な夜なベッドヤクザと化し、毎朝日の出とともにげっすりした顔で死んだように寝落ちし、まるでこの異世界に対する人身御供みたいなヒモ男を膝枕してやって慈しむ竜人王ネラ（正妻）という構図ができあがるわけであるが、そこらへんはまた別のお話——。